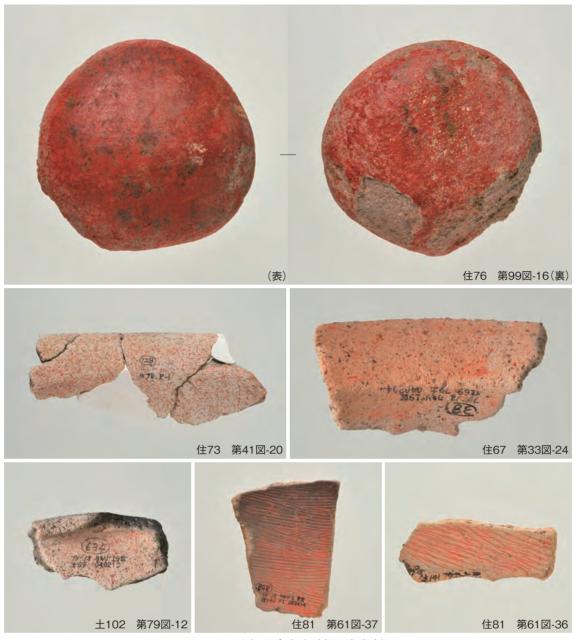
# 藤の尾垣添遺跡Ⅲ

福岡県みやま市瀬高町山門所在遺跡の調査

- 集落編3・墳墓編-



藤の尾垣添遺跡2次調査出土赤色顔料関連資料



1 9区出土赤色顔料関連資料



2 9区76号竪穴住居跡出土土器



1 9区75・76号竪穴住居跡(南東から)



2 9区76号竪穴住居跡出土状況(南西から)



1 7区15号甕棺墓(北東から)



2 7区17号甕棺墓(北から)



3 7区28号甕棺墓(南から)



4 7区31号甕棺墓(南から)



5 8区45号甕棺墓(北から)



6 8区52号甕棺墓(南から)



7区28号甕棺



8区33·40·45号甕棺

福岡県教育委員会では、平成13年度から独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構(旧日本鉄道建設公団)九州新幹線建設局の委託を受けて、九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。

本書は平成15・16年度に発掘調査を実施した、福岡県みやま市瀬高町(旧山門郡瀬高町大字)山門に所在する藤の尾垣添遺跡の記録で、九州新幹線建設工事に伴う藤の尾垣添遺跡調査報告の3冊目、最終冊に当たります。

本遺跡は矢部川・大根川が育んだ緑豊かな田園地帯に位置しています。調査では弥生時代前期の集落跡及び中期の甕棺墓群、弥生時代後期~古墳時代中期の大規模な集落跡及び古墳時代後期の集落跡などを確認し、この地域の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

本書が文化財愛護思想の普及及び学術研究・生涯学習への一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査及び報告書の作成に当たりましては、関係諸機関や地元を 始めとする多くの方々に御協力・御助言をいただきました。ここに深甚の謝意 を表します。

平成22年3月31日

福岡県教育委員会 教育長 森山 良一

# 例言

- 1 本書は平成15・16 (2003・2004) 年度に九州新幹線鹿児島ルート建設に伴って発掘調査を 実施した、福岡県みやま市瀬高町(旧山門郡瀬高町大字)山門字垣添・北ノ前・峯ノ元・北 池に所在する「藤の尾垣添遺跡」の記録で、九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告では第16 集、藤の尾垣添遺跡調査報告書としては第3冊目に当たる。
- 2 本遺跡調査報告書は3分冊とし、本書では集落編3・墳墓編として9・10区の集落出土遺構・遺物と7・8区の甕棺墓及び自然科学分析、まとめを報告する。なお、1分冊の平成19年度は集落編1として6・7区の甕棺墓を除いた遺構・遺物を報告し(大庭孝夫・宮地聡一郎2008『藤の尾垣添遺跡 I』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第9集 福岡県教育委員会)、平成20年度は集落編2として8区の甕棺墓を除いた遺構・遺物を報告している(大庭孝夫編2009『藤の尾垣添遺跡 II』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第14集 福岡県教育委員会)。
- 3 本遺跡の発掘調査・整理報告は独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線 建設局の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
- 4 本遺跡は九州新幹線船小屋一大牟田間の埋蔵文化財調査第3地点に当たる。
- 5 本書に掲載した遺構写真は秦憲二・今井涼子・進村真之・宮地聡一郎・小澤佳憲・大庭孝 夫が、遺物写真は文化財保護課整理指導員北岡伸一が撮影した。なお、空中写真は九州航空 株式会社及び東亜航空技研株式会社に委託した。
- 6 本書に掲載した遺構図は大庭の外、中間研志・秦憲二・今井涼子・進村真之・宮地聡一郎・小澤・高松・大庭が作成し、溝上潔・石井正興・今村孝男・堤弘光・楢崎俊平が補助した。掲載した遺構図の方位は全て国土座標系(旧座標、日本測地系)座標北(G. N. )である。なお、第1図の衛星写真については、福岡県立アジア文化交流センターから提供を受けた。
- 7 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所において、濱田信也・坂本真一・一瀬智・新原正典の指導の下に実施した。出土遺物の実測は調査担当者の外に、平田春美・棚町陽子・田中典子・久富美智子・坂田順子・橋之口雅子・堀江圭子・若松美枝子・寺岡和子・栗林明美・中村洋子・中川真理子・中川陽子・林知恵・城門義廣・西堂将夫が行った。製図は調査担当者の外に、豊福弥生・原カヨ子・江上佳子・橋之口・城門・杉原敏之・坂本真一・岡田諭が行い、土山真弓美・安永啓子・山田智子・辻清子が補助した。
- 8 出土遺物・写真・図面はすべて九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所に保管しているが、平成22年11月21日秋以降は小郡市三沢に移転する九州歴史資料館に保管される予定である。
- 9 本書の執筆は、Ⅱ-(2)を杉原敏之、Ⅱ-(3)の大半を西堂将夫、Ⅲ-2-(6)の石器・石製品を城門、Ⅲ-3を進村真之、Ⅳを(財)元興寺文化財研究所及び(株)パレオ・ラボ、その他を大庭が行い、編集は橋之口の協力を得て、大庭が行った。

# 目 次

巻頭図版									
序									
例言									
目次									
図版目次									
挿図目次									
表									

Ι	はじめに(大庭)	
	1 調査の経緯	1
	2 調査の組織	4
II	位置と環境(杉原・西堂・大庭)	
	1 歴史的環境	6
	(1) 村山資料の概要(大庭)	6
	(2) 村山資料の紹介 - 村山健治氏採集の槍先形尖頭器 - (杉原・大庭)	8
	(3)村山資料の紹介-鉄器編- (西堂・大庭)	11
	(4) 山門北池(松延)遺跡墳墓出土遺物の紹介(大庭)	23
	(5) 7・8区資料の補遺(大庭)	31
$\coprod$	発掘調査の記録	
	1 遺跡の概要 (大庭)	38
	(1) 遺跡の概要	38
	(2)調査の概要	38
	(3) 基本層序	40
	2 9区検出遺構と遺物(大庭・城門)	44
	(1) 概要(大庭)	44
	(2) 竪穴住居跡(大庭)	44
	(3) 土坑(大庭)	104
	(4) 溝(大庭)	136
	(5) ピット・遺構面等出土土器(大庭)	138
	(6) 9区出土石器・石製品・金属器(城門・大庭)	139
	3 10区の検出遺構と遺物 (進村)	·· 145
	4 7・8区検出の甕棺墓と遺物 (大庭)	. 148
	(1) 概要	148
	(2) 7区第1面甕棺墓と遺物	148
	(3) 7区第2面甕棺墓と遺物	156
	(4) 7区第3面甕棺墓と遺物	166
	(5) 8	172

IV 自然科	学分析	斤 ((財)元興寺文化財研究所	・(株)パレオ	・ラボ)	
1 出	土青釒	鏡の分析(元興寺文化財研	究所)		201
2 出	土赤色	セ顔料の蛍光 X線分析(パレ	オ・ラボ)・		211
3 出	土土器	号付着物の材料分析(パレオ)	・ラボ)		215
4 土	師器は	および弥生土器の付着物の赤魚	外分光分析(	(パレオ・ラボ)	219
5 出	土壁材	付および土製支脚の材料分析	(パレオ・ラ	ボ)	222
6 出	土炭化	と材の樹種同定(パレオ・ラ	ボ)		230
7 サ	ヌカイ	アンプラントの産地推定(パレオ・ラミング)	ボ)		232
V まとめ		-,			
		国添遺跡の集落・墓地の変遷			
		国添遺跡及び周辺遺跡出土甕			
		直添遺跡周辺の竪穴住居の構造			
4 藤	の尾垣	<b>直添遺跡遺跡出土赤色顔料関</b>	連資料につい	て	246
		া ব	版目次		
			以日久		
巻頭図版1	,,,,,	)尾垣添遺跡2次調査出土赤			
巻頭図版2		9区出土赤色顔料関連資料		9区76号竪穴住员	<b>居跡出土土器</b>
巻頭図版3	1.	9区75・76号竪穴住居跡(			
	2.	9区76号竪穴住居跡出土状			
巻頭図版4		7区15号甕棺墓(北東から)			
		7区28号甕棺墓(南から)			
w		8区45号甕棺墓(北から)	6.	8 区52号甕棺墓	(南から)
巻頭図版5		<b>(28号甕棺</b>			
巻頭図版6		₹33·40·45号甕棺		1 18 11.\	
図版 1		藤の尾垣添遺跡8・9区全		上が北)	
図版 2		藤の尾垣添遺跡全景(北か藤の尾垣添遺跡全景(北か		• )	
网压 2		藤の尾垣添遺跡9区北(上)			マ (まみこ)
図版 3		9区北全景(南から) 9区北端北壁土層(南から)		90中大泉堡工/	胃 (四ル*り)
図版 4		9区纪绮见堂上僧(南から)		\	
凶版 4		9区62号竪穴住居跡、89号:			
		9区63号竪穴住居跡、69号		·6)	
図版 5		9区63号竪穴住居跡炭化物			
		9区64号竪穴住居跡(南か		0 区65是取分件	早跡 (西から)
図版 6		9区66号竪穴住居跡(北西		3四00万至八正	百時(日かり)
		9区67・68号竪穴住居跡(			
		9区67号竪穴住居跡炉周辺		iから)	
図版 7		9区67号竪穴住居跡砥石出			
<u>⊢</u> 1/V <b>∧ I</b>		9区69号竪穴住居跡(北西)		<i>2)</i>	
		9区70~74号竪穴住居跡(北西)			
	$\cup$ .	~ ~ ~ · · · · · · · · · · · · · · · · ·	1+14 //		

```
図版 8
      1. 9区70~72号竪穴住居跡(東から)
       2. 9区70号竪穴住居跡出土状況(南から)
       3. 9区70号竪穴住居跡 P 4 (北北西から)
図版9
       1.70・72号竪穴住居跡出土状況(東から)
       2. 72号竪穴住居跡 P 4 出土状況 (東から)
       3.73号竪穴住居跡(東から)
図版10
       1. 73号竪穴住居跡出土状況(東北東から)
       2. 73号竪穴住居跡石包丁出土状況(北から)
       3. 74号竪穴住居跡、104・114号土坑(西から)
図版11
       1. 9区75・76号竪穴住居跡(南東から)
       2. 9区75号竪穴住居跡出土状況(1)(北西から)
       3. 9区75号竪穴住居跡出土状況(2)(P1付近)(西から)
図版12
       1. 9区75号竪穴住居跡出土状況(3)(北東から)
       2. 9区75号竪穴住居跡屋内土坑、107号土坑(西から)
       3. 9区76号竪穴住居跡(北西から)
図版13
       1. 9区76号竪穴住居跡出土状況(1)(南西から)
       2. 9区76号竪穴住居跡出土状況(2)(西から)
       3. 9区76号竪穴住居跡出土状況(3)(南から)
図版14
       1. 77号竪穴住居跡、94~98、105号土坑(北西から)
       2. 78号竪穴住居跡(北西から)
       3.79号竪穴住居跡、102号土坑(北西から)
図版15
       1. 9区79.・87号竪穴住居跡(南から)
       2. 9区80・81号竪穴住居跡(北西から)
       3. 9区80・81号竪穴住居跡出土状況(南から)
図版16
       1. 9区84号竪穴住居跡、163・168号土坑(南東から)
       2. 9区85・86号竪穴住居跡、128号土坑(北西から)
       3. 9区86号竪穴住居跡出土状況(西から)
図版17
       1. 9区90号土坑(東から)
                             2. 9区92号土坑(西から)
       3. 9区93号土坑(南西から)
       1. 9区94号土坑(西から)
                             2. 9区95~97号土坑(東から)
図版18
       3. 9区95号土坑(南西から)
図版19
       1. 9区98号土坑(北から)
                             2. 9区101号土坑(西から)
       3. 9区102号土坑(南東から)
図版20
       1. 9区103号土坑(東から)
                             2. 9区104号土坑(南東から)
       3. 9区105号土坑(東から)
図版21
       1. 9区107号土坑(1) (西から) 2. 9区107号土坑(2) (東から)
       3. 9区108号土坑(西から)
図版22
       1. 9区110号土坑(北東から)
                            2. 9区111号土坑(北東から)
       3. 9区112号土坑(南西から)
図版23
       1.114号土坑(北東から)
                            2.116号土坑(東から)
       3. 117号土坑 (東から)
```

図版24	1. 9区118号土坑(北西から)	2.	9区120号土坑(南から)
	3. 9区122号土坑(北北東から)		
図版25	1. 9区124号土坑(南から)	2.	9区126号土坑(南西から)
	3. 9区127号土坑(北から)		
図版26	1. 9区129号土坑(東から)		9区130号土坑(北から)
	3. 山門・藤ノ尾遺跡群全景(南から)		
図版27	1. 10区全景(空中写真)		10区全景(空中写真、北から)
図版28	1. 10区全景(北から)	2.	10区131~133号土坑(東から)
	3. 10区131号土坑(北から)		
図版29	1. 10区132号土坑(東から)	2.	10区133号土坑(北から)
	3.10区柵列状遺構(北から)		
図版30	1.10区柵列状遺構(西から)	2.	10区トレンチ(北東から)
	3.10区トレンチ(東から)		
図版31	1. 7区1号甕棺墓(北西から)	2.	7区2号甕棺墓(南から)
	3. 7区3号甕棺墓(東から)		
図版32	1. 7区4号甕棺墓(北から)	2.	7区5号甕棺墓(北から)
	3. 7区6号甕棺墓(北から)		
図版33	1. 7区7号甕棺墓(北から)	2.	7区8号甕棺墓(北西から)
	3. 7区9号甕棺墓(北から)		
図版34	1. 7区10・11号甕棺墓(南から)	2.	7区12号甕棺墓(西から)
	3. 7区13号甕棺墓(東から)		
図版35	1. 7区14号甕棺墓(南から)	2.	7区15号甕棺墓(北東から)
	3. 7区16号甕棺墓(西から)		
図版36	1. 7区17号甕棺墓(北から)	2.	7区18号甕棺墓(北西から)
	3. 7区19号甕棺墓(南から)		
図版37	1. 7区20号甕棺墓(北西から)	2.	7区21号甕棺墓(西北西から)
	3. 7区22号甕棺墓(東から)		
図版38	1. 7区22号甕棺墓人骨出土状況(東7	から)	
	2. 7区23号甕棺墓(北北西から)		
	3. 7区24号甕棺墓、30号土坑(南東7	から)	
図版39	1. 7区25号甕棺墓(北東から)	2.	7区26号甕棺墓(南東から)
	3. 7区27号甕棺墓(西から)		
図版40	1. 7区28号甕棺墓(南から)	2.	7区29号甕棺墓(南西から)
	3. 7区30号甕棺墓(南東から)		
図版41	1. 8区31号甕棺墓(南から)	2.	8区32号甕棺墓(北から)
	3. 8区33号甕棺墓(南から)		
図版42	1. 8区34号甕棺墓(西から)	2.	8区35号甕棺墓(南西から)
	3. 8区36号甕棺墓(西から)		
図版43	1. 8区37号甕棺墓(北から)	2.	8区38号甕棺墓(東から)
	3. 8区39号甕棺墓(南西から)		
図版44	1. 8区40号甕棺墓(南から)	2.	8区41号甕棺墓(北から)
	3. 8区42号甕棺墓(北東から)		

図版45	1. 8区43号甕棺墓(東から) 2. 8区44号甕棺墓(西から)
	3. 8区45号甕棺墓(北から)
図版46	1. 8区46号甕棺墓(西から) 2. 8区47号甕棺墓(北から)
	3. 8区48号甕棺墓(北東から)
図版47	1. 8区49号甕棺墓(北から) 2. 8区50号甕棺墓(北東から)
	3. 8区51号甕棺墓(北東から)
図版48	1. 8区52号甕棺墓(南から) 2. 8区53号甕棺墓(西から)
	3. 8区54号甕棺墓(北東から)
図版49	1. 8区55号甕棺墓(東から) 2. 8区56号甕棺墓(南から)
	3. 7区35号土坑(北東から)
図版50	9区63·67·69~73·75号竪穴住居跡出土土器
図版51	9区75(2)·76(1)号竪穴住居跡出土土器
図版52	9区76号竪穴住居跡出土土器(2)
図版53	9区76(3)·78~82·85号竪穴住居跡出土土器
図版54	9区86·87号竪穴住居跡、90号土坑出土土器
図版55	9 区95・102・105・107(1)号土坑出土土器
図版56	9区107(2)・116~118・124・125・128号土坑、9区ピット出土土器
図版57	7 · 9区出土石器 · 石製品、鉄器
図版58	7区1~8号甕棺
図版59	7区9~15号甕棺
図版60	7区16~22号甕棺
図版61	7区23~29号甕棺
図版62	7 · 8区30~37号甕棺
図版63	8 区38~43・45号甕棺
図版64	8区46~51号甕棺
図版65	8区52~56号甕棺、7区35号土坑出土土器



8区45号甕棺墓調査状況(東から)

# 挿図目次

第1図	藤の尾垣添遺跡の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
第2図	九州新幹線と藤の尾垣添遺跡	1
第3図	九州新幹線船小屋・大牟田間埋蔵文化財調査地点(1/100,000)	3
第4図	村山氏作成清水小谷遺跡出土尖頭器出土地点図	7
第5図	清水小谷遺跡出土尖頭器実測図(2/3)·写真	9
第6図	女山長谷古墳群関係図面	13
第7図	村山資料 1 (女山長谷古墳群) (1/2)	15
第8図	村山資料 2 (女山長谷古墳群) (1/2)	16
第9図	村山資料 3 (女山古墳) (1/2)	17
第10図	村山資料 4 (女山古墳) (1/2)	18
第11図	村山資料 5 (1/2)	19
第12図	山門北池(松延)遺跡1地点実測図(1/400)	23
第13図	松延遺跡 1 · 2号甕棺実測図 (K1は1/6、K2は1/8) ····································	25
第14図	松延遺跡3・5号甕棺実測図(1/8、拡大図は1/2)	26
第15図	松延遺跡 4 · 6 · 8 · 9 号甕棺実測図 (1/6) ····································	27
第16図	松延遺跡10·11号甕棺実測図 (1/8) ······	28
第17図	松延遺跡 3 号甕棺南甕写真	28
第18図	松延遺跡7号甕棺墓、2号石棺墓墓壙内、3号石棺墓付近西甕出土土器実測図(1/3、1/4)…	29
第19図	7区第3面遺構配置図 (1/200)	30
第20図	35号土坑実測図(1/30)	30
第21図	35号土坑出土土器実測図(1/4)	31
第22図	7 ・8 区出土土器・壁土実測図 (1/4、1/3)	31
第23図	7 ・ 8 区出土土器・壁土写真	33
第24図	旧山門郡における弥生時代~古墳時代前期周辺遺跡分布図(1/50,000)	35
第25図	藤の尾垣添遺跡周辺図(1/5,000)	36
第26図	藤の尾垣添遺跡調査区配置図(1/2,000、断面図は1/100)	37
第27図	藤の尾垣添遺跡 6~9区土層実測図(1/60)	39
第28図	9 区遺構配置図(1/200)	41
第29図	61~64号竪穴住居跡実測図(1/60)	45
第30図	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	47
第31図	65・66号竪穴住居跡実測図(1/60)	49
第32図	64・66・67(1) 号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	50
第33図		51
第34図		53
第35図		55
第36図	70 · 71号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4、1/3) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	57
第37図		59
第38図	72号竪穴住居跡出土土器実測図(1)(1/3、1/4)	60
第39図	72号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/4)	61

第40図	73号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (1/3)	62
第41図	73 (2) · 74号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4、1/3) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	63
第42図	74 · 75号竪穴住居跡実測図(1/60)	65
第43図	75号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3、1/4)	66
第44図	76号竪穴住居跡実測図(1/60)	67
第45図	76号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (1/3)	69
第46図	76号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (1/3)	70
第47図	76号竪穴住居跡出土土器実測図(3) (1/3)	71
第48図	76号竪穴住居跡出土土器実測図(4) (1/3)	72
第49図	76号竪穴住居跡出土土器実測図(5) (1/3)	73
第50図	76号竪穴住居跡出土土器実測図(6) (1/3)	74
第51図	76号竪穴住居跡出土土器実測図(7)(1/3)	75
第52図	76 (8) · 77号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4、1/3) ······	76
第53図	77 · 78号竪穴住居跡実測図(1/60)	78
第54図	78号竪穴住居跡出土土器実測図(1)(1/3)	79
第55図	78号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (1/4、1/3)	80
第56図	79・80号竪穴住居跡実測図(1/60)	81
第57図	79号竪穴住居跡出土土器実測図(1)(1/3)	82
第58図	79号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (1/3)	83
第59図	79号竪穴住居跡出土土器実測図(3) (1/3)	84
第60図	80号竪穴住居跡出土土器実測図(1)(1/4、1/3)	87
第61図	80 (2) · 81号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) ····································	89
第62図	81~83号竪穴住居跡実測図(1/60)	91
第63図	84・85号竪穴住居跡実測図(1/60)	93
第64図	82~84号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	94
第65図	85号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	95
第66図	86 · 87号竪穴住居跡実測図(1/60)	97
第67図	86号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (1/6、1/3)	99
第68図	86号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (1/3)	100
第69図	86号竪穴住居跡出土土器実測図(3) (1/3)	
第70図	86号竪穴住居跡出土土器実測図(4) (1/3)	
第71図	87号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4、1/3)	
第72図	88~92号土坑実測図(1/30)	
第73図	88・89・90 (1) 号土坑出土土器実測図 (1/3)	
第74図	90号土坑出土土器実測図(2) (1/3)	
第75図	93~97号土坑実測図(1/30)	109
第76図	93~95 · 100 · 101 · 103 · 105号土坑出土土器実測図(1/4、1/3) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
第77図	98~101号土坑実測図(1/30)	
第78図	102~105号土坑実測図(1/30)	115
第79図	102号土坑出土土器実測図(1/3)	
第80図	107 · 108 · 110号土坑実測図(1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	119

第81図	107号土坑出土土器実測図(1)(1/4、1/3)
第82図	107号土坑出土土器実測図(2)(1/4) … 121
第83図	108·112~114·116·117号土坑出土土器実測図(1/3、1/4)··············123
第84図	111~115号土坑実測図(1/30) … 124
第85図	116・118号土坑実測図(1/30)
第86図	117号土坑実測図(1/30)・・・・・・・・127
第87図	117 · 118 · 121 · 123号土坑出土土器実測図(1/3、1/4) · · · · · · · 129
第88図	119~123号土坑実測図(1/30)
第89図	124~126号土坑実測図(1/30) 131
第90図	124・125号土坑出土土器実測図(1/3) 133
第91図	127・128号土坑実測図(1/30) … 134
第92図	127~129号土坑出土土器実測図(1/4、1/3) … 135
第93図	129・130号土坑実測図(1/30) … 135
第94図	9~12号溝実測図(1/60) … 137
第95図	9・10号溝、ピット、遺構面出土土器実測図(1/4、1/3) 139
第96図	9 区石器実測図(1) (1/2)
第97図	9 区石器実測図(2) (1/1、1/2)
第98図	9 区石器実測図(3) (1/2、1/3)
第99図	9区石器実測図 (3) (1/2、1/3)       143         9区鉄器実測図 (1/2)       143
第100図	10区遺構配置図・西壁土層図(1/200、1/60) 146
第101図	10区131~133号土坑実測図(1/60)
第102図	7 · 8 区甕棺墓配置図(1/200) · · · · · · 149
第103図	$1 \sim 5$ 号甕棺墓実測図(1/20) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
第104図	6~11号甕棺墓実測図(1/20)・・・・・・・・・153
第105図	1~5・7号甕棺実測図(1/6)
第106図	6 · 8 ~ 11号甕棺実測図(1/6) · · · · · · 157
第107図	12~14 · 16 · 18 · 19号甕棺墓実測図(1/20) · · · · · · 159
第108図	15・17号甕棺墓実測図(1/20)・・・・・・・・161
第109図	12~15号甕棺実測図(1/8、1/6)
第110図	16~19号甕棺実測図(1/8、1/6)
第111図	20~25号甕棺墓実測図(1/20)
第112図	26~28号甕棺墓実測図(1/20)
第113図	29・30号甕棺墓実測図(1/20)169
第114図	20~26号甕棺実測図(1/6)
第115図	27~29号甕棺実測図(1/8) 171
第116図	30~33号甕棺実測図(1/6、1/8)
第117図	31~34号甕棺墓実測図(1/20)
第118図	35~38号甕棺墓実測図(1/20)
第119図	34~38号甕棺実測図(1/6) 179
第120図	39~43号甕棺墓実測図(1/20)
第121図	44~46号甕棺墓実測図(1/20)
第122図	47~49号甕棺墓実測図(1/20)

第123図	39~44 · 46号甕棺実測図(1/8、1/6)	187
第124図	45・47号甕棺実測図(1/8)	188
第125図	48~51·53号甕棺実測図(1/6) ······	189
第126図	50~52号甕棺墓実測図(1/20)	191
第127図	53~55号甕棺墓実測図(1/20)	193
第128図	56号甕棺墓実測図(1/20)	194
第129図	52 · 55号甕棺実測図 (1/8) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
第130図	54 · 56号甕棺実測図 (1/8)	196
第131図	福岡県みやま市瀬高町 藤の尾垣添遺跡出土青銅鏡	201
第132図	藤の尾垣添遺跡出土青銅鏡 (上:鏡背、下:内側破断面)	203
第133図	第132図の部分Aの拡大図	203
第134図	第132図の部分Bの拡大図	203
第135図	鉛同位体比分析用試料の採取個所C(右側破断面) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	204
第136図	分析個所 $a$ (内側破断面赤色部分)の蛍光 $X$ 線スペクトル $(50kV,\phi0.1mm)$	204
第137図	分析個所b(内側破断面素地部分)の蛍光 $X$ 線スペクトル( $50$ k $V$ 、 $\phi$ 0.1mm)	205
第138図	分析個所 $c$ (内側破断面赤色部分)の蛍光 $X$ 線スペクトル $(50kV,\phi0.1mm)$	205
第139図	分析個所b(鏡背素地部分)の蛍光X線スペクトル(50kV、 $\phi$ 0.1mm) ···································	206
第140図	鉛同位体比分析用試料(右側破断面より採取)蛍光X線スペクトル(45kV、 $\phi$ 1.8mm) …	206
第141図	藤の尾垣添遺跡から出土した青銅鏡の鉛同位体比(A式図) ······	209
第142図	藤の尾垣添遺跡から出土した青銅鏡の鉛同位体比(B式図) ······	210
第143図	藤の尾垣添遺跡から出土した青銅鏡と各時代青銅鏡の鉛同位体比(A式図)	210
第144図	藤の尾垣添遺跡から出土した青銅鏡と各時代青銅鏡の鉛同位体比(B式図)	211
第145図	赤色顔料の蛍光X線分析結果	213
第146図	分析対象資料	214
第147図	黒色付着土器と赤外分光スペクトル図	217
第148図	土器付着赤色顔料の蛍光X線スペクトル図	218
第149図	付着物・生漆の赤外分光スペクトル図(縦軸は透過率、横軸が波数を示す)	220
第150図	土師器および弥生土器付着物の拡大写真	
第151図	壁材および土製支脚と種子痕の顕微鏡写真	227
第152図	壁材および土製支脚胎土の顕微鏡写真 (a:開放ニコル、b:直交ニコル)	228
第153図	各試料の断面とその元素マッピング図「元素、b:Al,e:Si,d:Ca,e:Mn,f:Fe]	229
第154図	藤の尾垣添遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真	
第155図	サイヌカイト産地推定判別図 (1)	234
第156図	サイヌカイト産地推定判別図 (2)	234
第157図	藤の尾垣添遺跡の集落変遷図(1/400、1/600)	237
第158図	藤の尾垣添遺跡甕棺墓群変遷図(1/250)	
第159図	本地域における特徴的な甕棺 (1/12)	
第160図	分析対象竪穴住居跡一覧	
第161図	藤の尾垣添遺跡周辺における竪穴住居跡変遷	245
第162図	藤の尾垣添遺跡赤色顔料関連出土遺構と遺物(1/2,000、1/4)	249
第163図	他遺跡における赤色顔料出土遺構と遺物 (1/1,000、1/120、1/8、1/4)	251

# 表目次

第1表	九州新幹線鹿児島ルート船小屋・新八代間福岡県内埋蔵文化財調査地点一覧		2
第2表	女山長谷古墳群一覧表		12
第3表	村山資料観察表①		14
第3表	村山資料観察表②		21
第3表	村山資料観察表③		22
第4表	山門北池松延遺跡出土遺物観察表		24
第5表	旧山門郡を中心とする弥生時代~古墳時代前期集落一覧	•••••	34
第6表	『藤の尾垣添遺跡Ⅲ』掲載石器・石製品、金属器一覧	1	40
第7表	9区出土石器・石製品、金属器一覧表	1	44
第8表	『藤の尾垣添遺跡Ⅲ』掲載土器類一覧(1)	19	97
第8表	『藤の尾垣添遺跡Ⅲ』掲載土器類一覧 (2)	19	98
第8表	『藤の尾垣添遺跡Ⅲ』掲載土器類一覧(3)	19	99
第8表	『藤の尾垣添遺跡Ⅲ』掲載土器類一覧(4)	2	00
第9表	藤の尾垣添遺跡出土青銅鏡の各部から検出した元素とそのエネルギー強度	2	02
第10表	藤の尾垣添遺跡から出土した青銅鏡の鉛同位体比	2	09
第11表	分析対象資料	2	11
第12表	土器外面黒色及び赤色付着物試料とその詳細	2	15
第13表	黒色付着物の無機元素の分析結果(重量%)	2	16
第14表	赤外分光分析を行った土師器および弥生土器の付着物の詳細	2	19
第15表	付着物および生漆の赤外線吸収位置と強度	2	19
第16表	材料を検討した壁材および支脚とその詳細	22	22
第17表	壁材とその赤彩部および土製支脚断面の半定量分析結果(重量%)	2	25
第18表	粘土塊中の粘土および砂粒組成の特徴	2	26
第19表	岩石片の起源と組み合わせ	22	26
第20表	藤の尾垣添遺跡出土炭化材の樹種同定結果一覧		
第21表	分析対象資料	2	32
第22表	原石採取地と判別群名称	2	33
第23表	みやま市域における弥生時代~古墳時代中期前半の時期区分	2	35
第24表	福岡県教育委員会が実施した九州新幹線鹿児島ルートに係る埋蔵文化財調査地点一覧	図版65	裏



藤ノ尾車塚古墳(昭和52年頃、おそらく東から)

## I はじめに

#### 1 調査の経緯

九州新幹線(鹿児島ルート)は、「国民経済の発展及び国民生活領域の拡大並びに地域の振興を図るため」に「全国新幹線鉄道整備法」に基づき建設される新幹線鉄道で、福岡市(JR博多駅)から熊本市・川内市を経由して鹿児島市(JR鹿児島中央駅)に至る、工事延長249kmの路線である。このうち、JR新八代駅~JR鹿児島中央駅間(127.6km)は平成16年3月13日に部分開業しており、新たな産業の立地や観光産業の振興等に寄与している。

福岡県教育委員会(以下、「県教委 | という。)

第1図 藤の尾垣添遺跡の位置

が実施した、九州新幹線建設に係る埋蔵文化財取扱協議等の経緯については、『山門前田遺跡』 (大庭孝夫・坂元雄紀編 2006『山門前田遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第3集 福岡県教育委員会 p 1・2)、本遺跡に関わる調査の経緯及び経過については、『藤の尾垣添遺跡 I 』(大庭孝夫・宮地聡一郎 2008『藤の尾垣添遺跡 I 』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第9集 福岡県教育委員会 p 2~5)で詳述しているため省略する。

藤の尾垣添遺跡は、福岡県みやま市瀬高町(旧山門郡瀬高町大字)山門字垣添・北ノ前・峯ノ元・ 北池に所在する。新幹線工事区分では当遺跡大半(6~9区)が連続して調査を行った、山門 前田遺跡・山門北池遺跡と同じ瀬高南工区、北端部分(10区)のみ小川柳ノ内遺跡(第2地点)



第2図 九州新幹線と藤の尾垣添遺跡

と同じ瀬高中工区となる。

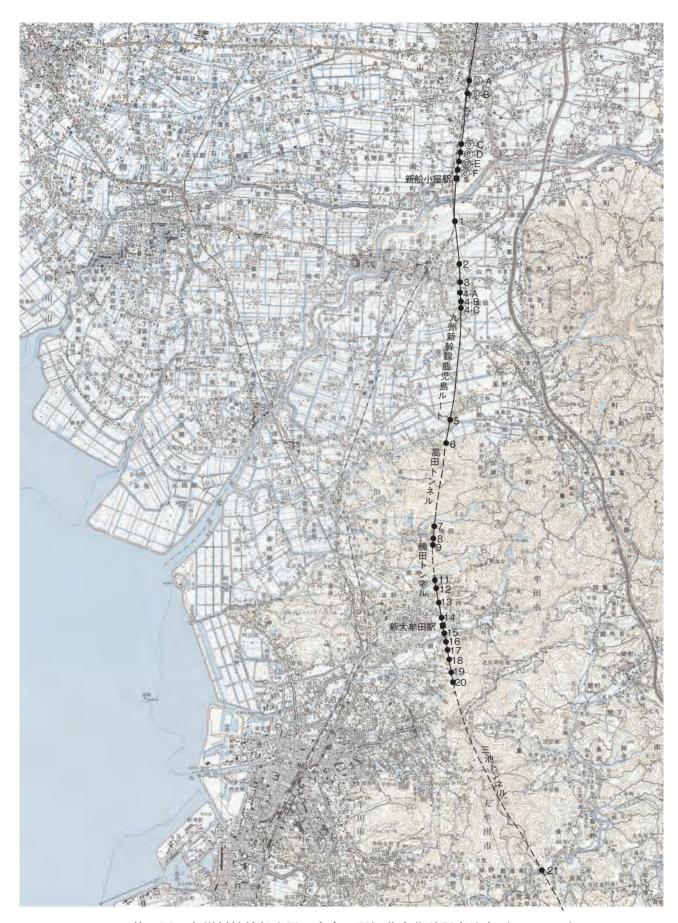
瀬高南工区で発掘調査を行った遺跡は、北から順に藤の尾垣添遺跡(第3地点)・山門北池遺跡(第4-A地点)・山門前田遺跡(第4-B地点)・松田掛畑遺跡(第4-C地点)の4ヶ所である(地点名は第3図・第1表と対応)。松田掛畑遺跡は用地解決が他の3遺跡と比べて遅れたため、平成17年度に本調査を実施し、平成19年度に報告書を作成している(小川泰樹・一瀬智2008『松田掛畑遺跡 岩本下内遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第10集 福岡県教育委員会)。本遺跡・山門北池遺跡・山門前田遺跡については、本調査を平成14~16年度に連続して行ったため、調査区割・遺構番号等重複がないよう留意した。この区割りは圃場整備後の現在の道路・水路を基準に、県道本吉・小川線を挟んで南から0~10区の計11区に区分けした(第25図)。0~2区は山門前田遺跡、3~5区は山門北池遺跡、6~10区は藤の尾垣添遺跡となる。

本来なら、遺跡ごとに新たに区番号を付与すべきであるが、本遺跡を含めた3遺跡は、当初の 想定外となる多くの遺構・遺物を検出し、かつ調査期間の制約もあったため、同時並行で本遺跡 と山門北池遺跡を、また本遺跡内各区の調査を複数の職員で実施したため、調査段階では遺構番 号の重複を避けることを最優先した。そのため、本書においても調査段階の区分けを重視し、当 初のままの区・遺構面名で報告する。さらに区割りと同じ理由で、調査段階では遺構番号も山門 前田遺跡・山門北池遺跡からの通し番号を使用したが、整理報告段階で遺構番号を新たに南の6 区より番号を付け直している。なお、ピットは煩雑となるため、当初の通し番号のままとする。

本書では、集落編3・墳墓編として9・10区の遺構・遺物と7・8区の甕棺墓及び自然科学分析、まとめを掲載した。ちなみに、平成19年度は集落編1として6・7区の甕棺墓を除いた遺構・遺物を、平成20年度は集落編2として8区の甕棺墓を除いた遺構・遺物を報告している。

地点	工事件名	遺跡名	所在地	対象面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	調査年度	報告年度	既刊報告書 番号	備考
1	瀬高北	郡領ノ一遺跡	みやま市瀬高町坂田	4,480	1,107	H16	H17	4集	調査終了
2	瀬高中	小川柳ノ内遺跡	みやま市瀬高町小川・下坂田	5,600	4,900	H16·17	H18·19	7.8集	調査終了
3	瀬高南	藤の尾垣添遺跡	みやま市瀬高町山門	3,360	5,500	H15·16	本書 H19~21	9·14· 16集	調査終了
4-A	瀬高南	山門北池遺跡	みやま市瀬高町山門		1,230	1H15	H18	6集	調査終了
4-B	瀬高南	山門前田遺跡	みやま市瀬高町山門·松田	6,340	1,175	H14·15	H17	3集	調査終了
4-C	瀬高南	松田掛畑遺跡	みやま市瀬高町松田	]	800	H17	H19	10集	調査終了
5	高田田尻	海津横馬場遺跡	みやま市高田町海津	4,200	2,250	H13~15	H16·17	1 · 2 集	調査終了
6	高田田尻	飯田遺跡	みやま市高田町田尻	0					遺跡なし
7	高田T		みやま市高田町上楠田	3,300					遺跡なし
8	楠田T	上楠田松浦遺跡	みやま市高田町上楠田	3,520	560	H16	H17	高田町7集	高田町調査
9	楠田T	上楠田垣田遺跡	みやま市高田町上楠田	6,000	870	H16	H17	高田町8集	高田町調査
10	楠田T		みやま市高田町上楠田	3,300					遺跡なし
11	楠田T		大牟田市大字宮崎	5,200					遺跡なし
12	楠田T	釈迦堂古墳群	大牟田市大字岩本	4,000					遺跡なし
13	楠田T	釈迦堂古墳群	大牟田市大字岩本	8,400					遺跡なし
14	楠田T	コノシロ塚遺跡	大牟田市大字岩本	2,576					遺跡なし
15	大牟田ST	白銀川条里	大牟田市大字岩本	3,360					遺跡なし
16	岩本	岩本下内遺跡	大牟田市大字岩本	1,300	770	H18	H19	10集	調査終了
17	岩本	岩本土定原遺跡·貝殼塚古墳	大牟田市大字岩本	2,240					遺跡なし
18	岩本		大牟田市大字岩本	896					遺跡なし
19	岩本	出口古墳群	大牟田市大字宮部	5,000					遺跡なし
20	岩本		大牟田市大字宮部	5,400					遺跡なし
21	三池T		大牟田市大字教来木	896					遺跡なし

第1表 九州新幹線鹿児島ルート船小屋・新八代間福岡県内埋蔵文化財調査地点一覧



第3図 九州新幹線船小屋・大牟田間埋蔵文化財調査地点(1/100,000)

### 2. 調査の組織

発掘調査及び整理・報告書作成に至る間の関係者は以下のとおりである。

### 独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局

	[平成15	年度]	[平成16	6年度]	[平成18	3年度]	[平成19	年度]	[平成20	年度]	[平成21	年度]
局長	高山	博文	高山	博文	元木	洋	元木	洋	元木	洋	高橋	浩一
					北川	隆						
次長	伊神	英二	伊神	英二	関根	茂	関根	茂	関根	茂	有屋田	日幸郎
用地第一課長	関根	茂	田中	等	高橋	秀幸	高橋	秀幸	西岡	秀郎	西岡	秀郎
用地第一課課長補佐	有屋目	日幸郎	木佐-	一正和								
	木佐-	一正和										
用地第一課担当係長	入江	万久	入江	万久	入江	万久	入江	万久	入江	万久	小川	秀平
					房野	和清	房野	和清	小川	秀平		
工事第三課長	石徳	博行	石徳	博行	北原	太一	北原	太一	木下	哲龍		
工事第三課課長補佐	上野	登	上野	登	弓削	伸二	三輪育	直四郎	三輪育	恒四郎		
			弓削	伸二								
工事第三課担当係長	橋本	順一	馬渕	善男	林	孝治	林	孝治	林	孝治		
			林	孝治								
工事第四課長											丸山	修
工事第四課課長補佐											佐藤	茂
工事第四課担当係長											本田	友行
大牟田鉄道建設所長	渡邊	修	渡邊	修	長谷川	川正明	長谷月	川正明	明田	重憲	明田	重憲
担当副所長	那須	芳人	福田	聡	福田	聡	江口	義次	宮越	雄幸	江口	義次
					石津	範彦			石津	範彦		

### 福岡県教育委員会(教育庁総務部文化財保護課)

	[平成15	5年度]	[平成16	5年度]	[平成18	8年度]	[平成19	年度]	[平成20	)年度]	[平成21	年度]	
総括	(発掘	調査)	(発掘	調査)	(整:	(整理)		(整理報告)		(整理報告)		(整理報告)	
教育長	森山	良一	森山	良一	森山	良一	森山	良一	森山	良一	森山	良一	
教育次長	三瓶	寧夫	清水	圭輔	清水	圭輔	楢崎沟	羊二郎	楢崎	羊二郎	亀岡	靖	
総務部長	清水	圭輔	中原	一憲	大島	和寛	大島	和寛	荒巻	俊彦	荒巻	俊彦	
総務部副理事													
兼文化財保護課長					磯村	幸男	磯村	幸男	磯村	幸男			
文化財保護課長	井上	裕弘	井上	裕弘							平川	昌弘	
副課長					佐々フ	木隆彦	佐々フ	大隆彦	池邉	元明	池邉	元明	
参事			新原	正典	新原	正典	新原	正典	新原	正典			
参事兼課長技術補佐	川述	昭人	川述	昭人	池邉	元明	池邉	元明	小池	史哲	小池	史哲	
	木下	修	木下	修	小池	史哲	小池	史哲	伊﨑	俊秋	伊﨑	俊秋	
参事兼課長補佐	久芳	昭文			安川	正郷	中薗	宏					

課長補佐 安川 正郷 前原 俊史 前原 俊史

参事補佐兼調香第一係長 小池 史哲 小池 史哲 小田 和利 小田 和利 小田 和利

調査第一係長 吉村 靖徳

庶務

参事補佐兼管理係長 古賀 敏生

事務主査 宮崎 志行 宮崎 志行 野中 顯 藤木 豊

主任主事 宋竹 元 石橋 伸二 渕上 大輔 渕上 大輔 藤木 豊 近藤 一崇

秦 俊二 末竹 元 柏村 正央 柏村 正央 近藤 一崇 野田 雅

小宮 辰之 小宮 辰之 小宮 辰之

主事 野田 雅 野田 雅 仲野 洋輔

調査・整理・報告

参事補佐兼調査第二係長 中間 研志 中間 研志 飛野 博文 飛野 博文 飛野 博文 飛野 博文

参事補佐 濱田 信也 濱田 信也 濱田 信也 新原 正典

技術主査 杉原 敏之

主任技師 秦 憲二 秦 憲二 大庭 孝夫 今井 涼子 今井 涼子 進村 真之

今井 涼子 今井 涼子 一瀬 智

宮地聡一郎 進村 真之

小澤 佳憲 宮地聡一郎

大庭 孝夫 大庭 孝夫

技師 坂元 雄紀 城門 義廣 城門 義廣

主任技師(併福岡県立アジア文化交流センター研究員) 宮地聡一郎 宮地聡一郎

調査及び整理期間中には、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局工事第三課・第四課及び大牟田鉄道建設所の瀬高中・南工区担当の方々、地元の瀬高町(現みやま市)教育委員会文化財担当の三池賢一・鬼丸哲也・立石真二・猿渡真弓の各氏、字図や圃場整備関係の図面の入手においては瀬高町役場税務課・建設課の他、瀬高南BL他工事を担当した鴻池・山九・九鉄・廣瀬特定建設工事共同企業体の久積副所長をはじめとする工事事務所及び鍋田組の方々、また現場近隣の方々には発掘調査を進めるに当たって様々な配慮いただきました(肩書きは調査・整理作業当時)。

2ヶ年にも及ぶ調査には地元を中心とする多数の方々が作業員として参加されました。調査は悪天候、悪条件の作業も伴い、作業員の皆様の御尽力なしには無事に調査を完了することはなかったと思います。ここに深甚の謝意を表します。

### Ⅱ 位置と環境

- 1 歴史的環境
- (1) 村山資料の概要
- a. はじめに

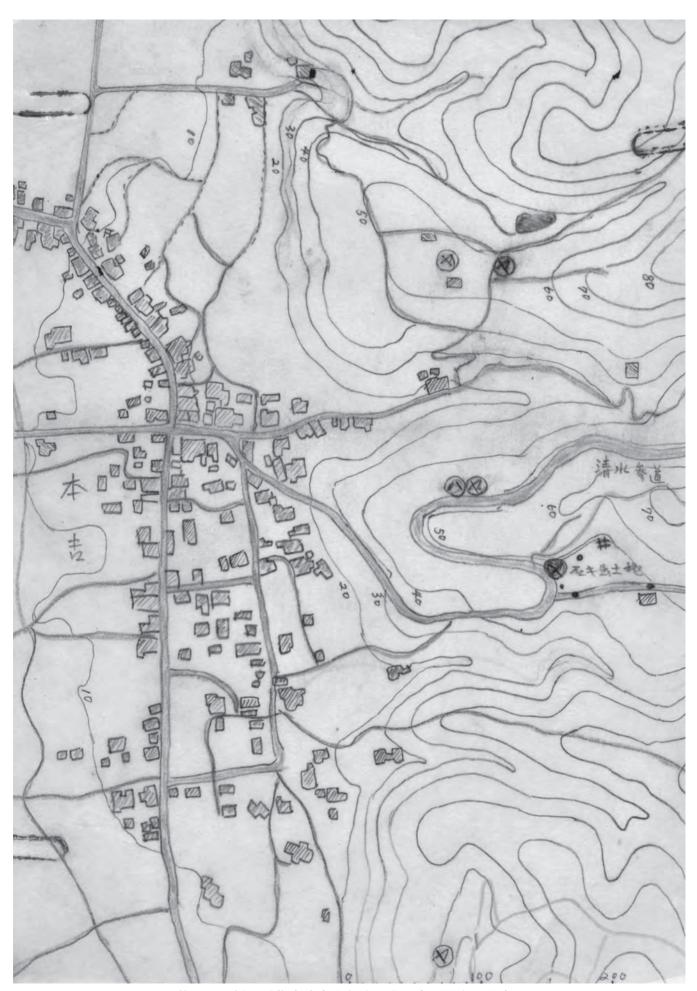
本遺跡が位置する旧瀬高町周辺の地理的・歴史的環境については、平成17年度刊行の山門前田遺跡報告書(大庭孝夫・坂元雄紀編2006『山門前田遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第3集福岡県教育委員会 p9~14)及び平成18年度刊行の山門北池遺跡報告書(大庭孝夫編2007『山門北池遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第6集 福岡県教育委員会 p7~20)の中で既に取り上げている。

そこで、『藤の尾垣添遺跡 I・Ⅲ』では、著名な郷土史家であった、故村山健治氏が旧瀬高町内を中心に長年にわたって収集した考古資料のうち、平成7年度に九州歴史資料館に寄贈された資料(以下「村山資料」という。)の紹介を行うこととする。『藤の尾垣添遺跡 I』では出土地点が明確な土器資料を紹介した(大庭孝夫2008「Ⅱ位置と環境」『藤の尾垣添遺跡 I』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第9集 福岡県教育委員会 p 7~14)。本書では、清水小谷遺跡出土の槍先形尖頭器と清水山所在の古墳時代後期古墳出土鉄器及び出土地点が明確な鉄器を報告し、本書で村山資料の資料化を完了したことになる。なお、同資料には、清水山で採集されたチョッパー(礫石器)もまとまって存在するが、そのほとんどは既に報告されているので(鈴木忠司1984「付載1清水山遺跡群採集の石器」『福岡県山門郡清水山遺跡群の調査』(財)古代学協会・平安博物館 p 47~72)、そちらを参照されたい。

#### b 故村山健治氏について

故村山健治氏の略歴については、『藤の尾垣添遺跡 I』の中で紹介したが、その刊行後に夫人の村山トシ氏が村山家歴代の歴史を綴った『村山等安とその末裔』(村山トシ1993『村山等安とその末裔』芸文堂)の存在を知ったため、同書内より、特に遺跡の調査など村山資料の形成に関わる事項について引用することで、同氏の業績を追加で紹介したい。

村山氏は、1952 年に銀行に外交員として入行後、営業の途中等で、田圃の地下げ作業等で現れた遺物を多数発見したことにより、山門郡の遺跡調査に取り組むきっかけとなったようである。まず東山村(1956 年に瀬高町と合併)文化財保存会を結成し、女山神護石(長谷水門・横尾谷水門)、名木野古墳の調査や、1957 年には九州大学初代考古学研究室教授の鏡山猛氏による坂田中園遺跡の調査に同行し、鏡山氏の知遇を得ている。同年、氏の郷土研究の拠点となる邪馬台国郷土史会を結成する。1958 年 12 月に藤ノ尾遺跡群一帯の地下げ作業が行われ、多数の土器が出土したことから、翌 1 月鏡山氏と共に発掘調査を行った(1 次調査以前)。1959年8月には清水山に所在する女山長谷古墳群を東京大学鈴木尚教授及び近藤四郎博士と共に発掘調査し、その概要を『女山長谷古墳群』として発表する。1962 年の清水小谷遺跡の発見の経緯については、(2) - a をご覧いただきたい。また同年、『山門郡地方遺跡分布図』の作成を行った。1964年秋には第1回郷土史展、翌年春には瀬高中学校体育館にて邪馬台国第1回研究発表会を行い、同年秋には第2回郷土史展を行うなど、文化財啓蒙・保護活動に精力的に取り組む。その後、清水寺郷土史料館の開館に尽力し、1969年には瀬高町文化財専門委員、



第4回 村山氏作成清水小谷遺跡出土尖頭器出土地点図

また瀬高文化協会地方史部会長を務める傍ら、町広報誌『せたか』に「邪馬台国」や「神籠石」などを連載で発表し、また複数の新聞や雑誌などに調査資料や論考を発表している。1978年には永年の願望であった『誰にも書けなかった邪馬台国』を発表する。その後、講演活動を精力的に行うが、1988年7月末日に不帰の人となられた。

#### (2) 村山資料の紹介-村山健治氏採集の槍先形尖頭器-

a. 村山健治氏による報告

同資料の整理中に、謄写印刷による下記報文が発見されたので、その原文を掲載する。(大庭)

· 清水谷遺跡

調査期間 昭和 37 年 6 月 11 日より同年 12 月 15 日迄

場所 福岡県山門郡瀬高町大字本吉字小谷 (清水寺参道))

海抜 50 m 南面の台地

土地所有者 瀬高町本吉 弥永正平 発見者 瀬高町山門 村山健治

調查人名 久保山教善 松竹研治 河野覚 村山健治

石質鑑定 橋本勇氏 地質学助教授 (九大) 年代鑑定 岡崎敬氏 考古学助教授 (九大)

· 6月11日

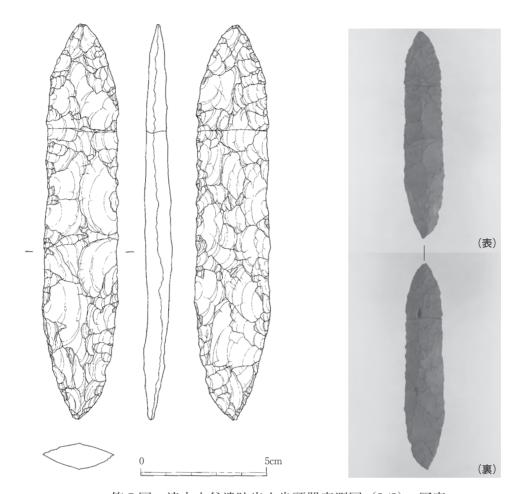
朝、自転車を押して清水寺本坊に行く途中、字小谷の源徳稲荷の赤い鳥居の側がブルトーザで開墾されて、山の地肌を見せている。たぶん、密柑園にするためであろう。道路は2日前の雨で非常に悪いので、立ち止まって、じっと開墾された跡を見ていた所、赤土の中に、なんとなく変わった土質があるので、自転車を立て現場で調べて見ると、北西の方がどうも古代人の遺物包含層土質に間違いないと思い、何か遺物はないかと2時(間)程探したが、土器・黒曜石・炭等は指先ほどの破片も発見できなかった。遺跡の中心に立って見渡したところ、ブルトーザによって、西北の角に土を押し寄せてある。そこに淡茶色の土塊を見とめ調べて見ると、土塊の中に石器の破片らしい物があるので土をくだいて、その中から尖頭器(ポイント)を発見、2/3位の所で折れていた。それで、すぐ横の土塊をくだいた所、折れた先の部分を発見し、つなぎ合わせた所、ぴったり合って1個の完全な形となった。その地点より3m位南の方に掻器(スクレーパー)を採集して、自転車を押して清水寺本坊に向かった。

#### · 6月15日

午前中、河野覚氏と共に現地に行き、岩盤(緑泥片岩)と違った石器ではないかと思われる 石全部を採集して、そこから 35 m程離れた湧水の付近を調べる。土師(器)・須恵器の破片と 火災の跡らしい層を発見、其の中に青磁の破片も有った。又、湧水地点の南の方には池の跡ら しい所もあり、青粘土の堆積があった。此の遺跡は南に渓谷をひかえ、北西が台地で寒風をふ せぎ、陽当たりのよい所である。

#### ・11月28日

鏡山教授の紹介により、九大考古学教室4年生の久保山氏が小谷遺跡調査に来られたので現 地に同行し、ハンドアックス1個を発見し、現地の写真をとって帰られた。其の際、ポイント・



第5図 清水小谷遺跡出土尖頭器実測図(2/3)・写真

スクレーパー・岩盤等を石質、年代鑑定のため九大へ持参された。

·石質鑑定結果発表 橋本勇氏(地質学助教授)

尖頭器 (ポイント): 安山岩 (サヌカイト)、掻器 (スクレイバー): 凝灰岩 (珪質凝灰岩)

岩盤:緑泥片岩(古生代の筑後変成岩)

- ・年代鑑定結果 岡崎敬氏 (考古学助教授): 打製石器、尖頭器は縄文期以前のもので、即ち今より 8,500 年以前のものにまちがいないとのこと。
- ・12月15日

久保山氏、遺物包含層を実測のため来訪されたので、松竹氏と3名にて出かけ、其の際、大形石器3個を発見した。

#### b. 槍先形尖頭器の観察(第5図)

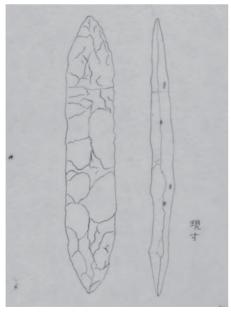
報告する資料は、昭和37年(1962)年に旧瀬高町在住であった村山健治氏によって採集されたサヌカイト製の槍先形尖頭器である。採集地は、清水山遺跡群の1つである旧瀬高町大字本吉字小谷に所在する小谷遺跡である。平面形態は両端部がほぼ対称となる「緩やかな圭頭形」で、現状で長さ15.65 cm、幅3.00 cm、厚さ1.15 cm、重さ55.4g を測る。

資料の素材形状は器体全面の加工により不明だが、器体裏面の下部に僅かに素材剥離面と考えられる面を残している。また、下端付近に厚みを残す側面形態から、付近に素材剥離の際の打点があった可能性が高い。器面の加工は、器体胴部中位の両面に軟質ハンマーによる成形段階の大型剥離面を残し、側縁を並行させるため、僅かに裏面に細調整している。結果として、両則縁部は幅3cm、長さ7cm程度に亘って並行する。さらに側縁部から上下両基端部を作出するため、成形剥離面を覆う形で整形剥離している。このうち上端部は、軟質ハンマーによる細かな調整によって厚みを減じ、側縁部に丸みを持たせながら左右対称となる鋭い尖頭部を作出している。下端部についても整形剥離によって仕上げるが、上端部と同じように厚みを減じることはなく剥離角も急角度で対称形になっていない。このような技術形態から、この「緩やかな圭頭形」尖頭器の上下端部を分けて考えることができる。なお、上端部については発見時に折損しており、現状では接着剤で接合されている。

#### d. 槍先形尖頭器の位置

九州地方における槍先形尖頭器は、細石刃文化期において事例が増加する(杉原 2004)。西北九州では、長崎県福井洞穴IV層、茶園遺跡IV層、泉福寺洞穴 5 層において、細石刃石器群と共伴している。共伴細石刃核から、福井IV層例の半面調整による幅広木葉形から、茶園IV層例のような両面調整による柳葉形へと変遷することが分かっている。特に茶園IV層例は、尖頭部の作出が入念で基部と明瞭に区分される。また、縄文草創期の指標である楔形細石刃核とも共伴し、爪形文土器段階頃に比定される。

小谷遺跡に見られるような「緩やかな圭頭形」を呈する槍先形尖頭器は、サヌカイト原産地の佐賀県多久遺跡群の茶園原遺跡、熊本県山鹿市柿原遺跡、宮崎県上猪原遺跡等に事例がある。また、「緩やかな圭頭形」と関係があると考えられる「圭頭形」は、茶園原遺跡、宮崎県辰之元遺跡等に事例がある。これらの槍先形尖頭器は、単体あるいは埋納状態で出土することが多く、茶園原遺跡で多量の未製品が見られる状況から、多久サヌカイト原産地で製作された完形品が遺跡外へ持ち出されたと考えられている。この多久産と見られる大型尖頭器は、鹿児島県



村山健治氏作図の槍先形尖頭器

種子島の園田遺跡でも確認されおり、30 cmを超える数本の規格品が2つの埋納遺構から折損された状態で出土している。

多久産槍先形尖頭器は、上下両端部を対称形に作出し、側縁部が並行する形態的特徴があり、 九州地方の槍先形尖頭器の変遷に照らせば、福井洞穴IV層以降の縄文草創期に位置づけられる。 ただし、共伴土器が殆ど無く時間的位置については不明な点が多い。僅かに推察することのできる資料として、上猪原遺跡で「隆帯文土器」と共伴し、また多久遺跡群の山王遺跡では縄文早期に盛行する小型槍先形尖頭器と小型の圭頭形尖頭器が共に出土している。この点から見る 限り、圭頭形の出現は、草創期初頭の指標である神子柴文化の大型木葉形の神子型尖頭器よりも時間をおいた中で理解される(杉原 2008)。さらに多久原産地遺跡群における搬出を目的とした槍先形尖頭器製作の上限については、遡っても隆起線文土器段階以降であり、むしろ圭頭形の盛行は山王遺跡の状況を見る限り、草創期の後半から早期前半の範囲で理解される。

以上のような九州地方の槍先形尖頭器の動向を念頭に置いた場合、小谷遺跡の「緩やかな圭頭形」 尖頭器も草創期末から早期前半頃に位置づけることが妥当であろう。こうした時間的理解は、清水 山遺跡群より出土する大型礫群が早期前半に収まると考えられる研究の現状とも齟齬はない(横田 1995)。(杉原敏之)

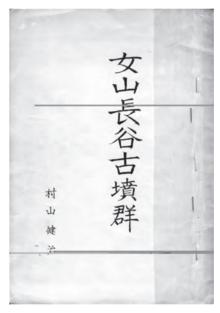
※本資料の実測は久留米市役所の富永直樹氏によるものであり、氏の承諾を得てトレース・使用した。

#### 参考文献

杉原敏之 2004「多久産尖頭器の編年的再検討」『Stone Sources』No4 石器原産地研究会 杉原敏之 2008「九州の槍先形尖頭器と有茎尖頭器」『旧石器考古学』70 号 旧石器文化談話会 横田義章 1995「 $\mathbb{N}$ -B-3 礫石器」『白木西原遺跡  $\mathbb{I}$ 』立花町文化財調査報告書第8集 立花町教育委員会

#### (3)村山資料の紹介-鉄器編-

(1) で先述したように、ここでは村山資 料中において出土地点が明確な鉄器につい て報告する。『藤の尾垣添遺跡I』に掲載し た同資料の土器とは異なり、同資料のほとん どの鉄器には出土地点が注記されており、図 化できた。まず、第2表・第6図は村山氏が 作成した女山長谷古墳群の古墳一覧表、また おそらく村山氏から資料の提供を受け作成 した、岩崎光氏報告の同古墳群、配置図及び 古墳実測図である。今回の報告資料には女山 長谷古墳群出土鉄器が多く含まれるため、参 考資料として本書に掲載した。第7~11図 は同資料中の鉄製品実測図、第3表はその観 察表である。今回は資料紹介が目的のため、 各資料の内容については、観察表をご覧いた だきたい。なお、実測及び観察表、まとめの 作成、執筆は九州歴史資料館臨時職員の西堂 将夫氏が行った(大庭)。



村山健治著『女山長谷古墳群』表紙

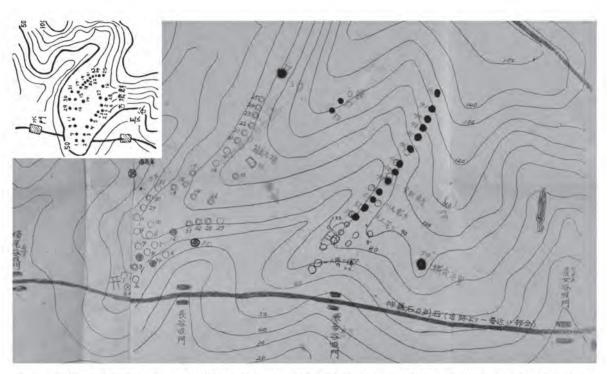


村山氏撮影の女山長谷古墳群 (昭和34年頃)

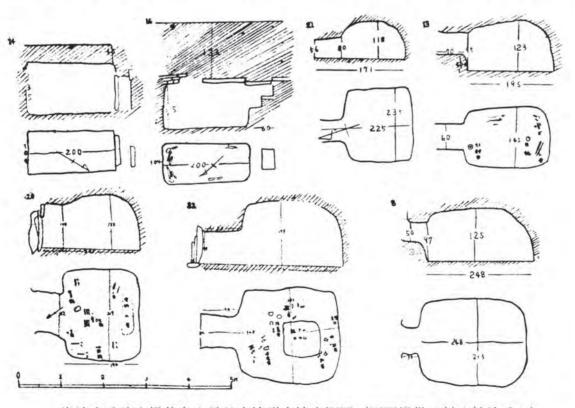
号数	(調査)	(主体部)構造	(装飾の 有無)	人骨	副葬品
1		土壙(竪穴式石室)	朱	人骨	
2		土壙	朱	人骨数体	
3	0	土壙(横穴墓)、玄室長1.85m×幅1m× 高0.85m	朱	人骨頭蓋骨	
4	未	石積石槨(竪穴式石室)		未発掘	未発掘
5	Δ	横穴	朱	人骨5体	刀子(1)、矢(鉄)鏃(1)、柄金(刀子)
6		横穴	不明		
7		石積石槨	朱		
8	Δ	石積石槨(竪穴系横口式石室)	朱	人骨2体	直刀(太刀1)、大小馬具(轡2)、耳環(金8)、管玉(水晶1)、刀子1V
9	Δ	石積石槨	朱		
10		石積石槨(竪穴式石室)	朱		
11	Δ	横穴	不明		
12	0	横穴(墓)、玄室長2.48m×幅2.13m×高 1.25m	朱	人骨8体	矢(鉄)鏃(2)、刀子(1)、耳環銅(金2)4ケ、管玉10ケ、水 晶製勾玉1
13	0	横穴(墓)、玄室長1.95m×幅1.45m×高 1.25m、玄門幅0.6m、玄門と玄室の高低 差は0.4m	朱	人骨1体(奥に偏在)	貝釧2、紡錘車1ケ、耳環銀1ケ、管玉4ケ(水晶1)、奥にまとめられる
14	0	竪穴舟形(竪穴系横口式石室)	朱	人骨	
15	0	横穴(墓)	無		馬具(口金:轡)羨道より出土、刀子1
16	0	竪穴(系横口式石室)、玄室長2m×幅 1m×高1.15m	朱	人骨3体(奥·両側に 集められる)	30才位の男女、1体は不明、刀子1
17	0	横穴	無		
18	Δ	横穴	無		
19	Δ	横穴(墓)	無		
20	0	横穴 (墓) 、玄室長2.25 m × 幅2.19 m × 高 1.3 m 、玄門幅 1 m	無	人骨3体(7才位30才位の男女)、奥に骨粉層、その東に肢骨2本中央に肢骨6本	貝釧2ケ、須恵(器)2ケ(提瓶)、短刀2ケ(太刀2)、刀子1 (3)、銀張耳輪2ケ(1)、矢(鉄)鏃(9)、鉄輪
21	0	横穴(墓)	無		(羨道に)須恵器3ケ(提瓶1)、(玄室中央周辺に)勾玉2ケ(メノウ1・ヒスイ1)、ガラス玉30ケ、管玉15ケ、耳輪金・銀(2)・銅(銅→銀)、鈴1ケ(2)、鉄器(刀子3)、矢(鉄)鏃数ケ(3)、刀子(3)、馬具(鏡板・轡)
22	0	横穴	無		
23	0	横穴	無		
24	0	横穴	無		須恵器2ケ、蓋石の横
25	0	横穴	無		
26	0	横穴	無	土砂崩れのため調査不能	
27	Δ	横穴(墓)	無		
28	0	横穴	無		
29	Δ	横穴(墓)	無		
30	0	横穴(墓)	無	人骨	須恵器、鉄器
31	Δ	横穴(墓)	無		
32		横穴(墓)、天井が崩壊	無	人骨8体(玄室中央よ りやや手前左に頭蓋 骨3個、その南に肢骨 7、手前右に肢骨1)	(羨道に)須恵器3ケ(提瓶3)、(玄室中央周辺に)勾玉2ケ(メノウ1・ヒスイ1)、ガラス玉30ケ、管玉15ケ、耳輪金銀(2)・銅(銅→銀)、鈴1ケ(2)、鉄器(刀子3)、矢(鉄)鏃数ケ(18程度)、刀子(1)、馬具(辻金具3、金交1、雲珠1)
33		横穴(墓)、天井が崩壊	無		須恵器5ケ(長頸壺2·平瓶1·高坏2·坏蓋1·坏身1·提 瓶1・腿1)
34		横穴	無		
35		横穴	無	人骨	
36		箱式石棺	無	人骨	

<sup>※</sup>村山健治作成(同氏著1962『女山長谷古墳群』邪馬台郷土史会 p 7・8)の表を基礎に、『女山長谷古墳群』の本文・図及び村山氏撮影写真、また岩崎氏が村山氏から資料の提供を受け執筆したと想定される論文(岩崎光1962「各地域の後期古墳(筑後-山門郡女山長谷古墳群)」『古代学研究』 30号 古代学研究会 p 12~13) から大庭が内容を検討し、作成した。

#### 第2表 女山長谷古墳群一覧表



村山氏作成『女山長谷古墳群』掲載女山長谷古墳群配置図(左上は岩崎光氏論文掲載図)

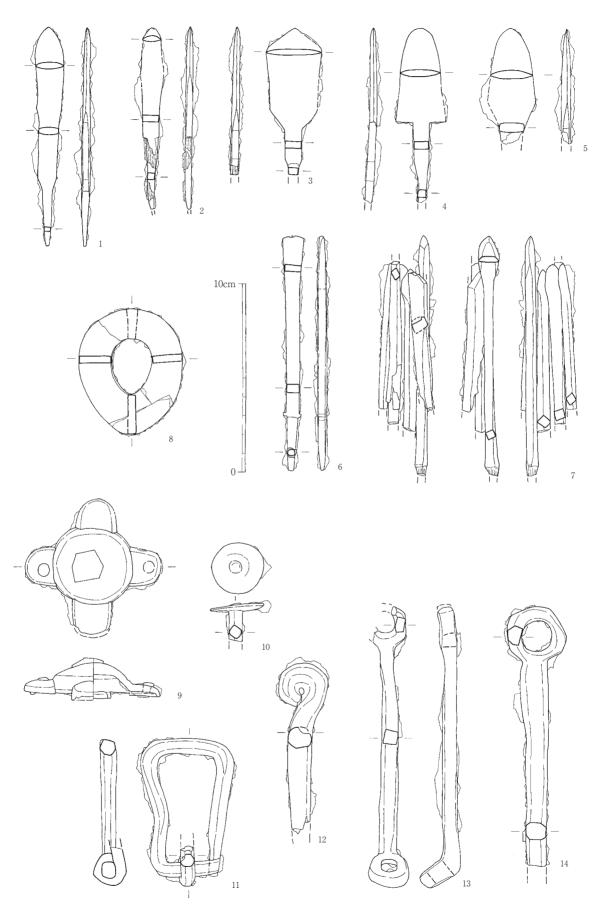


岩崎光氏論文掲載女山長谷古墳群古墳実測図 (原図提供は村山健治氏か)

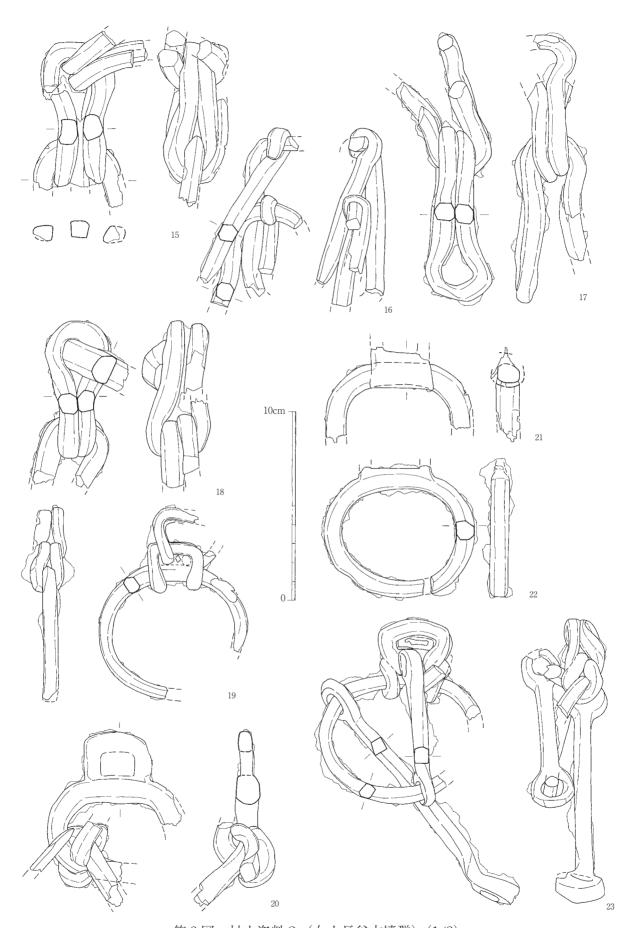
第6図 女山長谷古墳群関係図面

挿図	出土遺跡	注記女	插網	器種	(鏃)分類	法量(単位はcm) ( )は推定値、+αは欠損			備考
番号	出土地区名	注記名	種類	<b></b>	(その他)部位	長最大幅		最大厚	川 传
7-1	女山長谷古墳群	瀬高町女山長谷	鉄器	鉄鏃	平根·柳葉鏃	鏃身部4.3 頸部3.7 茎部3.5	鏃身部1.5 頸部1.35	0.45	茎部に木質が残存。
7-2	女山長谷古墳群	瀬高町女山長谷	鉄器	鉄鏃	平根·柳葉鏃	鏃身部2.45 頸部1.95 茎部0.45+ a	鏃身部1.2 頸部1.2 頸部0.6	0.4	茎部に木質が残存。
7-3	女山長谷古墳群	瀬高町女山長谷	鉄器	鉄鏃	平根·柳葉鏃	鏃身部5.35 頸部1.95 茎部0.45+ a	鏃身部2.9 頸部0.9	0.4	
7-4	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄器	鉄鏃	平根·長三角形鏃	鏃身部5.0 頸部3.05 茎部1.15+ a	鏃身部2.65 頸部0.9	鏃身部0.4 頸部0.45	
7-5	女山長谷古墳群	瀬高女山長谷	鉄器	鉄鏃	平根·長三角形鏃	鏃身部3.9 頸部2.2+ a	(2.6)	0.5	
7-6	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄器	鉄鏃	長頸·方頭鏃	鏃身部2.8 頸部6.75 茎部2.85	鏃身部1.1 頸部0.95 茎部0.55	0.5	棘状関である。
7-7	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄器	鉄鏃	長頸·柳葉鏃	鏃身部2.4 頸部9.6 茎部0.6+ a 鏃身部1.1 頸部0.45		鏃身部0.3 頸部0.4	
7-7	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄器	鉄鏃	長頸·柳葉鏃	鏃身部1.4 頸部7.2+ α	頸部0.55	頸部0.45	
7-7	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄器	鉄鏃	長頸·柳葉鏃	鏃身部2.1 頸部6.3+ α	鏃身部1.0 頸部0.55	頸部0.5	
7-7	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄器	鉄鏃	長頸·柳葉鏃	鏃身部1.8 頸部5.8+ a	頸部0.5	頸部0.4	
7-7	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄器	鉄鏃	長頸·鑿箭鏃	鏃身部6.4+ a 茎部0.9+ a	鏃身部0.9	鏃身部(0.7)	
7-7	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄器	鉄鏃	長頸·不明	鏃身部2.4+ a 頸部5.3+ a	頸部0.5	0.4	
7-8	女山長谷古墳群	瀬高町女山長谷	鉄製品	鍔		6.6 通し孔2.9	5.5 通し孔2.1	(0.6)	
7-9	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄製品	辻金具		7.2	(7.2)	2.2	鋲が2ケ所不明。
7-10	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄製品	馬具	鋲	直往	圣2.8	2.1+ a	
7-11	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄製品	馬具	鉸具	7.8	4.95	1.7	鞍と鐙を繋ぐ鉸具だろうか。
7-12	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄製品	馬具	轡の一部	9.0+ a	2.65	1.3	引手、銜などか。
7-13	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄製品	馬具	轡の引手	(15.0)	2.1	1.1	「名3」と注記あり。
7-14	女山長谷古墳群	瀬高女山長谷	鉄製品	馬具	轡の一部	13.7+ a	3.2	1.2	轡の引手部分か。
8-15	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄製品	馬具	轡あるいは鐙を 繋ぐ鉸具?	9.3	5.7+ a	3.8	鏡板の立聞部分と鎖、鐙用の 鉸具と鎖。鎖に挟み込まれて いる金具片は刺鉄か。
8-16	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄製品	馬具	鉸具	8.9+ a	2.8+ a	3.6	<b>鉸具が2個体分銹着している。</b>
8-16	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄製品	馬具	鉸具	6.1+ a	4.0+ a	1.7	<b>鉸具が2個体分銹着している。</b>
8-17	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄製品	馬具	不明	14.1	4.2+ a	3.8+ a	2連の鎖の両端が開いているので 鎖部分はこれのみであろうが、ど の部位に関連するものかは不明。
8-18	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄製品	馬具	不明	8.8+ a	4.5+ a	3.5+ a	2連の兵庫鎖と鐙の吊り金 具部分か。
8-19	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄製品	馬具	轡(兵庫鎖立聞付 円環轡)	10.2	7.9	1.8	「名3」と注記あり。兵庫鎖も 一部残る。円環部分に引手な どの金具痕らしき凹みあり。
8-20	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄製品	馬具	轡	9.2+ a	7.1+ a	4.3+ a	円環部分に引手、銜が残存。 鉄鏃片が銹着。
8-20	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄器	鉄鏃	長頸·柳葉鏃	鏃身部1.7 頸部1.4	_	_	轡の円環部分に銹着。

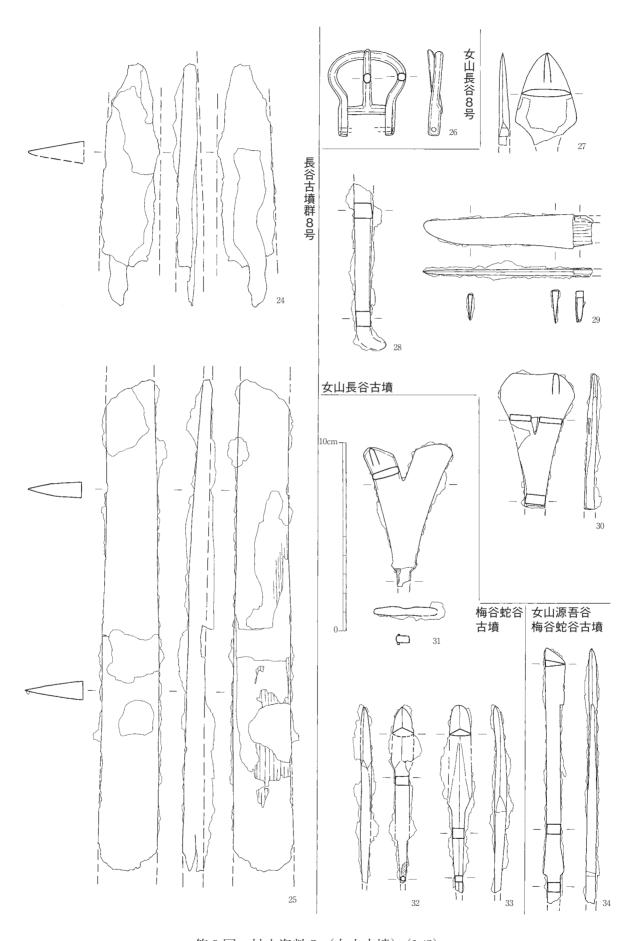
第3表 村山資料観察表①



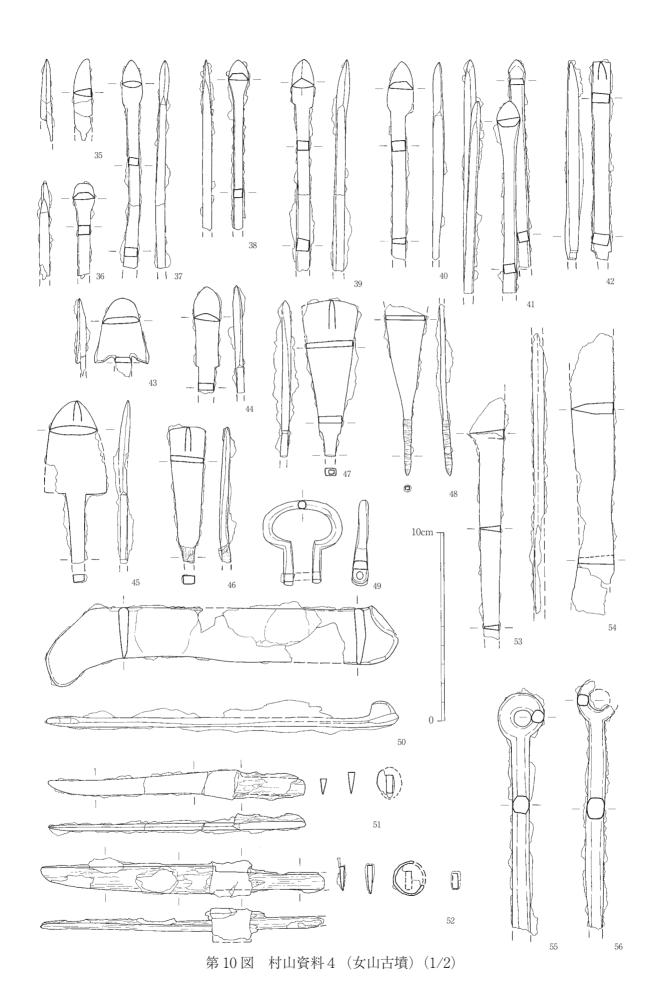
第7図 村山資料1 (女山長谷古墳群) (1/2)



第8図 村山資料2(女山長谷古墳群)(1/2)



第9図 村山資料3(女山古墳)(1/2)



- 18 -

挿図	出土遺跡	N=7.4	77.WT	00.77	(鏃)分類		法量(単位はci ご値、+αは欠		
番号	出土地区名	注記名	種類	器種	(その他)部位	長	最大幅	最大厚	備考
8-21	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄製品	馬具	轡(立聞付円環 轡)か	5.0+ a	(7.8)	(1.8)	
8-22	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄製品	馬具	轡(円環部分)	6.9+ a	8.0	1.0	円環部はサビ膨れにより割れ ているだけで欠損ではない。
8-23	女山長谷古墳群	女山長谷	鉄製品	馬具	轡(兵庫鎖立聞 付円環轡)	15.0	(8.8)	4.5	「名3」と注記あり。円環部分 に引手、衡、兵庫鎖が残存。
9-24	女山長谷古墳群	瀬高町長谷古墳 群8号?	鉄器	刀	刀身の先端部	12.9+ a	3.15+ a	1.1+ a	25と同一個体?
9-25	女山長谷古墳群	瀬高町長谷古墳群8号?	鉄器	刀		26.0+ a	3.15	1.1 ?	24と同一個体? 鞘の木質が銹着。刃部が全体に及び、関部は確認できない。 サビ膨れが著しく、厚さは不明瞭。
9-26	女山長谷古墳群	女山長谷8号	銅製品		鉸具	4.6	4.1	0.6	表面の一部に金メッキまた は金箔が残る。留金具部分が 欠損。
9-27	女山長谷古墳群	瀬高町女山長谷 古墳	鉄器	鉄鏃	平根·三角形鏃	鏃身部3.6 頸部1.2+ a	3.25	0.55	
9-28	女山長谷古墳群	瀬高町女山長谷 古墳	鉄製品	釘		8.8+ a	1.0	0.8	
9-29	女山長谷古墳群	瀬高町女山長谷 古墳	鉄器	刀子		刀身部8.0 茎部0.9+ α	刀身部1.85 茎部1.2	0.35	柄に木質が残存。
9-30	女山長谷古墳群	瀬高町女山長谷 古墳	鉄器	鉄鏃	平根·方頭斧箭鏃	鏃身部 7.7+ a	鏃身部4.0	鏃身部0.5	刃部が類円頭状になるタイプ。透か し孔をもつ。この類円頭状タイプは XI期以降に出現するが数は少ない。 (杉山1988,571p3行目)
9-31	梅谷蛇谷古墳	梅谷蛇谷古墳	鉄器	鉄鏃	平根·雁股鏃	鏃身部6.7 茎部0.8+ α	鏃身部4.7 茎部0.75	鏃身部0.5 茎部0.35	鏃身関部が山形。茎部に木質 が残る。
9-32	梅谷蛇谷古墳	梅谷蛇谷古墳	鉄器	鉄鏃	平根·柳葉鏃	鏃身部3.3 頸部3.7 茎部2.3+ a	鏃身部1.15 頸部0.75 茎部0.5	鏃身部0.55 頸部0.5	頸関部の形は不明瞭。茎部に 木質または繊維が残る。
9-33	梅谷蛇谷古墳	梅谷蛇谷古墳	鉄器	鉄鏃	平根·柳葉鏃	鏃身部5.7 茎部4.2+ a	鏃身部1.3 茎部0.65	0.65	
9-34	女山源吾谷 梅谷蛇谷	女山源吾谷梅谷 蛇谷	鉄器	鉄鏃	長頸·片刃形鏃	鏃身部3.0 頸部9.0 茎部1.5+ α	鏃身部1.1 頸部1.05 茎部0.7	鏃身部0.4 頸部0.5 茎部0.5	
10-35	女山古墳	女山古墳	鉄器	鉄鏃	長頸·片刃形鏃	鏃身部4.3+ a	鏃身部0.9	鏃身部0.45	刀子の可能性もある。
10-36	女山古墳	女山古墳	鉄器	鉄鏃	長頸·不明(柳葉鏃 または三角形鏃)	鏃身部1.5 頸部3.4+ α	鏃身部1.2 頸部0.65	鏃身部0.35 頸部0.5	
10-37	女山古墳	女山古墳	鉄器	鉄鏃	長頸·柳葉鏃	鏃身部2.5 頸部8.4+ α	鏃身部1.1 頸部0.75	0.4	
10-38	女山古墳	女山古墳	鉄器	鉄鏃	長頸·柳葉鏃	鏃身部2.2 頸部6.65	鏃身部1.05 頸部0.5	鏃身部0.4 頸部0.5	
10-39	女山古墳	女山古墳	鉄器	鉄鏃	長頸·柳葉鏃	鏃身部2.5 頸部8.5	鏃身部1.15 頸部0.65	鏃身部0.5 頸部0.65	
10-40	女山古墳	女山古墳	鉄器	鉄鏃	長頸·柳葉鏃	鏃身部2.8 頸部7.6+ α	鏃身部1.4 頸部0.75	0.55	
10-41	女山古墳	女山古墳	鉄器	鉄鏃	長頸·柳葉鏃	鏃身部2.3 頸部7.8+ a	鏃身部1.25 頸部0.65	鏃身部0.4 頸部0.45	
10-41	女山古墳	女山古墳	鉄器	鉄鏃	長頸·三角形鏃	鏃身部 10.9+ α	鏃身部0.8	鏃身部0.5	
10-42	女山古墳	女山古墳	鉄器	鉄鏃	長頸·鑿箭鏃	鏃身部3.3 頸部6.7 茎部0.4+ a	鏃身部1.0 頸部0.8	0.5	
10-43	女山古墳	女山古墳	鉄器	鉄鏃	平根·短頸三角 形鏃	鏃身部3.4 頸部1.1+ a	鏃身部2.8 頸部0.9	0.3	
10-44	女山古墳	女山古墳	鉄器	鉄鏃	長頸·柳葉鏃	鏃身部4.2 頸部1.4+ a	鏃身部1.4 頸部0.8	鏃身部0.4 頸部0.35	
10-45	女山古墳	女山古墳	鉄器	鉄鏃	平根·三角形鏃	鏃身部4.9 茎部3.6+ a	鏃身部(3.3)	0.45	
10-46	女山古墳	女山古墳	鉄器	鉄鏃	平根·方頭鏃	鏃身部6.3 茎部0.8+ a	鏃身部1.9	鏃身部0.3 部0.4	茎に繊維を巻き、その上に鏃 身関部を境に木質が銹着。

第3表 村山資料観察表②

挿図	出土遺跡	注記名	種類	器種	(鏃)分類		k量(単位はc で値、+αは欠		備考
番号	出土地区名	711011	1至天只	和印1王	(その他)部位	長	最大幅	最大厚	. VIII - 6
10-47	女山古墳	女山古墳	鉄器	鉄鏃	平根·方頭鏃	鏃身部8.2 茎部1.1+ a	鏃身部2.9	0.4	
10-48	女山吉墳	女山古墳	鉄器	鉄鏃	平根・不明(方頭 鏃または圭頭鏃)	鏃身部5.6+ a 茎部3.4	鏃身部2.2+ a	0.2	関の部分が不明瞭。茎部全体 に繊維を巻き付けている。
10-49	女山	女山	銅製品	馬具	鉸具	4.45	4.2	0.85	表面の一部に金メッキまた は金箔が残る。鞍や飾金具に 伴うものか。
10-50	女山吉墳	女山古墳	鉄器	鉄鎌		身部18.5	身部3.0	0.5	曲刃鎌。基部の角折り返し。
10-51	女山古墳	女山古墳	鉄器	刀子		刀身部9.7 茎部0.9	刀身部1.5 茎部0.95	0.35	両関をなす。鹿角製柄の一部 残存。形状から刃部の研ぎ減 りが推定される。
10-52	女山古墳	女山古墳	鉄器	刀子		刀身部9.2 茎部5.7	刀身部1.5 茎部0.8	0.35	両関をなす。全体に木質残存 (木製柄の一部も残る)。 柄縁に幅2cmの鉄板を巻く。
10-53	女山古墳	女山古墳	鉄器	刀?	関から茎の部分?	刀身部2.6+ α 茎部10.1+ α	刀身部1.8+ a 茎部1.25	刀身部0.5 茎部0.35	
10-54	女山古墳	女山古墳	鉄器	刀?	刀身部?	14.9+ a	2.3	0.55	
10-55	女山古墳	女山古墳	鉄製品	馬具	轡の一部	12.6+ α	棒状部0.9 環状部2.4	棒状部0.9 環状部0.65	砂粒が多く銹着。
10-56	女山古墳	女山古墳	鉄製品	馬具	轡の一部	13.0+ α	棒状部1.0 環状部2.2	棒状部1.1 環状部0.6	
11-57	山内古墳群	瀬高町山内古 墳群	鉄器	刀		刀身部50.35 茎部7.5+ a 鍔0.6	刀身部2.8 茎部2.15 鍔3.8	刀身部1.4 茎部0.6 鍔2.05	刀身の茎の目釘孔は確認できない。 鍔や鎺は緑色なので銅製。鎺には巻 き付け時の擦痕あり。柄に木質残る。
11-58	藤の尾松の本 遺跡	藤の尾松の本 遺跡	鉄器	鉄鏃	長頸·三角形鏃	鏃身部6.2+ a	鏃身部0.65	0.5	
11-59	藤の尾松の本 遺跡	藤の尾松の本 遺跡	鉄器	鉄鏃	長頸·鑿箭鏃	鏃身部3.2 頸部7.05 茎部0.35	鏃身部1.0 頸部0.9 茎部0.45	0.75	
11-60	上大谷横穴群 第2号	上大谷横穴群 第2号	骨角器	鏃	長頸·柳葉鏃	鏃身部2.9+ a 頸部5.85 茎部2.65	鏃身部0.85 頸部0.7	0.35	
11-61	上大谷横穴群 第2号	上大谷横穴群 第2号	骨角器	鏃	長頸·不明 (鑿箭鏃か)	鏃身部0.4+ α 頸部4.8 茎部2.9+ α	0.85	0.4	
11-62	上大谷横穴群 第2号	上大谷横穴群 第2号	鉄製品	馬具? 弓付属 金具?	留金具? 両頭金具?	3.8	0.85	0.85	木質が残る
11-63	上大谷横穴群 第2号	上大谷横穴群 第2号	鉄器	刀子		刀身部9.0+ α 茎部3.3	鏃身部2.0 茎部(0.85)	0.65	鹿角製柄の刀身側は鹿角の上に 鉄板が巻いてあった可能性があ る。刀身に木質(樹皮?)が残る。
11-64	上大谷横穴群 第2号	上大谷横穴群 第2号	鉄器	刀子		刀身部7.4 茎部2.6+ α	刀身部1.7 茎部0.75	0.45	鹿角製柄の表面は面取りし ている。

第3表 村山資料観察表③

#### 参考文献

日本馬具大鑑編集委員会(編)1990『日本馬具大鑑 第1巻古代上』吉川弘文館

高久健二·重藤輝行1993「武器」「武具」「馬具」「工具」「番塚古墳」苅田町教育委員会·九州大学考古学研究室

尾上元規1993「古墳時代鉄鏃の地域性 - 長頸式鉄鏃出現以降の西日本を中心として - 」『考古学研究157』考古学研究会 杉山秀宏1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集 第八』吉川弘文館

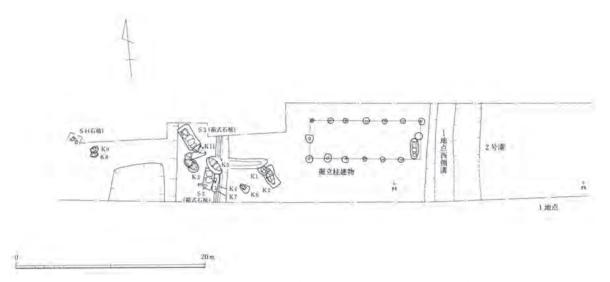
千賀久·村上恭通(編)2003『考古資料大観 第7巻』 - 弥生·古墳時代 鉄·金銅製品 - 小学館

橋本達也2008「九州における古墳時代後期の甲冑と鉄鏃」『後期古墳の再検討』第11回九州前方後円墳研究会 桃崎祐輔2008「九州の古墳時代後期馬具とその変遷」『後期古墳の再検討』第11回九州前方後円墳研究会

### 村山資料の鉄器の特徴

- ・長頸鏃は分類するのが困難なものが多い。(例、長頸三角形鏃と長頸柳葉鏃)
- ・長頸鏃は全体的に柳葉鏃が多い

(西堂将夫)



第12回 山門北池(松延)遺跡1地点実測図(1/400)

# (4) 山門北池(松延)遺跡墳墓出土遺物の紹介

#### a. はじめに

山門北池(松延)遺跡は平成15年度の九州新幹線建設による調査以前に、県営圃場整備及び国営矢部川左岸導水路事業の幹・排水路工事に伴い、瀬高町(現みやま市)教育委員会より、松延遺跡という遺跡名で発掘調査・報告されている(川述昭人1998「松延遺跡の調査」「瀬高地区遺跡群Ⅱ」瀬高町文化財調査報告書第15集 瀬高町教育委員会)。昭和60年9月9日~21日に実施された松延遺跡の発掘調査では、当時事業主体の瀬高町教育委員会における文化財専門職員は、嘱託職員のみであったため、福岡県教育庁南筑後教育事務所の担当専門職員が派遣された経緯がある。そのため、平成9年度の報告書作成時には、福岡県教育委員会も遺物整理作業及び報告書執筆の一部を分担した。しかし、同報告書にも記されているのように、紙数の関係から、報告された墓地は国営矢部川左岸導水路事業分のみで、同時に調査された県営圃場整備分(1地点)は遺構配置図を紹介する程度にとどめられている。本書では、本遺跡2次調査7・8区で検出した弥生時代中期の甕棺墓56基を報告しているため、その関連資料として、実測まで行われたが報告されなかった松延遺跡1地点の墓地出土資料の紹介をすることとしたい。

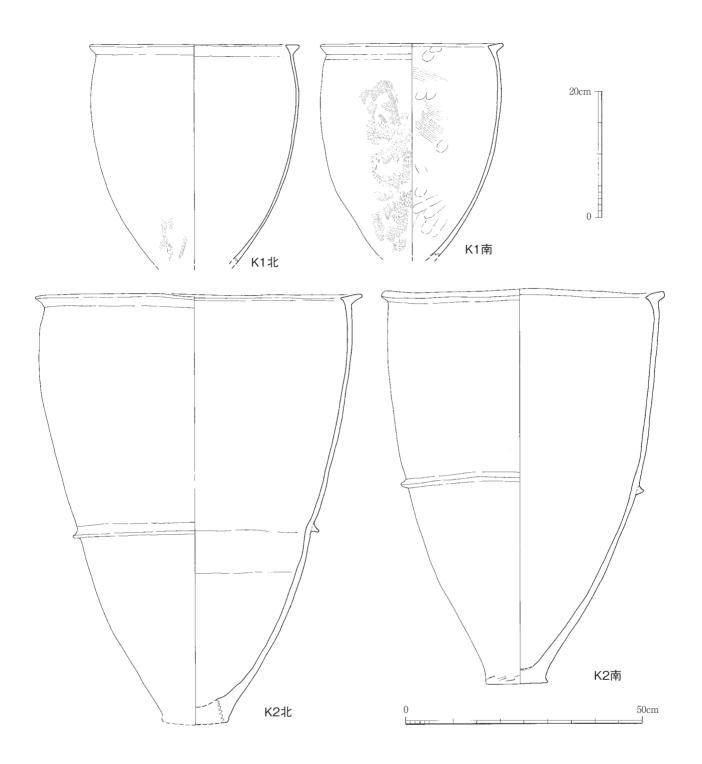
なお、同墓地出土資料の整理作業は九州歴史資料館及び福岡県教育庁指導第二部文化課太宰府事務所で行い、実測作業は甕棺を同課技師の吉田東明(現文化財保護課技術主査)と当時同調査補助員の大庭が行い、他の遺物については太宰府事務所整理作業員が実施した。なお、遺物整理から12年経過しているため、3号甕棺南甕を除き甕棺墓は既に整理箱に収納されており、他の遺物も実測当時の姿をとどめていない。そのため、3号甕棺南甕を除き、遺物の観察は当時の注記によった。

#### b. 墳墓群の概要

松延遺跡報告書では、東1トレンチの箱式石棺墓1基・壺棺墓2基、また1地点の箱式石棺墓3基、石蓋土壙墓1基は報告され、1地点の甕棺墓10基分は未報告となっている。第12図の1地点の遺構配置図を見ると、1~7・11号甕棺墓は集塊状に存在するが、8・9号甕棺

挿図 番号	出土遺跡	注記名	種類	法量(cm) ( )は復元値	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	備考	甕棺型式· 遺物時期
	山門北池(松延)遺跡	K1北	甕棺	残存高90.5 口径(35.2) 胴部最大径(33.2)	2mm以下の石英、 角閃石、赤褐色・ 黒色・白色の砂 粒を多く含む	良好	外:白黄褐色 内:橙褐色 ~黄褐色	外面にハケメ痕跡	全面磨滅	南筑後KIb
13-K1	山門北池(松延)遺跡	K1南	甕棺	残存高37.3 口径(29.2) 頸部径(27.3)	1~4mmの赤褐色 粒、1mmの石英、 白色・黒色の砂 粒を多く含む	良好	外:淡橙色 内:橙色	外面ハケメ、内面 ハケメ後ナデ、口 縁部ヨコナデ	内面に指圧痕あり	南筑後KIb
13-K2	山門北池(松延)遺跡	K2#L	甕棺	残存高90.5 口径68.6 胴部最大径65.7 底径14.0 凸带径51.6	細かい砂粒を 多く含む	良好	外:黄褐色 内:灰黄褐色	両面ナデ、口縁部ョコナデ		南筑後KIb
13-K2	山門北池(松延)遺跡	K2南	甕棺	器高83.5 口径59.0 胴部最大径56.4 底径12.9 口縁内径52.0	砂粒をやや多 く含む	良好	黄茶灰色 ~黄灰色	両面ナデ、口縁部 ヨコナデ	口縁上面、胴部上 半に部分的に黒斑 あり	南筑後KIb
14-K3	山門北池(松延)遺跡	K3北	甕棺	器高82.5 口径60.4 胴部最大径73.0 底径13.0 口縁内径52.8	やや大きめの 砂粒を多く含 む	良好	灰黄色	両面とも丁寧な ナデ、口縁部ヨ コナデ		南筑後KIa
14-K3	山門北池(松延)遺跡	K3南	甕棺	器高82.3 口径61.0~64.5 胴部最大径65.2 底径10.3 口縁内径51.0~56.5	砂粒をやや多 く含む	良好	黄茶色	両面とも丁寧な ナデ、口縁部ヨ コナデ	外面の頭部直下と胴中位に3条のヘ ラ描沈線を鋭利な工具で行い、その 間に放射状のヘラ描文様を4ケ所に 配置。竪穴住居を示したような鋭利 な工具による文様が1ケ所あり。	南筑後KIb
15-K4	山門北池(松延)遺跡	K4上	甕棺	器高38.6 口径34.2 胴部最大径30.3 底径7.5 頸部径29.8	白色・赤褐色・黒 色の細かい砂 粒を多く含む	良好	淡橙色	外面ハケメ、内 面ナデ、口縁部 ヨコナデ	内面に指圧痕あり	南筑後KⅡb (須玖Ⅱ式 中段階)
15-K4	山門北池(松延)遺跡	K4下	甕棺	残存高38.0 口径34.8 胴部最大径31.1 底径9.0 頸部径29.5	1mmの白色・赤 褐色の砂粒を 多く含む	良好	橙色~淡橙色 底部外面:黒色	外面ハケメ、内 面ナデ、口縁部 ヨコナデ	底部外面に黒斑、 その内面も黒色 化。内面に指圧痕。	南筑後KⅡb (須玖Ⅱ式 中段階)
14-K5	山門北池(松延)遺跡	1地点 K5南	甕棺	器高80.8 口径66.8 胴部最大径60.6 底径13.4 口縁内径56.0	細かい砂粒を 多く含む	良好	茶色	両面ナデ、口縁 部・突帯部ヨコ ナデ		南筑後KIa
14-K5	山門北池(松延)遺跡	1地点 K5北	甕棺	残存高83.5 口径67.4 胴部最大径63.2 底径10.4	1mm位の砂粒を 多く含む。密で ある。	良好	外:赤茶褐色 内:白黄褐色	両面ナデ、口縁 部・突帯部ヨコ ナデ		南筑後KIa
15-K6	山門北池(松延)遺跡	K6	甕棺	器高42.3 口径38.0 胴部最大径36.1 底径5.4 頸部径35.0	1mmの石英、黒 色・赤褐色の砂 粒を多く含む	良好	外:淡橙色 ~橙褐色 内:淡灰色 ~灰色	外面ハケメ後最大径部 に工具痕(突帯貼付の ため?)、内面ナデ、口 縁部・上底部ヨコナデ	単棺。内面に指圧 痕。内面と上底部 に黒斑。	南筑後KIIa
15-K8	山門北池(松延)遺跡	K8上	甕棺	残存高21.3 底径(6.0) 胴部最大径(30.0)	1~5mmの赤褐色粒、 2mm以下の石英、角 閃石、雲母、白色砂 粒を多く含む	良好	外:淡橙褐色 ~黒色 内:白黄褐色	両面ナデ	胴最大部に沈線が 巡る	須玖 I 式 新段階
15-K8	山門北池(松延)遺跡	K8下	甕棺	器高(42.0) 口径(33.0) 胴部最大径(32.1) 底径6.6	1mm以下の石英、 赤褐色・黒色の砂 粒を多く含む	良好	外:淡黄褐色 ~黄褐色 内:暗褐色 ~黄褐色	外面ハケメ、内 面ナデ、口縁部 ヨコナデ	内面の指圧痕あり	南筑後KIb
15-K9	山門北池(松延)遺跡	K9上	甕棺	器高(30.3) 口径29.8 胴部最大径26.5 底径(7.1)	細砂粒を含む	良好	外:レンガ色 内:淡橙褐色		外面全体が丹塗磨研(丹は内面にも 一部付着)。口縁端 面に刻目が巡る。	須玖Ⅱ式 中段階
15-K9	山門北池(松延)遺跡	K9下	甕棺	残存高21.6 口径31.5 胴部最大径29.8	0.5~1mmの石 英を多く含む。	良好	橙褐色	磨滅して調整が 不明瞭		南筑後KIIb
16-K10	山門北池(松延)遺跡	K10	甕棺	残存高43.8 胴部最大径(60.0)	砂粒を多く含む	良好	外:黄灰色 ~黄茶色 内:黒色	両面ナデ、突帯 部ヨコナデ		南筑後KIa か
16-K11	山門北池(松延)遺跡	K11上	甕棺	残存高47.0 口径60.6~63.5 胴部最大径72.2 口縁内径52.1~55.6	砂粒をやや多く含む	やや 軟	灰肌色	両面ヨコヘラミガキ (外面は場所によって はタテヘラミガキ)、口 縁部・突帯部ヨコナデ		南筑後KIa
16-K11	山門北池(松延)遺跡	K11下	甕棺	器高81.5 口径63.1 胴部最大径64.2 底径14.0 口縁内径53.5	砂粒をわずか に含む。良好。	やや 軟	薄い 黄灰色	外面上半はミガキ?、外面下半と内面はナデ、口縁部・突帯部はヨコナデ		南筑後KIa
17-1	山門北池(松延)遺跡	7号甕棺墓 墓壙内	弥生 (甕)	残存高11.1 口径(26.0) 頸部径(24.0)	細かい石英、 雲母、黒・赤褐 色・白色のむ 粒を多く含む	良好	橙色	外面ハケメ(同 一個体破片にハ ケメ残る)	全体磨滅。内面の 屈曲部直下に指圧 痕あり。	弥生時代 中期初頭
17-2	山門北池(松延)遺跡	7号甕棺墓 墓壙内	弥生(甕)	残存高9.8 口径(27.4) 頸部径(24.0)	細かい石英、 黒色砂粒を含 む	良好	外:褐色 内:茶褐色 ~褐色	外面ハケメ、内面は上方向ケズリ、口縁部ヨコナデ	外面磨滅	古墳時代 後期
17-3	山門北池(松延)遺跡	2号石棺墓 墓壙内	弥生 (甕)	残存高20.0 底径9.0	1mm以下の白色・ 赤褐色・黒色の 砂粒を多く含む	良好	外:橙褐色 内:橙褐色 ~淡灰色	外面ハケメ、内面の胴部下半はケズリ?、底部はナデ?	内面磨滅	弥生時代 後期後半か
17-4	山門北池(松延)遺跡	1地点 3号石棺墓 付近西甕	弥生 (甕)	残存高37.3 底径6.3	3mm以下の石英、 角閃石、赤褐色 砂粒を多く含む	良好	外:白黄茶色 ~白桃色 内:白黄茶色	外面ハケメ、突 帯部ヨコナデ	内面磨滅。底部外面に黒斑(その内面も黒色化)。	弥生時代 中期前半

第4表 山門北池(松延)遺跡出土遺物観察表

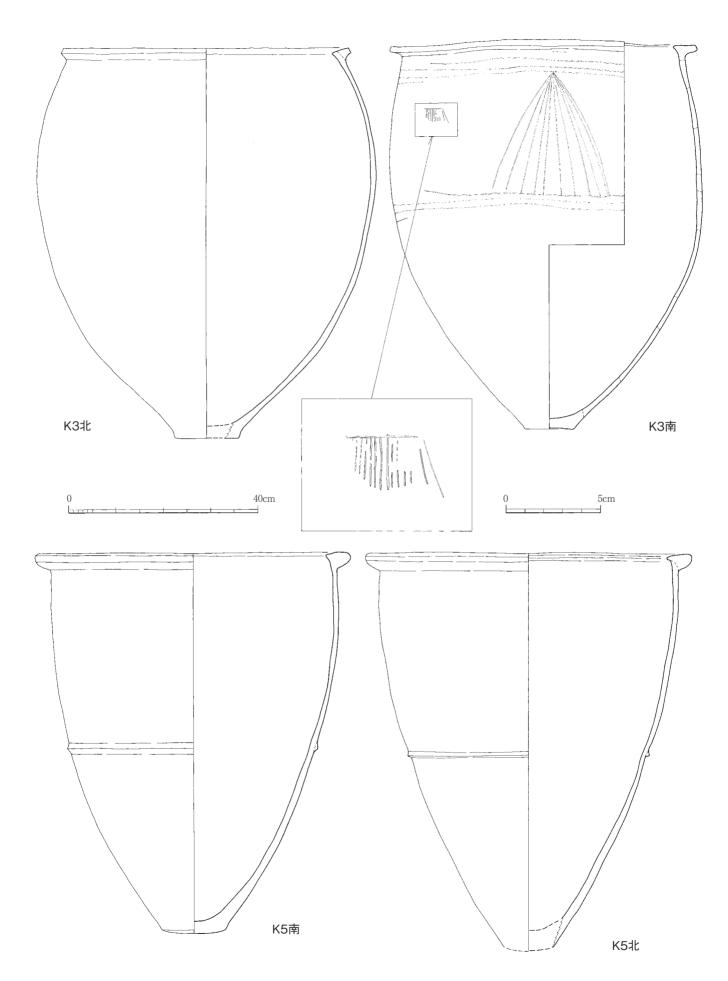


第 13 図 松延遺跡 1 ・ 2 号甕棺実測図(K 1 は 1/6、K 2 は 1/8) 墓は 8 mほど西側に位置する。甕棺の観察は第 4 表をご覧いただきたいが、以下では既報告の遺構配置図から分かる範囲で各墳墓の状況について記述する。

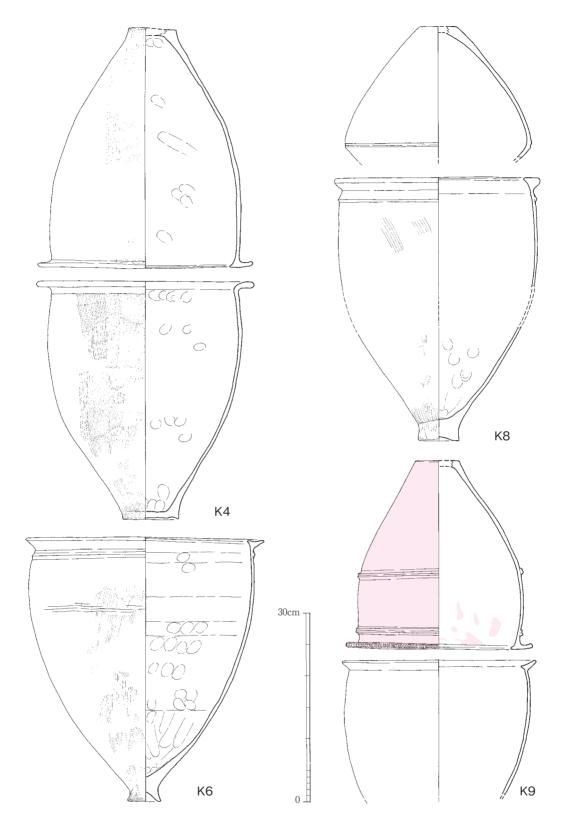
**1号甕棺墓**:東西溝に北側を壊されるが、2号甕棺墓を切る小形棺。いずれも底部を欠損することから、傾斜角はほぼ水平か。

2号甕棺墓:墓群最も東に位置する大形棺。1号甕棺墓に切られる。

**3号甕棺墓**:配置図では最も西に位置する大形棺で、5・11号甕棺墓と方位がほぼ一致する。 なお、3号甕棺南甕には、口縁直下と胴部中位に鋭利な工具による1本書きの3条の沈線、そ

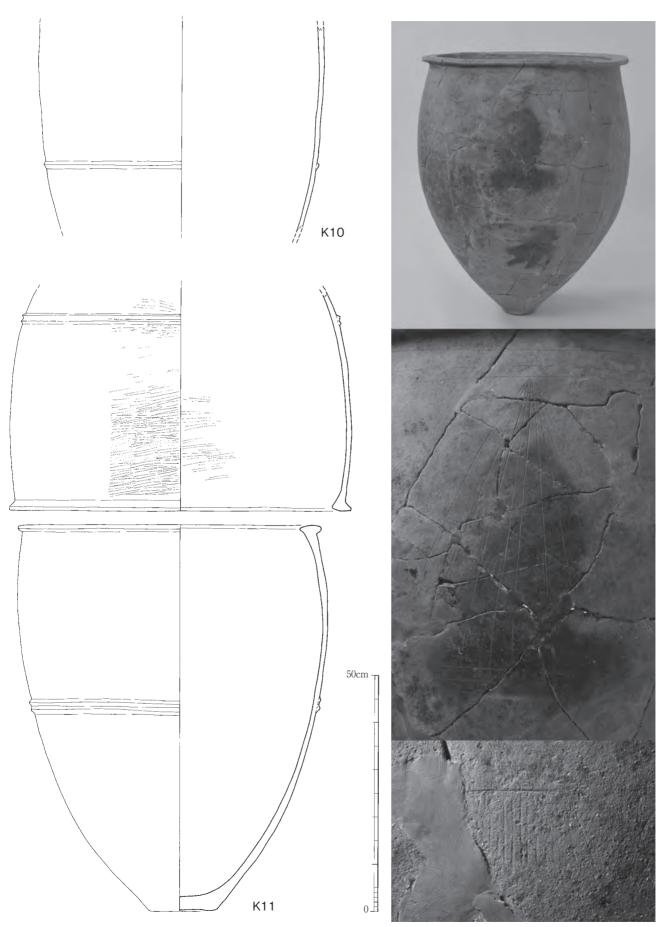


第14回 松延遺跡3・5号甕棺実測図(1/8、拡大図は1/2)



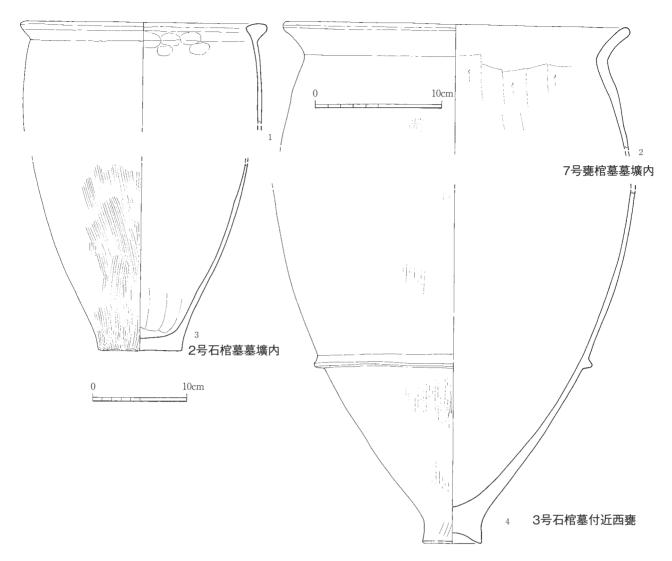
第15図 松延遺跡4・6・8・9号甕棺実測図 (1/6)

の間には沈線と同じ鋭利な工具による放射状の文様を現状では2ヶ所、元々は4ヶ所に施していたと想定される。またその横沈線と放射状文様の間に、竪穴住居を示したようなヘラ描き文様が1ヶ所認められる。まず横沈線は上下とも下から上への1本書きで、下沈線が左上に跳ね上



第 16 図 松延遺跡 10·11 号甕棺実測図 (1/8)

第17図 松延遺跡3号甕棺南甕写真



第18回 松延遺跡7号甕棺墓、2号石棺墓墓壙内、3号石棺墓付近西甕出土土器実測図(2は1/3、他は1/4)

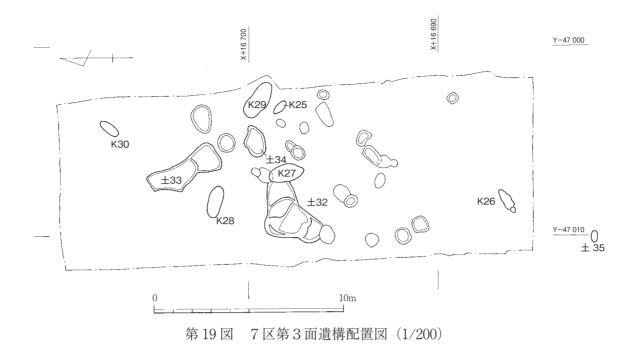
がることから、おそらく人自体が動くことで施文したと考えられる。次にその間の放射状文は 最初に縦1本入れ、その線を基準に左右5本内側から外側に、また上から下へ施している。こ の放射状文様は上下端とも沈線からはみ出すものはほどんどなく、正確に行われている。

竪穴住居状のヘラ描き文様は左は欠損するため、全容は不明である。最初に横沈線・放射状 文様とは異なる細い工具で、一部横線が重複する箇所から横線を左から右に入れたことが分か り、縦線はおそらく左から右、上から下に入れたと考えられるが、この縦線は浅いため、右側 へ行くほど線の残りが悪い。文様左端の左上がりの斜線は針状の鋭利な工具で下から上に焼成 後に刻んでおり、他の線とは施文方法や順序が異なるが、この線すぐ左の焼成前刻みの縦線は 浅くしか残っていないが、斜めの線であるため、この焼成後に刻んだ線も同一文様を構成する ものであると判断した。

この甕棺の文様に関する検討は、紙数の関係上、簡単な観察記述にとどめ、類例との比較検討も含めて別稿にて行うこととしたい。

4号甕棺墓:2号箱式石棺墓に切られ、甕棺型式から5・7号甕棺墓、南北溝を切る小形棺。

5号甕棺墓:配置図とは異なり、甕棺型式から2号箱式石棺墓・4号甕棺墓に切られ、南北溝



を切る大形棺。

6号甕棺墓:単棺の中形甕である。

**7号甕棺墓**: 2号箱式石棺墓とおそらく4号甕棺墓に切られ、南北溝も切るもので、棺自体は現存していなかった。墓壙内から弥生時代中期初頭甕(第18図1)が出土した。

8号甕棺墓:甕棺型式から9号甕棺墓に切られる小形棺。

9号甕棺墓:甕棺型式から8号甕棺墓に切る小形棺で、上甕は丹塗磨研精製甕を使用。

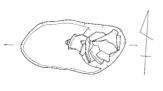
**10号甕棺墓**:配置図にはない大形棺で、残存するのは胴部のみ。おそらく上層遺構に壊されたものである。

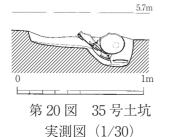
11 号甕棺墓: 3号箱式石棺墓に上甕を大きく壊された大形棺。

また、第18図3・4の甕の存在から、2・3号箱式石棺墓は甕棺墓を壊して造られた可能性がある。

# c. まとめ-墓地の変遷-

まず南筑後 K I a 式段階には、墓地中央に大形棺である  $3\cdot 5\cdot 11$  号甕棺墓が形成され、これらは北西 – 南東方向に軸をそろえている。次の南筑後 K I b 式段階には、大形棺では 2 号甕棺墓、小形棺では  $1\cdot 8$  号甕棺墓が作られ、特に大形棺 2 号甕棺墓は主軸が南北方向に変化している。南筑後 K I c 式段階のものは調査区内では確認できなかったが、南筑後 K II a 式段





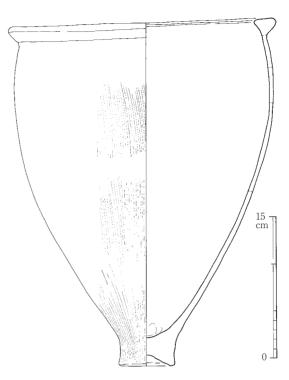
階には単棺の6号甕棺墓、続く南筑後KIIb式段階には9号甕棺墓が作られる。このように、やや離れた場所に位置する8・9号甕棺墓を除き、甕棺墓群は調査区内では集塊状を呈するが、墓群全体では列状傾向を示す可能性も棄てきれない。その後、弥生時代後期になり、2~4号箱式石棺墓が作られる。このことから、当遺跡は弥生時代中期前半~弥生時代後期まで継続した墓地である可能性が高い。山門北池(松延)遺跡では弥生時代後期中葉~古墳時代前期前半の集落は発見されているが、甕棺墓を形成した弥生時代中期の集落跡は不明である。今後の調査の進展に期待したい。

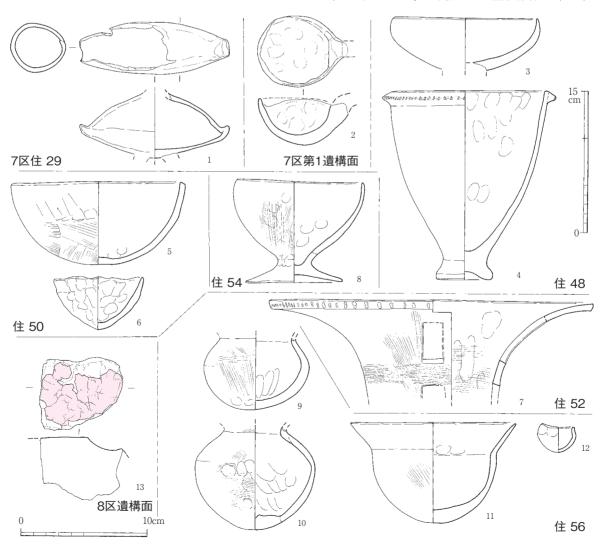
# (5) 7・8区資料の補遺

7・8区の報告である『藤の尾垣添遺跡Ⅰ・Ⅱ』 を作成後、7区の土坑1基と7・8区の住居跡を 中心とする出土資料の報告し忘れに気が付いたの で、ここではその資料の報告をしたい。

# a. 7区第3面35号土坑(図版49、第19·20図)

『藤の尾垣添遺跡 I』 第25図 (p41·42)の 第3面遺構配置図では26号甕棺墓の南、調査区 外とした位置にある。調査段階では甕棺墓として 調査・取り上げを行ったが、出土状況の検討の結 果、土坑として報告する。土坑規模は長軸83cm ×短軸39cm、土坑東のピット状に下がる箇所で 深さ 28cm を測る、長楕円形の土坑である。出土 状況はほぼ完形の甕1個体の破片を積み重ね、最 第21図 35号土坑出土土器実測図 (1/4)





第22図 7・8区出土土器・壁土実測図 (4は1/4、他は1/3)

後に底部片を置いた状況であり、西側のテラスも含めて甕を埋めるために意図的に掘削された 土坑で、割られた甕も何らかの意図があることが想定される。出土土器から、弥生時代中期初 頭の土坑と考えられる。

出土土器(図版 65、第 21 図) ほぼ完形の弥生中期初頭の甕で、口径 28.0 cm、底径 6.0 cm、器高 36.4 cmを測る。やや内傾する三角口縁は丸味を帯び、砲弾形の胴部はやや張るもので、底部はやや上げ底となる。胴部外面には二次加熱痕・ススがあり、特にススは顕著に付着する。内面下位にはコゲ痕あり。色は灰黄色。

# b. 報告で漏れた7・8区出土資料(遺物図版は第23図に掲載、実測図は第22図)

1はラグビーボール状体部の両先端をつまみ上げ、現在は欠けた口縁部と脚部を付けたもの。特殊な形態の土器で、熊本県南部の旧城南町宮地・一丁畑出土の舟形注口土器(『新熊本市史通史編第1巻 自然 原始・古代編』図3-70、p 589で存在を確認、原報告は『弥生土器集成』本編)が類例となる。また、この宮地・一丁畑出土例から、脚部は「八」の字状に開き、口縁部は広口になると考えられ、宮地・一丁畑出土例では体部は船形状により広く広がるとともに文様状のハケ目?や、脚部には櫛描沈線文を2条と多数の孔を施しているが、本例の体部は無文である。宮地・一丁畑出土例は弥生時代後期後半前後の時期に比定されており、本例はそれより若干後出するものである可能性が高い。調整は内外面丁寧なナデを施し、器壁は薄い。胴部中央近くは1枚の粘土板を曲げることで成形しているが、両先端部の突起は粘土を貼り付けたか、余分な粘土で作ったかは不明。色は白黄褐色。7区29号住居跡出土。2は大形の杓子形土器で、把手は欠ける。内外面には黒斑があり、色は白灰黄色。7区第1面遺構面出土。

3・4は8区48号住居跡出土。3は椀状の坏部を持った高坏で、色は橙褐色。4は弥生中期初頭の甕で、三角口縁端部には押し引き刻目を施し、砲弾形の胴部で、底部は上げ底となる。外面には二次加熱痕・ススあり。色は黄茶褐色。5・6は8区50号住居跡出土。5は在地系直口鉢で、体部上位はハケ後ケズリを施す。内外面の7割近くは黒斑が認められ、焼成温度が低いことが分かる。色は灰黄色。6は手づくね土器で、内外面ナデ痕が顕著。色は黄橙褐色。7は有明海沿岸型器台上部片で、上部端部にはハケ工具による刻目を施す。外面体部上下には長方形透かし孔を各4ヶ所施し、その間には横描文を施す。色は橙褐色。8区52号住居跡出土。9~12は8区56号住居跡出土で、9~11は古墳時代中期前半のもの。9・10は覆土下層出土の小形丸底壺で、いずれも口縁部は欠損する。9の外面には黒斑があり、色は灰黄色。10の内外面は指押さえ痕が良く残る。また内面底部の粘土継ぎ目痕から、最初に丸い底部を作り、その後粘土紐を積み上げて成形したことが良く分かる。外面には二次加熱痕とススがあり、色は暗灰黄褐色。11は口縁部が開く外反口縁鉢で、外面には黒斑あり。色は外が灰黄褐色、内が黄橙褐色。12は手づくね土器。胎土は精良で、色は黄褐色。

13 は8 区遺構面出土の壁土状土製品。生きている面は、ベンガラを塗布する面のみで、その面はナデにより平滑に仕上げる。またその面右側の窪みは、その部分に住居構築部材が当たっていたため、窪んでいると想定される。胎土にはスサを含み、色は黄褐色が基調。なお、この壁土状土製品の顔料及び胎土組成を解明するため、自然化学分析を実施しており、その報告は「 $\mathbb{IV}$  – 5 の出土壁材および土製支脚の材料分析」をご覧いただきたい( $\mathbb{P}$  222 ~ 230)。



第23回 7 · 8区出土土器 · 壁土写真

第5表 旧山門郡を中心とする弥生時代~古墳時代前期集落一覧

・標高は遺構検出レベルを示す。遺構面に傾斜がある場合には、平均レベルで計測した。・点線は正確な時期比定が難しいもの及び存続した可能性が高いものを示す。

·第5表の遺跡番号は、第24図の番号と対応。 ·表中の実線は、遺構・遺物などが出土しており、確実に存続していたと考えられるもの。

		36	37	88	33	40	41		43	44	45	46	47	,	_	20	21	劍、52	3 2	¥ 1	3	26	22	28	59	9	3 2	ō	62					20		
	無	住10、甕棺14、箱式石棺5	甕棺2	住2、溝1		住8、溝1、井戸1	甕棺2+数基、石棺墓	住83、甕棺87、破鏡、內面朱付着土器。 翡翠製勾玉	甕棺9、土坑墓1	住18、建物1、甕棺8	甕棺48、祭祀土坑等		住58、甕棺61基	住46、土156、瀬戸内V様式前葉甕小形仿製鏡、巴型銅器	方形区画溝、掘立柱建物等	<b>熟</b> 棺2	甕棺12、箱式石棺1	整柏55基以上、石柏10、細形銅劍、 磨製石鏃、石製紡錘車	祭祀土坑、銅剣鋳型	黒曜石素材が大量に出土		住20、溝1			住6	住5	住24、土2			住2、竪穴遺構、土2	悪棺3	井1	据立柱建物12、土坑約200	Ⅰ・Ⅱ区で掘立柱建物74、土坑70		十2
批	田温																																			
古墳時代	前期 1半 後半																																			
	後半前																																			
	後期中葉																																			
	井温																																			
4.3	中期末~ 後期初頭																																			
弥生時代	中期																																			
	前期末~ 中期初頭 前半									1																										
	後半							1																												
	温																																			
	標高	6m	5.5 m	7m	7.5m	7.6m	7.5m	6m	6.5 m	7m	9m	9m		8.5m	9.5 m	14m	15m		5.0 m	5m	7.5m	9.5m	8m	9m	9.5m	10.5m	48m	14m	7m	7.5m	7m	5.5 m	3m	3m		3.0 m
			-		-				_				(高地					部上	-		_					_						_			5年	
	           	也 沖積微高地	集落·墓地 沖積微高地	沖積微高地	沖積微高地	沖積微高地	自然堤防上	也 自然堤防上	自然堤防上	-	也 沖積微高地	沖積微高地	也 沖積稳	也 台地上	也 台地上	台地上	台地上	自然堤防上	自然堤防上	自然堤防上	自然堤防上	沖積微高地	沖積微高地	沖積微高地	自然堤防上	沖積微高地	台地上	也 合地上	自然堤防上	沖積微高地	也 自然堤防上	沖積微高地	沖積低地	沖積低地	沖積低地	沖積低地
	松	集落·墓地	集落·墓地	集落	集落	集落	墓地	集落·墓地	製用	集落·墓地	集落·墓地	集落	集落·墓地 沖積微高地	集落·墓地	集落·墓地 台地上	墓地	墓地	墓地	集落	集落	集落	集落	散布地	散布地	集落	集落	集落	集落·墓地	墓地	集落	集落·墓地	集落	集落	集落		集落
	遺跡名	山門北池遺跡 松延遺跡	山門前田遺跡	山門井鎌口遺跡	山門牛島遺跡	山門片垂遺跡	堤遺跡	藤の尾垣添遺跡	杉ノ本遺跡	藤ノ尾車塚遺跡	権現塚北遺跡	権現塚南遺跡	小川柳ノ内遺跡	海津横馬場遺跡	竹海校東遺跡	竹飯堺遺跡	竹飯犬ノ馬場遺跡	鉾田遺跡	上枇杷遺跡	大江南遺跡	御仁田遺跡	大道端遺跡	草葉遺跡	大草遺跡	北古賀遺跡	三反畑遺跡	三船山遺跡	山ノ上遺跡	定角遺跡	郡領ノ一遺跡	文広大塚遺跡	本郷地区遺跡	機鳥フケ遺跡	清船津江頭遺跡	德益八枝遺跡	東蒲池榎町遺跡
	遺跡群名		1	山門遺跡群	1	1			藤ノ尾遺跡群			権現塚遺跡群			14 海津遺跡群		1			1																
	O	П	2	က	4	5	9		∞	6	10	Ξ	12	13	14	15	16	17	18	19	8	21	22	23	24	22	56	27	88	53	30	31	32	33	34	32

御二橋遺跡 I·I

吉開口遺跡

三島神社貝塚

徳益遺跡

中棚町遺跡下棚町遺跡上塩塚遺跡

古川中島遺跡 枇杷園 I 遺跡

散田遺跡

鷹尾神社遺跡

枇杷園遺跡

島貝塚

吉井松田遺跡

城道遺跡

寺中遺跡

フミアガリ遺跡

山門幸賀遺跡

寺門遺跡

初瀬町第2遺跡

下坂田遺跡

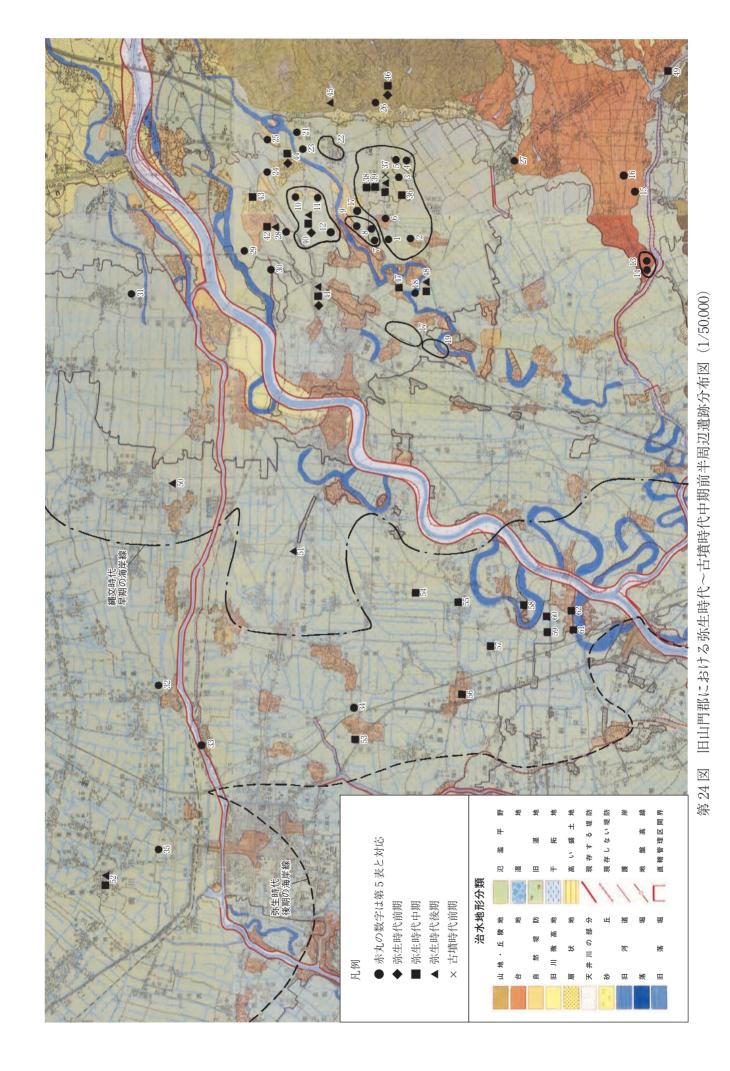
朝日遺跡

坂田定角遺跡

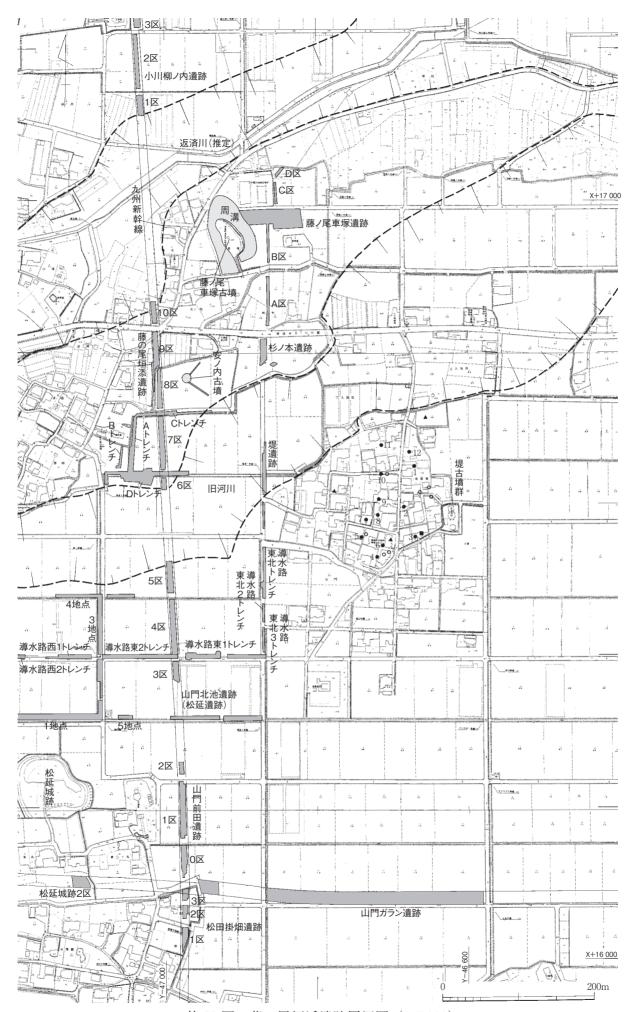
上坂田遺跡

大塚遺跡

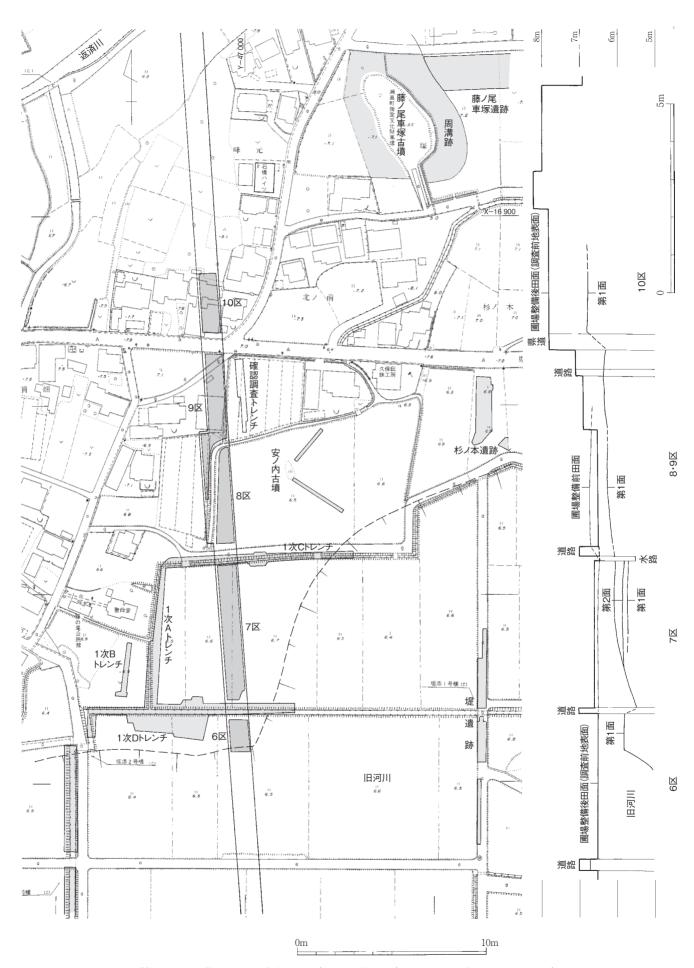
女山産女谷 清水谷遺跡



- 35 -



第25図 藤の尾垣添遺跡周辺図 (1/5,000)



第26図 藤の尾垣添遺跡調査区配置図 (1/2,000、断面図は1/100)

# Ⅲ 発掘調査の記録

# 1 遺跡の概要

### (1)遺跡の概要

藤の尾垣添遺跡は福岡県みやま市(旧山門郡瀬高町大字)山門字垣添・北ノ前・峯ノ元・北 池に所在し、北側の返済川及び北東から南西方向に蛇行する旧河川が形成した自然堤防上に位 置する。当遺跡は瀬高町教育委員会により既往の調査・報告が行なわれているため、今回の調 査は2次を数える。

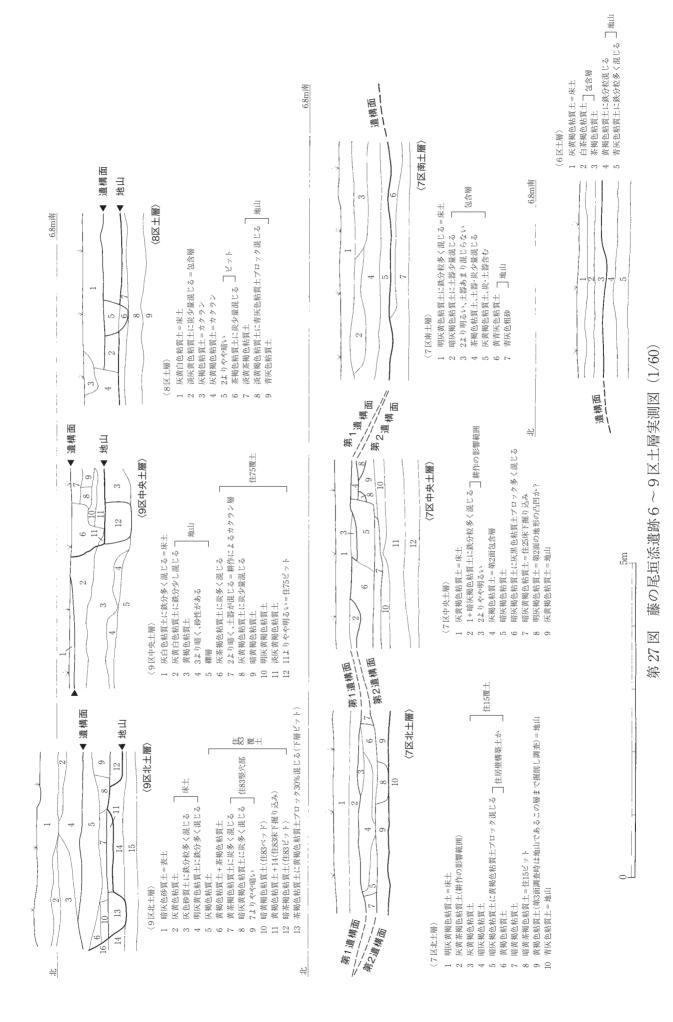
当遺跡は、大道端遺跡報告書(関晴彦編 1977『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 - X IV - 』福岡県教育委員会)では、弥生時代前期~後期、平安時代後期の集落・墓地跡である北ノ前遺跡、また福岡県遺跡等分布地図(福岡県教育委員会 1978『福岡県遺跡等分布地図(大牟田市・柳川市・山門郡・三池郡編)』)及び全国遺跡地図(文化庁文化財保護部 1984『全国遺跡地図 福岡県』)では、弥生時代の散布地である北ノ前遺跡(県遺跡番号 790306)として登録・掲載されている。しかし、瀬高町教育委員会が昭和 61(1986)年に本遺跡 6 - 7 区・7 - 8 区間等水路部分の発掘調査を実施し(1 次調査)、その成果を藤の尾垣添遺跡として 2 分冊の報告書にまとめている(田中康信編 1988『藤の尾垣添遺跡』瀬高町文化財調査報告書第 4 集、田中康信編 1989『藤の尾垣添遺跡 II』瀬高町文化財調査報告書第 5 集)。

この「藤の尾垣添遺跡」という遺跡名は、西に隣接する集落名「藤ノ尾」と小字名「垣添」を組み合わせたものであるが、本来の集落名は<u>藤ノ尾</u>であるため、「<u>藤の尾</u>垣添遺跡」という遺跡名は誤りである。しかし、今回遺跡名を変更することは更なる遺跡名の混乱を生じさせるため、瀬高町教育委員会により付与された遺跡名である「<u>藤の尾垣添遺跡</u>」のままで報告し、本遺跡を含めた遺跡群の総称としては「<u>藤ノ尾遺跡群</u>」としたい。なお、この遺跡名称については、既に山門北池遺跡報告書(大庭孝夫編 2007『山門北池遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第6集 福岡県教育委員会 p 7~20 及び第2表)の中で区分していることを付け加えておく。

# (2)調査の概要

I-1-(1)で先述したように、本遺跡は調査の便宜上、道路・水路で区分けした。本遺跡は県道本吉・小川線より南の6~9区及び県道北側の10区からなり(第25・26図)、遺跡の南北幅は現状で約240mを測る。東西幅は不明であるが、東は圃場整備及び九州新幹線建設に伴う確認調査で確認した旧河川までとなる。本遺跡の北東には古墳時代中期の全長約55mを測る前方後円墳である藤ノ尾車塚古墳や、弥生時代中期の甕棺墓群、古墳時代前期の集落が検出され、本遺跡と同一遺跡になる可能性がある藤ノ尾車塚遺跡が位置し、また享保20(1735)年には本遺跡北で鏡が1面出土したようである。本遺跡北約250mに位置する小川柳ノ内遺跡との間は、返済川の氾濫源であったことが本新幹線建設工事に伴う確認調査から判明している。また本遺跡南の山門北池遺跡との間には、最小幅100mほどの旧河川が存在する(第25図)。

調査は平成15年度に9→8区、6区、平成16年度に7区→9区北拡張区、10区というように、 基本的には北→南方向で新幹線建設工事の優先順位に従って調査を進めた。なお、新幹線用地 幅が11.2 m、さらに調査区壁に傾斜を付けたため、実際の調査幅は9m程度である。6~10



39 -

区の合計の当遺跡調査面積は5.500㎡を測る。

9区で検出した遺構は、竪穴住居跡 27 棟、土坑 42 基、溝 4条、ピットなどで、10区で検出した遺構は、土坑 3 基、柵列状遺構 1 基、ピットなどで、遺物は弥生土器・土師器・須恵器・石器・石製品・金属器がパンケース 93 箱出土した。 7・8区で検出し、今回報告した甕棺墓は計 56 基である。なお、今回の本遺跡 2 次調査における総計は、竪穴住居跡 87 棟、掘立柱建物跡 1 棟、土坑 130 基、溝 12 条、甕棺墓 56 基、柵列状遺構 1 基と、調査面積が 5.500 ㎡ながら、非常に高い遺構密度となる遺跡である。

これより、9・10 区の検出遺構・遺物及び7・8 区甕棺墓の検出遺構遺物の説明を行うが、この文中内で使用される出土土器の分類・年代観については以下の文献を参照した。まず、弥生時代前期後半~末の土器については、中野充編年(中野充1997「佐賀平野における弥生文化成立期の土器編年」『立命館大学考古学論集 I』立命館大学考古学論集刊行会)、弥生時代中期の土器については、石田智子編年(石田智子2008「第2章 佐賀平野東部地域における弥生時代中期の土器様相」『吉野ヶ里遺跡』佐賀県文化財調査報告書第177集 佐賀県教育委員会)、弥生時代後期~古墳時代前期の土器については、檀佳克編年(檀佳克2005「1. 土器からみた、京田・深田遺跡の竪穴住居跡に関する位置づけ」『八女市南部地区県営圃場整備事業地内 埋蔵文化財調査報告書1』八女市文化財調査報告書第71集 八女市教育委員会)及び蒲原宏行編年(蒲原宏行1991「古墳時代初頭前後の土器編年-佐賀平野の場合-」『調査研究書〔第16集〕』佐賀県立博物館・佐賀県立美術館・蒲原宏行2003「佐賀平野における弥生後期の土器編年」『調査研究書「第27集〕』佐賀県立博物館・佐賀県立美術館)、甕棺については、橋口達也の南筑後甕棺編年(橋口達也1985「V南筑後における甕棺の編年」『権現塚北遺跡』瀬高町文化財調査報告書第3集 瀬高町教育委員会)を用いた。

# (3) 基本層序(図版3、第26·27図)

#### a. はじめに

これまで刊行した、『藤の尾垣添遺跡  $I \cdot II$ 』では、I は  $6 \cdot 7$  区、II は 8 区の基本層序についてのみ検討してきた。本書では、まず 9 区の基本層序の検討を行い、その後詳しくは V-1 の集落の変遷の中で本遺跡形成過程を考察するが、ここでも本遺跡全体の基本層序・地形復元について考えていきたい。なお、発掘調査前は  $6 \cdot 8$  区と同じく、9 区南は水田が営まれ、9 区中央~北は県道のレベルと合わせるために水田に盛土を行った上に工場と田んぼがあり、10 区も盛土上に宅地が存在していた。また 10 区については、報告の中でも記述しているが(p 145~148)、地山が淡青褐色砂質土と砂層であることから、基本的には河川の氾濫原であったと想定される。

調査前の田面標高は6区6.5 m、7区は6.6—6.7 m、8区は6.5 m、9区南は6.7 - 6.8 mを測る。 圃場整備前の田面標高は6区6.5 m、7区は6.47 - 6.49—6.43 m、9区南は6.7 mと圃場整備 計画図面に記録されるが、8区及び9区中央~北の記録はない。しかし、本遺跡の立地は返済 川が形成した自然堤防上で、圃場整備後の現在の地形も合わせて考えると、弥生・古墳時代の 当時も北→南に緩やかに傾斜する地形であったと推測される。

#### b. 9区基本層序の検討

第26図は調査区配置図とその断面鉛直図、第27図は本遺跡6~9区の土層図である。9区

の土層作成は、区北端の83号住居跡付近の調査区北壁と、区中央の75号住居跡付近の調査区 東壁で作成した。また、既報告の6~8区東壁土層図も参考資料として掲載した。

当区でも6~8区と同じく、基本的に盛土及び表土は調査前に除去されていたが、区北端は 県道に面しているため、表土除去は行われていなかった。遺構面は7区中央~北、8区と同じ く床土(北端:2・3層、中央:1層)直下で、遺構面を1面のみ確認した。中央では1層か ら弥生時代後期前半の75号住居跡が切り込み、北端は作成箇所が丁度悪いものの、地山(16層) の存在から、弥生時代後期終末の83号住居跡が同じく2、3層に切り込む。当区は第26図の 断面図を見ると、6~8区と比べ、遺構面が徐々に上がっており、掘削した遺構には地山に青 灰色粘質土が混じらない。当区遺構の時期は、弥生時代前・中期と後期~古墳時代中期と大き く2時期に分かれ、7・8区では弥生時代前・中期の遺構埋土下層には青灰色粘質土を含むも のが多く、遺構時期をおおよそ判断できた。9区の遺構埋土では茶褐色系粘質土を基調とし、7・ 8区より区別が難しいが、弥生時代後期~古墳時代前期の遺構埋土上層には灰黄色系の粘質土 を含むものが多いため、埋土からある程度の遺構の所属時期を判断できた。

### c. 本遺跡の地形復元

本遺跡は自然堤防上に位置するため、調査区内でも地形に凹凸が見られる。このため、調査範囲に限った地形復元を行うことは、その範囲のみの復元におわる可能性が高い。しかし、本遺跡では九州新幹線で南北方向、圃場整備で東西方向2ヶ所にトレンチを入れたような調査範囲となっているため、遺跡の様相をある程度把握できると考えられる。以下では、簡単ながら地形復元を行い、V-1の集落・墓地分析のための基礎としたい。

まず第 25 図から、本遺跡は返済川・旧河川に挟まれた、北東-南東方向に細長く延びた中洲状の自然堤防微高地に位置し、自然堤防の性格上、南北の河川近くが高くなることが予想された。調査でも第 26 図から、北の 10 区及び南の 6 区は堤防状に急激に高まっている状況が分かり、その間の  $7 \sim 9$  区に遺構が集中する。また 1 次調査 C トレンチにおいても、西→東方向で、遺構面レベルが 6.0 m→ 6.25 m→ 6.7 mと旧河川側が堤防状に高くなる。この堤防上における遺構密度は 10 区は非常に低いものの、南の 6 区及び 1 次調査 D トレンチでは弥生時代後期~ 古墳時代中期、古墳時代後期の 2 時期にわたる遺構がやや高い密度で検出されている。この遺跡南北での堤防上における集落様相の違いは、南北堤防の高さ・規模が異なることから、北の返済川の方が河川規模の大きいため、自然堤防の形成が顕著であり、かつ氾濫などの影響も大きいことに起因しているのではないだろうか。

この堤防間の7~9区様相については、V-1の集落変遷の検討に詳しくは譲るが、7区のように中央部が高くなるなど、地形の凹凸が若干見られるが、基本的には北→南に傾斜する地形である。遺跡東西方向は、先述した1次調査Cトレンチでは、東の河川側に向かって高くなるものの、1次調査B・Dトレンチ及び6区という、遺跡南端の東西方向はほぼ平らな地形になっている。7区中央~北にかけては、古墳時代後期と弥生時代前期~古墳時代中期前半という2面の遺構面が存在する。また時期別の遺構分布は、弥生時代前期後半~末の土坑群は7区中央~9区中央にまとまり、続く中期の甕棺墓群は7区中央~8区中央、1次調査A~Cトレンチという、遺跡中央の北東-南西にまとまって分布する。弥生時代後期~古墳時代中期前半

の竪穴住居跡は集落域全域に広がっているが、当時期の土坑群は8区南に集中する。古墳時代後期の集落は6区~7区中央、1次調査Dトレンチと遺跡南側のみに認められる。このように、本遺跡は時期別に集落・墓域の位置が変わるという土地利用の変化が確認できる。

# 2 9区の検出遺構と遺物

#### (1) 概要

9区は、10区とは県道本吉・小川線を挟んで約11 m南に位置し、8区とは圃場整備前から存在し(P194を参照)、本遺跡西側の藤の尾集落からの段落ち部分に沿うように北東 - 南西方向に貫流する、幅1.2 mのコンクリート製U字溝を挟んだ場所に位置する。8区とはこの溝で調査区を分けたため、9区は南に向かって細長く延び、8区は北に向かって狭くなる。また9区調査当初は、町道付け替え許可の関係上、9区北の町道より南を先に発掘調査し、付け替え許可が下りた平成16年6月より当区北端の調査を行った。そのため、その境部分は遺構検出レベルが異なり、その部分の遺構も一部掘り間違えてしまい、歪な平面形となってしまった遺構もある。9区の規模は、南北約78 m、東西幅は南端で約1.2 m、最も広い中央部で約12 m、北端で約9 mの面積約2.400 mの調査区である。検出された遺構は、竪穴住居跡27棟、土坑42基、溝4条、ピット多数で、出土遺物はパンケース93箱出土した。

### (2) 竪穴住居跡

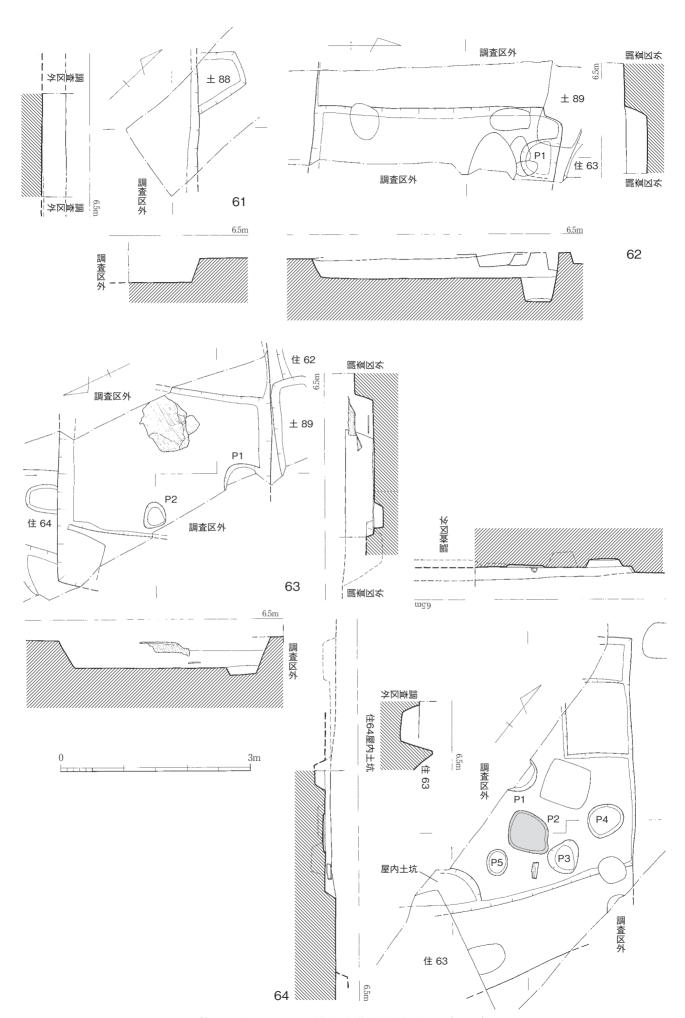
### 61 号竪穴住居跡 (図版 4、第 29 図)

細長く延びる9区南端に位置し、88号土坑を切る。住居の大半が調査区外であり、調査区では北壁のほんの一部を検出したにとどまる。住居規模は北西 - 南東が167 cm以上×南西 - 北東が118 cmで、深さ38cmを測る。狭い検出範囲のため、床面ではピットなどは検出できなかった。埋土は暗茶褐色灰粘質土。埋土及び出土土器から弥生時代後期後半~古墳時代前期の住居跡か。出土土器(第30図1・2) 1 は在地系直口鉢。体部下半は手持ちヘラケズリを施す。外面には二次加熱痕あり。色は橙褐色。2 は弥生前期末の甕口縁部。口縁外端部には非常に浅い刻目を施し、口縁部下にも突帯を貼り付けた痕跡が認められる。胎土には角閃石多く含む。色は外が黄茶色、内が暗茶色。

#### 62 号竪穴住居跡 (図版 4、第 29 図)

9区南の南寄りに位置し、89号土坑に切られる。住居東・西の大半が調査区外で、住居規模は南北392cm×東西192m以上、住居竪穴部中央で深さ37cmを測る、おそらく東西に長い長方形住居になると考えられる。住居西壁には地山削り出しによるベッド状遺構を付設し、その規模は高さ30cm、幅80cmを測る。竪穴部床面では北壁沿いに屋内土坑的なピットを1基検出したが、主柱穴は不明である。埋土は暗茶褐色粘質土。切り合い関係及び出土土器から、弥生時代後期後半~古墳時代前期の住居跡と考えられる。

出土土器(第30図3・4) 3は在地系広口壺の肩部片で、外面には5条の波状文を巡らす。 色は黄茶褐色。4は弥生前期末の甕口縁部。口縁外端部にはやや丸い工具による浅い刻目を施 す。外面は黒化し、色は外が灰褐色、内が黄褐色。



第 29 図  $61 \sim 64$  号竪穴住居跡実測図 (1/60)

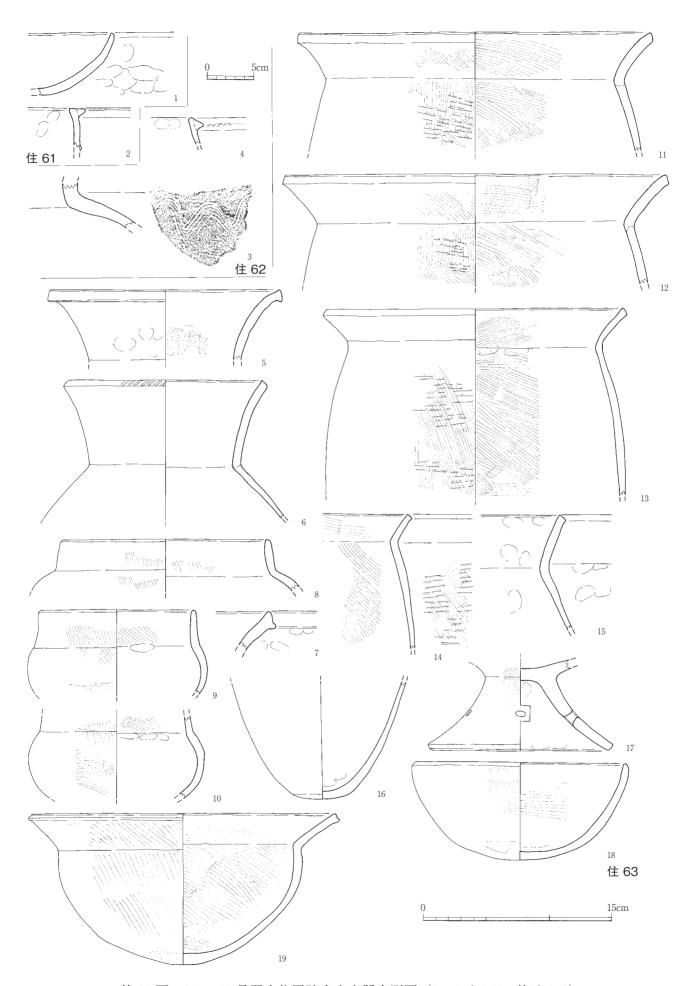
# 63号竪穴住居跡(図版4、第9図)

9区南中央の南寄りに位置し、89号土坑に切られ、64号住居跡を切る。住居東西の大半が調査区外で、住居規模は北東-南西335cm×南東-北西240cm以上、住居竪穴部中央で深さ45cmを測る、おそらく正方形住居で、深さ的には残りの良い住居となる。住居東西に地山削り出しによるベッド状遺構を付設し、西側は高さ12cm・幅100m以上、東側は高さ25cm・幅68cm以上を測る。なお、西側ベッドの北西隅には上層ピットが切り込む。厚さが1cm程度の非常に薄い炭層を床面から20cm以上浮いた状態で検出した。この炭層は分析の結果、アカガシ亜属と同定された(IV-6、p230~231)。このため、出土状況と合わせて考えると、住居廃絶時にアカガシ亜属の住居構造材を住居内に廃棄したことで、後にこの炭層になったと推測される。竪穴部床面ではピット2基を検出し、位置からP2が主柱穴の可能性があるが、その対の主柱穴は検出できなかった。埋土は灰黄色粘質土。覆土上層よりスクレイパー(第96図1)が出土した。出土土器から古墳時代前期前半の住居跡と考えられる。

出土土器(図版 50、第 30 図 5~19) いずれも覆土上層から出土したものである。5~7 は在地系広口壺。内面にはハケ目が残る。色は黄褐色。6 の口縁端部には浅い刻目を施す。外面には二次加熱痕があり、色は橙色。7 の口縁端部はナデで面取りする。色は淡橙褐色。8 は在地系短頸壺で、復元径には自信がない。外面には二次加熱痕があり、色は黄褐色。9・10 は在地系小形直口壺である。9 の外面体部下位にはケズリ状の擦過を施す。色は黄褐色。10 の外面体部下位はケズリ後ハケを施し、内外面にはススが付着するが、破損後に付着した可能性が高いもの。色は黄褐色。11~15 は胴部に張りが少ない在地系長胴甕の口縁部~胴部上位片。11~14 の胴部外面はタタキ後ハケ、内面はハケ後一部ナデを施す。11~14 には黒斑が、15には二次加熱痕、11・13 にはススが認められる。色は11 が茶褐色、12 は外が暗茶褐色、内が暗灰黄色。13 は外が暗灰黄色、内が黄褐色。14 は灰黄色を呈する。15 は内外面ナデ調整で、色は橙褐色。16 はほぼ丸底の小形甕底部で、調整は内外面ナデを施す。外面には二次加熱痕があり、色は外が黄褐色、内が橙色。17 は低脚の高坏脚部。脚部中位には焼成前外→内穿孔を4ヶ所施す。外面には黒斑があり、色は黄褐色。18 は在地系直口鉢で、体部外面下位にはヘラナデを施す。外面には黒斑があり、色は黄褐色。19 はほぼ完形の在地系屈折口縁鉢。口径 24.5 cm、器高 11.8 cmを測る。内外面はハケ調整が基本である。色は灰黄褐色。

# 64号竪穴住居跡(図版5、第29図)

9区南中央のやや南寄りに位置し、63号住居跡に切られ、また住居東西の多くが調査区外となる。住居規模は北西 - 南東 490cm 以上×北東 - 南西 350cm、住居竪穴部中央の最も残りの良い箇所で深さ 20cm を測る、おそらく東西に長い長方形住居になるか。また、東壁と北壁が直角に交差せず、歪む住居となる。住居北西壁の一部、東壁には地山削り出しによるベッド状遺構を付設し、北西端を一段 8 cmほど掘りすぎてしまっている北側ベッドは高さ 8 cm、幅102cm、東側ベッドは高さ 20 cm、幅130 cmを測る。竪穴部床面ではピット 4 基及び屋内土坑を検出した。埋土に炭が混じる P 2 が炉、やや位置が炉に近いことは気になるが、深さから P 3 が主柱穴となるか。竪穴部南隅に存在する屋内土坑は、床面からの深さ 28 cmで、埋土は上



第 30 図 61  $\sim$  63 号竪穴住居跡出土土器実測図  $(2\cdot 4$  は 1/4、他は 1/3)

層が灰褐色粘質土、下層が暗黄褐色粘質土。住居埋土は灰黄色粘質土である。出土土器から弥 生時代後期終末の住居跡と考えられる。

出土土器(図版 50、第 32 図 1 ~ 10) 1 は在地系短頸壺。色は灰黄褐色。 2 は扁球状の胴部を持つ小形在地系壺。外面にはミガキ、肩部には6条以上の波状文を施す。外面には黒斑があり、色は外が茶褐色、内が灰黄色。 P 3 出土。 3 は在地系大形甕口縁部で、口縁端部には刻目を施すが、ナデによる窪みのため、刻目が上下のみに施された形態になる。内面には黒斑があり、色は橙褐色。 4 は凸レンズ底の在地系甕底部。外面には黒斑があり、色は灰黄色。 5 · 6 は在地系甕。色は5 は黄褐色、 6 はこげ茶色。 7 は凸レンズ底の在地系乳底部。外面にはススがあり、色は黄褐色。 8 は在地系短頸鉢で、色は黄褐色。 9 は短く屈折する口縁の鉢。色は黄褐色。10 は支脚で、上部中央には外→内の焼成前穿孔を施す。外面には黒斑があり、色は黄褐色。

### 65号竪穴住居跡(図版5、第31図)

9区南中央の北寄りに位置し、住居東側は調査区外、住居北西側は試掘トレンチにより大きく壊される。住居規模は南北340cm×東西170cm以上、住居竪穴部中央で深さは20cmを測る、おそらく住居平面形態は正方形住居になるか。住居東・南壁には地山削り出しによるベッド状遺構を付設し、東側ベッドは高さ12cm、幅72cm以上、南側ベッドは高さ15cm、幅86cmを測る。竪穴部床面ではピット3基を検出し、埋土に炭が混じるP1が炉、やや位置が炉に近いことは気になるが、深さからP2・3が主柱穴となる可能性がある。埋土は上層が灰褐色粘質土、下層が黄褐色粘質土である。なお、当住居周囲の北西〜北に位置する、深さを示したピット3基は、埋土・位置から当住居外の支柱穴となる可能性がある。出土土器で図示できるものはなかったが、埋土及び住居形態から弥生時代後期〜古墳時代前期の住居跡と考えられる。

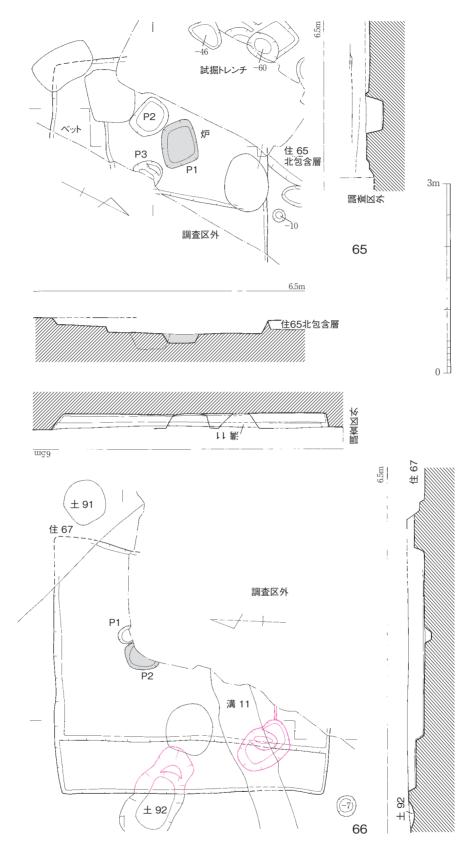
# 66号竪穴住居跡(図版6、第31図)

9区中央の南端、ちょうど調査区が南側に細長くなる始点に位置し、67号住居跡、91号土坑、11号溝に切られ、92号土坑を切る。住居中央~南西は調査区外で、住居北東隅は67号住居跡により壊される。住居規模は南北440cm×東西430cm以上で、竪穴中央部で深さ26cmを測る、ほぼ正方形住居となるか。住居東・西壁には地山削り出しによるベッド状遺構を付設し、東側ベッドは高さ13cm、幅72cm以上、西側ベッドは高さ13cm、幅85cmを測る。竪穴部床面ではピット2基検出し、埋土に炭が混じるP2が炉の可能性があるが、主柱穴は検出できていない。住居埋土はレンズ状に堆積し、その中央で焼土・炭層を確認した。埋土は暗黄褐色粘質土。なお、住居外南西隅の深さを示したピットは、位置から当住居外の支柱穴となる可能性がある。出土土器から弥生時代後期終末の住居跡と考えられる。

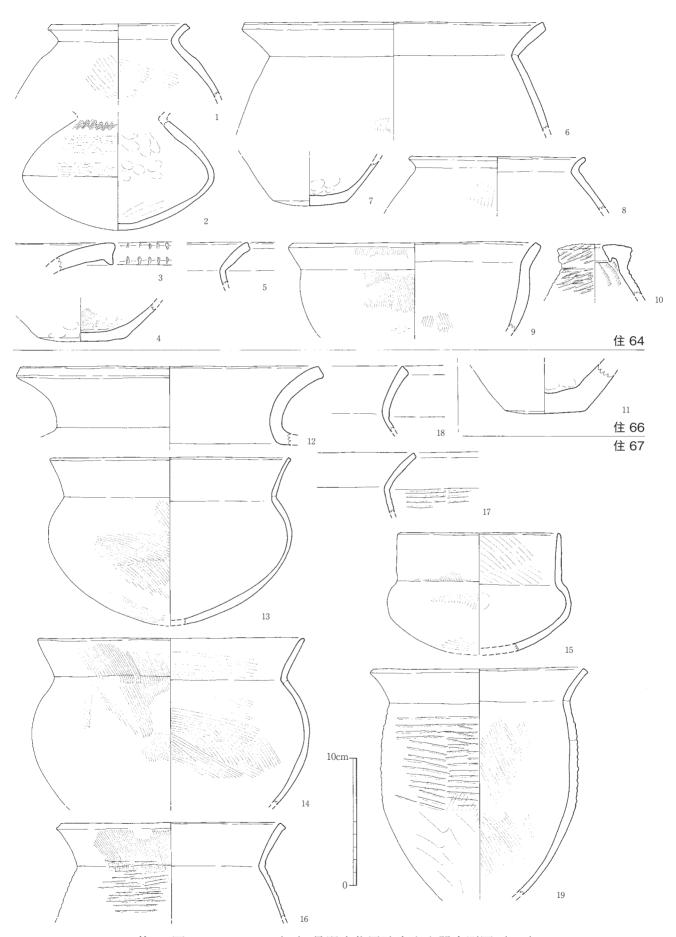
出土土器(第32図11) 出土土器で図示できたのは、11のみ。11は凸レンズ底の在地系甕底部で、外面には黒斑・二次加熱痕が認められ、割れ口にも二次加熱痕があることから、割れた後に二次加熱痕を受けたことが分かる。色は赤褐色。

### 67 号竪穴住居跡 (図版 6、第 34 図)

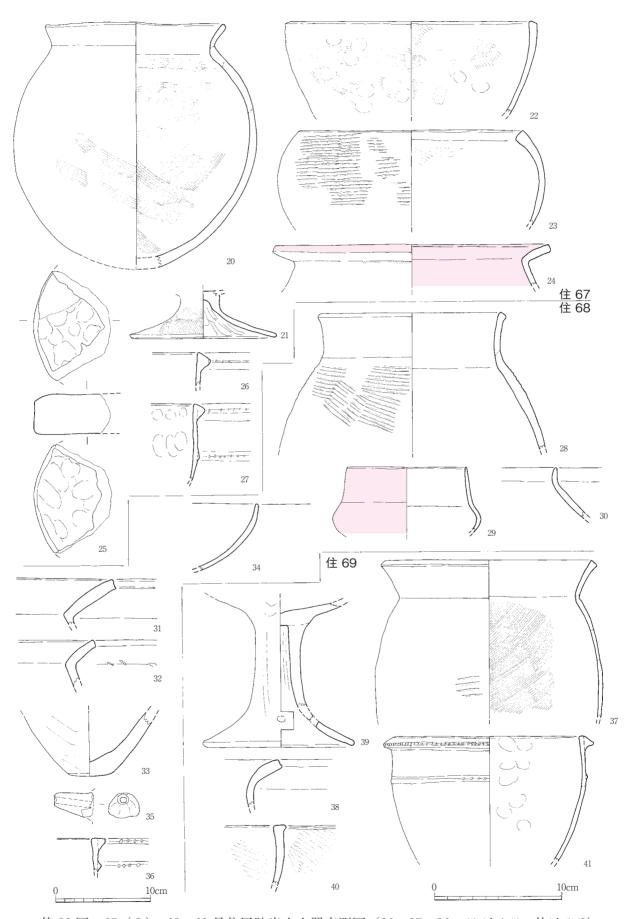
9区中央の南東隅に位置し、68号住居跡、91号土坑に切られ、66号住居跡、116・119号土



第 31 図 65·66 号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第 32 図  $64 \cdot 66 \cdot 67$  (1) 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

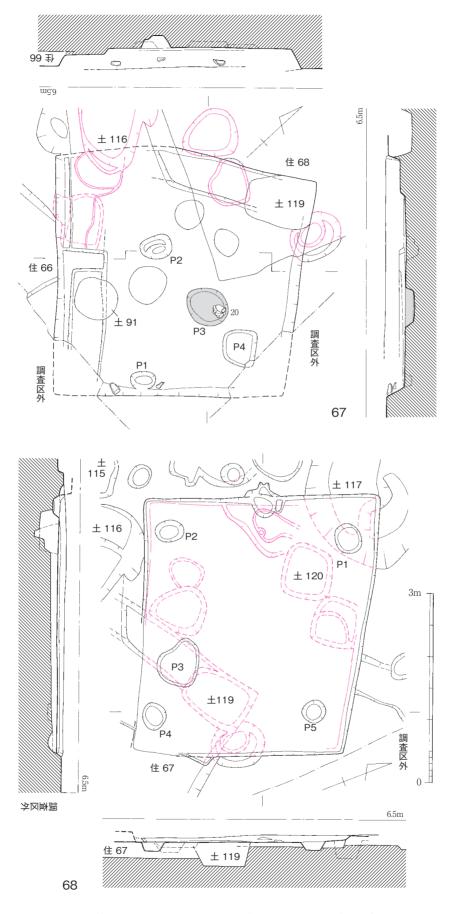


第 33 図 67 (2) · 68 · 69 号住居跡出土土器実測図 (26 · 27 · 36 · 41 は 1/4、他は 1/3)

坑を切る。住居北東、南西隅は調査区外で、住居南西~西壁中央にかけては、切り合いの前後 関係を誤り、116・119号土坑、下層ピットを先に調査したため、その部分の壁及び西・南側のベッ ド状遺構の一部を掘り飛ばしてしまった。住居規模は北東-南西385cm×南東-北西380cm、 竪穴部中央で深さ 30 cmの正方形住居となる。住居西・南壁には地山削り出しによるベッド状遺 構を付設し、西はほぼ掘り下げ、東も一部掘り下げた南側ベッドは高さ10 cm、幅70 cm、南北 を掘り下げた西側ベッドは高さ8cm、幅60cmを測る。竪穴部床面ではピット4基検出した。埋 土に炭が混じるP3は炉で、ピット形態からP2が主柱穴となれば、壁際ではあるがP1がそ の対の主柱穴の、2本柱の住居となるか。また床面から15cmほど浮いた状態で土器(20)、砥石(第 96 図8)が出土した。埋土は上層が茶褐色粘質土、下層が黄茶褐色砂質土。覆土よりスクレイパー (第97図12)、鉄鏃(第99図1)出土。出土土器から古墳時代前期前半の住居跡と考えられる。 出土土器(図版 50、第 32・33 図 12 ~ 27) 12 は在地系広口壺。色は黄褐色。13 ~ 15 は在地 系小形丸底壺で、鉢でも良いもの。13 は二次加熱痕、14 は黒斑が認められる。13 は口縁内端 部をわずかにつまみ出し、色は灰黄褐色。14 の色は外が灰黄色、内が灰色。15 の外面はハケ のちナデで、胎土には赤色粒を非常に多く含む。色は橙褐色。16~19は胴部の張りが少ない 在地系甕。16・17 は断面に二次加熱痕があるため、割れた後に二次加熱を受けていることが 分かる。16 の色は灰黄褐色。17・18 の色は灰黄色。19 の外面胴部下半はタタキ後ハケ、その 後ケズリを施す。外面には二次加熱痕・ススがあり、色は外が黄褐色、内が橙褐色。20 は在 地系短頸甕で、胴部の器壁はやや厚い。内外面調整はハケ後ナデを施し、外面には黒斑があ り、色は黄褐色。21 は畿内系低脚高坏で、坏部との接合部には貼り付けやすくするために刻 目を施す。色は橙褐色。22 は在地系直口鉢で、外面には二次加熱痕が認められる。色は黄褐 色。23 は椀状に内湾する在地系鉢で、外面にはタタキ痕が認められる。色は灰黄色。24 はい わゆる在地系甕を用いた内面朱付着土器。口縁部外端部から内面全体に朱がヒビまで染み込ん でいるが、朱の付着度は良くない。外面頸部にはハケ工具痕あり。色は黄褐色。25は1/4弱 残存する円形土製品。厚 3.2 cmを測り、復元径は 10.0 cmほどになるか。表裏とも指おさえ痕が 顕著に残る。外面には黒斑があり、胎土には少しスサを含むもので、色は淡灰黄色。胎土から 弥生後期~古墳前期に属する。26・27は弥生前期末の甕口縁部。いずれも口縁端部及び突帯 端部には浅い刻目を施す。26の色は灰黄色、27は外面にうすいススが認められ、色は灰黄褐色。

# 68号竪穴住居跡(図版6、第34図)

9区中央の南東に位置し、67号住居跡、116・117・119・120号土坑を切る、切り合い関係からこの付近では最も新しい住居跡となる。南東隅の壁は調査時に掘り誤ったため、壁下端のみ検出している。住居規模は東西415cm×南北372cm、深さ8cmを測る。平面形は東西にやや長く、また東壁より西壁が長くやや歪んだ長方形住居である。また住居西壁のカマド状の掘り込みは、当初は当住居は古墳時代後期後半のカマドを付設している住居であると考えて、カマドとして調査したものであるが、焼土・炭がカマド内にあまり混じらないこと、7区で検出したようなカマドの袖にならないことなどから、カマドではないと判断した。竪穴部床面ではピット5基検出し、位置・深さからP1・2・4・5が主柱穴の4本柱の住居となる。また黄褐色粘質土が埋土のP3は屋内土坑の可能性がある。住居埋土は黄褐色粘質土。また床下掘り込みを住居全体で検出したが、下層の土坑やピットを掘り下げ中に確認したため、一部図化で



第 34 図 67 · 68 号竪穴住居跡実測図 (1/60)

きなかった部分がある。出土土器では住居の時期は弥生時代後期終末と考えられるが、切り合い関係及び住居形態から古墳時代中期まで下る可能性がある。当住居跡南包含層より砥石(第96図6)が出土した。

出土土器 (第33 図28~36) 29・33 は覆土下層出土で、39 はP1出土。28 は在地系直口壺。 床下掘り込み出土で、色は黄褐色。29 は在地系小形丸底壺で、外面全体には化粧土を施す。 生地は黄褐色。30 は在地系短頸壺。色は灰黄色。31・32 は在地系甕口縁部。31 の外面には黒 斑があり、色は灰黄色。32 の外面頸部には工具痕あり。外面にはススがあり、色は暗橙褐色。 33 は凸レンズ底の甕底部。外面は板ナデ後ナデを施す。外面には黒斑があり、色は灰黄色。 34 は在地系直口鉢。色は黄褐色。35 は鉢に付けた注口片か。胎土から弥生後期~古墳前期の 可能性が高い。色は黄褐色。36 は弥生前期末の甕口縁部で、口縁部と口縁下突帯の端部には やや丸い工具による刻目を施す。色は灰黄色。

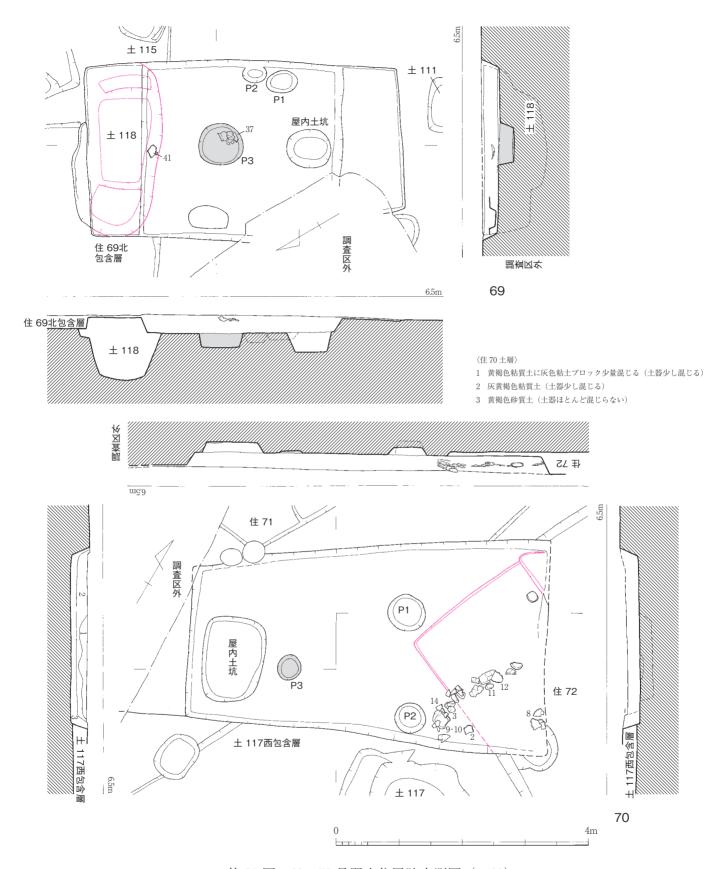
# 69号竪穴住居跡(図版7、第35図)

9区中央の南西隅の、調査区が南に長く延びる部分の始点に位置する。北側のベッド状遺構の下層には118号土坑が、また当住居北には包含層がある。住居南西の一部は調査区外で、住居規模は長軸500cm×短軸285cm、深さ27cmを測る、南北に長い長方形住居となる。住居北・南壁には地山削り出しによるベッド状遺構を付設し、北側ベッドは高さ23cm、幅92cm、西側ベッドは高さ21cm、幅103cmを測る。竪穴部床面ではピットを4基検出した。茶褐色粘質土に炭混じるP3は炉、またP3と同じ長軸上に位置する部分に茶褐色粘質土が埋土の屋内土坑がある。主柱穴は検出できていない。P3より20cm浮いた状態で甕(37)が出土した。埋土は上層が灰黄色粘質土に炭が混じり、下層が灰黄褐色粘質土。出土土器から弥生時代後期終末の住居跡と考えられる。

出土土器(図版 50、第 33 図 37 ~ 41) 37 は在地系甕で、胴部外面はタタキ後ナデを施し、色は黄褐色。38 も在地系甕で、外面には二次加熱痕あり。色は黄橙褐色。39 は在地系高坏脚部で、坏部底面には工具による窪みあり。調整は内外面ともナデで、脚部下位の焼成前穿孔の孔数は不明。胎土は精良で、色は橙褐色。 P 1 出土。40 は在地系直口鉢。色は黄褐色。41 は弥生前期末の甕。口縁と低平な突帯端部にはヘラ工具による浅い刻目を施す。色は灰黄褐色。

# 70 号竪穴住居跡 (図版7、第35 図)

9区中央やや南寄りの西端に位置し、71・72号住居跡、117号土坑を切る。また当初は72号住居跡が当住居を切ると考えたが、土器出土状況などから切り合いが逆であると判断した。そのため、本来なら当住居に属する土器が72号住居跡のものとして報告している可能性がある。住居西側は調査区外で、東壁は先述したように切り合い関係を誤り掘り失っている。住居規模は東西665cm以上×南北338cm、竪穴部で深さ27cmを測る、東西に長い長方形住居となる。住居西壁には地山削り出しによるベッド状遺構を付設し、高さ11cm、幅98cm以上を測る。竪穴部床面ではピットを3基及び屋内土坑1基を検出した。黄褐色粘質土に炭混じるP3は炉となるが、主柱穴は検出できていない。屋内土坑は長軸134cm×短軸100cm、深さ15cmを測る大型のもので、その埋土は黄褐色粘質土。また住居南東の床面から10cmほど浮いた状態の土器群を検出し



第 35 図 69 · 70 号竪穴住居跡実測図 (1/60)

た。これらは、土層2の灰黄褐色粘質土に伴い、住居廃絶時に投棄されたものと考えられる。 1・2層は住居廃絶後にごみ穴となった堆積で、3層が廃絶直後の自然堆積と考えられる。

出土土器(図版 50、第 36 図  $1 \sim 14$ ) 1 は在地系長頸壺胴部。外面にはミガキを施し、黒斑もあり、色は黄褐色。  $2 \cdot 3$  は鈍い稜の凸レンズ底の在地系壺底部で、 2 の外面には黒斑あり。いずれも色は黄橙色。 4 は在地系甕口縁部。色は橙色。 5 は在地系屈折口縁鉢で、外面には黒斑あり。色は黄褐色。 6 は器台で、色は橙褐色。 7 はおそらく小形杓子状土製品の把手。胎土は精良で、色は淡黄褐色。

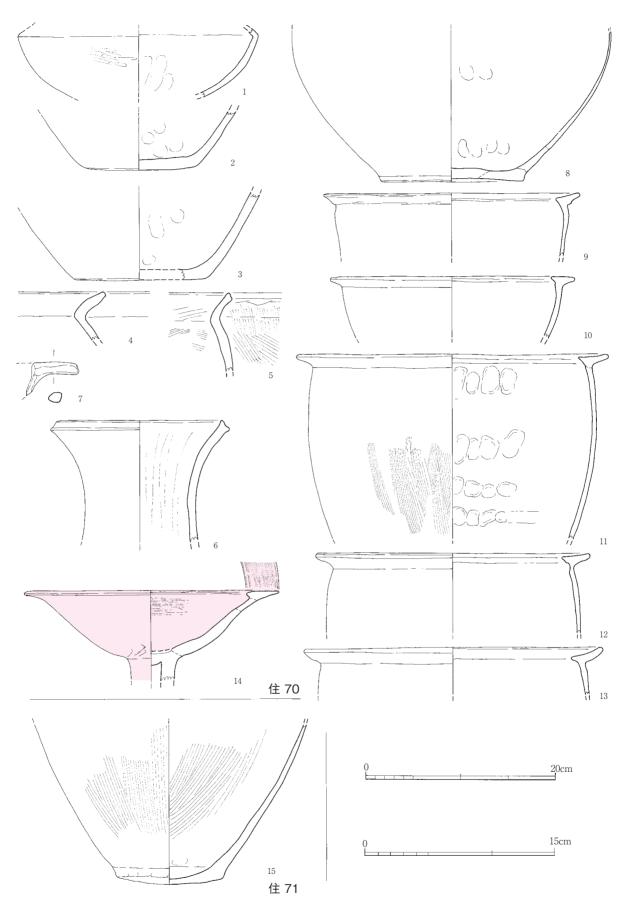
8は胴が張った壺で、弥生前期に属するか。胎土には細粒を多く含み、色は肌色。9~13は弥生中期の甕口縁部で、9は「く」の字状、10~13は「T」字形で、特に13は上面が大きく窪むタイプである。9の口縁下にはナデ前のハケ工具痕が残り、色は黄褐色。10は鉢の可能性もあるもので、色は白黄橙色。11は弥生中期後半古段階のもので、内面は指押さえ痕が顕著に残る。胴部内面下位にはコゲが付着し、外面には黒斑あり。胎土は精良で、色は黄茶褐色。12の外面は布等による横ナデを施し、また薄いススも付着する。色は暗茶褐色。13の胎土は角閃石が多く、色は橙褐色~黄褐色。14は弥生中期後半鋤先口縁の高坏で、やや器壁が厚い。内外面はミガキ後丹塗りを施し、坏部外面下位と脚部内面には工具痕が認められる。生地は黄橙色。出土土器は弥生前期~後期終末の土器があるが、切り合い関係も考えると、弥生時代後期終末の住居跡になるか。

### 71 号竪穴住居跡 (図版7、第37図)

9区中央やや南寄りの西端に位置し、70・74号住居跡に切られる。住居壁で検出できたのは東壁のみで、住居の大半が調査区外となる。住居規模は南北380cm以上×東西210cm以上、住居竪穴部中央で深さ34cmを測る。住居東壁に地山削り出しによるベッド状遺構を付設し、高さ25cm、幅135cmを測る。検出範囲が狭く、竪穴部床面ではピットなどは検出できなかった。埋土は灰褐色粘質土。切り合い関係及び出土土器から弥生時代後期後半新段階の住居跡か。出土土器(図版50、第36図15) 図示できた15は覆土下層出土の弥生後期後半の甕で、外面には二次加熱痕・スス、内面にはコゲが認められる。色は外が灰黄色、内が黒褐色。

#### **72** 号竪穴住居跡(図版 7 、第 37 図)

9区中央やや南寄りに位置し、70・73号住居跡に切られ、75号住居跡を切る。また、当住居跡と93号土坑は近接するため、切り合い関係を持つ可能性があるが、出土土器から当住居の方が新しい。70・73号住居跡に大きく壊されるため、住居自体の残りが悪く、また当初70号住居跡に当住居が切られると考えたが、土器出土状況などから切り合いが当初の想定が逆であると判断した。そのため、本来なら70号住居跡に属する土器が当住居のものとして報告している可能性がある。住居規模は南北435cm×東西410cm、深さ36cmを測る、ほぼ正方形の住居となる。なお、西側の一段下がった部分は当住居のベッド状遺構ではない。床面ではピットを5基検出し、P2・3・5が位置・深さから主柱穴の可能性があるものの、時期的に2本柱の住居跡の可能性が高いため、どのセットが主柱穴となるかは判断できない。埋土は黄茶褐色粘質土。出土土器は弥生時代中期の土器が多いが、切り合い関係も考慮すると、弥生時代後期終末の



第 36 図 70・71 号竪穴住居跡出土土器実測図  $(8 \sim 14$  は 1/4、他は 1/3)

住居跡と考えられる。

出土土器(図版50、第38・39図) 1はわずかに稜が残る凸レンズ底の在地系壺。外面は板ナ デ後ナデを施す。色は黄褐色。2~4は在地系甕。器壁が厚い2は内外面丁寧なナデを施し、胎 土には赤色粒を多く含む。色は暗橙褐色。3の色は灰黄茶色。4はやや内湾する口縁部下に三 角突帯を巡らす、やや大形のもの。色は黄茶褐色。5は在地系直口鉢。色は外が黄橙色、内が 灰黄色。6~9は器台。8割近く残存する6は上下及び内外面とも二次加熱を受け、色は黄褐色。 7の色は黄褐色。8はP4出土で、色は橙茶色。9はP5出土で、色は黄褐色。10は弥生中期 壺底部。外面には黒斑があり、色は黄褐色。11は弥生中期甕蓋で、外面体部は工具ナデのちナ デを施したか。外面には二次加熱痕があり、内面は黒化する。色は黄橙褐色。12~28は弥生中 期壺で、黒斑は 16・17・24・27、二次加熱痕は 14・16・23、ススは 14・16・27・28 に認められる。 12~15 は逆「L | 字状の口縁部を持ち、12の色は茶褐色。13 の胎土には非常に細かな細粒を 多く含み、色は灰黄色。14 は樽状の胴部で、口縁下にはやや大振りな三角突帯を巡らす。胎土 には石英·赤色粒を多く含み、色は灰黄色。15 の色は橙色。16~23 は「T」字状の口縁部を持ち、  $17 \sim 19 \cdot 21 \sim 23$  は三角口縁甕の影響を残す。16 は壺になるかもしれないもので、色は黄褐色、 P 4 出土の 17 の色は灰橙色。18 の色は黄褐色、19 の色は灰橙褐色、20 は口縁上面が強く窪み、 色は黄橙色。21 の色は黄褐色、22 の色は橙茶色、23 の色は黄橙色。24~26 は「く」の字状の 口縁部。24の内面は縦ハケのち一部横ハケを施す。色は黄褐色。25の胴部は張り、色は黄橙褐色。 大きく外湾する口縁の26は口縁下に鋭い三角突帯を巡らし、胎土には赤色粒を多く含み、色は 橙褐色。27 の内面は指押さえ痕が顕著で、色は灰黄色。28 の外面はハケ後一部ナデを施す。色 は外が灰黄褐色、内が灰黄褐色~橙褐色。29は弥生中期丹塗精製甕で、口縁部と底部のみ出土。 外面には焼成後に付着したススが認められ、生地は灰黄色。覆土下層出土。30・31 は弥生中期 鋤先口縁の丹塗精製高坏。口縁部と脚裾部のみ出土した30の口縁部にはススが付着。生地は黄 褐色。31 は器壁が厚く、全体的にぼてっとした印象のもの。脚部には焼成前外→内の穿孔を2ヶ 所施したか。生地は黄褐色。32 は弥生中期高坏か鉢口縁部。色は黄橙色。33 は弥生中期高坏脚 部で、外面には転用後に受けた二次加熱痕が認められる。色は黄橙色。覆土下層出土。34 は P 4出土の鼓形器台で、外面は二次加熱を受け器表が少し荒れる。色は黄褐色。

### 73 号竪穴住居跡 (図版7、第37図)

9区中央やや南寄りの東端に位置し、72・75号住居跡、93号土坑を切る。住居の半分以上

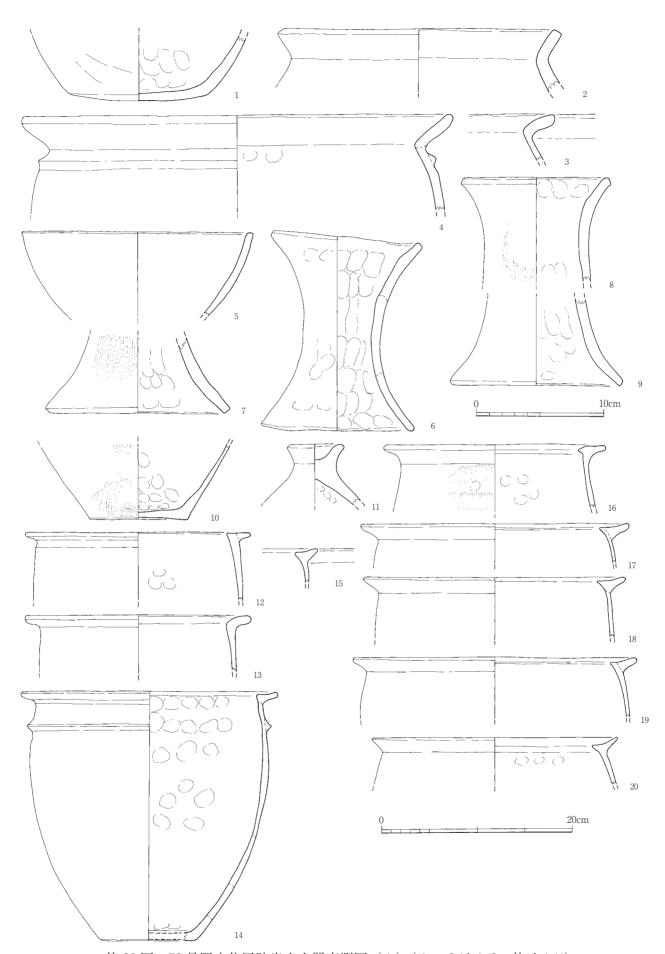


73 号住居跡出土状況 (東から)

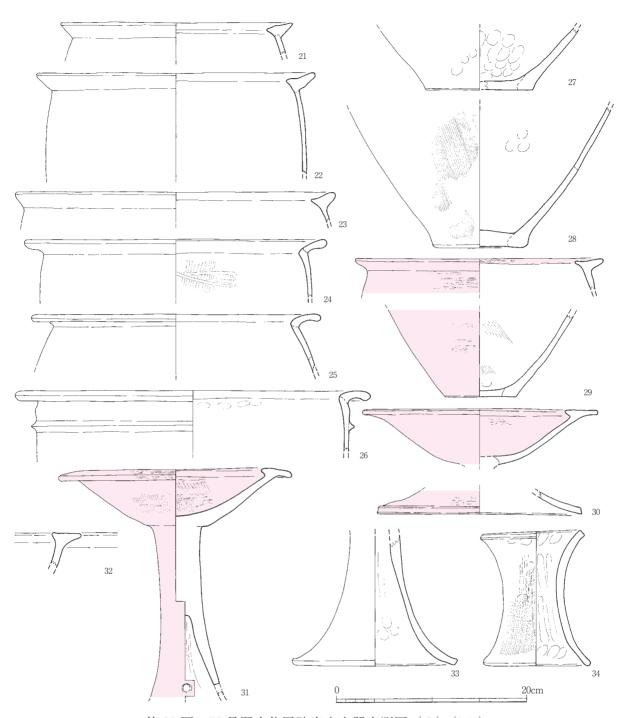
が調査区外で、住居規模は南北 530cm ×東西 286cm 以上、住居竪穴部中央で深さ 32cm を測る。時期的にベッド状遺構を付設すると考えられるが、調査区内では検出できなかった。床面ではピット 3 基検出し、位置・深さから P 1・2 が主柱穴の 2 本柱住居になる可能性がある。床面から 20 cmほど浮いた状態の土器群(6・15~17)を検出した。また南壁に張り付いた状態で石包丁(第 97 図 4)



第 37 図  $71 \sim 73$  号竪穴住居跡実測図 (1/60)



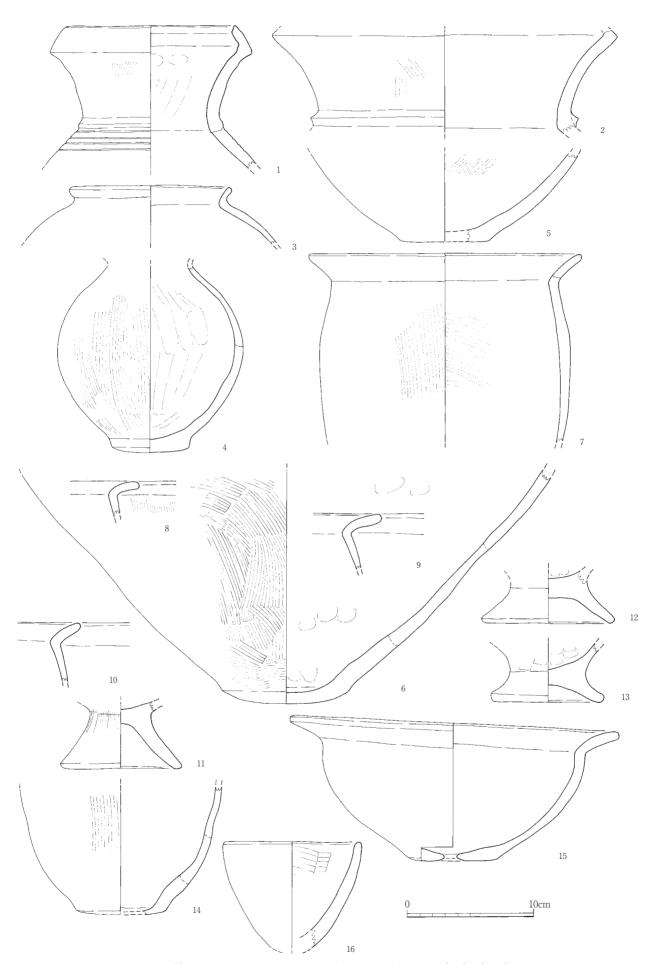
第 38 図 72 号竪穴住居跡出土土器実測図(1)(1 ~ 9 は 1/3、他は 1/4)



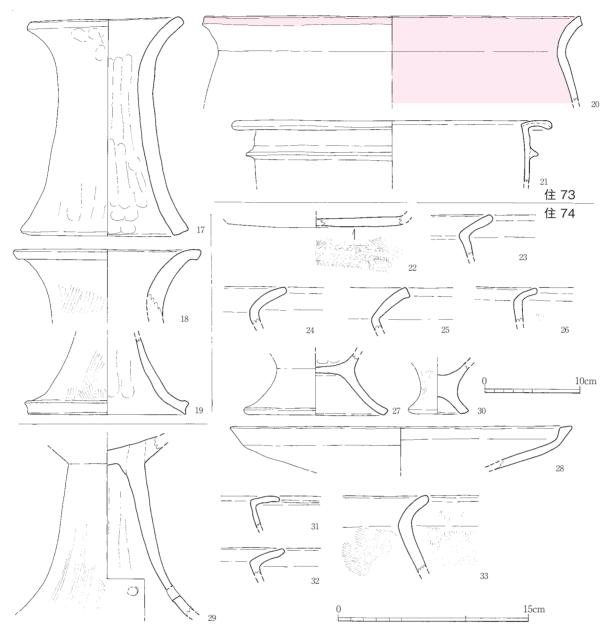
第39図 72号竪穴住居跡出土土器実測図(2)(1/4)

が出土した。埋土は上層が灰茶褐色粘質土、下層が黄褐色粘質土となる。住居中央で床下掘り込みを確認した。切り合い関係及び出土土器から弥生時代後期終末の住居跡と考えられる。 出土土器(図版 50、第 40 図 1 ~ 21) 1 ・ 2 は在地系複合口縁壺で、1 の肩部には4条のヘラ描き沈線が巡る。外面には黒斑あり。色は黄褐色。 2 は頸部に締まりがないもので、頸部に三角突帯を貼り付ける。色は灰黄褐色。 3 は在地系無頸壺で、色は灰黄褐色。 P 1 出土。 4 ・ 5 は覆土下層出土。 4 は凸レンズ底の在地系小形壺で、外面には黒斑あり。色は外が灰褐色、内が灰色。 5 も凸レンズ底の在地系壺底部。色は外が灰橙褐色、内が橙褐色。 6 は在地系大形壺

底部。外面には黒斑あり、色は灰黄褐色。7~10は在地系甕。7の外面には黒斑があり、内



第40図 73号竪穴住居跡出土土器実測図(1)(1/3)



第41図 73(2)・74号竪穴住居跡出土土器実測図(21・30・31は1/4、他は1/3)

面下位は黒化する。色は灰色。8はP1出土で、色は黄褐色。9の口縁部内面には黒斑があり、色は茶褐色。10の色は淡橙褐色。11~13は在地系台付甕脚部。高脚である11の外面には二次加熱痕があり、色は黄褐色。12は脚内外に二次加熱痕があり、色は白黄褐色。P1出土。13の胴部外面には工具痕があり、色は暗橙褐色。14は在地系鉢底部で甕になる可能性もある。底部は非常に薄い。外面には黒斑があり、色は外が黄褐色、内が灰色。15は屈折口縁鉢で、底部には焼成後外→内穿孔がある。底部は弱い凸レンズ底で、内外面は全体的に二次加熱を受け、器表が荒れる。外面には薄い黒斑あり。色は赤茶褐色。16はコップ型の粗製直口鉢で、色は黄褐色。17~19は器台。17はほぼ完形で、上部径11.7 cm、底径13.2 cm、器高17.2 cmを測る。外面は丁寧なナデを施し、外面には二次加熱痕あり。色は橙茶色。18の色は灰橙褐色、19の色は淡橙褐色。20はいわゆる内面朱付着土器で在地系甕を用いたもの。重要資料であるため、無理やり反転し

たが、復元径には自信がない。内面全面から口縁外端部まで朱が認められ、朱が胎土内に染み込む状況である。外面には黒斑があり、色は白黄褐色。P1出土。21は弥生中期甕で、色は橙色。

## **74** 号竪穴住居跡 (図版 7、第 42 図)

9区中央の西端に位置し、71号住居跡、123号土坑を切り、76号住居跡、104・114号土坑に切られる。また、75号住居跡とも接するため、切り合い関係を持つが、出土土器から当住居の方が新しい。さらに、当住居を調査の際、上層から切り込む104号土坑及びその南のピットの存在に気づかず、その出土土器が混じってしまった可能性がある。住居西側の半分近くは調査区外で、住居規模は南北430cm×東西280cm以上、竪穴部中央で深さ37cmを測り、おそらくほぼ正方形住居となるか。住居北・東及び南壁の南東部には地山削り出しによるベッド状遺構を付設するが、東壁ベッドは調査の際、高さ8cmほど下げすぎてしまい、東壁中央のベルトとして残した部分が本来のベッド状遺構の高さとなる。そのため、東壁ベッドは南壁ベッドと本来は同じ高さとなる。北ベッドは高さ35cm、幅97cm、東ベッドは高さ25cm、幅115cm、南ベッドは高さ27cm、長さ200cm、幅96cmを測る。床面ではピット1基及び屋内土坑を検出した。南西隅に位置する屋内土坑は深さ34cmで、床面から5cmほど浮いた状態で炭塊を確認した。P1は位置・深さから主柱穴になる可能性が高い。埋土はレンズ状堆積を示す。切り合い関係及び出土土器から弥生時代後期終末の住居跡と考えられる。

出土土器(第 41 図 22 ~ 33) 22・27 は覆土下層、31 ~ 33 は屋内土坑出土。26 は P 1 出土。22 はやや凸レンズ底の壺底部としたが、底径が広く、鉢の可能性もある。底部外面までハケを施し、色は灰黄褐色。23 ~ 27 は在地系甕で、23 には黒斑・二次加熱痕、24 にはススが認められる。23 の色は灰橙褐色。24 の色は黄褐色。25 の色は黄橙色。26 の色は黄褐色。27 は台付甕脚部。色は灰黄褐色。28 は在地系屈折口縁高坏。色は橙褐色。29 は在地系高坏脚部で、脚部下位には焼成前外→内穿孔を 2 ヶ所残るが、何ヶ所施したかは不明。外面には二次加熱痕・ススがあり、色は黄橙褐色。30 は弥生中期甕底部。色は灰橙褐色。31 は弥生中期甕口縁部。外面にはススがあり、色は灰黄褐色。32・33 は在地系甕口縁部。32 の色は黄褐色。器壁が厚い33 の外面には黒斑があり、色は茶褐色。

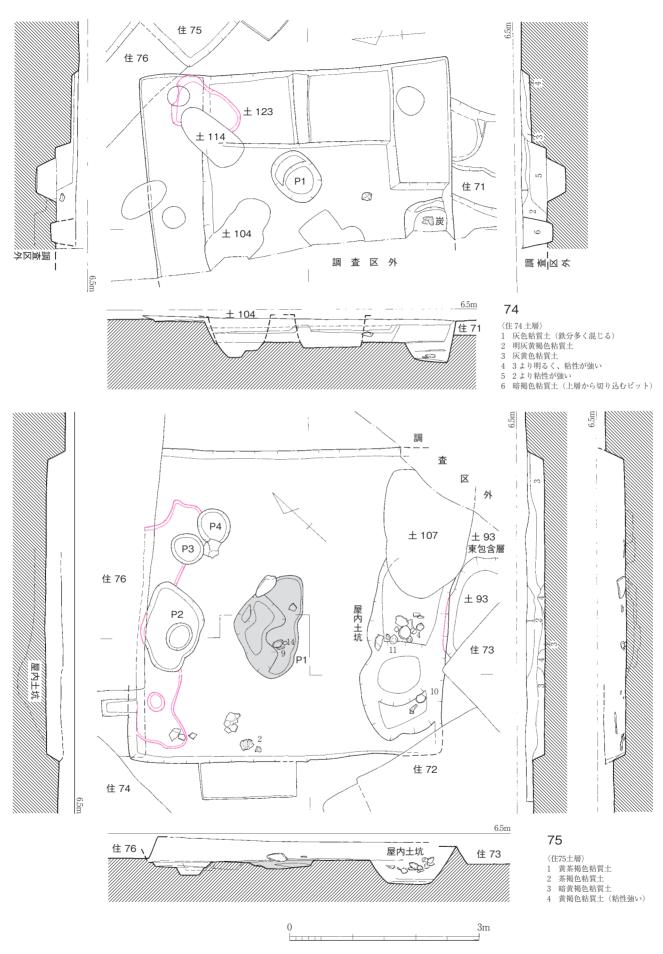
#### 75 号竪穴住居跡(図版 11・12、第 42 図)

9区中央のやや東寄りに位置し、72・73・76号住居跡、107号土坑に切られ、93号土坑を

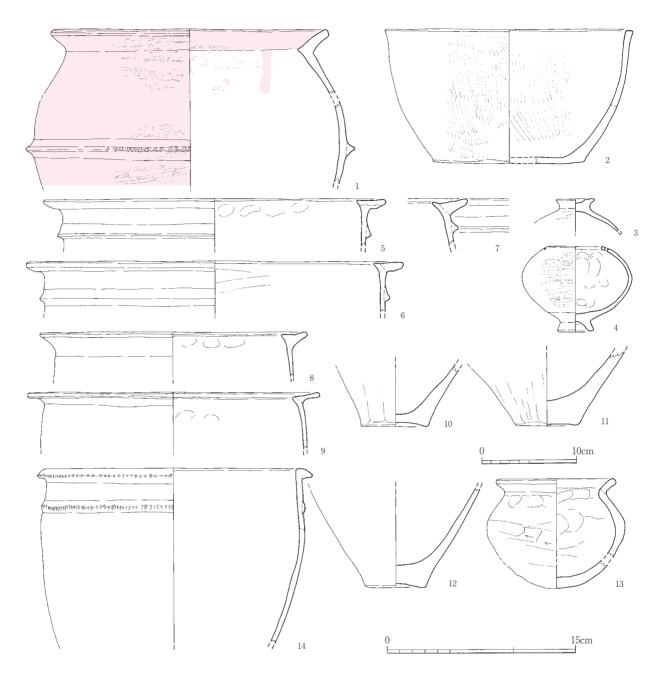


75 号住居跡炉付近出土状況(南東から)

切る。また74号住居跡と接するため、切り合い関係を持つが、出土土器から当住居の方が古い。切り合い関係から、9区中央で最も古い住居となる。住居南東隅は調査区外で、住居規模は北西 - 南東496cm ×北東 - 南西490cm、深さ最大40cmを測る、正方形住居。ベッド状遺構は元々付設していないと考えられる。床面ではピット4基及び屋内土坑を検出した。埋土が黄褐色粘質土に炭が混じるP



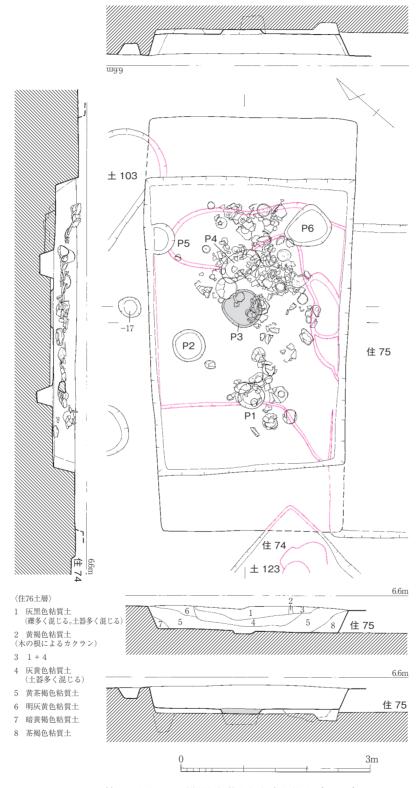
第 42 図 74 · 75 号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第 43 図 75 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1・2・13 は 1/3、他は 1/4)

1が炉、位置からP2・3が北側の主柱穴列の可能性が高く、4本柱の住居となると考えられる。そうすると南西側の柱穴は土器群がない屋内土坑の一段下がった部分になるか。屋内土坑は南壁中央から南西隅の壁際に位置する、長軸285cm以上×短軸138cm、深さ30cmの大型の土坑で、土坑床面から10cmほど浮いた状態で土器群(4・10・11)を検出した。屋内土坑埋土は茶褐色粘質土。住居埋土はレンズ状堆積を示し、土層4のP1周囲の高まりは、炉であるP1の土手となる可能性がある。住居床面直上では鉢(2)を検出した。住居北側で床下掘り込みを確認した。出土土器から弥生時代後期前半の住居跡と考えられる。

出土土器(図版 50、第 43 図) 2 は床面直上、1・6 は覆土下層、8 は P 2、3・4・11・12 は屋内土坑内出土。1 はミガキを行う外面全体及び口縁部内面に丹塗を施した、大形の短頸壺で、球状の胴部中位には三角突帯を貼り付け、その端部には刻目を施す。生地は橙褐色。



第44図 76号竪穴住居跡実測図 (1/60)

2は直口鉢で、底部外面端部付近にはケズリ状の工具ナデを施す。外面には黒斑があり、色は 灰黄褐色。3は精製の壺蓋で、外面には丁寧なミガキを施す。外面には黒斑があり、色は橙色。 4は小形脚付無頸壺で、口縁部には2孔1セットの蓋用の孔を2ヶ所施す。外面には黒斑があり、色は外が褐色、内が灰黒色。5~9は弥生中期の逆「L」字状を呈する甕口縁部で、5・6は口縁下に三角突帯を巡らす。5の突帯下にはハケの際の工具痕あり。5の口縁上端には黒斑があり、色は外が黄橙色、内が灰黄色。6の口縁部内面には布等によるナデ痕が明瞭に残り、内面は黒化する。色は外が橙褐色、内が灰黄褐色。7の外面には二次加熱痕があり、色は白黄茶色。8の外面にはススがあり、色は橙褐色。9は口縁外端部が長く突出するもので、割れた後に二次加熱を受ける。色は暗橙褐色。10~12は弥生中期甕底部で、いずれも外面には二次加熱痕、内面にはコゲ痕あり。10の色は外が黄橙色、内が灰茶色。11の色は茶褐色。12は胎土に細粒を多く含み、色は暗茶色。13は古墳前期の粗製在地系小形丸底壺で、胴部外面下位にはケズリを施す。色は黄褐色。混入品。14は弥生前期末の亀ノ甲系譜甕で、口縁と低平な突帯端部には丸い棒状工具による刻目を施す。外面には黒斑・二次加熱痕・ススがあり、内面には薄くコゲが付着する。色は黄茶褐色。

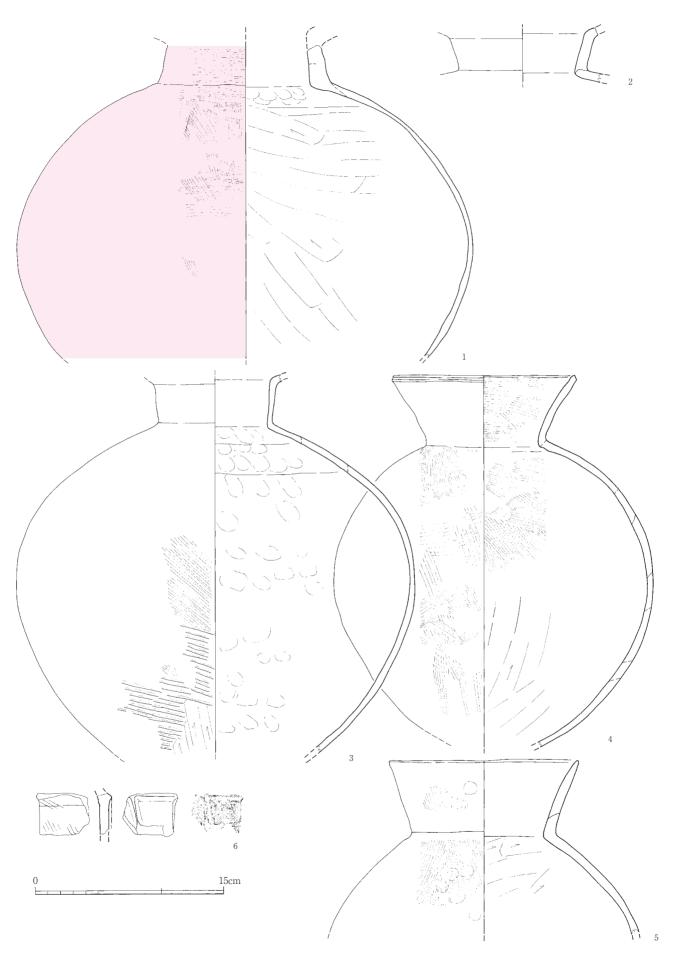
### 76 号竪穴住居跡 (図版 12 · 13、第 44 図)

9区中央に位置し、 $74 \cdot 75$  号住居跡、103 号土坑を切る、9区中央では 68 号住居跡と並んで、切り合い関係から最も新しい住居跡となる。住居全体が調査区内に収まり、住居規模は長軸 650cm × 短軸 320cm、竪穴部中央で深さ 38cm を測る、東西に長い長方形住居となる。住居北・南壁には地山削り出しによるベッド状遺構を付設し、高さはいずれも 36cm 前後と高く、幅は東が 106cm、西が 103 cmを測る。なお、西ベッドの南端は先に 75 号住居跡を調査したため、また東ベッドの北端は先に 103 号土坑を調査したため、誤って掘り失った。竪穴部床面ではピット 6 基検出し、灰褐色粘質土に炭が多く混じる P 3 が炉、位置・深さから P  $1 \cdot 4$  が主柱穴で、2 本柱の住居跡となる。 P  $5 \cdot 6$  は位置・深さから住居内の補助柱の可能性があり、炉の短軸上にある北に位置する住居外のピットは住居外の支柱穴の可能性がある。竪穴部床面から 5 cm以上浮いた状態で多量の土器群を検出した。土層図からレンズ状に堆積する  $1 \sim 6$  層に伴う土器群であり、床面直上出土のものはほとんどない。そのため、住居廃絶後に住居の窪みをごみ穴として利用したと想定される。住居中央で床下掘り込みを確認した。覆土上層よりベンガラが全面付着した磨石(第 98 図 16)が出土した。このベンガラの顔料分析については、V 2

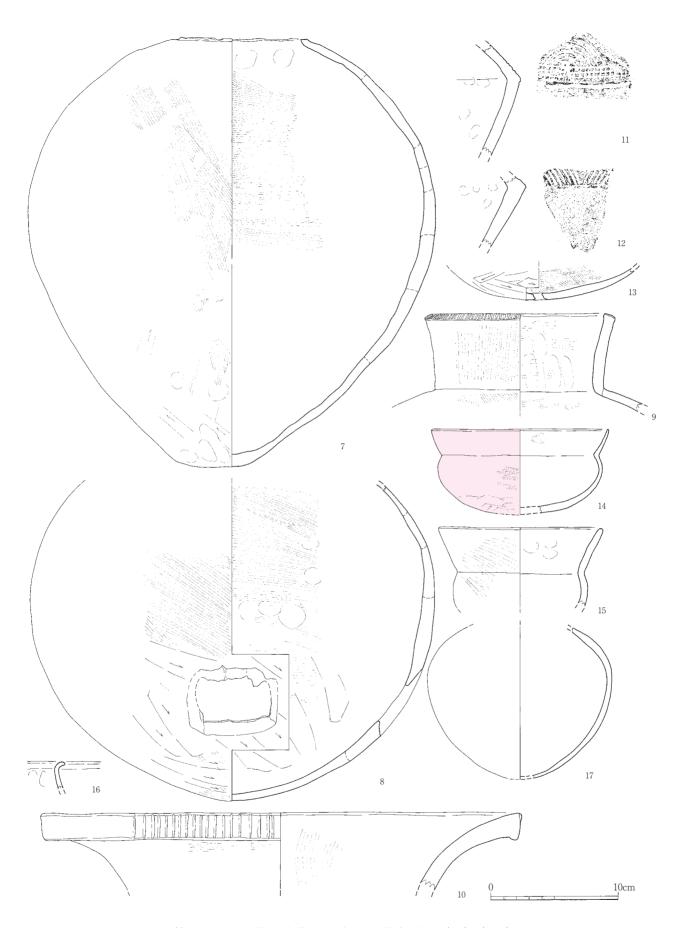


76 号住居跡出土状況(南東から)

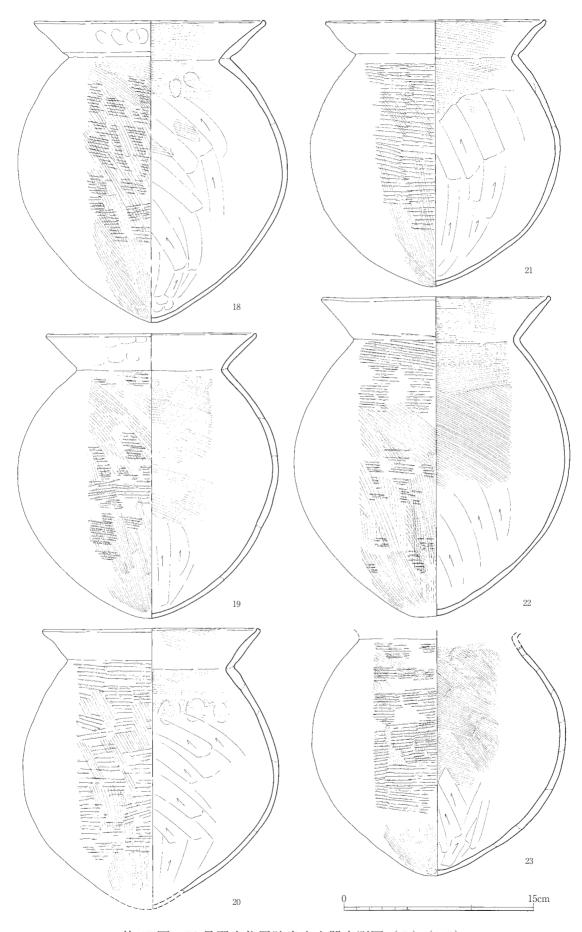
で実施している(p211~214)。出土土器から古墳時代前期中葉の住居跡と考えられる。 出土土器(図版51、第45~52図1~83) 1~3は畿内系二重口縁壺で、いずれも2次口縁部を欠損する。1は外面にハケ後ミガキを行い、その後スリップを施す精製品。生地は黄褐色。2は口頸部のみ残存するもので、割れ口にススが付着しているため、何かに転用されたものか。色は黄橙褐色。3は器壁が



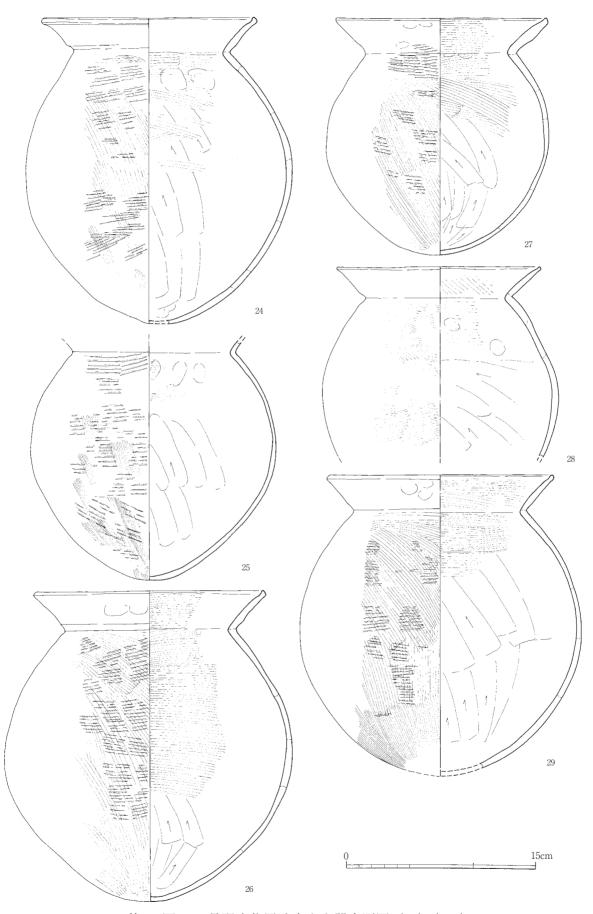
第 45 図 76 号竪穴住居跡出土土器実測図(1)(1/3)



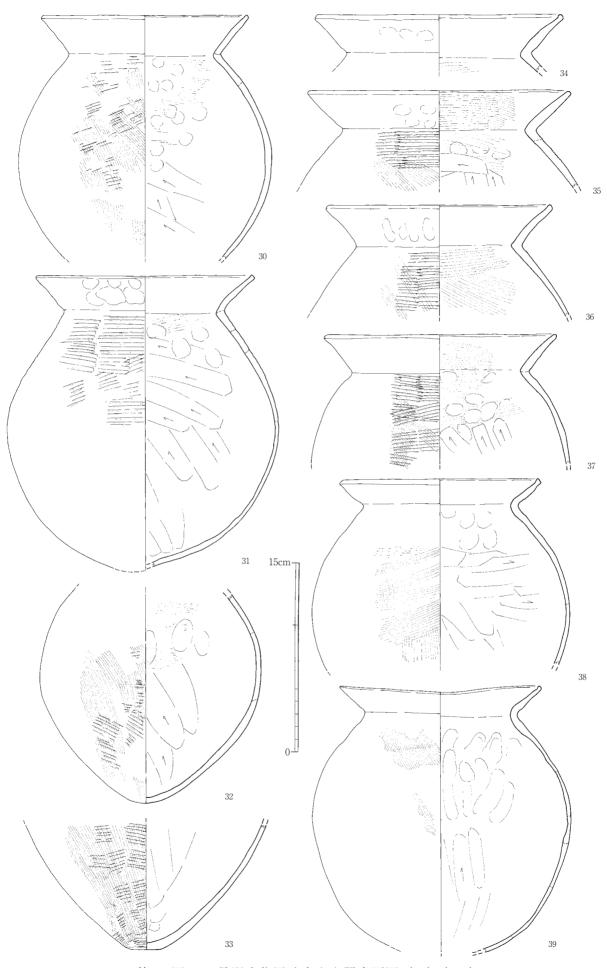
第46回 76号竪穴住居跡出土土器実測図(2)(1/3)



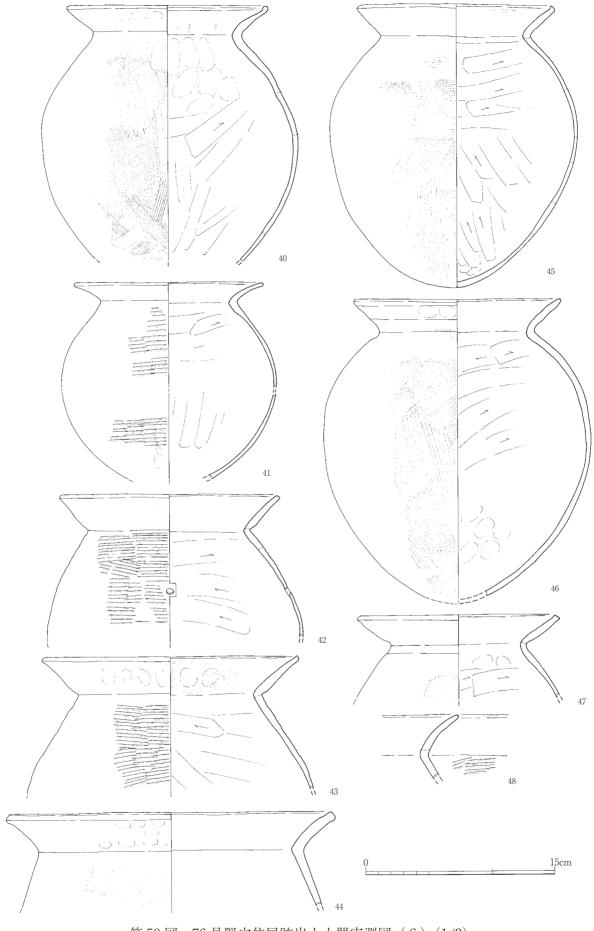
第47図 76号竪穴住居跡出土土器実測図(3)(1/3)



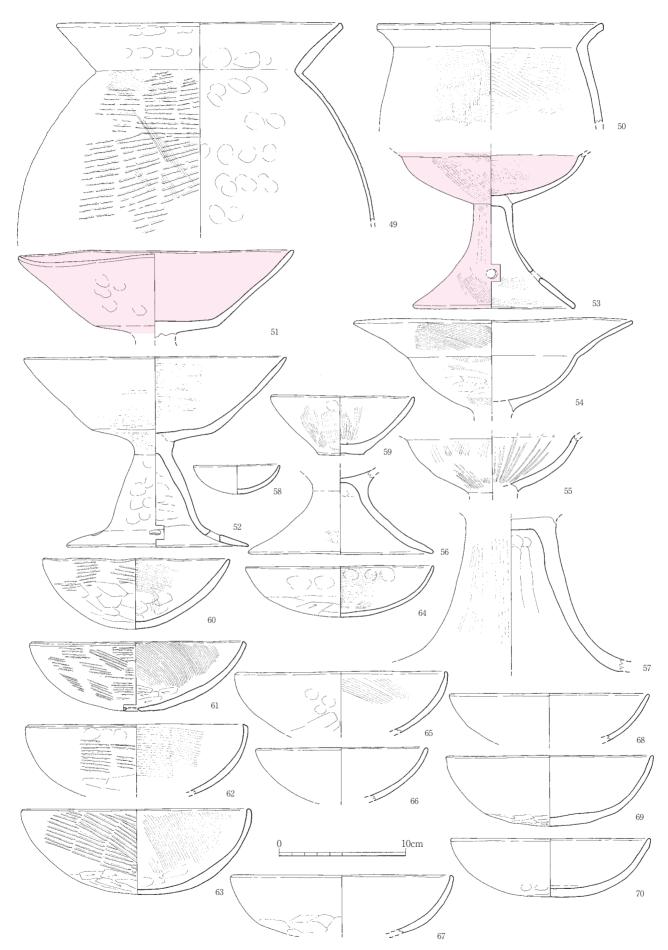
第48図 76号竪穴住居跡出土土器実測図(4)(1/3)



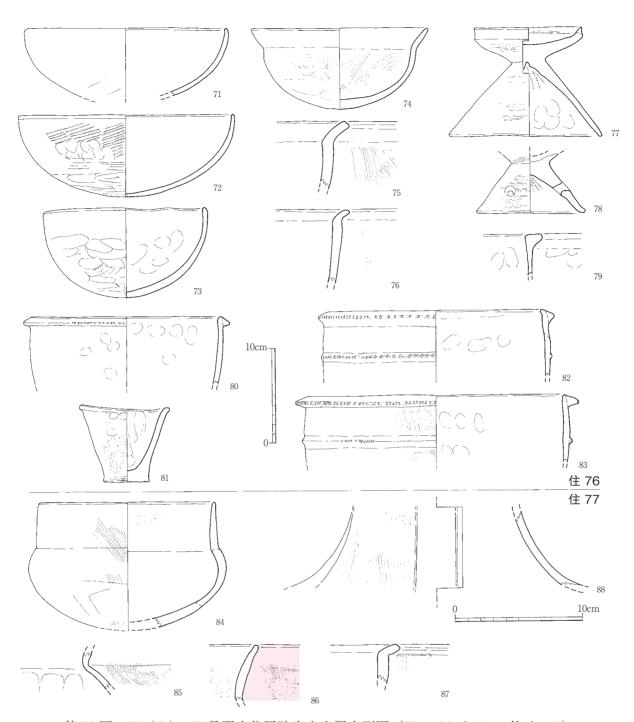
第49図 76号竪穴住居跡出土土器実測図(5)(1/3)



第50図 76号竪穴住居跡出土土器実測図(6)(1/3)



第51図 76号竪穴住居跡出土土器実測図(7)(1/3)



第52 図 76 (8)・77 号竪穴住居跡出土土器実測図 (79~83 は 1/4、他は 1/3) 薄いもので、胴部外面はタタキ後ハケ、底部付近のみ最後にケズリを施す。肩部には二次加熱痕が顕著であるため、何かに転用したものか。外面には黒斑があり、色は黄褐色。4・5 は畿内系直口壺である。4 の胴部外面は横タタキのち縦ハケを施し、底部付近はハケがケズリ状に見える。外面には黒斑があり、色は橙褐色。5 の色は黄茶褐色。6 は屈曲部に横の三角突帯と縦の棒状浮文を貼り付けた、畿内系二重口縁壺の口頸部か。傾きは横突帯で復元したが、小片のため自信がない。胎土から搬入土器の可能性が高い。色は外が灰色、内が灰黄色。覆土下層出土。7 は口縁部以上を打ち欠いた壺胴部で、胴部以下はほぼ完形品である。やや器壁が厚く、粘土継ぎ目痕から3~4 cmほどの粘土紐で成形したことが分かる。外面胴部下位はハケがケズ

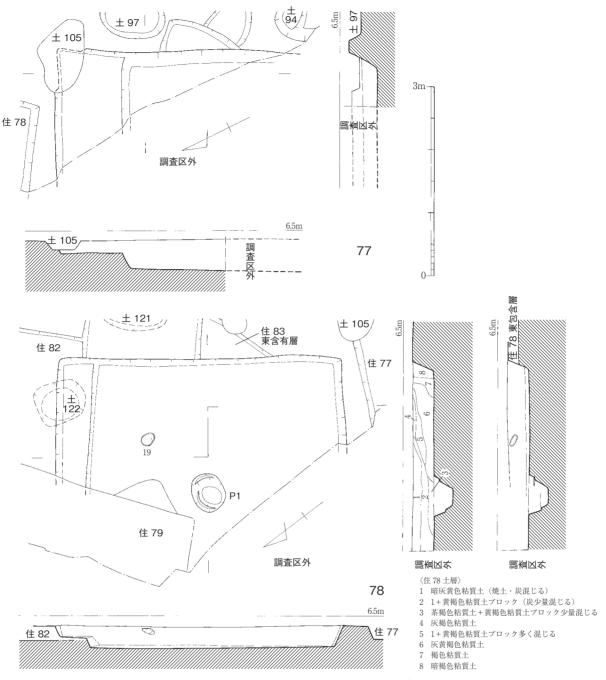
リ状になる。内面下位は器表がボロボロで調整は不明。外面には黒斑があり、二次加熱痕も認められる。色は灰茶褐色。8は寸胴の在地系壺胴部で、下位には焼成後外→内の大きな穿孔1ヶ所を施す。内外面下位はケズリ調整で、一部ケズリ工具がハケ状に痕跡が残る。外面には黒斑・二次加熱痕があり、色は橙褐色。9は在地系直口壺で、口縁端部には刻目を施す。外面には黒斑があり、色は白黄褐色。10は在地系大形壺口縁部で、口縁端部前面



76号住居跡竪穴部(南東から)

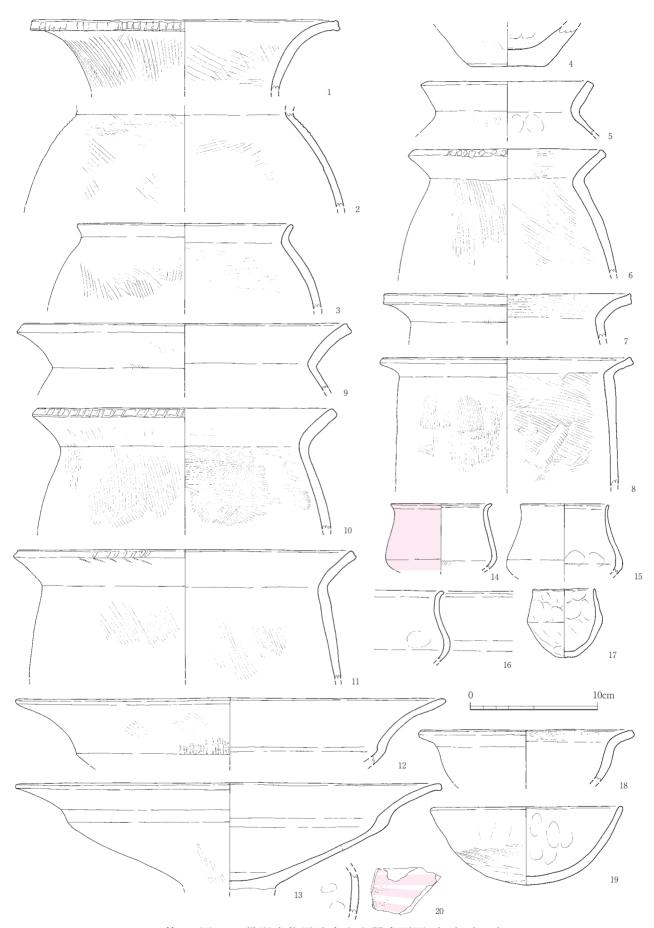
に刻目を密に施す。色は茶褐色。11・12 は肥後系の重弧文を施した屈曲の強い壺胴部で、色はいずれも黄褐色。11 はヘラ工具により 1 本ずつ施文するもので、最初に 5 条の重弧文、次に 4 条の沈線、最後に縦短線を施すもの。12 は櫛状工具により施したもの。覆土下層出土。13 は在地系壺底部としたか、鉢でも良いか。底部中央に鋭利な工具により焼成後穿孔を施す。色は茶褐色を呈する。14・15 は畿内系小形丸底壺。14 は器壁が非常に薄い精製品で、外面には化粧土を施している。生地は橙色。覆土下層出土。15 は器壁が厚いもので、外面には黒斑あり。色は黄褐色。16 は在地系小形外反口縁壺。胎土は精良で、色は橙褐色。17 は畿内系中形壺胴部で、外面には黒斑あり。色は黄茶褐色を呈する。

18~49は畿内系と在地系の両方の要素を持つ折衷甕である。黒斑は18・20~28・30・32・ 29~31・33・36~38・40・45・46・49、胴部内面のコゲは21~24・29・31・32・45に認め られる。18~29はどちらかというと庄内系の要素を持つ器形で、胴部は球状で、最大胴部径 は胴部中位にあるもの。また胴部内面調整は基本的にケズリ後ハケとなる。肥厚させた口縁端 部をつまみ出すものは、18~20、21・24・25・28・29で、底部が尖底に近いものは18・19・  $21 \cdot 23$ 、また  $18 \sim 20$ 、27 は完形品に近く、 $21 \cdot 22 \cdot 26$  はほぼ完形品である。18 の色は橙茶色。 19 の色は黄褐色。20 の胴部内面はハケ後ケズリを施す。色は橙褐色。21 の色は黄褐色。22 は 幅細のタタキ痕で、色は茶褐色。23の胴部内面はハケ後ケズリを施す。色は茶褐色。24~29 は丸底になるもの。24 の色は黄橙褐色。25 の色は灰黄褐色~灰黄色。26 の色は灰黄褐色。27 は口縁部だけ器壁が厚く、色は灰黄茶色。28の胴部下位は最後に右上がりの粗いハケを施す。 色は灰茶色。29 は最後に頸部付近のみ横ハケを施す。色は外が黄褐色、内が灰黄褐色。30・31 の口縁端部はわずかにつまみ上げたもの。 $30 \cdot 32 \cdot 34 \sim 41$  は口縁内端部をつまみ上げる。30は球状の胴部で、色は黄茶褐色。31 は胴部最大径が胴部下位近くまで下がるもので、内面頸部 には板ナデを施す。色は灰黄色。32は小形甕で、色は外が赤茶色、内が褐色。33は不安定な凸 レンズ底で、色は暗茶褐色。34~37は胴部内面にハケを施すもので、34の色は黄茶褐色。器 壁がやや厚めの35の胴部内面はハケ後ケズリを施す。色は橙褐色。覆土下層出土。36は胎土 から当遺跡周辺で作ったものではない。色は灰黄色。37の胴部内面は指おさえ痕が残り、ハケ 後ケズリを施す。外面は黒化する。色は橙茶色。38~41は内湾する口縁部を持ち、どちらか というと布留系の要素が強い。38の色は灰橙褐色。39は歪みがあり、作りも粗いもの。胴部内

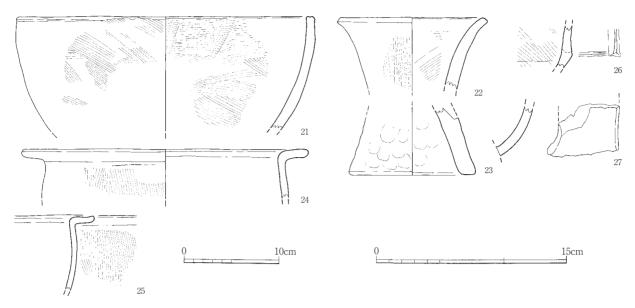


第 53 図 77 · 78 号竪穴住居跡実測図 (1/60)

面上位はナデによる凹凸が顕著。色は黄褐色。40 は長胴気味の胴部で、色は茶褐色。41 は器壁が薄く、球状の胴部から口縁部が強く外折する特徴的な器形。色は橙褐色。42~44 はほぼ在地系甕であるが、42・43 は内面にケズリを施すところが畿内系の要素となる。胴部上位には焼成後小穿孔を1孔施す。色は灰黄茶褐色。43 の色は外が肌色、内が暗黄褐色。44 の色は白黄褐色。45 は布留系甕でほぼ完形品。口径 15.6 cm、器高 22.3 cmを測る。胴部中位やや上位に横ハケを施すが、その後一部短い縦ハケを施す。内面頸部近くまでケズリを施し、色は橙褐色。46 は口縁部はナデによる凹凸が顕著で、色は茶褐色。47 の色は灰黄色。覆土下層出土。48 の色は黄橙色。49 は内外面とも指押さえ痕が良く残る。色は橙茶色。50 は在地系甕。色は黄褐色。

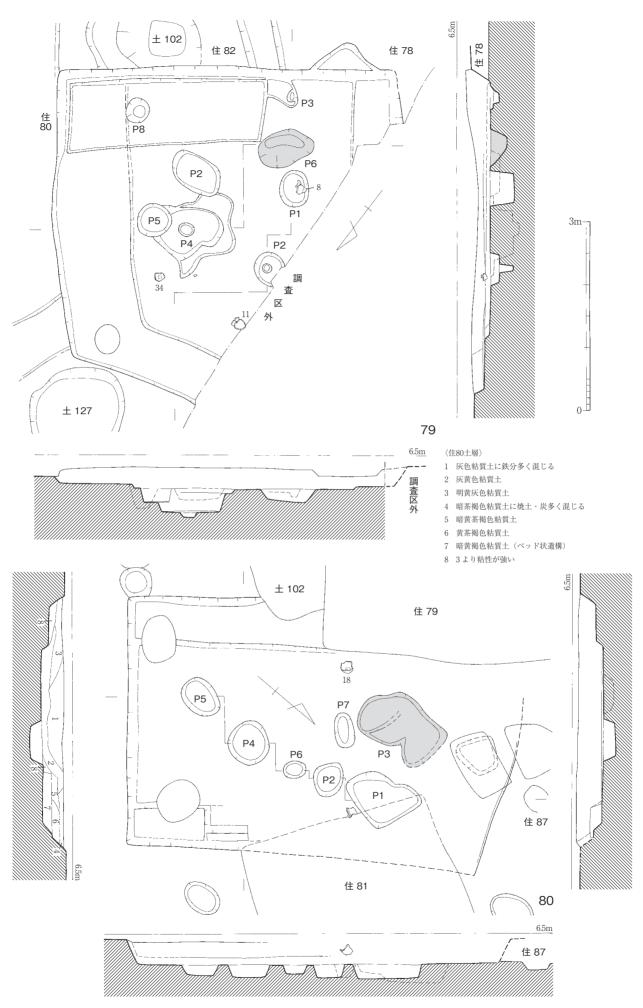


第54図 78号竪穴住居跡出土土器実測図(1)(1/3)

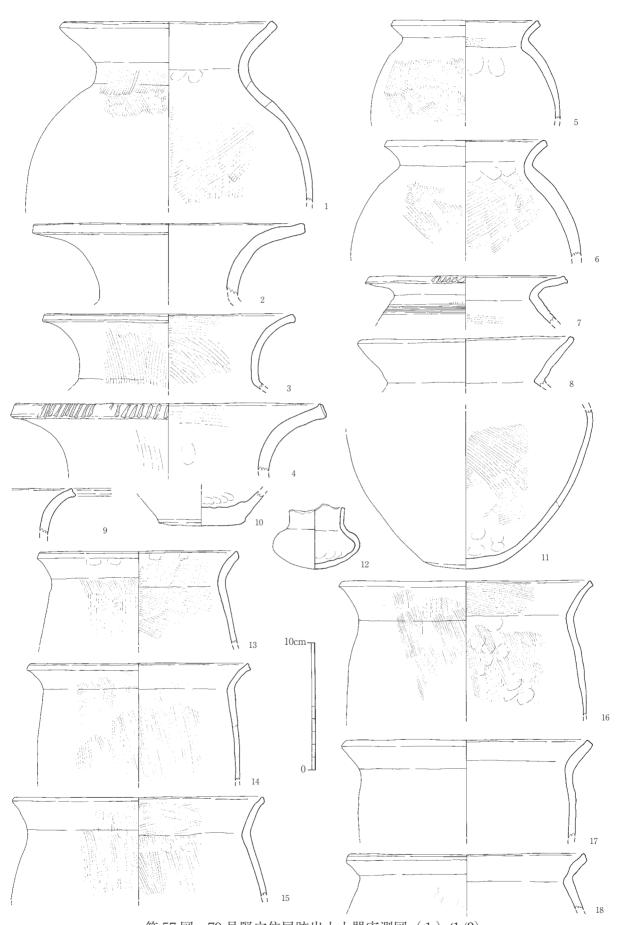


第55図 78号竪穴住居跡出土土器実測図(2)(24・25は1/4、他は、1/3)

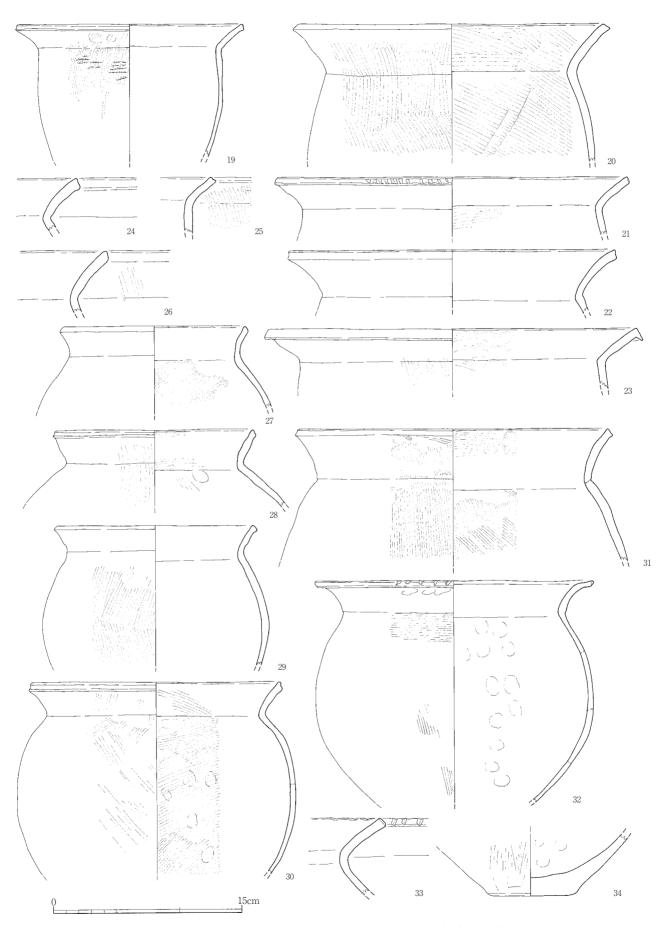
51・52 は布留系高坏。かなり歪む 51 は坏部内外面化粧土を施し、外面には黒斑あり。脚部 との接合部には接合のための刻目あり。胎土は精良で、生地は橙色。52は70%残存するもので、 復元法量は口径 20.7 cm、底径 14.2 cm、器高 15.0 cmを測る。坏部内外面はミガキ、脚部はナデ調 整を施す。脚裾部には焼成前外→内穿孔を2ヶ所施す。外面には黒斑があり、色は橙色。53~ 57 は在地系高坏で、53~55 は屈折口縁の高坏となる。53 は外面全体及び坏部内面に化粧土を 施し、脚部には焼成前外→内の穿孔が4ヶ所認められる。胎土は精良で、生地は淡橙褐色。54 の坏部外面体部には一部ヘラナデを施し、口縁部外面には黒斑あり。色は黄橙色。55の外面 は一部のみ縦ミガキを施し、内面は粗い暗文状ミガキを施す。胎土は精良で、色は橙色。56・ 57 は在地系高坏脚部。56 の色は灰黄褐色。57 の色は黄褐色。58 ~ 73 は直口鉢。59・61・68・ 69・73には黒斑がある。58は畿内系の精製品で、色は外が橙色、内は灰色。覆土下層出土。59 の外面は縦ハケ、内面は縦ミガキを施す。色は茶褐色。60~63は外面にタタキ痕が残り、底 部外面には手持ちヘラケズリを施すもの。60の色は茶褐色。覆土下層出土。61は底部に焼成後 外→内の穿孔を施す。色は橙茶色。62の色は橙褐色。63は完形に近いもので、内面底部には ケズリ状の擦過痕が認められる。外面には二次加熱痕・ススが認められる。色は茶褐色。64・ 65・67・69・71・72の外面底部には手持ちヘラケズリを施す。64の色は黄橙色。65は内面一 部が黒化し、色は黄橙色、66の色は橙茶色、67の色は橙褐色。68の色は茶褐色。69の色は黄 褐色。70 の底部外面には成形台から切り離した際に付いた木の擦渦痕がわずかに残る。色は茶 褐色。71 の色は黄橙褐色。72 の内面は丁寧なナデを施し、色は橙褐色。73 はほぼ完形で、外 面にはヘラナデ状の手持ちヘラケズリを施す。胎土は精良で、色は橙褐色。74 は在地系屈折口 縁鉢。色は橙褐色。75・76は屈折口縁鉢。75の内面には黒斑があり、色は黄褐色。76は外面 に板ナデを施し、色は白黄褐色。77・78は畿内系精製小形器台。77の坏部内外面及び脚部外面 にはミガキを施し、脚部内面はハケ工具による絞りを行う。色は橙褐色。78は脚部に3ヶ所穿 孔を施し、貼り付け痕には刻目を入れている。色は明橙色。79は三角口縁の弥生中期甕口縁部。 外面にはススがあり、色は淡橙色。80~83は弥生前期末の甕。80は口縁端部に浅い刻目を施し、 外面には二次加熱痕あり。色は黄橙色。81 はバケツ形の胴部から口縁部がわずかに外反する小



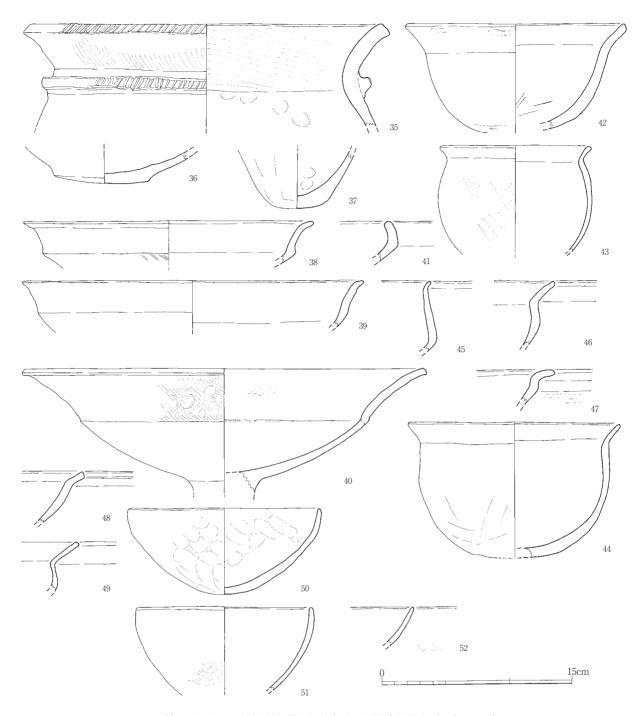
第 56 図 79・80 号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第 57 図 79 号竪穴住居跡出土土器実測図(1)(1/3)



第58図 79号竪穴住居跡出土土器実測図(2)(1/3)



第59図 79号竪穴住居跡出土土器実測図(3)(1/3)

形甕で、外面には黒斑・ススがあり、色は灰黄褐色。弥生前期後半まで遡るか。82・83の口縁下突帯はきわめて低平なもので、それぞれ刻目を施す。82の外面にはススがあり、色は茶褐色。83はハケ後突帯を貼り付けたもので、外面には黒斑があり、色は灰黄色。

# 77 号竪穴住居跡 (図版 14、第 53 図)

9区中央の西端に位置し、105号土坑に住居北東隅を切られる。住居西側の大半が調査区外で、住居規模は南北 360cm 以上×東西 208cm 以上、住居竪穴部中央で深さ 45cm を測る、おそらく南北に長い長方形住居となるか。住居北側には地山削り出しによるベッド状遺構を付設

し、高さ25 cm、幅106 cmを測る。検出範囲が狭く、竪穴部床面では遺構は検出できなかった。 埋土は灰黄褐色粘質土である。出土土器から古墳時代前期前半の住居跡と考えられる。

出土土器 (第52回84~87) 84・85・88 は覆土下層出土。84 は在地系小形丸底壺で、外面には黒斑あり。色は橙褐色。85 は在地系壺頸部。胎土は精良で、色は橙褐色。86 は在地系壺口縁部で、外面には化粧土を施す。生地は灰黄色~茶褐色。87 は屈折口縁鉢で、色は灰黄色。88 はいわゆる有明海沿岸型器台で、長方形透かし孔が4ヶ所あり。胎土は精良であるが、焼成は不良。色は橙褐色。

## 78 号竪穴住居跡 (図版 14、第 53 図)

9区中央の北西端に位置し、79号住居跡に切られ、82号住居跡、122号土坑を切る。また、 東側には包含層がある。住居規模は北東 - 南西 455cm ×北西 - 南東 348cm 以上、竪穴部中央 で深さ33cmを測る。住居北側には地山削り出しによる細長いベッド状遺構を付設し、高さ15cm、 幅57cmを測る。床面ではピットを1基検出し、深さから主柱穴の可能性が高い。埋土は土層3 ~8までがレンズ状堆積を示すが、1・2層は3~8層とは土が異なるため、79号住居跡を構 築する際に整地した土の可能性がある。出土土器から弥生時代後期終末の住居跡と考えられる。 出土土器(図版53、第54・55図) 1は在地系広口壺で、口縁端部にはヘラ工具による浅い刻 目が認められる。口縁部外面には細かいハケ後粗いハケを施す。色は茶褐色。2は在地系壺胴 部で、肩部には横ハケを1条施す。色は灰褐色。3は在地系短頸壺で、色は灰黄褐色。4は凸 レンズ底の壺底部で、外面には黒斑あり。色は橙色。5も在地系短頸壺で、色は淡黄褐色。6 ~11 は胴の張りが弱い長胴の在地系甕で、10には黒斑、6・9・10にはススが認められる。 6は口径が小さいもので、口縁上端部には丸い工具による刻目を施す。色は灰黄色。7の色は 黄褐色。8は胴部がほぼ直立し、色は灰黄色。9の色は黄褐色。10・11の口縁端部にはやや丸 い工具による刻目を施し、色はいずれも灰黄褐色。12・13 は在地系屈折口縁の高坏。12 は精製 品で、外面には縦ミガキを施し、内面もミガキを施したか。内面屈折部にはハケ工具痕が残る。 色は灰黄色。12の内面は薄く黒化し、何かに転用した際に付いたものか。色は灰黄褐色。14 ~ 16 は口縁端部が短く屈折する在地系精製鉢。14 の外面には化粧土を塗布し、生地は橙褐色。 15・16 の色も橙褐色。17 は口縁部が直立気味のコップ形小形鉢で、外面には黒斑あり。胎土は 精良で、色は灰黄褐色。やや器壁の厚い 18 は在地系屈折口縁鉢で、色は灰黄褐色。19・21 は在 地系直口鉢。19の外面は板ナデ後横ナデを施す。色は黄褐色~橙褐色。20は外面にベンガラに

よる横線を4条以上施したもので、器形は鉢になるか。横線はハケ状工具で1本ずつ描き、外面はハケ後ナデ、内面はナデ調整で、色は黄茶色。21は大形で、口縁端部には外面のハケの後、口縁端部にナデを施した際に粘土が柔らかかったためか粘土が少しはみ出す。色は灰黄褐色。22・23は器台で、いずれも二次加熱痕あり。色は22が灰黄褐色、23が灰黄色。24・25は弥生中期甕で、24の

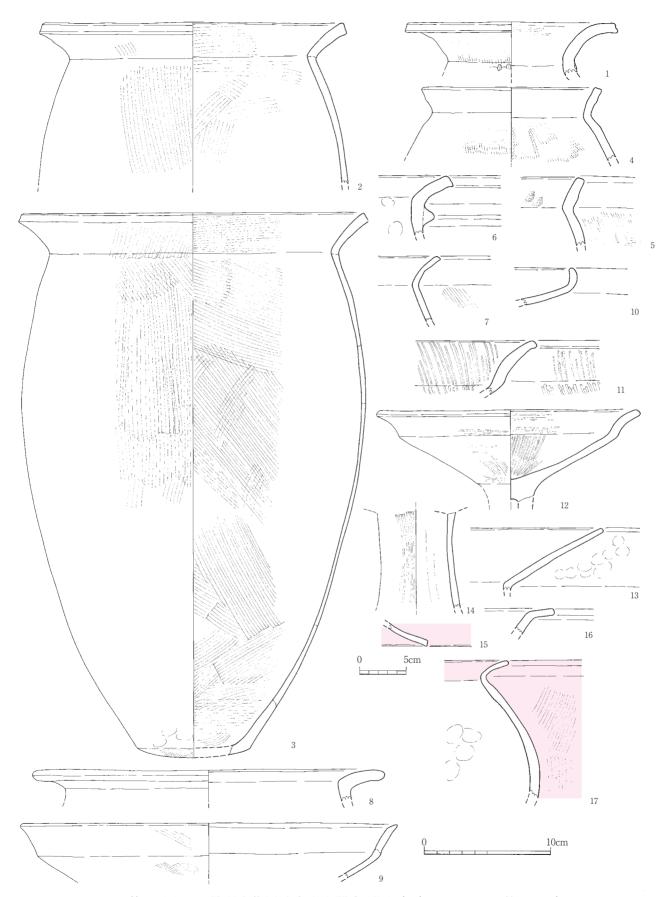


78 号住居跡出土状況 (東から)

口縁下にはハケ工具痕、外面にはススが付着する。色は暗黄褐色。25 は跳ね上げ状口縁で、色は白黄褐色。26・27 は当住居跡西撹乱土内出土で、当住居跡に伴うかは不明。26 は棒状浮文の畿内系二重口縁壺で、外面屈折部には横沈線を1条施し、その上に縦棒状浮文を貼り付ける。胎土から搬入土器であることは確実で、色は灰黄色。27 はジョッキ形土器の把手。色は黄褐色。

#### 79 号竪穴住居跡 (図版 14、第 56 図)

9 区北の南西端に位置し、78・80・82 号住居跡、102 号土坑を切る。127 号土坑とも接する ため、切り合い関係を持つが、出土土器では両遺構とも弥生時代後期終末のため、その前後関 係を判断できない。住居西側 1/3 近くは調査区外で、住居規模は北東 - 南西 446cm ×北西 -南東 535cm 以上、竪穴部中央で深さ 37cm を測り、北壁のみ広がるやや歪な住居跡である。住 居北・東・南壁には地山削り出しによる、高さ5cm前後のベッド状遺構を付設するが、当住居 跡は調査の際の反転の境目に位置するため、住居東南部を10cmほど下げすぎてしまい、その 部分のベッド状遺構も掘り失った。ベッド状遺構の幅は、北が 80 cm、東が 121 cm、南が 63 cm を測る。竪穴部床面ではピット8基を検出した。住居中央より南に偏在し、深さ26cmとやや 深いため、自信がないが、埋土に炭が混じるP6は炉、ピット内に柱穴状の掘り込みが存在す る P 2 · 3 は主柱穴、また位置・深さから P 5 · 8 は東側の柱穴列の可能性があり、4 本柱住 居となる可能性が高い。またP4は埋土から当住居跡に伴うと判断したが、P5が切る込むこ とから下層遺構の可能性がある。床面から5cm程度浮いた状態で土器(8·11·34)が出土した。 埋土は灰色粘質土に炭を多く混じり、竪穴部床面直上には炭層が広がる。覆土下層から鉄鎌(第 99 図2)が出土した。切り合い関係及び出土土器から古墳時代前期前半の住居跡と考えられる。 出土土器 (図版53、第57~59図) 14·15·21·22·24~27·29·30·37·39~41·43· 47・48・52 は覆土下層出土で、23 は P 5、51 は P 1 出土。 1~4 は在地系広口壺。 1 は器形 から壺に分類されるが、外面全体に顕著な二次加熱痕が認められることから、煮沸用として利 用されたもの。色は茶褐色。2の色は淡橙色。3・4は頸部の締まりがないもの。3の外面に は黒斑があり、色は橙褐色。P1出土。4は口縁端部にヘラ工具による浅い刻目を密に施した もので、色は橙褐色。P4出土。5・6は在地系短頸壺で、5の色は白灰褐色。覆土下層出土。 胴部の器壁が厚い6の外面にはススがあり、色は黄橙褐色。7~9は壺か甕か分類が難しいもの。 7の外面肩部には4条の櫛描文を施し、口縁端部には丸い工具による刻目を施す。色は黄褐色。 8の外面にはスス・黒斑があり、色は灰黄色。胎土には角閃石が非常に多く、搬入土器か。9 はP5出土で、色は白黄褐色。10は凸レンズ底の在地系壺底部で、外面には黒斑あり。色は黄 褐色。11 は丸底の在地系壺底部で、胴部外面は丁寧なナデを施す。外面には黒斑あり。色は黄 橙色。12 は口縁部を打ち欠いた、口縁部以下は完形の在地系小形壺で、外面には二次加熱痕あり。 色は橙褐色。13~37は在地系甕で、黒斑は17・20・29・31・33・34・37、二次加熱痕は18・  $19 \cdot 27 \cdot 29 \cdot 30 \cdot 32 \cdot 35 \cdot 37$ 、ススは  $14 \cdot 20 \cdot 22 \sim 24 \cdot 26$  に認められる。 $13 \sim 17$  は胴の張り が少ないもの。13の色は黄褐色。14の色は外が灰黄色、内が黒灰色。15の色は黄褐色。16の 色は灰黄色。17 の胎土には大きめの細粒多く含み、色は黄橙褐色。18 の色は白黄褐色。胴が窄 まる器形の19の色は黄褐色。20の色は灰黄色。21は口縁端部にヘラによる非常に浅い刻目を 施す。色は灰黄褐色。22 の色は灰黄色。23 は口縁下端部を下に強くつまみ出すもので、色は黄

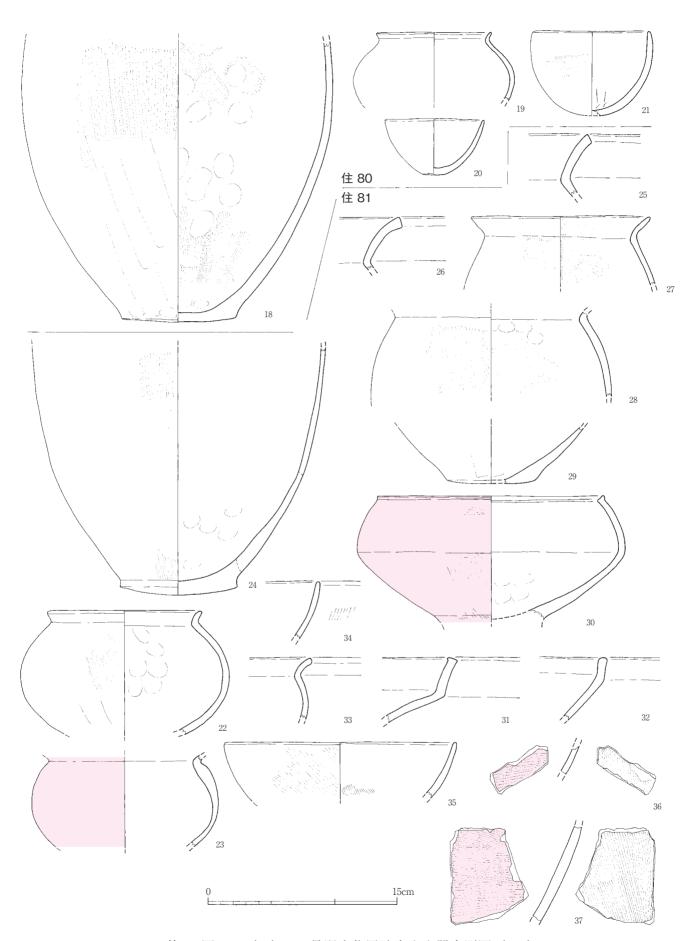


第 60 図 80 号竪穴住居跡出土土器実測図(1)15 は 1/4、他は 1/3)

橙褐色。24 の色は灰黄色。25⋅26 の色は黄褐色。27 ~ 31 は口縁部が直立気味で、球状の胴部 を持つもの。27・28・31 の色は黄褐色。29 の色は橙褐色~黄褐色。30 の色は外が黄褐色、内 が橙色。31の胎土には角閃石が多い。32は球状の胴部に口縁部が強く開き、かつ頸部の締まり が悪いもので、壺としても良いか。口縁端部には刻目を疎に施し、肩部には1条の横ハケを施す。 色は黄橙色。33 は口縁端部に工具端による刻目を施し、色は黄橙色。34 は弱い凸レンズ底の在 地系甕底部で、外面底部付近は板ナデのちナデを施す。色は黄褐色。35の口縁端部及び口縁下 の台形突帯端部にはヘラ工具による浅い刻目を施す。色は黄褐色。36 は凸レンズ底の在地系甕 底部で、内面は黒化する。色は灰黄色。37は小形在地系甕底部で、色は外が橙褐色、内が灰黄 色。38~41 は在地系高坏で、38~41 は屈折口縁のもの。38の胎土は精良で、坏部体部外面 には縦ミガキを施す。色は橙色。39の色は橙褐色。40の胎土は精良で、色は淡橙褐色。41は 口縁部が丸く内湾するもので、割れ口にも二次加熱痕が認められる。色は橙色。42~49は在 地系屈折口縁鉢。42の外面はタタキのちナデを施し、底部外面はケズリ、内面底部にはハケ工 具痕が残る。色は灰黄褐色。43の胴部外面は工具ナデ後ナデで調整し、外面にはスス・黒斑あり。 胎土は精良で、色は黄褐色。44の胴部外面下位は板ナデ後ナデで、外面には黒斑あり。色は黄 褐色。45 は口縁端部が短く外反するもので、色は橙色。46 は直立する体部上位から口縁部が外 折するもので、色は橙褐色。47の外面にはタタキ後ナデを施し、色は黄褐色。48の色は黄褐色。 49 の色は黄橙色。50 ~ 52 は在地系直口鉢。50 の外面下位は板ナデ後ナデを施し、二次加熱痕 も認められる。色は黄褐色。51の外面には黒斑があり、色は灰黄色~黄橙色。52の色は黄橙色。

# 80 号竪穴住居跡 (図版 15、第 56 図)

9区北中央よりやや南東に位置し、79・81号住居跡、102号土坑に切られ、87号住居跡を切る。 北・東壁は81・87号住居跡と同じ住居跡になる可能性があると考え、当初は同時に掘り下げ てしまたため、その壁の一部を掘り失い、また土器も混ざってしまった可能性がある。住居規 模は北西 - 南東 615cm 以上×北東 - 南西 400cm、竪穴部中央で深さ 40cm を測る、北壁がや や広がる南北に長い長方形住居である。住居西及び東南部には地山削り出しによる、ベッド状 遺構を付設する。東側のベッドは東壁全体に付設された可能性あるが、先述したように、掘 り誤って床面まで下げてしまった。西ベッドの高さ 12 cm、幅が 75 cm、東ベッドは高さ 18 cm、 幅 60 cmを測る。竪穴部床面ではピット7基を検出した。P3埋土には炭が混じるが、位置的 に北に偏りすぎるため、炉となるかは自信がない。P1はその規模から屋内土坑の可能性があ る。主柱穴は他のいずれのピットも深さ20cm前後であり、位置的にも判断できない。埋土は レンズ状堆積を示す。切り合い関係及び出土土器から弥生時代後期終末の住居跡と考えられる。 出土土器(図版 53、第  $60 \cdot 61$  図  $1 \sim 21$ )  $2 \cdot 7 \cdot 10 \cdot 11 \cdot 12 \cdot 15 \cdot 21$  は覆土下層、 $5 \cdot 19$ はP4出土。1は在地系広口壺で、頸部にはハケ工具端による刻目を施す。色は暗茶褐色。2  $\sim 8$  は在地系甕。黒斑は $2 \sim 4 \cdot 6$ 、二次加熱痕は5、ススは $2 \cdot 3 \cdot 8$ 、内面のコゲは3に 認められる。2・3はかなり長胴のもので、2の色は灰黄色。3は凸レンズ底で、復元器高は 43 cmを測る。口縁端部はナデにより面取りされ、外面胴部下位は工具ナデ後丁寧なナデを施す。 色は灰黄茶色。4・5は口縁部が直立気味のもので、鉢でも良いか。4の色は黄褐色、5の色 は灰黄褐色。5は口縁直下に大振りの三角突帯を貼り付け、色は黄褐色。7の色は橙色。8は



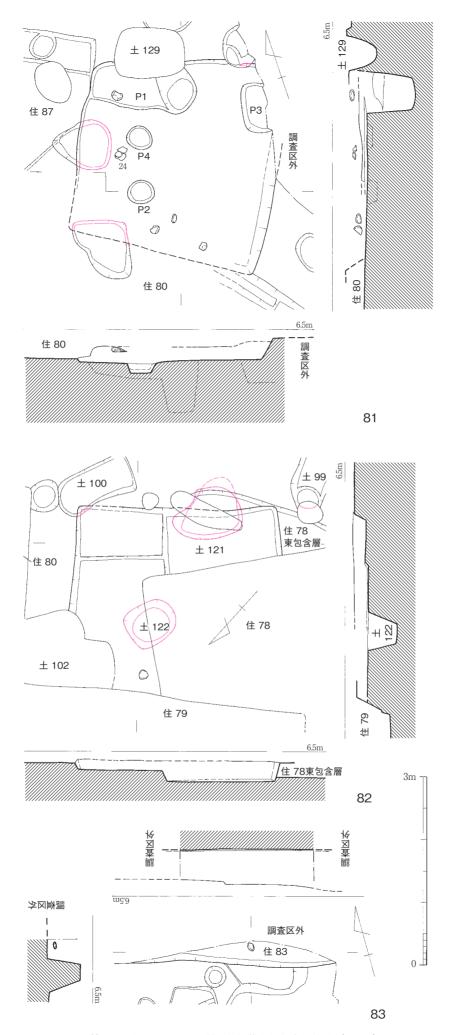
第61 図 80 (2) · 81 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

弥生後期前半の甕口縁部で、色は灰黄褐色。9・11~13 は在地系屈折口縁の高坏。9の外面には黒斑があり、色は灰黄褐色。10 は内湾する屈曲口縁の高坏口縁部。色は灰黄色。11 は内外面に暗文状の縦ミガキを施す精製品で、色は暗茶褐色。12 の外面全体及び口縁部内面は横ミガキ、坏部体部内面は暗文状の縦ミガキを施し、色は灰黄色。13 は外面に黒斑があり、胎土は精良で、色は灰黄褐色。14 は在地系高坏脚部で、外面はハケ後縦ミガキを施し、胎土は精良で、色は橙色を呈する。15 は弥生中期丹塗磨研高坏脚裾部。生地は白橙褐色。16・17 は在地系屈折口縁鉢。16 の色は橙色、17 は外面及び口縁部内面に化粧土を施し、外面には黒斑あり。生地は灰黄褐色。18 は在地系甕で、底部は凸レンズ底、外面下位は工具による擦過後ナデを施し、内面はナデによる凹凸が顕著なため、ハケが一部しか施していないように見える。外面には二次加熱痕・ススがあり、内面下位はコゲが顕著に残る。色は灰黄色。19 は在地系精製短頸壺で、体部外面下位にはケズリ痕が残る。外面には二次加熱痕があり、色は橙色。20・21 は椀状の在地系直口鉢。20 は完形品で、色は黄橙色。21 の内面底部付近には工具痕があり、色は灰黄色。

#### 81 号竪穴住居跡 (図版 15、第 62 図)

9区北中央の南東端に位置し、129号土坑に切られ、80・87号住居跡を切る。先述したように、住居の南西部は80・87号住居跡と同じ住居跡の可能性があると考え、同時に掘り下げてしまったため、その壁の一部を掘り失い、また土器も混ざっている可能性がある。住居規模は南北315cm程度×東西312cm、竪穴部中央で深さ35cmを測る、ほぼ正方形の住居になると考えられる。また、時期的にベッド状遺構を付設すると考えられるが、ベッド状遺構は検出できなかった。床面ではピット4基を検出したが、炉・主柱穴とも不明である。P1は調査段階では屋内土坑となると考えたが、屋内土坑としては深さ82cmと深いため、下層遺構の可能性がある。P1埋土は暗黄褐色粘質土で、一段深くなる箇所の最下層には厚さ1cm程度の炭層が認められた。住居埋土は灰黄褐色粘質土に焼土・炭が混じる。切り合い関係及び出土土器から弥生時代後期終末の住居跡と考えられる。

出土土器(図版 53、第 61 図 22 ~ 37) 22・23 は在地系短頸壺。22 の外面体部下位は工具ナデ後ナデを施す。外面には黒斑があり、色は橙褐色。23 の外面には化粧土を施し、ススも付着する。生地は灰黄色。24 ~ 29 は在地系甕で、黒斑は 25・28・29、ススは 24、内面下位のコゲは 24 に認められる。24 は凸レンズ底を持ち、外面胴部下位はハケをナデ消す。色は淡灰黄色が基調。25 の色は灰黄白色。26 の色は淡橙褐色。27 の色は黄褐色。 P 3 出土。28 の色は灰黄色。覆土下層出土。29 は凸レンズ底を持ち、外面は工具ナデ後ナデを施す。色は黄褐色。30 は弥生後期前半のワイングラス状の坏部を持つ、いわゆる「豊前系」の丹塗精製高坏。外面はハケ後ミガキ、その後丹塗りを行う。外面には黒斑があり、生地は橙色。31・32 は在地系屈折口縁の高坏。31 の色は黄橙色。覆土下層出土。32 の外面には黒斑があり、色は黄橙褐色。33 は在地系屈折口縁鉢で、色は橙褐色。34・35 は在地系直口鉢。34 の色は黄褐色。35 の胎土は精良で、色は橙色。また外面には黒斑及び二次加熱痕あり。36・37 はいずれも内面朱付着土器の在地系甕胴部下位片。36 は内面ハケの間に朱が染み込んでいる。色は外が黄褐色、内が灰褐色。覆土上層出土。37 は P 1 出土で、同じく内面ハケの間に朱が染み込んでいる。色は外が黄褐色、内が灰黒色。



第 62 図  $81 \sim 83$  号竪穴住居跡実測図 (1/60)

### 82 号竪穴住居跡 (第62 図)

9区中央の北側に位置し、78·79号住居跡、102号土坑に切られ、100·121·122号土坑を切る。また南側には包含層が存在する。遺構が密に切り合うため、調査では南壁及び東・西壁の一部を検出したにとどまる。住居規模は北西 – 南東 290cm 以上×北東 – 南西 323cm、竪穴部中央で深さ 32cm を測る。住居東壁には地山削り出しによる、一段高い南東部で17cm、一段低いその北側で12cm、幅は140cm前後のベッド状遺構を付設する。検出範囲が狭く、床面ではピット等は検出できなかった。埋土は灰黄褐色粘質土である。切り合い関係及び出土土器から弥生時代後期終末の住居跡と考えられる。

出土土器(図版 53、第 64 図 1~5) 1・2 は小さな凸レンズ底の在地系長胴甕で、外面には黒斑・二次加熱痕・ススが認められる。1の外面胴部下位は工具ナデ後ナデを施す。色は灰黄色。2の口縁部に施したハケは、粘土の乾く前に行ったため、ハケ終点痕が良く残る。色は灰黄褐色。3 は在地系屈折口縁の高坏で、胎土は精良、色は暗黄褐色。4 は在地系屈折口縁鉢で、胎土は精良、色は淡橙色。5 は器台で、色は灰黄色。覆土下層出土。

#### 83 号竪穴住居跡 (第62 図)

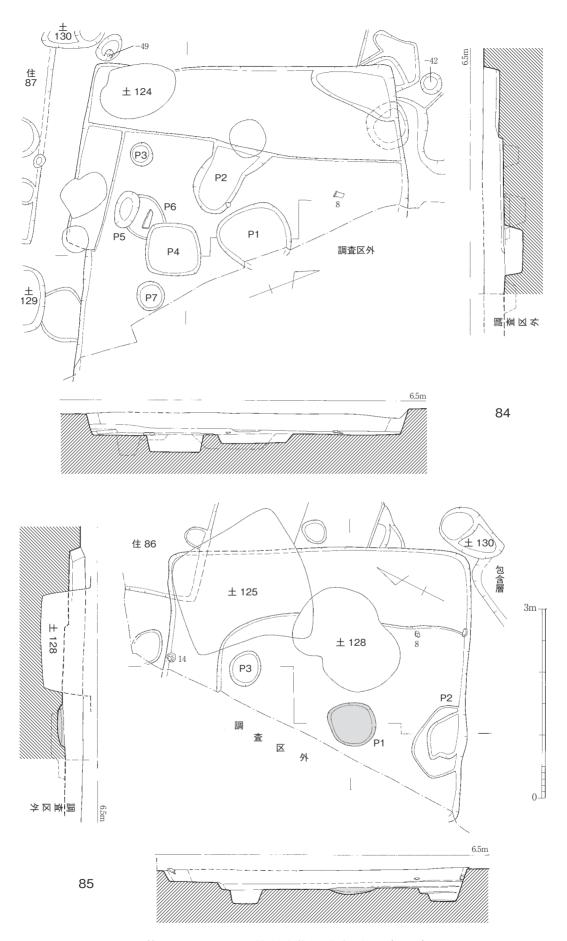
9 区北東隅に位置し、住居南壁の一部、325 cm部分のみ検出し、その他の大半が調査区外となる住居である。深さは75cmと深く、埋土は灰黄褐色粘質土となる。出土土器から弥生時代後期終末の住居跡と考えられる。

出土土器(第64図6) 図示できた6は、在地系広口壺口縁部で、色は黄褐色。

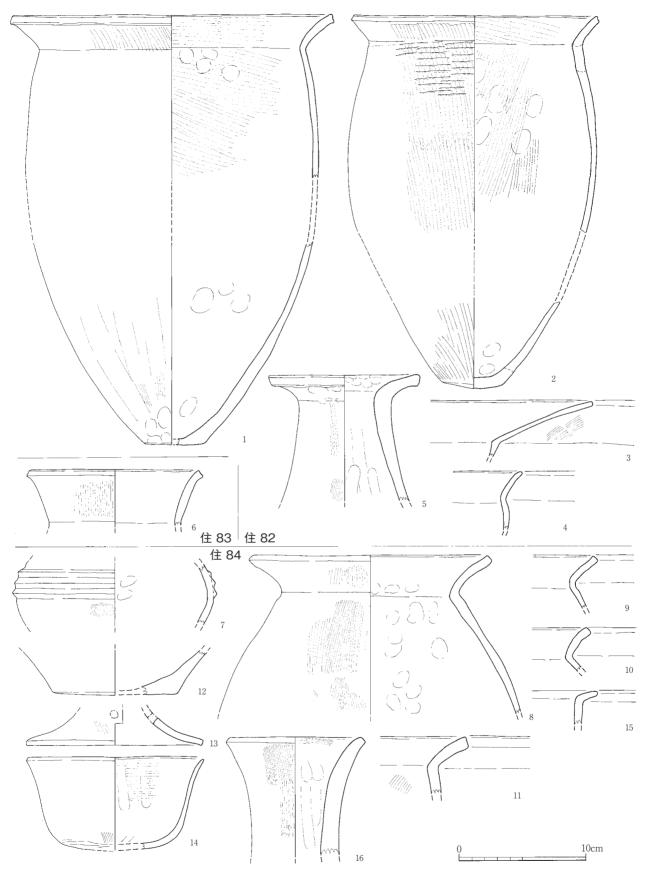
# 84 号竪穴住居跡 (図版 16、第63 図)

9区北東の東端に位置し、124号土坑に切られる。住居東側 1/3ほどは調査区外で、住居南西部には突出部を持つ。住居規模は南北525cm×東西485cm以上、竪穴部中央で深さ32cmを測り、おそらくほぼ正方形住居となるか。住居西壁及び南壁の南西部には地山削り出しによるベッド状遺構を付設する。西ベッドは高さ6cm、幅140cm、南ベッドは高さ4cm、幅57cmのいずれも低いベッド状遺構となる。また西ベッド北端に存在する深さ25cmのピット状の落ち込みは埋土から当住居に伴うもの。竪穴部床面ではピット7基を検出した。規模からP1・2・4が屋内土坑の可能性があり、深さからP5が主柱穴の可能性がある。床面直上で壺(8)が出土した。埋土はレンズ状堆積を示し、上層が黄褐色粘質土、下層が暗黄褐色粘質土となる。覆土下層よりガラス小玉(第97図9)、石包丁(第97図13)が出土した。出土土器から弥生時代後期終末の住居跡と考えられる。

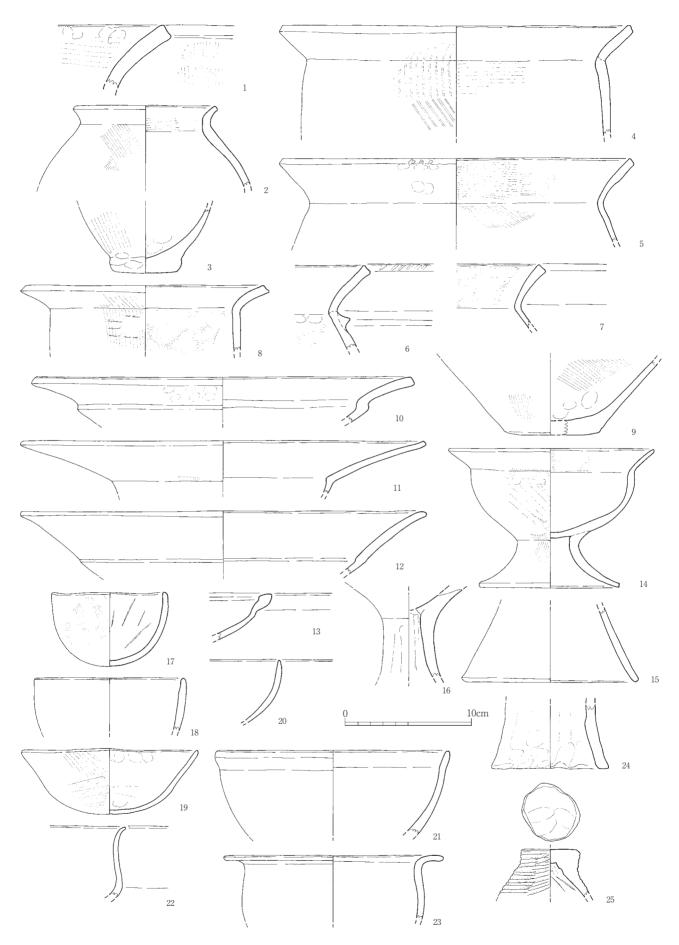
出土土器 (第64図7~16) 9~11 は覆土下層、13·15 はP4出土。7は3条の連続三角突帯を貼り付けた在地系壺胴部。外面には黒斑があり、色は外が橙褐色、内が灰黒色。8~12 は在地系甕。8は長胴のもので、器壁は厚めである。色は橙褐色。9の色は黄褐色。10の色は淡茶褐色。11 の外面には黒斑があり、色は灰黄褐色。12 は底部の器壁が薄い凸レンズ底で、外面にはススが付着。色は灰褐色を呈する。13 は高坏脚部で、焼成前外→内穿孔が1孔残る。焼成はやや甘く、胎土は精良で、色は淡橙褐色。14 は在地系鉢で、内面底部には工具痕あり。



第 63 図 84·85 号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第 64 図  $82 \sim 84$  号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第65図 85号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

外面には黒斑あり。色は外が灰黄褐色、内が灰色。15 は屈折口縁鉢口縁部で、色は黄褐色。 16 は器台で、色は黄褐色を呈する。

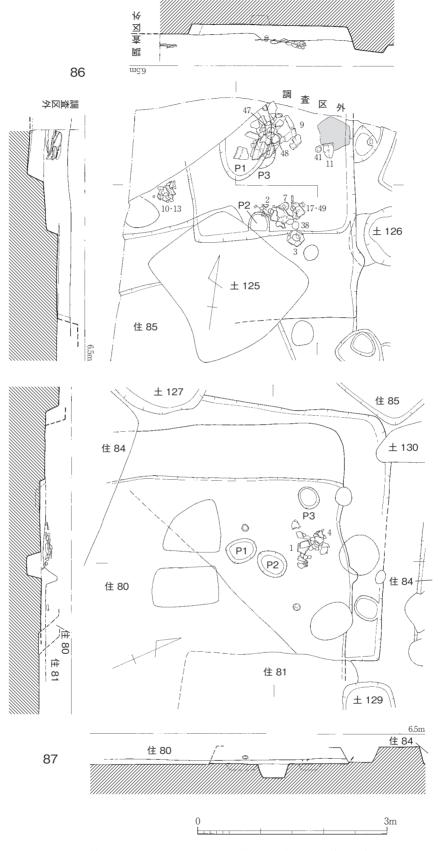
# 85 号竪穴住居跡 (図版 16、第 63 図)

9区北西隅に位置し、125・128 号土坑に切られ、86 号住居跡を切る。また130 号土坑とも接するため、切り合い関係を持つが、130 号土坑は出土土器から詳細な時期を判断できないため、前後関係は不明である。住居規模は南北 480cm×東西 425cm 以上、竪穴部中央で深さ28cmを測り、住居南西隅がほぼ検出できていることから、おそらく南北にやや長い長方形住居となる。住居北・東壁には地山削り出しによるベッド状遺構を付設する。北ベッドは幅85cm、東ベッドは幅123cm、いずれも高さ10cm程度を測る。竪穴部床面ではピット3基を検出した。埋土に炭が多く混じるP1は炉、位置からP3は主柱穴と考えられ、その対はP2となり、2本柱の住居跡となる可能性がある。高坏(14)は北壁から落ち込んだ状態で出土した。埋土は暗灰褐色粘質土が主体のレンズ状堆積で、床面直上には炭層が広がる。出土土器から古墳時代前期前半の住居跡と考えられる。

出土土器(図版 53、第 65 図) 1 は在地系大形壺口縁部。色は灰黄褐色。2 は在地系短頸壺。 色は灰褐色。3は在地系小形壺か鉢の底部。色は外が黄褐色、内が灰色。4~9は在地系甕で、 黒斑は4・7、ススは9に認められる。4は内外面粗いハケ後ナデで、色は灰黄褐色。5の口 縁端部には浅い刻目を施し、色は黄褐色。6の口縁端部にも浅い刻目を施し、頸部にはやや大 振りで鋭い三角突帯を貼り付ける。色は淡灰色。7・8の色は灰黄褐色。9は凸レンズ底の底 部で、色は灰色。10 ~ 16 は在地系高坏で、10 ~ 12 は屈折口縁、14 は肥厚口縁である。やや 器壁が厚い 10 の色は淡黄橙褐色。口縁端部を弱くつまみ上げる 11 の口縁部内面には二次加熱 痕があり、外面には黒斑あり。色は明橙褐色。12の外面には黒斑があり、色は橙褐色~灰黄褐色。 13の外面には黒斑あり。色は橙褐色。14は在地系屈曲口縁鉢に短脚を付けた器形で、坏部体 部外面はハケ後板ナデを施す。色は黄褐色。15は高坏裾部で、色は灰黄褐色。P2出土。16 は断面にも二次加熱痕あり。胎土は精良で、色は淡橙褐色。17~21は在地系直口鉢。17の内 外面は工具ナデ後ナデを施し、また黒斑及び二次加熱痕あり。色は灰黄褐色。覆土下層出土。 18 の外面には黒斑があり、色は黄褐色。歪みがある 19 の外面下位は工具ナデ後ナデを施し、 内面にも工具痕が残る。外面には黒斑があり、色は黄褐色。20の外面には二次加熱痕があり、 焼成はやや甘く、色は橙褐色。21 は外面には二次加熱痕あり。色は黄橙褐色。22 は在地系の 短く外反する口縁の鉢で、胎土は精良、色は淡橙褐色を呈する。23 は屈折口縁の鉢で、色は 黄茶褐色。覆土下層出土。24 は在地系粗製器台で、内外面には二次加熱痕あり。色は灰黄褐色。 25 は小形支脚で、外面には黒斑及び二次加熱痕あり。色は黄橙褐色。覆土下層出土。

## 86 号竪穴住居跡 (図版 16、第 66 図)

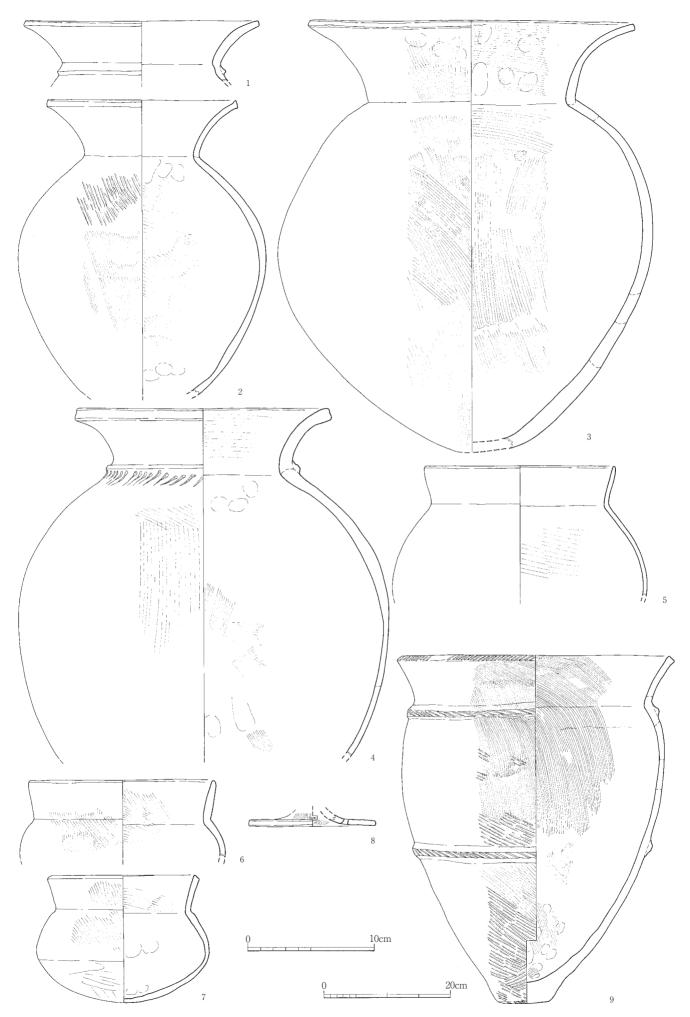
9区北西隅に位置し、85号住居跡、125号土坑及び未調査の遺構(竪穴住居跡か)に切られ、126号土坑を切る。住居規模は南北340cm以上×東西368cm以上、竪穴部中央で深さ35cmを測る。住居南・西壁には地山削り出しによるベッド状遺構を付設する。南ベッドは高さ20cm、幅135cm、東ベッドは高さ16cm、幅112cm以上を測る。竪穴部床面ではピット3基を検出したが、



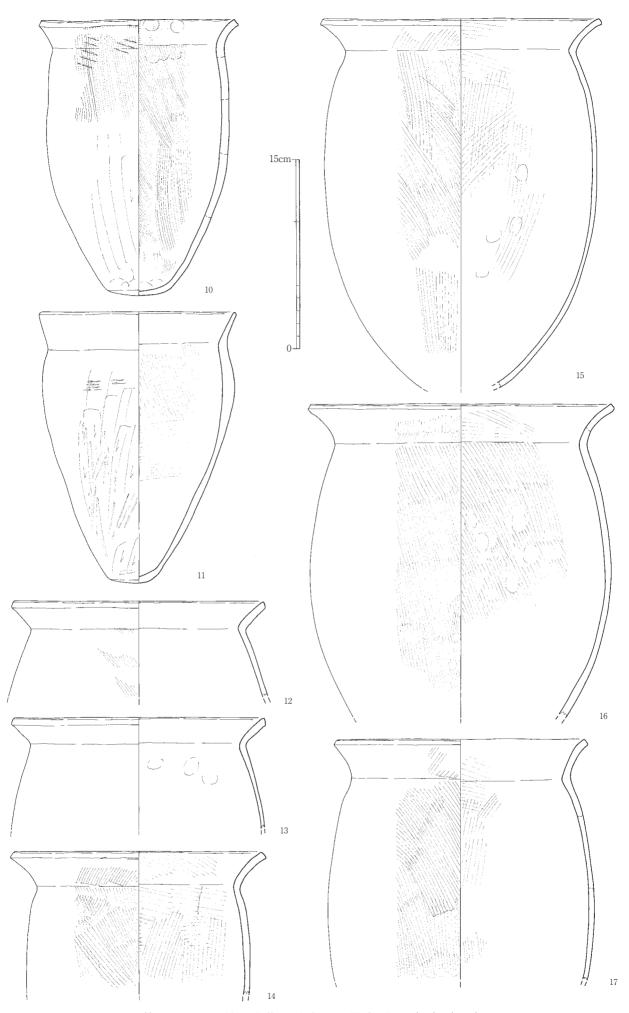
第 66 図 86·87 号竪穴住居跡実測図 (1/60)

P 2 が主柱穴となる可能性があるが、炉・主柱穴ともに不明。床面及びベッド状遺構から5 cm 以上浮いた状態の土器群を検出したが、3 の壺のみは南ベッド状遺構のほぼ直上で出土した。これらは、出土状況から住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。また、竪穴部床面直上には炭層が広がり、床面直上の北東隅には焼土の塊を確認した(トーンで示す)。P 1 より砥石(第 96 図 7)が出土した。住居埋土は暗灰褐色粘質土。出土土器から古墳時代前期前半の住居跡と考えられる。

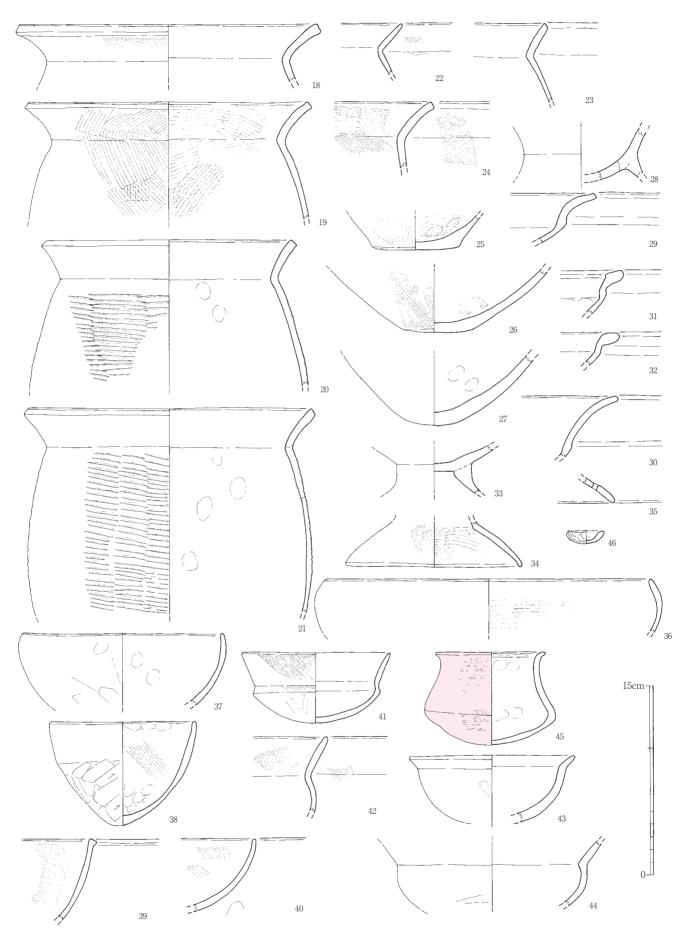
出土土器(図版 54、第  $67 \sim 70$  図)  $4 \cdot 12 \cdot 15 \cdot 18 \cdot 19 \cdot 21 \cdot 25 \sim 27 \cdot 29 \cdot 32 \cdot 33 \cdot 35 \cdot 36 \cdot$ 40・42 は覆土下層、34 はP1出土。1~4 は在地系広口壺。1の頸部には低平な三角突帯を貼 り付け、内外面とも二次加熱痕あり。焼成は甘く、色は橙色。2は外面肩部にほぼ縦方向のタ タキを施す珍しいもの。外面には黒斑があり、色は黄褐色。 3 はやや大形のもので、器壁は厚 めである。底部はほぼ丸底で、外面には黒斑及び二次加熱痕あり。色は黄褐色~橙褐色。4も 肩部の器壁がやや厚めで、頸部に貼り付けた低平な突帯から肩部にかけて、ヘラ工具による短 斜線文を密に施す。外面には黒斑があり、色は黄褐色。5は直立気味の口縁部を持つ在地系壺 で、焼成はやや甘く、色は淡橙褐色。6・7は在地系小形丸底壺で、6の色は黄褐色。7の外 面底部はケズリを行い、内外面とも焼成が悪く、ほとんど黒化する。色は灰黒色~灰黄色。8 は壺蓋で、外面は縦ミガキ、内面はハケを施し、2孔1セットの孔を2ヶ所に施す。胎土は精 良で、色は暗茶褐色。9は大形在地系甕で、復元法量は口径43.0 cm、底径8.0 cm、器高54.8 cm を測る。口縁端部及び頸部と胴部下位に貼り付けた台形突帯端部にはタタキ工具による刻目を 施し、胴部外面下位の突帯はハケ調整後に貼り付けている。外面には黒斑及び二次加熱痕・スス、 内面下位にはコゲが認められる。色は灰黄褐色。10~28 は在地系甕。10.11 はほぼ完形品で、 胴部の張りがなく、外面下位はタタキ後ケズリを行い、底部はわずかに稜を残す凸レンズ底で、 いずれも黒斑・二次加熱痕・ススが認められる、ほぼ同様の形態のもの。10の色は灰黄色。11 の胴部外面下位はケズリのち雑なミガキを施し、色は黄褐色を呈する。12~28は、黒斑は15・ 20・24・27、二次加熱痕は13・15・21・25・27、ススは14・16・17・18・21・25、内面下位の コゲは 16 に認められる。12 の色は灰黄褐色~橙色。13・14 の色は黄褐色。14 の胴部上位は長 さが短い横ハケ後縦ハケを施す。15・16は丸味を帯びた長胴甕で、色は15は黄褐色、16は灰 黄褐色。17 ~ 19 の色は灰黄褐色。20・21 の外面はタタキが最終調整のもので、色は 20 が淡橙 褐色、21 が黄橙褐色。22・24 の色は灰黄褐色。23 の色は淡橙褐色。25 は凸レンズ底で、色は 外が褐色、内が灰黄色。26・27 はほぼ丸底で、26 の色は外が灰黄褐色、内が灰色。やや器壁が 厚い 27 の外面は工具ナデ後ナデを施し、色は黄橙褐色。28 は台付甕で、色は灰黄褐色。29 ~ 33 は在地系高坏。29・30 は屈折口縁で、29 の色は灰黄色~黄橙褐色。30 の色は黄褐色。31・32 は口縁部を肥厚させたもので、31の内面には工具痕あり。31の色は淡黄橙褐色、32の色は外が 灰黄褐色、内が淡橙褐色。33 は短脚の脚部で、焼成はやや甘く、色は淡橙褐色。34・35 は畿内 系低脚高坏脚部。34 は内湾する脚部で、内面上位はケズリを施す。外面には黒斑あり。色は淡 茶褐色。35 は焼成前外→内穿孔を施した脚裾部で、内外面には黒斑あり。色は白黄褐色。36 ~ 40 は在地系直口鉢。36 は強く内湾する口縁部片であるが、小片のため復元径に自信がない。色 は外が灰黄褐色、内が淡茶褐色。37は粗製鉢で、外面には粘土の皺が残る。体部下位は工具ナ デ後ナデを施し、色は灰黄褐色。38 は完形品の尖底のコップ形鉢で、外面下位は不定方向の手



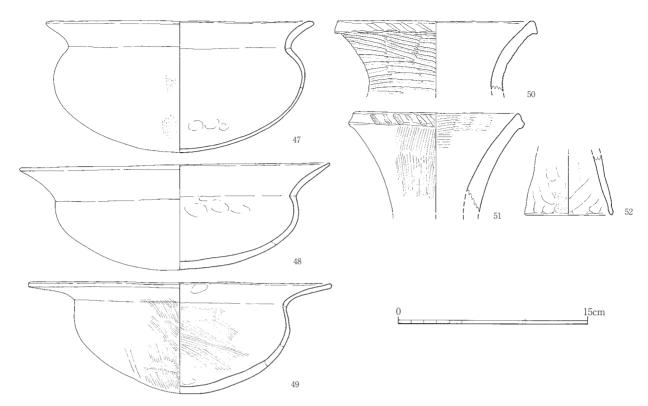
第 67 図 86 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (9 は 1/6、他は 1/3)



第68図 86号竪穴住居跡出土土器実測図(2)(1/3)



第69図 86号竪穴住居跡出土土器実測図(3)(1/3)



第70図 86号竪穴住居跡出土土器実測図(4)(1/3)

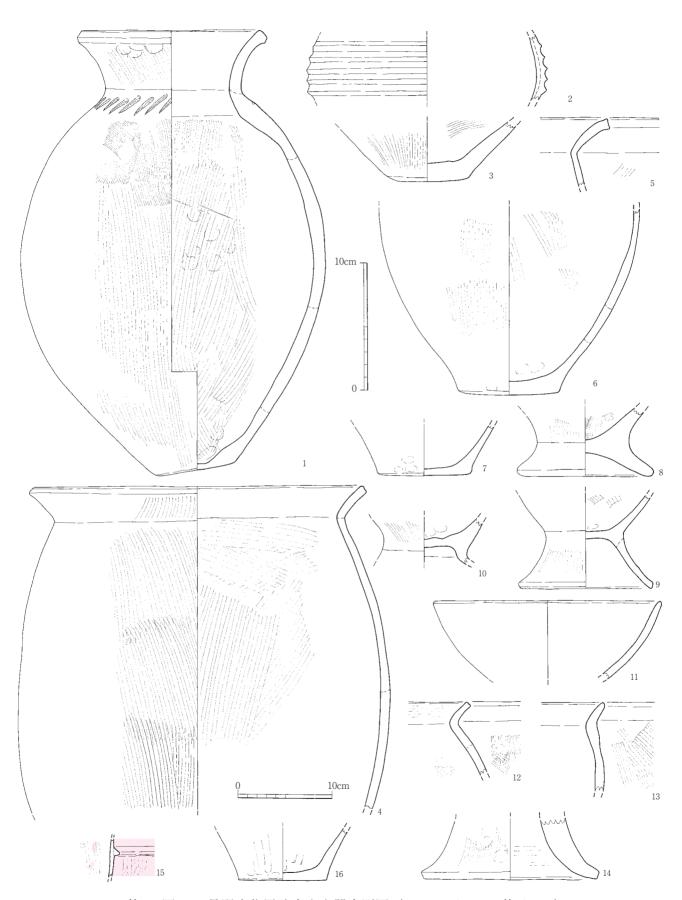
持ちヘラケズリを行い。内面は黒化する。胎土には細粒を多く含み、色は茶褐色。39の色は外が暗茶褐色、内が灰色。40の外面には黒斑があり、色は灰黄褐色。41~44は在地系屈折口縁鉢。41の体部外面は工具ナデ後丁寧なナデで調整し、胎土は精良で、色は灰黄色。また外面には黒斑及び二次加熱痕が認められる。42の色は外が灰黄褐色、内が灰褐色。43の口縁は短く屈折するもので、色は灰黄褐色。44の外面にはススが付着し、色は黄茶褐色。45は在地系の外反口縁鉢で、外面には化粧土を塗布する。外面には黒斑があり、胎土は精良、色は橙色。46は手づくね土器。胎土は精良で、色は茶褐色。47~49も在地系屈折口縁鉢。47の外面にはススが付着し、胎土は精良、色は橙褐色。48の外面には二次加熱痕・黒斑が認められ、内面は黒化する。色は橙褐色~黄褐色。49の内面底部の円形の窪みは、製作技法と関連するか。内外面には黒斑があり、色は茶褐色。50~52は器台。50·51は口縁端部に非常に浅い刻目を施し、色はいずれも灰黄褐色。なお、51の刻目原体はハケ工具。52は小形器台で、外面は工具ナデ後ナデを施す。色は灰黄褐色。



87 号住居跡出土状況 (南東から)

# 87 号竪穴住居跡 (第66 図)

9区北中央に位置し、80・81・84号住居跡に切られる。先述したように、80・81号住居跡と同じ住居跡の可能性があると考え、同時に掘り下げてしまたため、各住居跡出土土器が混ざってしまった可能性がある。住居規模は南北355cm以上×東西365cm以上、竪穴部中央で深さ6cmを測る、おそらく東にもベッド状遺構を付設する、東西にやや長



第 71 図 87 号竪穴住居跡出土土器実測図(15・16 は 1/4、他は 1/3)

い長方形住居となるか。住居西壁には高さ6cm、幅90cmを測る、地山削り出しによるベッド 状遺構を付設する。竪穴部床面ではピット3基を検出した。P2は深さ・位置から主柱穴となる可能性がある。床面から5cm以上浮いた状態の土器(1・4)を検出し、これらは出土状況から住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。竪穴部床面直上には黄褐色粘土を貼る。住居埋土は暗灰黄褐色粘質土。覆土上層より砥石(第96図4)、付近の遺構面から鉄鎌(第99図3)が出土した。出土土器から弥生時代後期終末の住居跡と考えられる。

出土土器(図版 54、第 71 図) 5~7、14・15 は覆土下層出土。1 は在地系広口壺で、器壁は厚い。胴肩部にはハケ工具による短斜線文を施す。また胴肩部には胴部中位以下の粗いハケとは原体が異なる細かいハケを施す。なお、内面胴肩部の細かいハケは原体の当たり角度によるもの。外面には黒斑には黒斑があり、色は茶褐色。2 は在地系壺で、胴部中位に5条の連続三角突帯を貼り付け。色は黄褐色。3 は凸レンズ底の在地系甕で、色は外が橙褐色、内が暗灰黄褐色。4~10 は在地系甕。4 の外面には黒斑・ススが認められ、内面は一部黒化する。色は灰黄色。5 の色は白黄褐色。6 も凸レンズ底を持ち、色は黄褐色。7 の外面には黒斑・二次加熱痕・ススが認められ、内面にはコゲが厚く付着する。色は灰黄色。8~10 は台付甕脚部。器壁が厚い8 は外面に強い二次加熱を受け、色は外が赤褐色、内が黄褐色。脚が高い9 の外面には二次加熱痕及びススが付着し、色は橙褐色~黄褐色。10 の色は黄褐色。11 は在地系直口鉢で、外面には黒斑及び二次加熱痕あり。色は黄橙褐色。12・13 は屈折口縁鉢口縁部で、いずれも色は黄褐色。14 は器壁がかなり厚い器台で、色は暗橙褐色。15・16 は弥生中期壺。15 は台形突帯を貼り付けた丹塗精製壺胴部で、生地は灰橙色。16 の内面底部には工具痕があり、外面はうすく黒化し、色は灰黄褐色。

# (3) 土坑

#### 88 号土坑 (第72 図)

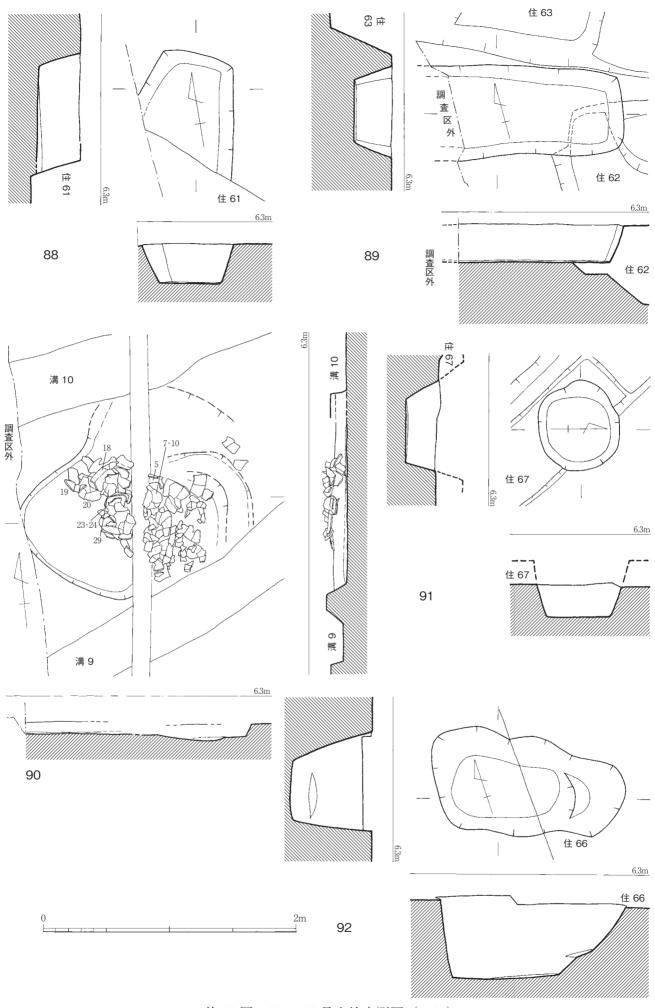
9区の最南端に位置し、61号住居跡に切られる。南側を61号住居跡に壊され、西側は調査区外となるため、土坑規模は長軸90cm以上×短軸75cm以上、深さ32cmの、現状では台形状の平面形態となる。床面はほぼ平らで、埋土は上層が灰黄褐色粘質土に炭が少量混じり、下層が黄褐色粘質土である。切り合い関係から61号住居跡の時期である弥生時代後期後半~古墳時代前期より以前の土坑と考えられる。

出土土器(第73 図1) 図示できたのは1のみ。1は在地系甕口縁部で、口縁部外面にはタタキ痕が残る。外面にはススが付着し、色は灰黄褐色。

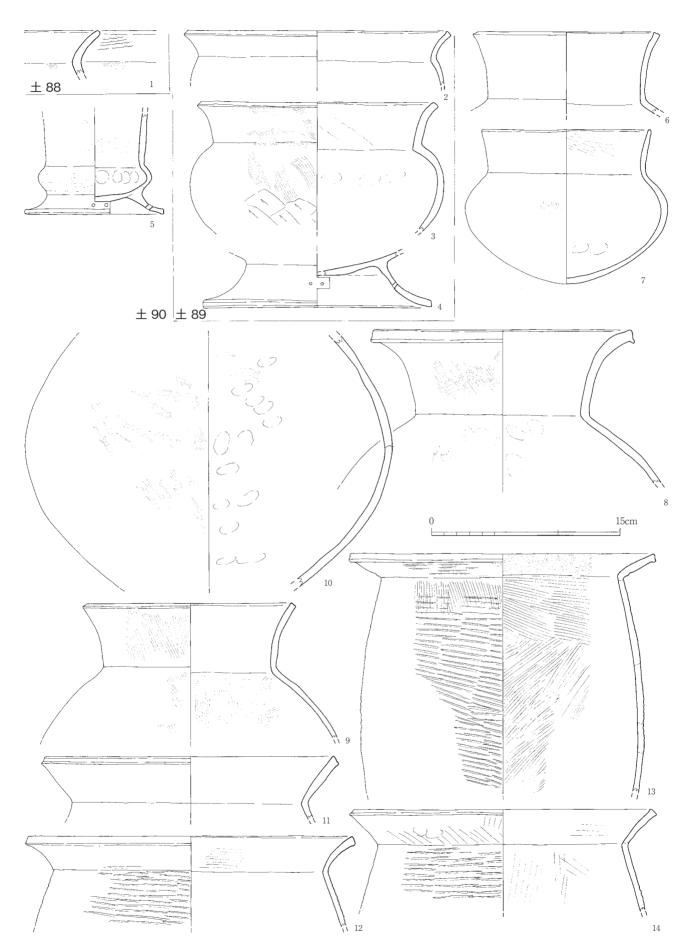
#### 89 号土坑 (第72 図)

9区南の南寄りに位置し、62・63号住居跡を切る。西側は調査区外となるが、土坑規模は長軸 160 cm以上×短軸 72 cm、深さ 30 cm を測る、長方形土坑となる。床面はほぼ平らで、埋土は上層が暗灰黄色粘質土に炭少量混じり、下層が暗黄褐色粘質土である。切り合い関係及び出土土器から古墳時代前期後半の土坑と考えられる。

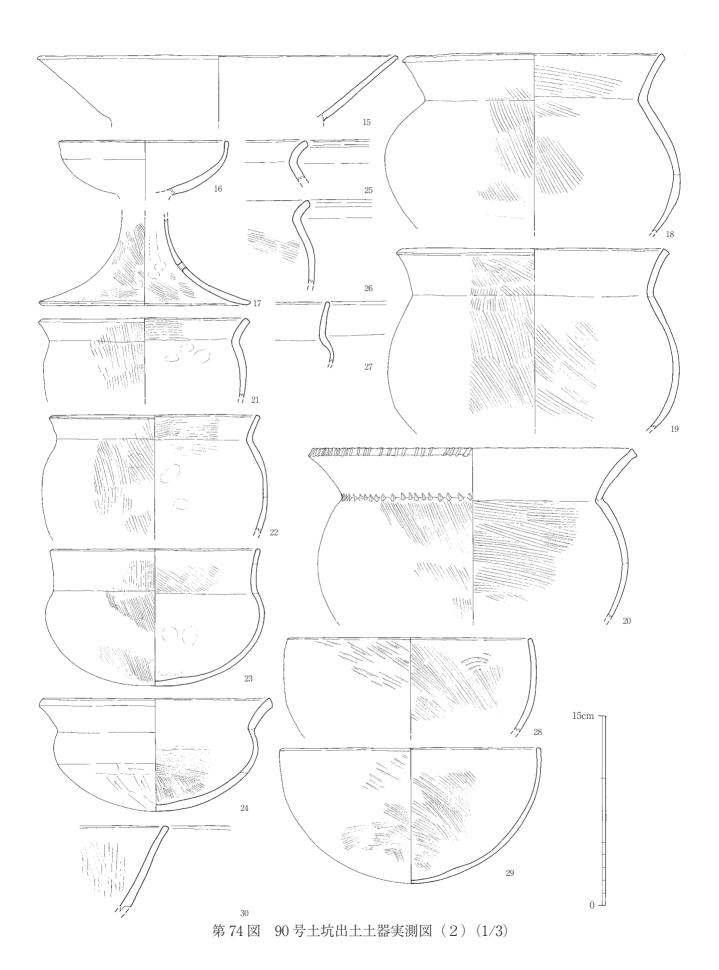
出土土器(第73図2~4) 2・3は在地系屈折口縁鉢。2は内外面二次加熱痕が顕著で、色は黄褐色。3は直立気味の口縁が長く、扁球状の胴部を持つもので、口縁部内面には工具痕あ



第 72 図  $88 \sim 92$  号土坑実測図 (1/30)



第 73 図 88 · 89 · 90 (1) 号土坑出土土器実測図 (1/3)



- 107 -

り。色は灰黄褐色。4は脚付鉢の脚部。脚中位には2孔1セットの孔があり、おそらく2セット、計4孔施したものか。色は灰黄褐色。

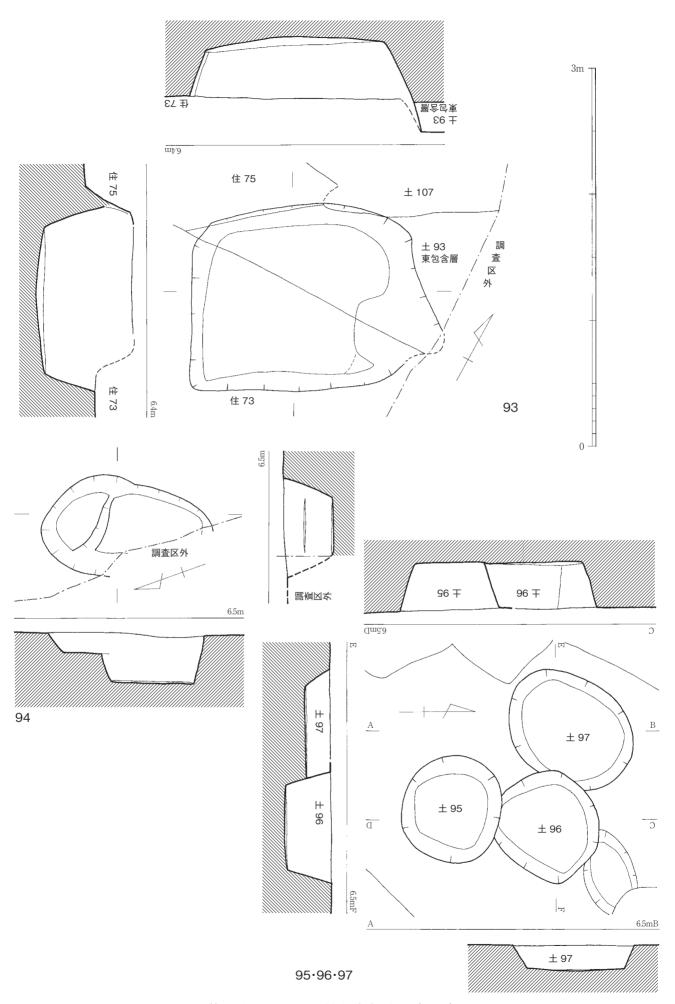
## 90 号土坑 (図版 17、第 72 図)

9区南中央のやや北寄りに位置し、9・10号溝に切られる。土坑規模は南北130 cm以上×東西183 cm以上、最も深い箇所で深さ13cmを測り、浅い楕円形の平面形態となるか。床面は一段下がる部分以外はほぼ平らで、東壁の傾斜は急である。土坑中央から多量の土器群が出土したが、出土状況から当土坑は浅い土器溜まり的様相を示す。埋土は茶褐色粘質土に炭多く混じる。出土土器から古墳時代前期前半の土坑と考えられる。

出土土器(図版 54、第 73·74 図 5~30) 5 は直立する口縁部がかなり長く、扁球状の胴部は 寸胴で、それに「八」の字に開く脚が付く脚付壺。脚部中位には2孔1セットの孔を0・3・6・ 9時方向に各1セット、計4セット、8孔施す。外面及び口縁部内面にはミガキを施し、胴部内 面も丁寧なナデを施す。外面には黒斑があり、色は白黄褐色。6はやや長い口縁部の在地系直 口壺で、外面には二次加熱痕あり、色は黄欖褐色。7は在地系丸底壺で、外面は二次加熱によ り器表が荒れる。また黒斑もあり、色は黄茶褐色。8は在地系広口壺で、口縁下端部を下につ まみ出す。色は橙褐色。9は在地系直口壺で、色は灰黄褐色。10は球状の在地系壺胴部で、外 面には黒斑及び二次加熱痕が認められる。色は橙褐色。11 ~ 14 は在地系長胴甕。11 の色は白黄 褐色。12の色は黄褐色。13は胴部の張りがほとんどないもので、外面には黒斑及びススが認め られる。色は白黄褐色。内外面粗いハケを施す14の外面には黒斑があり、色は白黄色。15~17 は在地系高坏。15は屈折口縁の高坏坏部で、胎土は精良、色は橙色。16は在地系直口鉢に脚部 が付く形態の高坏で、色は黄橙褐色。17は脚部中位に焼成前外→内穿孔を施すが、何ヶ所施し たかは不明。外面には二次加熱痕があり、色は黄橙褐色。18~27は在地系屈折口縁鉢で、黒斑 は 18・21・22・24・25 に認められる。18~20 は大形鉢で、18・20 は内外面顕著な二次加熱を 受けることから、煮沸用として使用されたか、何かに転用されたもの。18は強い二次加熱によ り、器表が荒れ、剥離も顕著である。色は黄褐色。19 は外が黄褐色、内が橙褐色。20 は口縁端 部に工具端による刻目を密に施し、かつ頸部にも同じく工具端による刻目を浅めに施している。 色は橙色。21 の色は黄褐色。22 の胴部内面はハケ後ナデを施し、色は白黄褐色。23 は内外面で ハケ原体が異なるもので、色は黄褐色。やや器壁の厚い24の色は白黄褐色。25の色は灰黄褐色。 26 の色は白黄褐色。27 の色は黄茶褐色。28 ~ 30 は在地系直口鉢で、28・29 の外面にはタタキ 痕が残る。28・29の色は黄褐色。30は直線的な口縁部で、外面には黒斑あり。色は黄褐色。

#### 91 号土坑 (第72 図)

9区中央の南東隅近くに位置し、67号住居跡を切る。土坑規模は東西70cm×南北65cm、深さ25cmを測る、かなり小型の円形土坑である。床面はほぼ平らで、埋土は茶褐色粘質土に炭が多く混じる。出土土器で図示できるものないが、埋土及び切り合い関係から古墳時代前期前半~後半の土坑と考えられる。



第75 図 93~97 号土坑実測図 (1/30)

# 92 号土坑 (図版 17、第 72 図)

9区南の北端、ちょうど調査区が南に細長く延びる始点部分に位置し、66号住居跡に切られる。土坑規模は長軸 150 cm×短軸 80 cm、深さ65cm を測る、長楕円形土坑となる。床面は西に向かって緩やかに傾斜し、東には小さなテラスを持つ。壁の傾斜は緩やかな東壁以外はいずれも急に立ち上がる。埋土は茶褐色粘質土に炭少量混じる土である。出土土器で図示できるものはないが、埋土と切り合い関係から弥生時代後期後半~終末の土坑と考えられる。

## 93 号土坑 (図版 17、第 75 図)

9区中央のやや東南寄りの調査区際に位置し、73・75 号住居跡、107 号土坑に切られる。また当土坑東側~調査区端にかけては包含層を確認している。土坑東のほんの一部が調査区外となるが、土坑規模は東西 202 cm程度×南北 149 cm、深さ 76cm を測る、南東部が短く突出する、ほぼ方形の大型土坑となる。床面は中央に向かって緩やかに傾斜し、壁の傾斜はいずれも緩やかである。なお、土坑南東部は破線部分が本来の下端で、調査では少し掘り過ぎている。埋土は茶褐色粘質土である。切り合い関係及び出土土器から弥生時代後期前半の土坑と考えられる。出土土器(第76 図 1~6) 1 は弥生後期前半の甕口縁部で、色は茶褐色。2~5 は弥生中期の甕。2 は逆「L」字状口縁で、色は灰黄褐色。3 は丹塗磨研精製甕口縁部で、口縁外端部にはヘラ工具による刻目を非常に密に施す。生地は橙色。4・5 は甕底部で、4 の色は橙褐色。5 の外面には黒斑があり、色は黄褐色。6 は中期初頭の三角口縁甕口縁部。色は灰黄褐色。

## 94 号土坑 (図版 18、第 75 図)

9区中央の西端に位置する。土坑規模は長軸 135 cm以上×短軸 80 cm以上、ピット状に一段下がる南側で深さ 39cm を測り、おそらく長楕円形土坑となるか。北のテラス床面及び床面はほぼ平らで、埋土は暗灰褐色粘質土である。出土土器及び埋土から、弥生時代後期後半~古墳時代前期の土坑と考えられる。

出土土器(第76図7~10) 7・8は在地系屈折口縁鉢。7の色は灰黄褐色、8の色は肌色。9は在地系直口鉢で、色は黄褐色。10は有明海沿岸型器台で、上下各4ヶ所長方形透かしを施す。透かし孔間には櫛状工具になる4条の沈線を巡らす。色は黄褐色。

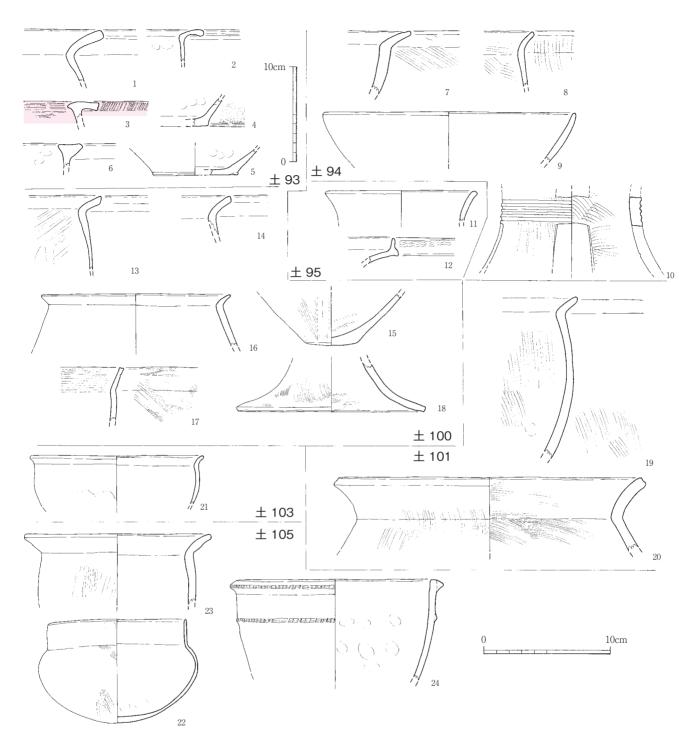
#### 95 号土坑 (図版 18、第 75 図)

9区中央のやや西寄りに位置し、96号土坑を切る。土坑規模は南北78 cm×東西85 cm、深さ37cmの円形土坑である。床面はほぼ平らで、埋土は暗灰黄色粘質土。出土土器から古墳時代前期前半の土坑となるか。

出土土器(図版 55、第 76 図 11・12) 11 は在地系小形広口壺口縁部で、色は灰黄褐色。12 は在地系広口壺の口縁部を上方に拡張させたもので、口縁端部には 3 条の波状文を施す。胎土は精良で、色は橙色。

## 96 号土坑 (図版 18、第 75 図)

9区中央のやや西寄りに位置し、95号土坑に切られ、97号土坑を切る。土坑規模は東西90cm×南北77cm以上、深さ36cmの円形土坑である。床面はほぼ平らで、埋土は灰黄褐色粘質土。



第76図 93~95·100·101·103·105号土坑出土土器実測図  $(2 \sim 6 \cdot 24 \text{ は } 1/4 \text{、他は } 1/3)$ 

出土土器は小片であり、図示できるものはなかったが、覆土より砥石 2 点(第 97 図 10・11)及 び磨石 (第 98 図 17)が出土した。切り合い関係及び埋土から古墳時代前期の土坑と考えられる。

# 97号土坑 (図版 18、第75 図)

9区中央のやや西寄りに位置し、96号土坑に切られる。土坑規模は南北96 cm×東西80 cm 以上、深さ20cmの円形土坑である。床面はほぼ平らで、埋土は灰色粘質土である。出土土器で図示できるものはないが、切り合い関係及び埋土から古墳時代前期の土坑か。

# 98号土坑 (図版 19、第77 図)

9区中央の西寄りに位置する。土坑規模は長軸 140 cm×短軸 63 cm、深さ 43 cm の南北に長い長楕円形土坑となる。床面はほぼ平らで、東西壁の傾斜はいずれも急である。埋土は灰褐色粘質土。出土土器で図示できるものはないが、埋土から弥生時代後期~古墳時代前期の土坑か。

#### 99 号土坑 (第77 図)

9区中央の北西に位置し、北側をピットで切られる。土坑規模は長軸 135 cm以上×短軸 76 cm、北側のピット状に一段深くなる部分で深さ 64cm を測る、南北に長い長楕円形土坑となる。床面はほぼ平らで、壁の傾斜はいずれも急である。埋土は灰黄色粘質土に炭混じる土である。出土土器で図示できるものはないが、切り合い関係及び埋土から弥生時代後期~古墳時代前期の土坑か。

## 100 号土坑 (第77 図)

9 区北の南端に位置し、82 号住居跡に切られ、土坑北東部をわずかながらピットに切られる。土坑規模は長軸 127 cm×短軸 64 cm、深さ 62cm の長楕円形土坑となる。床面はほぼ平らで、壁の傾斜はいずれも急である。埋土は上層が暗黄褐色粘質土、下層が茶褐色粘質土である。切り合い関係と出土土器から弥生時代後期後半~終末の土坑と考えられる。

出土土器(第76図13~18) 13・14 は在地系小形甕口縁部。13 の色は灰黄褐色。14 の外面には二次加熱痕があり、色は灰黄色。15 は凸レンズ底の在地系甕底部で、内面はハケ後ナデを施す。外面には黒斑及びススが認められる。色は灰黄褐色。16 は口縁部がくの字状に短く屈折する在地系鉢口縁部で、外面には黒斑あり。色は茶褐色。17 は在地系鉢口縁部で、口縁部外面には工具痕があり、黒斑も認められる。色は外が灰黄褐色、内が灰黄色。18 は在地系高坏脚部で、孔は不明。色は灰黄褐色。

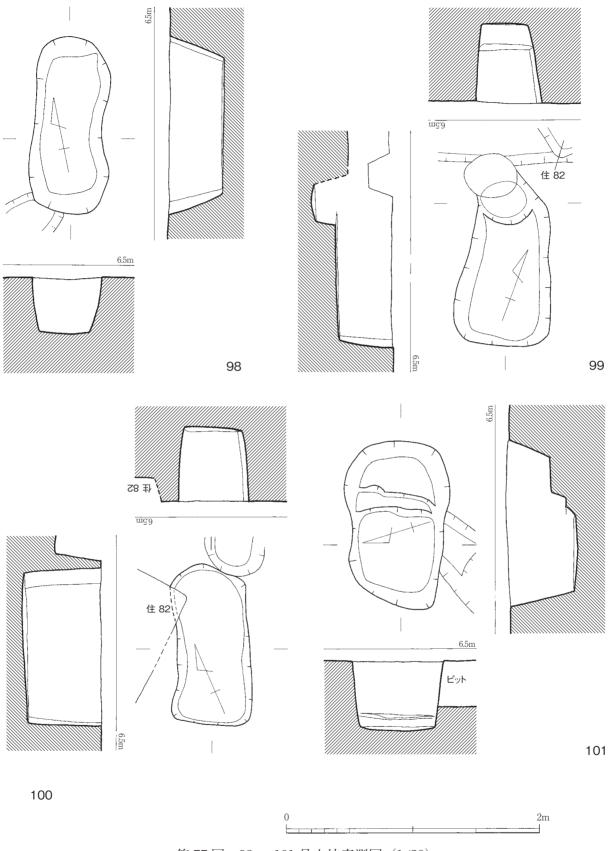
## 101 号土坑 (図版 19、第 77 図)

9区中央の北端に位置する。土坑規模は長軸 132 cm×短軸 83 cm、最も深い西側で深さ 55 cm の楕円形土坑となる。東側にはテラスを 2 段持ち、一段深くなる部分の床面は中央に向かって緩やかに傾斜する。東西壁の傾斜はいずれも急である。埋土は上層が灰色粘質土、下層が黄褐色粘質土である。出土土器から弥生時代後期後半~古墳時代前期前半の土坑と考えられる。出土土器 (第76 図 19・20) 19・20 は在地系甕。19 は口縁部が短く屈折するもので、内外面ともハケ後ナデを施す。色は暗黄茶褐色。20 の口縁部内外面にはススが付着する。色は灰黄褐色。

## 102 号土坑 (図版 19、第 78 図)

9区北の南に位置し、80・82号住居跡を切り、79号住居跡に切られる。土坑規模は長軸 185 cm×短軸 120 cm以上、最も深い西側で深さ 65cm の楕円形土坑となる。土坑北・東の2つのテラスの床面はほぼ平らであるが、西側の一段深い部分の床面は中央に向かって緩やかに傾斜する。床面から覆土中層にかけて、土器 (2・3・10) が出土した。埋土は灰黄褐色粘質土である。切り合い関係及び出土土器から弥生時代後期終末の土坑と考えられる。

出土土器(図版 55、第 79 図) 1 は球状の胴部と、頸部には低平な三角突帯を巡らす、在地



第77図  $98 \sim 101$  号土坑実測図 (1/30)

系複合口縁壺で、胴部外面には黒斑及び二次加熱痕・ススが認められる。また胴部内面にはコ ゲ痕があることから、口縁部を打ち欠いて煮沸用として転用したものか。色は黄褐色。2も球 状の胴部中位に垂れ気味の三角突帯を巡らし、その端部にはやや丸い工具による刻目を入れる。 外面には黒斑があり、色は外が灰黄褐色、内が淡黒色。胎土より他遺跡よりの搬入土器の可能 性が高い。3~8は在地系甕。3の外面にはススがべっとり付着し、胴部は工具ナデ後ナデを 施す。また内面頸部付近にはコゲ痕が認められる。色は灰黄褐色。4は外面に薄くススが認め られ、色は灰黄褐色。5の胴部内面にはナデの稜が明瞭で、口縁部内面は布等による強いナデ を施している。外面には黒斑があり、胎土は精良で、色は灰黄褐色。6は器壁の厚い鉢状の小 形甕で、外面胴部上位は粗いハケをナデ消す。口縁部内面には黒斑があり、色は灰黄褐色。7 は凸レンズ底の甕底部で、外面にはスス、内面にはコゲ痕が認められる。色は灰黄色。8が台 付甕脚部で、外面には二次加熱痕・ススがあり、色は白灰黄褐色。9は内外面とも指押さえ痕 が明瞭に認められる在地系小型高坏。完形品で口径 8.5 cm、底径 4.8 cm、器高 5.8 cmを測る。坏 部内面には黒斑があり、色は灰黄色。10 は短く外反する口縁部を持つ在地系高坏で、内外面 はミガキを施す。内面は黒化し、色は白黄褐色。11 は凸レンズ底を持つ椀状の鉢で、内面は 布等による横ナデを施す。色は黄褐色。12 は在地系複合口縁壺の口縁部内面の胎土に朱が染 み込んだ、いわゆる内面朱付着土器。本遺跡では本例以外は甕か鉢で、壺を使用した唯一の例 である。口縁部という部位もあるが、外面にはスス等の付着がないため、朱の容器として用い た可能性も考えられる。外面には黒斑があり、色は灰黄色。

## 103号土坑 (図版 20、第78 図)

9区中央に位置し、76号住居跡に切られる。土坑規模は長軸200cm×短軸120cm程度、深さ23cmの大型の長楕円形土坑である。床面はほぼ平らで、埋土は暗黄褐色粘質土を呈する。埋土及び出土土器から弥生時代後期後半~古墳時代前期前半の土坑と考えられる。

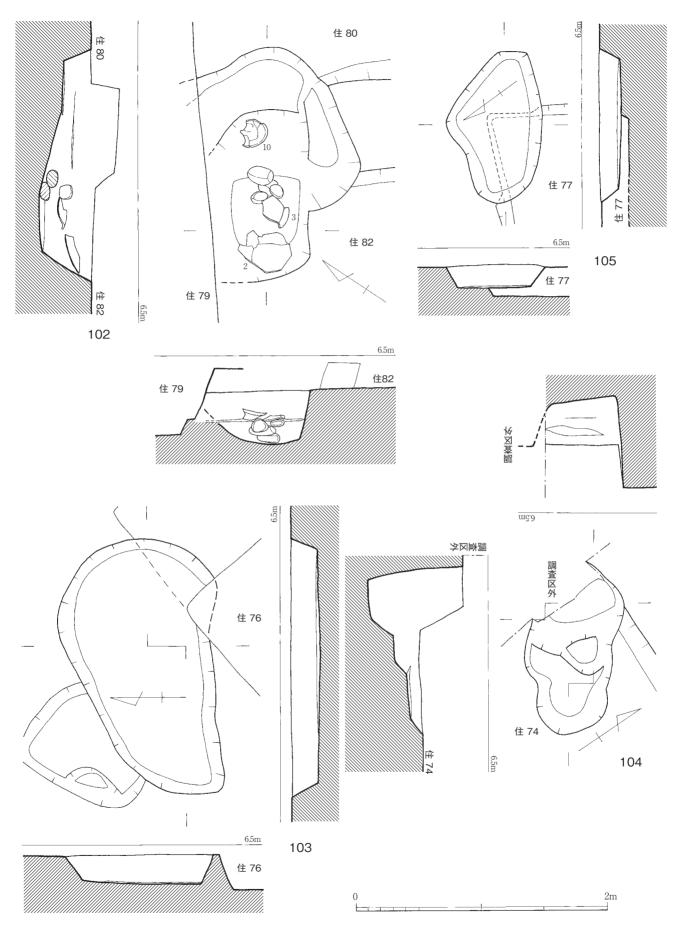
出土土器 (第76 図 21) 図示できたのは 21 のみ。21 は口縁部が短く外反する在地系鉢で、体部外面下位にはケズリを施す。色は灰黄褐色。

## 104 号土坑 (図版 20、第 78 図)

9区中央の西端に位置し、74号住居跡を切る。調査当初は当土坑の存在に気づかず、74号住居跡床面の検出段階で存在を認識したため、74号住居跡出土土器に当土坑出土土器が混ざってしまった可能性がある。土坑西側は調査区外となるが、土坑規模は長軸135cm以上×短軸70cm、一段深くなる西端で深さ75cm以上の長楕円形土坑となる。土坑東側にはテラスを2段持ち、埋土は暗灰茶褐色粘質土である。出土土器で図示できるものはないが、切り合い関係及び埋土から弥生時代後期終末~古墳時代前期の土坑と考えられる。

## 105号土坑 (図版 20、第78 図)

9区中央の北西に位置し、77号住居跡の北東隅を切る。土坑規模は長軸 120 cm×短軸 75 cm、深さ 18cm の長楕円形土坑となる。床面はほぼ平らで、埋土は灰黄褐色粘質土。出土土器から古墳時代前期前半の土坑と考えられる。



第 78 図  $102 \sim 105$  号土坑実測図 (1/30)

出土土器(図版 55、第 76 図 22 ~ 24) 22 は器壁が薄い在地系小形丸底壺で、胴部外面のハケは摩滅気味である。色は橙褐色。23 は在地系小形甕で、色は黄褐色。24 は弥生前期末の甕で、三角口縁と口縁下の低平な突帯の端部にはヘラ工具による刻目を施す。内面には少しコゲが付着する。色は黄茶色を呈する。

## 107号土坑 (図版 21、第80 図)

9区中央の南西端に位置し、75号住居跡、93号土坑を切る。また南側には包含層がある。 土坑東側の一部は調査区外になるが、土坑規模は長軸200cm×短軸142cm、一段下がる東側で 深さ55cmのやや大型の長楕円形土坑となる。床面は東側に緩やかに傾斜し、壁の傾斜はいず れも緩やかに立ち上がる。ほとんどが床面から5cmほど少し浮いた多量の土器を検出したが、 その出土状況から土坑内に土器・石器を廃棄したものと考えられる。埋土は灰茶褐色粘質土で ある。出土土器は弥生中期前半・後半と弥生時代後期初頭~前半の土器の3時期に分かれるが、 土坑の時期は後期前半になると考えられる。しかし、中期前半・後半の土器の残存度も高く、 調査区外の当土坑周辺にこの時期の遺構が広がる可能性が高い。

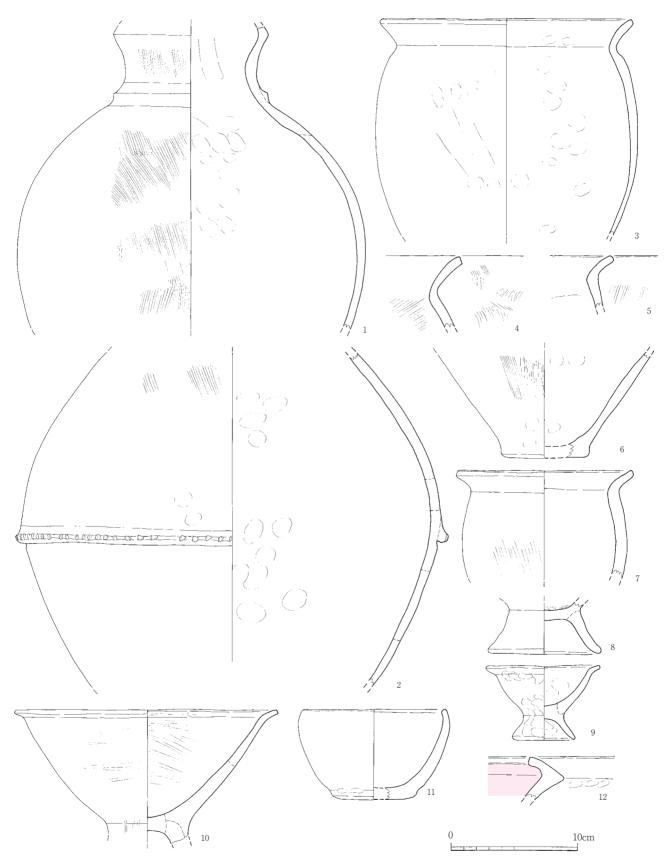
出土土器(図版 55、第 81・82 図) 1 は弥生後期前半の広口壺。胴部上位にある最大胴部径の部分に小振りで低平な三角突帯を巡らし、胴部突帯下と口縁部内面は粗く太めのミガキ、胴部突帯上はナデ、口縁部外面はハケ後ナデ、胴部内面はナデを施す。底部は上げ底状に窪み、外面には黒斑あり。色は灰褐色。 2 は後期前半の丹塗磨研の無頸壺。完形品で、口径 12.5 cm、底径 6.6 cm、器高 12.4 cmを測る。口縁部は「く」の字状を呈し、底部は 1 と同様の上げ底状になる。胴部内面中位には工具痕があり、ミガキは外面~口縁部内面まで施す。外面には黒斑があり、生地は橙褐色。 3 は胴部中位以上を打ち欠いた、やや凸レンズ底を呈する壺底部。外面には黒斑及び二次加熱痕・ススが認められるため、打ち欠き後煮沸用として利用している。色は黄褐色。 4 は内外面丁寧なナデを施し、外面のみ丹塗りを行った鉢。生地は茶褐色。 5~8 は支脚で、5・6 と7・8 はそれぞれほぼ同じ形態のため、2 つをセットとして利用した可能性が高い。5・6 は器高 12 cm前後の筒状のもので、5 の外面には二次加熱痕がある。色はいずれも黄褐色。7・8 は下部が広がるもので、上部中央には焼成前に指で孔を開けている。特に7 は内面中位の接合痕が明瞭で、上下別々に作り、その後に貼り付け成形したことが分かる。いずれも二次加熱痕があり、色は黄茶色。

 $9\sim26$  は弥生中期甕。黒斑は  $9\cdot19\cdot20$ 、二次加熱痕は  $11\sim13\cdot17\sim19\cdot23\sim26$ 、ススは  $12\cdot14\cdot16\cdot18\cdot20\cdot21\cdot24\cdot25$ 、胴部内面下位のコゲ痕は  $11\cdot16\cdot18\cdot25$  に認められ



107 号土坑出土状況(南東から)

る。9~14 は弥生中期後半の甕で、9~12 はいずれも外傾気味の長く突出する逆「L」字状口縁を持ち、胴部上位は直立気味である。9 は実測図では見えないが、口縁直下にハケ工具痕があり、色は灰褐色。10 の色も灰褐色。11 の胴部内面にはナデの稜が残る。色は茶褐色。12 は胴部内面に二次加熱痕・ススが認められることから、何かに転用された



第79図 102号土坑出土土器実測図 (1/3)

ものか。色は茶褐色。13 は焼成後内→外穿孔が中央ではなく偏った位置にあり、色は暗黄褐色。 14 の色は灰黄褐色。

15~26 は弥生中期前半の甕。15~23 はいずれも口縁上面が窪む逆「L」字状口縁で、胴の張りが弱く、そのまま底部まで窄まる器形。15 の色は黄褐色。16 の色は灰黄褐色。17 は胴部下位を打ち欠いたもので、内面は二次加熱痕が顕著なため、炉の一部として利用した可能性が高い。口縁下には低平な三角突帯を巡らし、色は灰黄褐色。18 は粘土継ぎ目痕から2・3 cmの粘土紐を積み上げて成形したことが分かり、底部は上げ底である。色は黄褐色。19 の色は黄橙褐色。20 の色は灰黄色。21~23 はやや内傾する口縁部で、21 の色は灰黄褐色。22 の色は黄褐色。23 の色は橙褐色。24~26 は上げ底の甕底部。24 は器壁が厚く、外面は細かいハケ後、底部から粗いハケを施している。丁寧なナデを施す内面底部付近は黒化する。色は黄茶色。25 の胴部内面には工具痕があり、色は黄褐色。26 の内面底部は黒化し、色は灰黄褐色。

## 108号土坑 (図版 21、第80 図)

9区中央の南に位置し、117号土坑を切る。また、土坑西側には包含層がある。土坑規模は長軸 104 cm×短軸 80 cm、深さ 39cm を測る、やや小型の長楕円形土坑となる。床面はほぼ平らで、埋土は茶褐色粘質土に炭少量が混じる土である。出土土器から古墳時代前期前半の土坑か。出土土器(第83 図 1 ・ 2) 1 は複合口縁系譜の在地系二重口縁壺で、直立する口縁部外面には浅い波状文後に円形浮文を貼り付ける。色は黄褐色。 2 は器台で、色は黄褐色。

#### 110号土坑 (図版 22、第80図)

9区南の北端近くの、調査区が南に細長く延びる部分の始点部分に位置する。111号土坑と接するが、出土土器はないため、切り合いの前後関係を判断できない。土坑規模は南北62cm×東西70cm、深さ38cmの小型円形土坑である。床面はほぼ平らで、壁の傾斜はいずれもやや急に立ち上がる。埋土は茶褐色粘質土に炭少量混じる土である。出土土器で図示できるものはないが、埋土から弥生時代後期~古墳時代前期の土坑と考えられる。

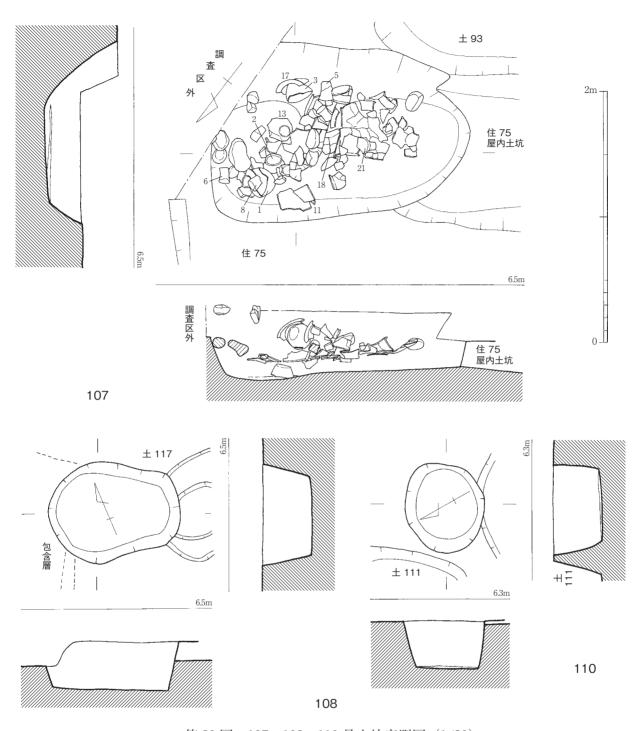
## 111 号土坑 (図版 22、第 84 図)

9区南の北端近くに位置する。110号土坑と接するが、110号土坑で先述したように、切り合いの前後関係は不明である。土坑規模は南北91cm×東西87cm、深さ38cmの隅丸方形の土坑である。床面はほぼ平らで、壁の傾斜はいずれもやや急に立ち上がる。埋土は茶褐色粘質土に炭少量混じる。出土土器で図示できるものはないが、埋土から弥生時代後期~古墳時代前期の土坑と考えられる。

## 112号土坑 (図版 22、第84図)

9区南の北側に位置し、12号溝を切る。土坑規模は長軸 105 cm×短軸 85 cm、深さ 31 cm の 長楕円形土坑である。床面は中央に向かって緩やかに傾斜する。埋土は茶褐色粘質土に炭少量 混じる。埋土及び出土土器から弥生時代後期~古墳時代前期の土坑と考えられる。

出土土器(第83図3・4) 3は在地系屈折口縁鉢で、色は黄褐色。4は弥生中期前半の甕蓋で、外面には二次加熱痕・ススが認められる。色は黄褐色。

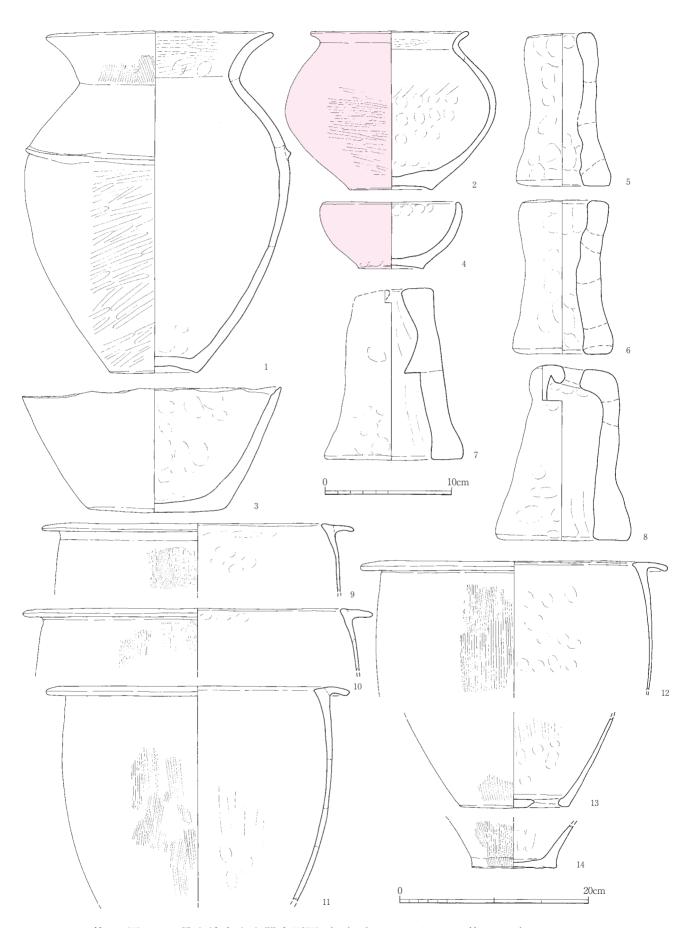


第80図 107・108・110 号土坑実測図 (1/30)

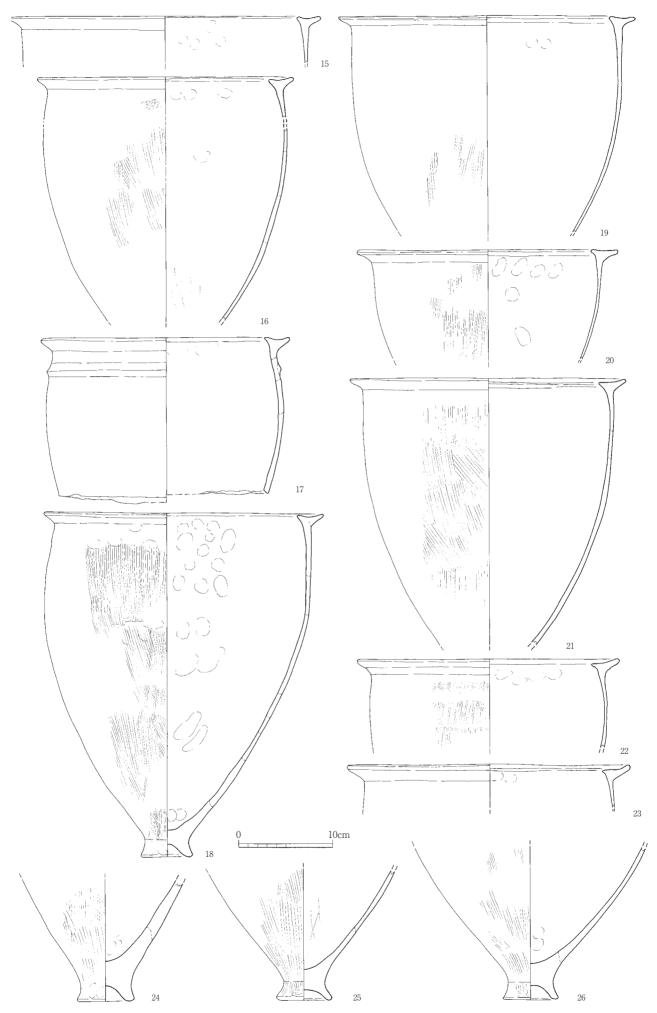
# 113号土坑 (第84図)

9区南の北西端に位置し、11号溝に切られる。西側の大半が調査区外で、土坑規模は東西 93 cm以上×南北 121 cm、一段深くなる北西部で深さ 41cm を測り、おそらく楕円形土坑となるか。土坑東~南側には床面がほぼ平らのテラスを持ち、テラス及び床面はほぼ平らである。埋土は暗茶褐色粘質土である。出土土器から弥生時代後期初頭の土坑と考えられる。

出土土器(第83図5~7) 5~7は後期初頭の甕口縁部で、いずれも外面に二次加熱痕があ



第81図 107号土坑出土土器実測図(1)(9~14は1/4、他は1/3)



第82図 107号土坑出土土器実測図(2)(1/4)

る。5・6は「く」の字状口縁で、色は5が黄橙褐色、6が橙褐色。7は跳ね上げ状口縁で、 色は灰褐色を呈する。

# 114号土坑 (図版 23、第84 図)

9区中央の西に位置し、74号住居跡、122号土坑を切る。土坑規模は長軸 115 cm×短軸 56 cm、一段深くなる部分で深さ 48cm を測る、長楕円形土坑となる。南側のテラスとともに、床面はほぼ平らで、壁はいずれも急に立ち上がる。埋土は茶褐色粘質土である。切り合い関係及び出土土器から弥生時代後期終末~古墳時代前期の土坑と考えられる。

出土土器(第83図8) 図示できたのは8のみ。8は在地系屈折口縁の鉢。色は黄褐色。

## 115号土坑 (第84図)

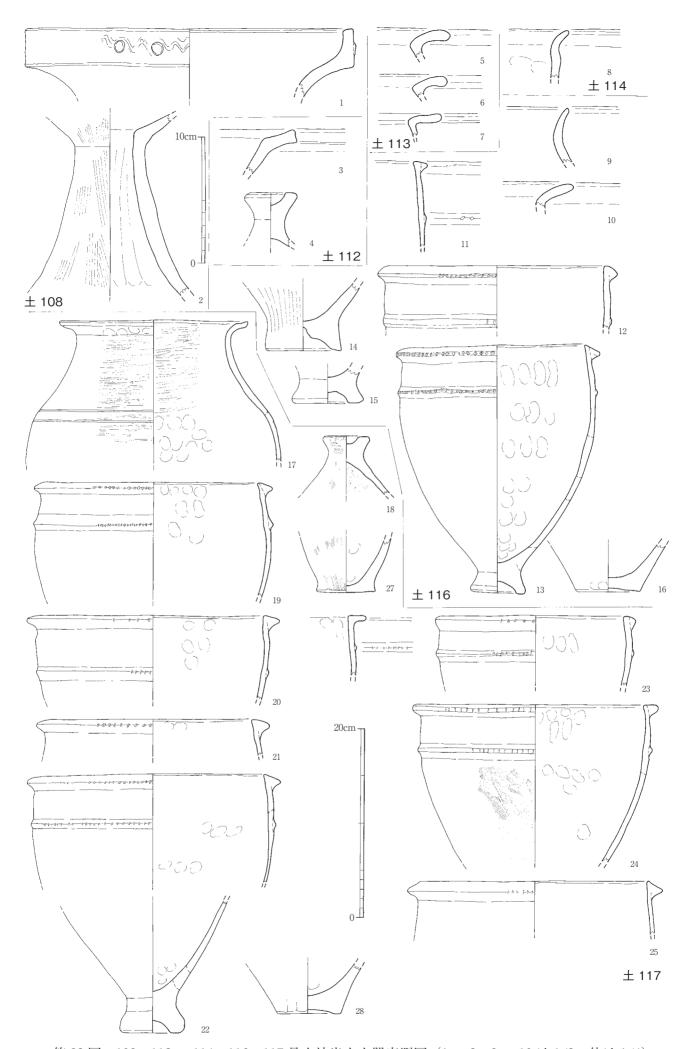
9区中央の南寄りに位置する。116号土坑と接するため、切り合い関係を持つと考えられるが、埋土から当土坑の方が新しいと思われる。土坑規模は南北80cm×東西95cm、深さ55cmの隅丸方形に近い形状の土坑である。西側に小さなテラスを持ち、床面は中央に向かって緩やかに傾斜する。また、北・西壁は急に立ち上がる。埋土は茶褐色粘質土。出土土器で図示できるものはないが、埋土から弥生時代後期~古墳時代前期の土坑と考えられる。

#### 116号土坑 (図版 23、第85 図)

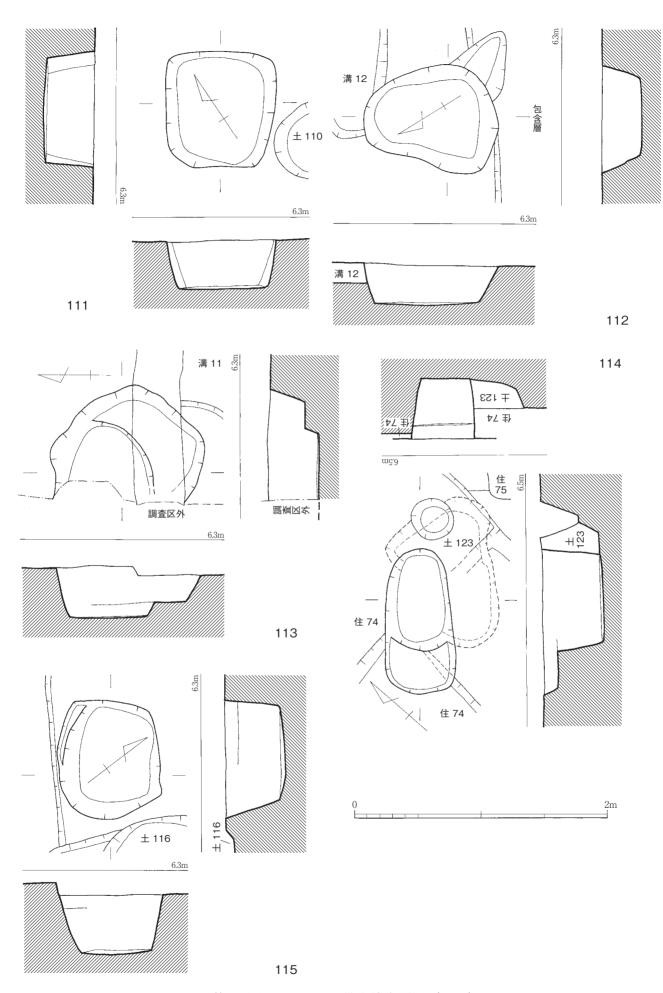
9区中央の南に位置し、67・68号住居跡に切られる。また115号土坑と接するため、切り合い関係を持つと考えられるが、埋土から当土坑の方が古いと思われる。当土坑は67号住居跡の床面調査時に検出したため、当初は67号住居跡の屋内土坑の可能性があると考え、掘り進めた結果、67号住居跡の南西壁を掘り抜いてしまっている。土坑規模は長軸175cm×短軸126cm、中央の最も深い部分で、深さ55cmを測る、北側の一部が突出する長楕円形土坑である。なお、土坑東側の浅く一段下がる部分は67号住居跡の床面掘り込みの可能性が高い。土坑東西にはテラスを持ち、床面は南東側に向かって緩やかに傾斜する。床面から30cmほど浮いた状態で、甕(13)が出土した。埋土は茶褐色粘質土に炭が混じる土である。

出土土器は弥生時代前期・中期・後期とバラエティーに富むが、埋土も考慮すると、弥生時 代後期~古墳時代前期の土坑か。

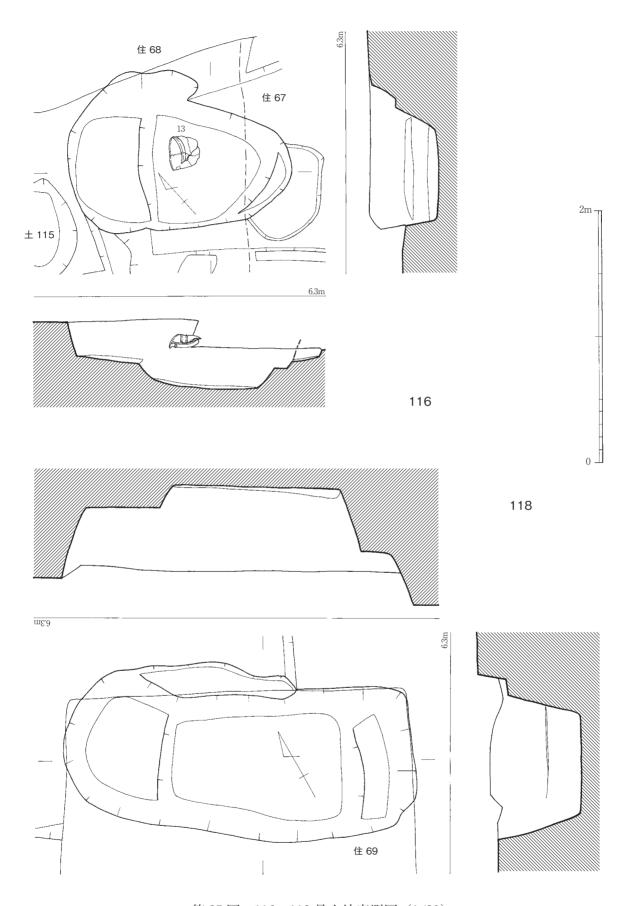
出土土器(図版 56 第 83 図 9  $\sim$  16) 9 は口縁部が弱く外湾する在地系鉢。色は灰黄褐色。10 は後期前半の甕口縁部。外面には黒斑及び二次加熱痕あり。色は橙褐色。 $11 \sim 13$  は弥生前期末の甕で、三角口縁と口縁下の極めて低平な突帯端部に浅い刻目を施す。いずれも外面にススがあり、 $12 \cdot 13$  の外面には黒斑、 $11 \cdot 13$  の外面には二次加熱痕あり。11 はやや内傾する直立口縁部で、色は黄橙色。12 の色も黄橙色。13 は上げ底の底部に砲弾状胴部を持つ弥生前期末新相のもので、内面底部にはコゲ痕あり。色は黄褐色。 $14 \sim 16$  は弥生中期甕底部で、 $14 \cdot 15$  は上げ底、16 はやや上げ底のもの。 $14 \cdot 15$  には二次加熱痕、14 にはスス、 $15 \cdot 16$  の内面にはコゲ痕あり。14 の色は灰黄褐色。15 の色は橙褐色。16 の色は灰黄褐色。



第83図  $108 \cdot 112 \sim 114 \cdot 116 \cdot 117$  号土坑出土土器実測図  $(1 \sim 3 \cdot 8 \sim 10$  は 1/3、他は 1/4)



第84図 111~115号土坑実測図 (1/30)



第85図 116・118 号土坑実測図 (1/30)

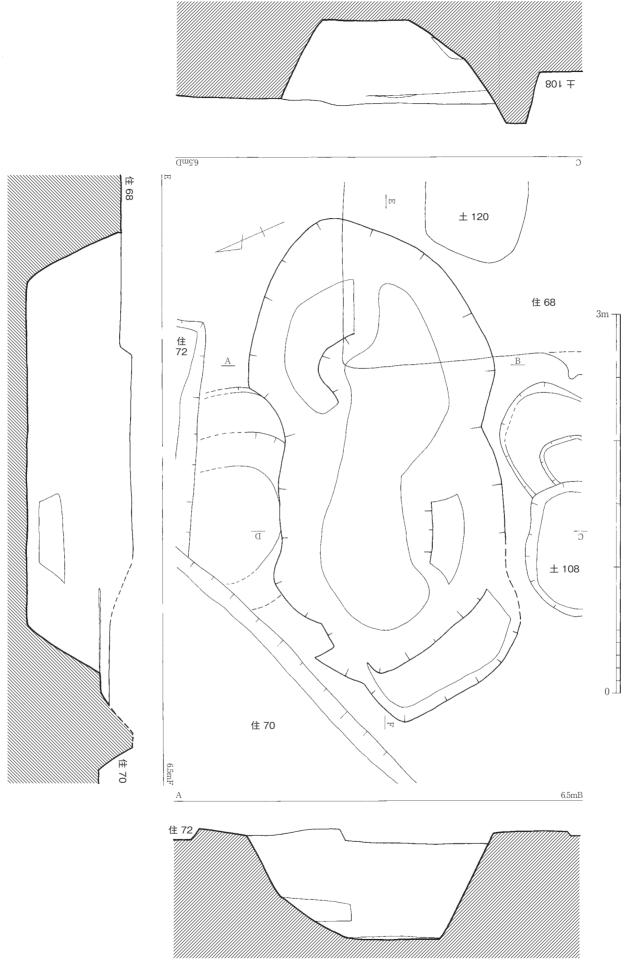
# 117号土坑 (図版 23、第86 図)

9区中央のやや南寄りに位置し、68号住居跡、108号土坑に切られる。120号土坑とも接するため、切り合い関係を持つと考えられるが、埋土から当土坑の方が古いか。また70号住居跡とも切り合い関係を持つ可能性があるが、出土土器から当土坑の方が古い。土坑規模は長軸375cm×短軸195cm、深さは最も深い部分で深さ82cmを測る、東西に長いかなり大型の長楕円形土坑である。北・南・西にはテラスを持ち、床面はほぼ平らである。壁はいずれも緩やかに立ち上がる。埋土は上層が茶褐色粘質土に炭が混じり、下層が青灰色粘質土。出土土器から弥生時代前期末の土坑と考えられる。

出土土器(図版 56、第 87 図 17 ~ 28) 17 は壺で、口縁部は強く外反し、頸部には 2 条の細い平行沈線を巡らす。外面全体及び長めの口縁部内面にはミガキを施すが、内外面のミガキ幅が異なるため、ミガキ原体が異なる可能性がある。色は橙褐色。18 は壺蓋で、外面はハケ後ミガキ、内面もミガキを施す。色は黄褐色。19 ~ 28 は甕で、19 ~ 24 は三角口縁端部と口縁下の極めて低平な胴部突帯端部には刻目を施し、その原体は 19・21・22 がやや丸い工具、20・23・24 がヘラ工具である。黒斑は 19・24、ススは 19・20・22・23~25、内面のコゲ痕は 19・22・24・25 に認められる。19 は胴が張るやや古相のもので、色は白黄褐色。20 の色は黄褐色で、21 の色は黄橙褐色。22 は胴部中位を欠損したもので、底部は上げ底である。色は灰黄褐色。23・24 は丸味を帯びた三角口縁で、23 の色は灰黄褐色。24 は非常に浅い刻目を施すもので、外面のハケはナデ消していないもの。色は灰黄褐色~暗橙色。25 は鋭い三角口縁で、浅い刻目はほとんど摩滅している。色は暗黄茶褐色。26 は逆「L」字状口縁で、口縁下の低平な突帯にはヘラ工具による刻目を施す。色は灰褐色。27・28 は甕底部で、色は暗黄茶褐色。28 はやや上げ底で、外面には二次加熱痕・スス、内面にはコゲ痕あり。色は灰黄褐色。

#### 118 号土坑 (図版 24、第 85 図)

9区中央の南西に位置し、ちょうど上層の69号住居跡北ベッド状遺構の中にほぼ収まる土坑である。土坑規模は長軸278 cm×短軸135 cm、最も深い中央部で深さ68cmを測る、大形の長楕円形土坑である。土坑北・東・西にはそれぞれテラスを持ち、床面とテラスの床面はほぼ平らである。埋土は上層が茶褐色粘質土、下層が青灰色粘質土である。覆土よりスクレイパー2点(第96図2・3)が出土した。出土土器から弥生時代中期初頭の土坑と考えられる。出土土器(図版56、第87図1~17) 1 は強く外反する口縁部を持つ壺で、色は茶褐色。2は甕蓋で、内面には工具痕あり。外面には二次加熱痕・スス、内面は黒化する。色は灰黄褐色。3~16 は甕で、黒斑は7・9・10、二次加熱痕は8・10・15・16、ススは3・4・6~8・10・15・16、内面のコゲ痕は8・10・15・16 に認められる。3・4・6・11・13 は口縁と口縁下の極めて低平な突帯に、5 は垂れ下がる口縁端部に刻目を施す。3 は大振りの三角口縁と張りのある胴部を持ち、内面には指押さえ痕が残る。色は灰黄褐色。4・5 は垂れ下がる貼り付け口縁で、4 の色は灰黄褐色、5 の色は黄褐色。6 の色は灰黄褐色。7 は垂れ下がる貼り付け口縁で、4 の色は灰黄褐色、5 の色は黄褐色。6 の色は灰黄褐色。7 は垂れ下がる三角口縁で、短いハケを施す胴部は胴が張らず窄まる。口縁部外面及び内面には指押さえ痕が顕著で、内面は一部黒化する。色は茶褐色。8 の三角口縁上端は水平になり、色は灰黄褐色。9 の玉縁状口縁はハケ後に貼り付けており、胴部外面上位には2条の平行沈線を巡らす。口縁部内面に



第86図 117号土坑実測図 (1/30)

はハケ状の工具ナデ痕あり。色は茶褐色。10 は「コ」の字状口縁に、砲弾形の胴部、底部には焼成後外→内の穿孔を施す。外面胴部下位はハケ後ミガキを施し、色は茶褐色を呈する。11 の色は外が茶褐色、内がこげ茶色。12 は口縁下の低平な突帯が連続する2条のもので、口縁及び上突帯端部には刻目を入れる。焼成は不良で、色は黄褐色。13 の口縁部の刻目はハケ工具、突帯は丸い工具と刻目原体が異なる。色は茶褐色。14 は壺底部の可能性もある甕底部。外面は器表が荒れており、色は黄褐色。15・16 は甕底部で、15 の色は茶褐色。16 の色は灰黄褐色。17 は小形鉢で、色は茶褐色。18 は口縁部片が117 号土坑、底部片が118 号土坑出土の同一個体の小形甕。外面には二次加熱痕・ススがあり、色は茶褐色。

## 119号土坑 (第88図)

9区中央の南東に位置し、67・68 号住居跡に切られる。調査段階では当土坑壁と 67 号住居跡壁が一致するため、67 号住居跡の屋内土坑と想定したが、67 号住居跡のベッド状遺構との切り合い関係から、住居下層遺構と判断した。土坑規模は長軸 110 cm×短軸 80 cm、深さは 67 号住居跡の壁上端からは 40 cmを測る。床面はほぼ平らで、埋土は茶褐色粘質土。出土土器で図示できるものはないが、切り合い関係及び埋土から弥生時代後期~古墳時代前期の土坑と考えられる。

## 120号土坑 (図版 24、第88 図)

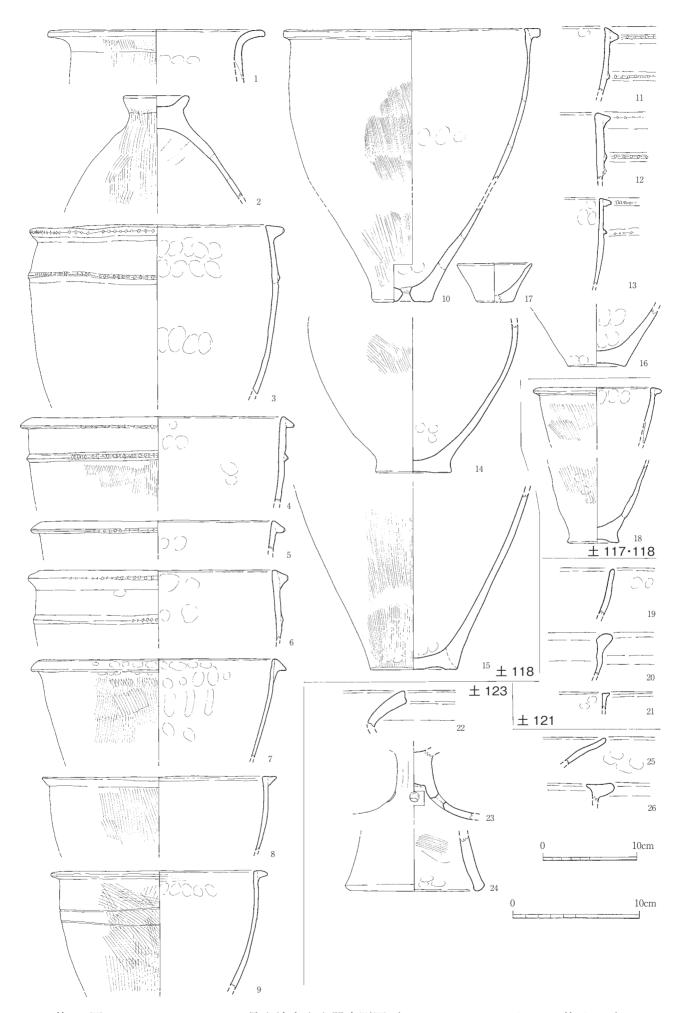
9区中央の南西寄りに位置する。68号住居跡の下層土坑で、117号土坑と接するため、切り合い関係を持つ可能性があるが、埋土から当土坑の方が新しい。土坑規模は南北80cm×東西88cm、深さ32cmを測る、隅丸方形の土坑である。床面はほぼ平らで、埋土は茶褐色粘質土である。出土土器で図示できるものはないが、切り合い関係及び埋土から弥生時代後期~古墳時代前期の土坑と考えられる。

#### 121 号土坑 (第88 図)

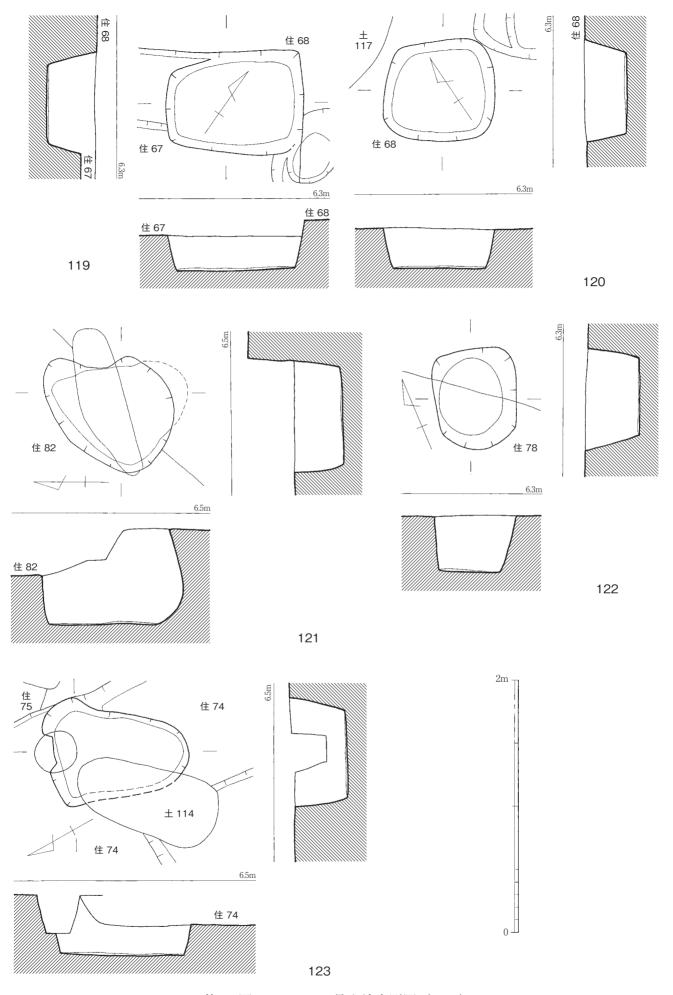
9区北の南に位置し、82号住居跡に切られる。土坑規模はオーバーハング部分まで含めると南北115cm×東西92cm、深さ76cmを測る、東が窪むハート形の土坑である。南壁はかなりオーバーハングし、その他の壁もかなり急に立ち上がる。床面はほぼ平らで、埋土は茶褐色粘質土に炭が混じる。切り合い関係及び出土土器から弥生時代後期の土坑と考えられる。出土土器(第87図19~21)19は在地系直口鉢口縁部。外面には黒斑があり、色は灰黄褐色。20は玉縁状に肥厚させた口縁部の在地系鉢で、色は橙褐色。21は弥生中期小形鉢口縁部で、色は茶褐色。

## 122 号土坑 (図版 24、第 88 図)

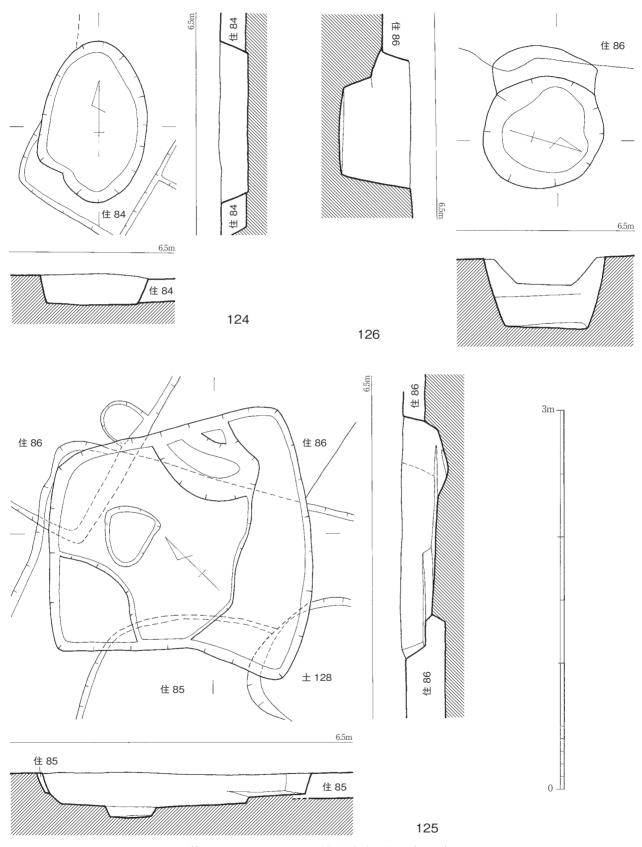
9区北の南に位置し、上層には78·82号住居跡が存在する。土坑規模は南北79cm×東西65cm、深さ43cmを測る、小形円形土坑である。床面はほぼ平らで、壁の立ち上がりはいずれもやや急である。埋土は茶褐色粘質土に炭混じる。出土土器で図示できるものはないが、切り合い関係及び埋土から弥生時代後期の土坑と考えられる。



第87図  $117 \cdot 118 \cdot 121 \cdot 123$  号土坑出土土器実測図  $(19 \cdot 20 \cdot 22 \sim 25$  は 1/3、他は 1/4)



第 88 図  $119 \sim 123$  号土坑実測図 (1/30)



第89図  $124 \sim 126$  号土坑実測図 (1/30)

## 123 号土坑 (第88 図)

9区中央の西に位置し、74号住居跡、114号土坑に切られる。また、75号住居跡とも接するため、切り合い関係を持つと考えられるが、埋土から当土坑の方が古いか。土坑規模は長軸115cm×短軸85cm、深さ43cmを測る楕円形土坑である。床面はほぼ平らで、壁はいずれも急に立ち上がる。埋土は茶褐色粘質土である。切り合い関係及び埋土、出土土器から弥生時代後期の土坑と考えられる。

出土土器(第87図22~26) 22 は在地系甕口縁部。色は灰黄褐色。23 は在地系高坏脚柱部で、焼成前外→内の穿孔が3ヶ所残るため、元々は4ヶ所に穿孔を施したもの。色は白黄褐色。24 は器台で、外面には二次加熱痕あり。色は白黄褐色。25 は在地系屈曲口縁高坏の口縁部で、胎土は精良、色は橙褐色。26 は弥生中期甕口縁部。色は灰黄褐色。

## 124号土坑 (図版 25、第89図)

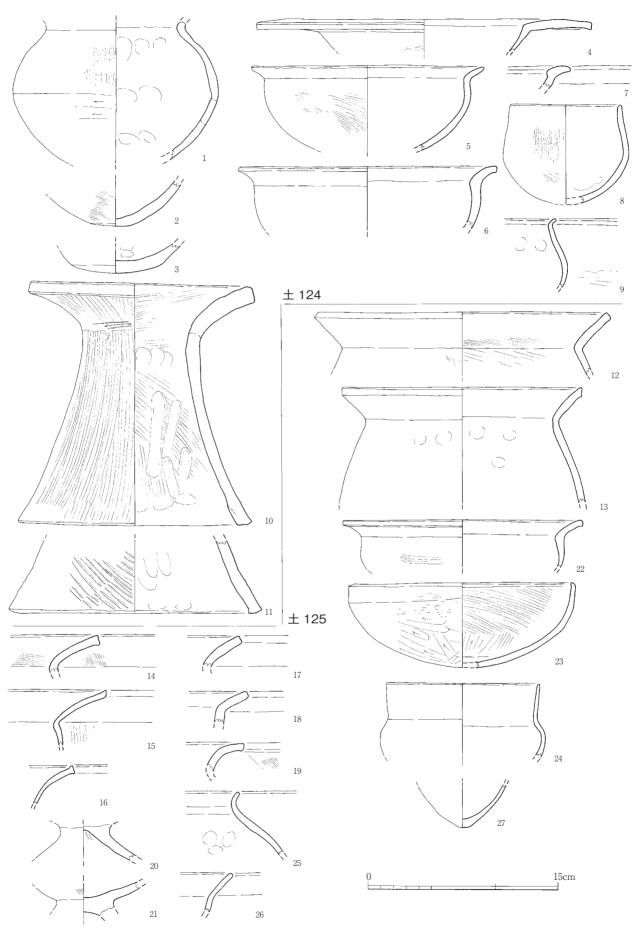
9区北中央のやや北寄りに位置し、84号住居跡を切る。土坑規模は長軸 128 cm×短軸 84 cm、深さ 25cm を測る長楕円形土坑である。床面はほぼ平らで、埋土は暗灰褐色粘質土に炭多く混じる。出土土器と切り合い関係から古墳時代前期前半の土坑と考えられる。

出土土器(図版 56、第 90 図 1 ~ 11) 1 は球状を呈する在地系短頸壺の胴部。外面下位はハケ後ケズリ、その後一部ナデを施す。外面には黒斑・ススがあり、色は灰黄色。 2・3 はわずかに稜が残るほぼ丸底の在地系甕底部で、いずれも外面にススが付着。色は 2 が灰黄色、 3 が黄茶褐色。 4 は口縁部がかなり長く突出する在地系高坏坏部。色は黄褐色。 5~7 は在地系屈折口縁の鉢。 5 の外面下位は板ナデを施し、内外面には黒斑あり。色は白黄褐色。 6 の色は茶褐色。 7 は高坏口縁部の可能性もあるもので、色は橙褐色。 8 はコップ形の直口鉢で、外面上位の一部のみ細かい縦ミガキを施す、珍しいもの。外面には黒斑あり。色は黄褐色。 9 は口縁部を短く外反させた在地系鉢で、胴部下位は工具ナデを施す。色は黄褐色。 10・11 は器台。 10 はほぼ完形品で、上部径 17.9 cm、底径 18.4 cm、器高 19.2 cmを測る。外面には二次加熱痕があり、色は黄褐色。 11 は外面にタタキを施したもので、色は黄褐色。

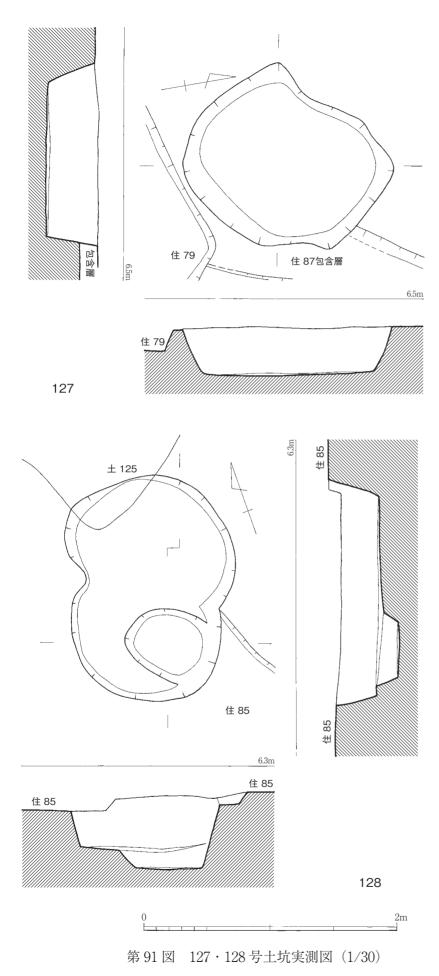
#### 125 号土坑 (第89 図)

9区の北西隅に位置し、85・86号住居跡、128号土坑を切る。土坑規模は南北208 cm×東西215 cm、土坑中央北のピット状に下がる箇所で深さ36cmを測る、隅丸台形の土坑である。土坑中央の広く一段下がる部分は下層に85・86号住居跡が存在するため掘りすぎており、本来の床面は上端からは17 cm程度となる。埋土は暗灰褐色粘質土。覆土下層より砥石(第96図5)が出土した。出土土器及び切り合い関係から古墳時代前期前半の土坑と考えられる。

出土土器(図版 56、第 90 図  $12 \sim 28$ )  $12 \cdot 14 \cdot 17 \cdot 21 \cdot 24 \sim 26 \cdot 28$  は覆土下層出土。 $12 \sim 19$  は在地系甕で、 $15 \cdot 16$  のみ口縁内端部をつまみ上げる。黒斑は 17、二次加熱痕は  $12 \cdot 15$ 、ススは 19 に認められる。12 の内面は頸部を境にハケ原体が異なる。色は黄褐色。 $13 \cdot 14$  の色は黄褐色。器壁が薄い 15 の色は茶褐色。16 は器壁が非常に薄く、色は黄褐色。17 の胎土は精良で、色は黄褐色。18 の色は黄橙色。19 の色は外が暗黄茶褐色、内が灰茶褐色。 $20 \cdot 21$  は小形高坏の脚部で、脚部内面は工具ナデ後ナデを行い、色は橙褐色を呈する。22 は在地系屈折口縁鉢で、



第 90 図 124·125 号土坑出土土器実測図 (1/3)



色は黄褐色。23 は在地系直口鉢で、 外面下位はタタキ後ケズリ、内面 下位はケズリ後ハケを行う。外面 には二次加熱痕とススが認められ、 また内面にはコゲが付着するため、 煮沸用として使用されている。色は 暗黄褐色。24 は在地系小形丸底鉢。 外面には黒斑があり、色は茶褐色。 25 は口縁部が短く直立する鉢で、 色は橙褐色。26 は在地系屈曲口縁 鉢で、色は淡黄褐色。28 は尖底の 在地系直口鉢底部で、器壁は薄い。 色は外が黄褐色、内が灰褐色。

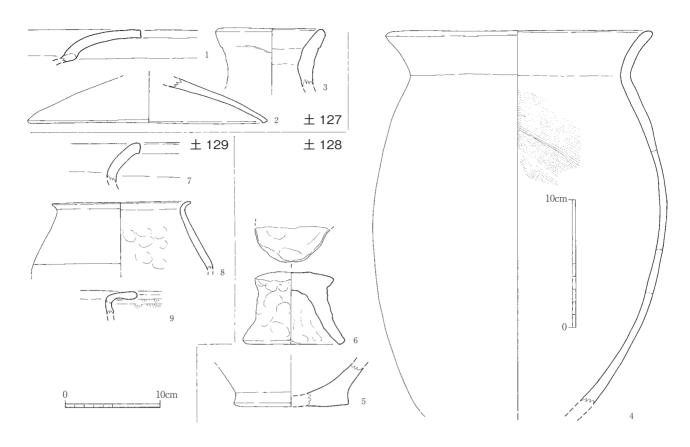
### 126号土坑 (図版 25、第89 図)

9区北端の中央に位置し、86号住居跡に切られる。土坑規模は長軸 112 cm×短軸 95 cm、深さ 56cmを測る楕円形土坑である。床面は中央に向かって緩やかに傾斜し、埋土は暗灰褐色粘質土である。出土土器で図示できるものはないが、切り合い関係及び埋土から古墳時代前期の土坑と考えられる。

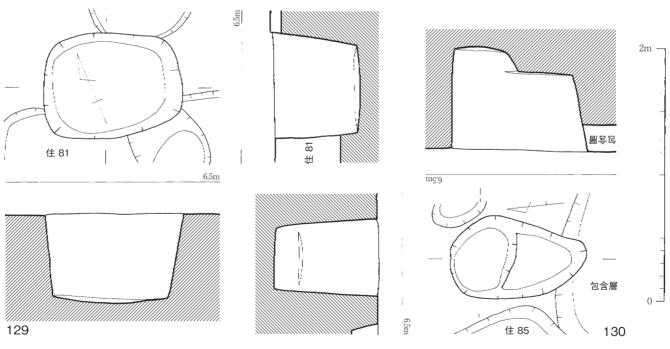
## 127 号土坑 (図版 25、第 91 図)

9区北中央の西に位置する。79 号住居跡と接し、切り合い関係を 持つが、出土土器では当土坑が新 しいと考えられる。土坑規模は南 北166 cm×東西143 cm、深さ40cm を測る、不整形な土坑である。床 面はほぼ平らで、埋土は茶褐色粘 質土である。出土土器から古墳時 代前期前半の土坑となるか。

出土土器(第92図1~3) 1は 強く外反する在地系高坏口縁部で、 色は灰黄褐色。2は畿内系小形器 台脚部で、色は橙色。3は小形器 台で、色は灰黄褐色。



第92図 127~129号土坑出土土器実測図(9は1/4、他は1/3)



第93図 129:130号土坑実測図 (1/30)

# 128 号土坑 (第 91 図)

9 区北西隅近くに位置し、125 号土坑に切られ、85 号住居跡を切る。土坑規模は長軸 179 cm × 短軸 133 cm、ピット状に一段深くなる南東部で、深さ 56cm を測る、双円状の長楕円形土坑

である。床面はピット状に下がる南東部に向かって緩やかに傾斜し、埋土は灰褐色粘質土である。切り合い関係及び出土土器から古墳時代前期前半の土坑と考えられる。

出土土器(図版 56、第 92 図 4~6) 4 は在地系長胴甕。外面全体及び口縁部内面まで二次加熱痕が顕著なため、その範囲の調整は不明。外面には黒斑があり、色は黄褐色。 5 はわずかに凸レンズ底になる甕底部で、内面にはコゲ痕あり。色は茶褐色。 6 は小形支脚で、内外面指押さえ痕が顕著である。色は黄褐色。

#### 129 号土坑 (図版 26、第 93 図)

9区北中央の東寄りに位置し、81号住居跡を切る。土坑規模は長軸110cm×短軸83cm、深さ71cmを測る、隅丸長方形の土坑である。床面は中央に向かって緩やかに傾斜し、壁はいずれもかなり急に立ち上がる。埋土は上層が暗灰褐色粘質土に炭が混じり、下層が茶褐色粘質土に炭混じる。切り合い関係及び出土土器から、弥生時代後期終末~古墳時代前期の土坑と考えられる。

出土土器(第92図7~9) 7は在地系直口壺口縁部で、口縁部は短く外反する。色は灰黄褐色。8は口縁部が短く外反する在地系鉢で、色は外が黄橙色、内が灰黄色。9は弥生中期の跳ね上げ状を呈する甕口縁部で、色は灰黄色。

#### 130号土坑 (図版 26、第 93 図)

9区北中央の北寄りに位置し、85号住居跡南東隅と接するため、切り合い関係を持つと考えられるが、当土坑の確実な時期は不明のため、その前後関係は不明である。また土坑南には包含層が存在する。土坑規模は長軸106cm×短軸65cm、一段下がる北側で深さ82cmを測る、長楕円形土坑である。土坑南側には床面がほぼ平らのテラスを持ち、壁はいずれも垂直気味に立ち上がる。出土土器で図示できるものはないが、埋土から弥生時代後期~古墳時代前期の土坑と考えられる。

## (4) 溝

#### 9号溝 (第94図)

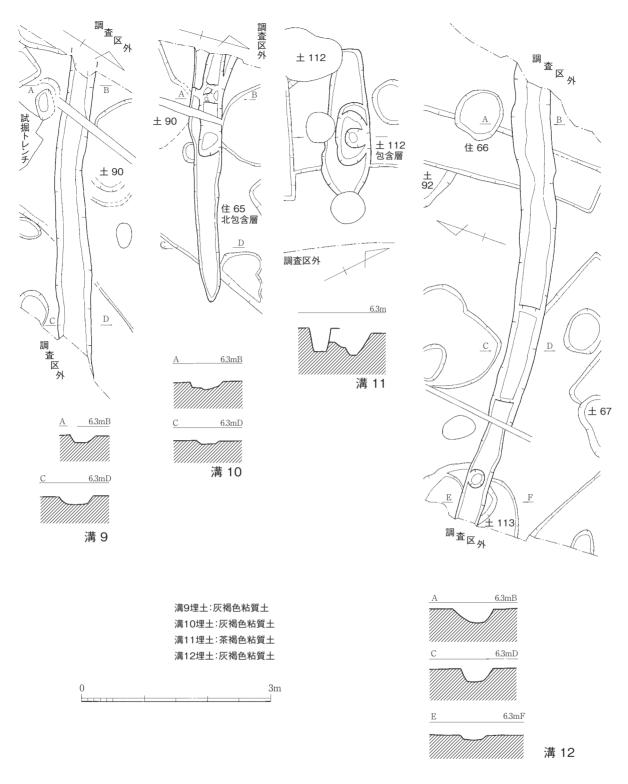
9区南の北寄りに位置する細長い北東-南西溝である。溝東西両側は調査区外で、90号土



9~12号溝(空中写真、上が西)

坑を切る。溝の規模は長さ 470cm 以上、幅は 50 cm前後を測る、ほぼ直線的な平面形態で、深さは西端で 11cm、中央で 15 cm、東端で 8 cmと、溝床面は西→東方向へ緩やかに傾斜する。溝埋土は灰褐色粘質土 1 層のみである。埋土から 10 号溝と同じ、8世紀後半の溝となると考えられる。

出土土器(第95図1) 出土土器で図示でき たのは1のみ。1は在地系屈折口縁鉢で、色 は黄橙色を呈する。



第94図 9~12号溝実測図(1/60)

## 10号溝(第94図)

9区南の北寄りに位置する細長い東西溝である。溝西側は調査区外で、90号土坑を切る。溝の規模は長さ250cm程度、幅は最大78cmを測る、ほぼ直線的な平面形態で、深さは中央のピット状に深くなる部分で35cmを測る。溝埋土は灰褐色粘質土1層のみである。出土土器から8世紀後半の溝と考えられる。

出土土器(第95図2・3) 2は須恵器杯身口縁部。色は灰色。3は高台付杯身底部で、内面にはミガキ状の工具ナデを施す。色は灰色。

### 11 号溝 (第 94 図)

9区南の北に位置する短い東西溝で、112号土坑を切る。また溝両側には包含層がある。溝の規模は長さ390cm以上、幅は西側で50cm前後を測る。ほぼ直線的な平面形態で、深さは西端で2cm、中央で12cm、東端で14cmとなり、溝床面は東→西方向へ緩やかに傾斜する。溝埋土は茶褐色粘質土1層のみである。出土土器で図示できるものはないが、埋土から弥生時代後期~古墳時代前期の溝と考えられる。

#### 12号溝(第94図)

9区南の北に位置する細長い東西溝である。溝東西両側は調査区外で、66号住居跡、113号土坑を切る。溝の規模は長さ730cm以上、幅は50cm前後を測る、緩やかに弧状を描く平面形態で、深さは西端で6cm、中央で13cm、東端で21cmとなり、溝床面は西→東方向へ緩やかに傾斜する。溝埋土は灰褐色粘質土1層のみである。埋土から10号溝と同じ、8世紀後半の溝か。

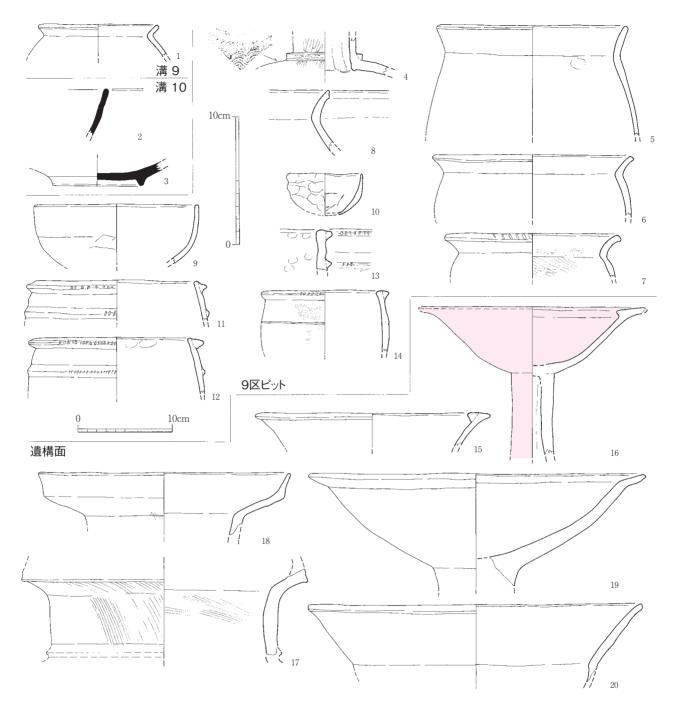
## (5) ピット・遺構面等出土土器

#### 9区ピット出土土器 (図版 56、第 95 図 4 ~ 14)

4は畿内系小形二重口縁壺の口頸部で、頸部には貼り付け後横ミガキを施した突帯を巡らせ、頸部と肩部外面には縦ミガキを施す。また肩部には最後に7条以上の波状文を施す。内面頸部には粘土しぼり痕が残り、胴部内面は黒化する。色は黄褐色。P422出土。5~8は在地系甕。5の色は黄橙色で、P304出土。6・7は鉢でも良いもの。6の口縁部内面には黒斑があり、色は黄褐色。P422出土。7の口縁端部にはヘラ工具による非常に浅い刻目を施し、外面には黒斑及び二次加熱痕があり、色は灰黄褐色。P307出土。8の色は黄褐色。P429出土。9は在地系直口鉢。外面体部下位にはケズリを行い、外面には黒斑が認められる。色は黄褐色。P304出土。10は手づくね土器。内面には工具痕があり、色は橙褐色。P259出土。11~13は弥生前期末の小形甕。いずれも三角口縁と口縁下の突帯端部にはヘラ工具による刻目を施す。11・13の外面にはスス、12の外面には黒斑あり。11・12は胴部が張るもので、P303出土。11の色は茶褐色。12の色は灰黄褐色。13は口縁部が直立し、外面突帯下には工具痕あり。色は灰黄褐色。P259出土。14は弥生中期初頭の小形甕で、三角突帯端部には丸い工具により刻目を施し、外面胴部上位には沈線を巡らす。外面にはススが厚く付着し、色は茶褐色。P265出土。

## 9区遺構面出土土器 (第95図15~20)

15 は弥生中期前半の鋤先口縁広口壺で、口縁部上面には黒斑あり。色は灰黄褐色。16 は弥生中期後半の鋤先口縁丹塗高坏で、内外面の調整は摩滅のため不明だが、ミガキの可能性が高い。生地は橙褐色。17 は複合口縁壺で、頸部にしまりがないもの。頸部にはハケの後に突帯を巡らしていたが、外れてしまっている。内面にはススがあるが、破損後に付着したものか。色は灰黄褐色~灰褐色。18 は複合口縁壺系譜の在地系二重口縁壺。色は黄橙色。19 は弥生後期前半の高坏坏部で、何かに転用後強い二次加熱を受けたため、器表がボロボロである。口縁部内外面は黒化し、色は灰黄褐色~橙褐色。20 は在地系屈折口縁鉢であるが、復元径に自信がない。外面には二次加熱痕があり、色は灰黄褐色。(大庭)



第 95 図 9 · 10 号溝、ピット、遺構面出土土器実測図(11 ~ 16 は 1/4、他は 1/3)

# (6) 9区出土石器·石製品、金属器

# 石器・石製品 (図版 57、第 96 ~ 99 図)

1~3はスクレイパーと考えられる剥片石器である。すべて安山岩製である。1は縦長剥片を使用しており、右縁に刃部を形成している。上部を欠損している。63号住居跡覆土上層出土。2は横長剥片を使用しており、裏面には主要剥離面が残る。下縁に細かい剥離により刃部が形成される。118号土坑出土。3は横長剥片を使用しており、上面および裏面の一部には自然面が残る。上縁に大きく剥離を行うことにより刃部を形成している。118号土坑出土。

 $4\sim8$ 、10、11 は砥石である。 4 は 1 / 2 が残存しており、表裏ともに研ぎに使用している。側面は研磨により面取りされる。白色頁岩製である。87 号住居跡覆土上層出土。 5 はほぼ完形で、表裏および側面の一部を研ぎに使用している。白色頁岩製である。125 号土坑覆土下層出土。 6 は破片で、裏面はやや風化がひどいが、表裏ともに研ぎに使用している。片岩製である。68 号住居跡出土。 7 は 2 / 3 が残存しており、表裏ともに研ぎに使用している。側面は研磨により面取りされる。頁岩製である。86 号住居跡 P 1 出土。 8 は 1 割ほどが欠損しており、表裏ともに研ぎに使用している。側面は研磨により面取りしている。左側が推定で 5.5 cmほどの厚みがある一方、右側は 1 cm強の厚みしかなく、使用時の方向が一定であったことがわかる。白色頁岩製である。67 号住居跡出土。 $10\cdot11$  はともに破片で、表面の一部に研ぎ面が残るのみである。細粒砂岩製で、同一個体の可能性もあるが接合はしない。96 号土坑出土。石材および研ぎ面の細かさから見てすべて仕上げ砥であり、大きさより  $4\sim7$  は持ち砥、 $8\cdot10\cdot11$  は置き砥であろう。

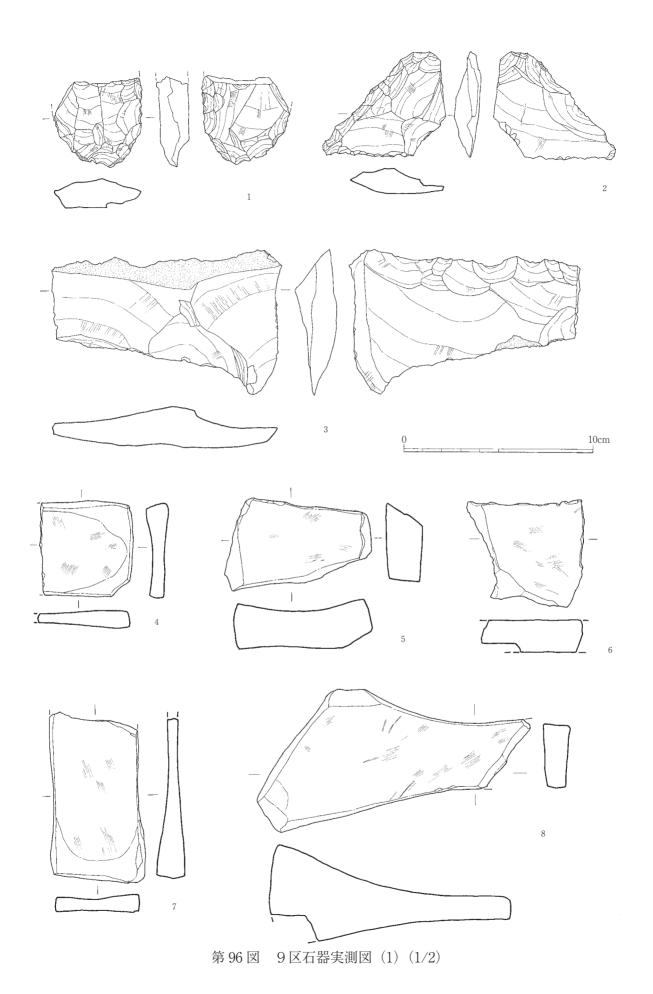
9 はガラス小玉で、色はコバルトブルーである。1 点のみの出土である。84 号住居跡覆土下 層出土。

12 は石庖丁を再利用したスクレイパーであり、ほぼ完形である。石庖丁が孔のそばで 1/4 ほどに割れたために、刃部および背面に再調整を施し再利用したものと考えられる。片岩製のためさほど強度は強くないが、使用痕等も見られないため、未使用品の可能性もある。孔径は残存値で内孔  $0.55~\mathrm{cm}$ 、外孔  $1.2~\mathrm{cm}$ 。67 号住居跡覆土上層出土。 $13\cdot14$  は石庖丁で、ともに片岩製である。13 は 3/7 ほどが残存している。側面に抉りをつけており、孔は見られない。表面の風化激しく、研磨痕は見られない。類例が昨年度報告の『藤の尾垣添遺跡 II』でも見られる。84 号住居跡覆土下層出土。14 は表裏ともに剥落が激しく、3/4 ほどしか残存していない。背部がごく僅かにふくらむ外湾刃半月形である。外孔は  $1.0\sim1.85~\mathrm{cm}$ 、内孔  $0.45\sim0.6~\mathrm{cm}$ 、背孔・左 1.7、右  $1.3~\mathrm{cm}$ 、孔間  $1.7~\mathrm{cm}$ である。 $73~\mathrm{5}$  住居跡出土。

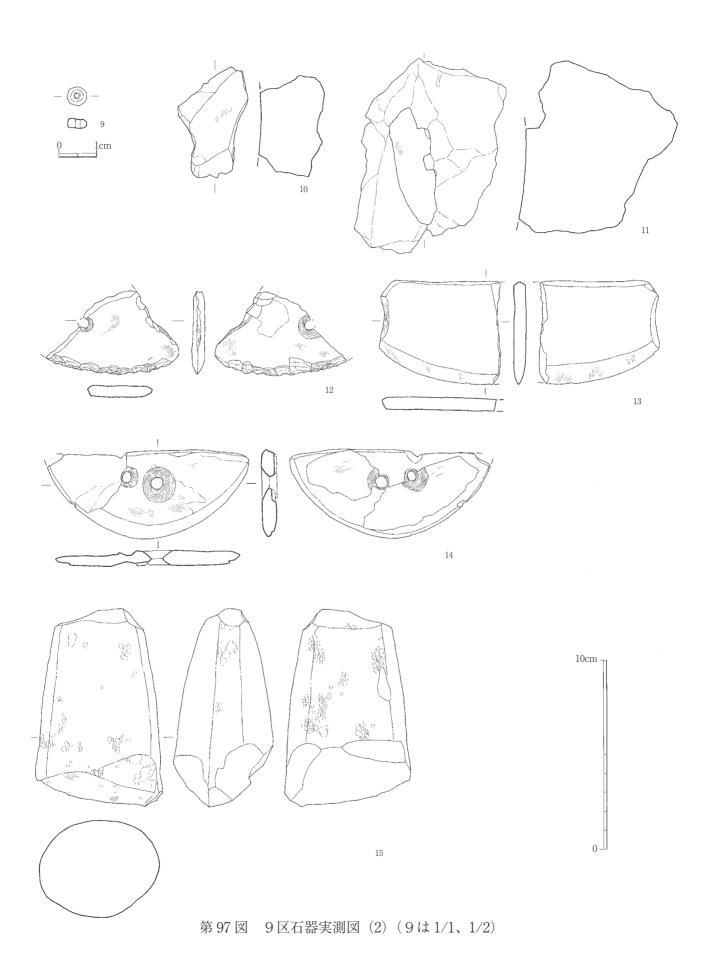
15 は太型蛤刃石斧で1/3ほどが残存している。表面の下部には割れ面に対して敲打および

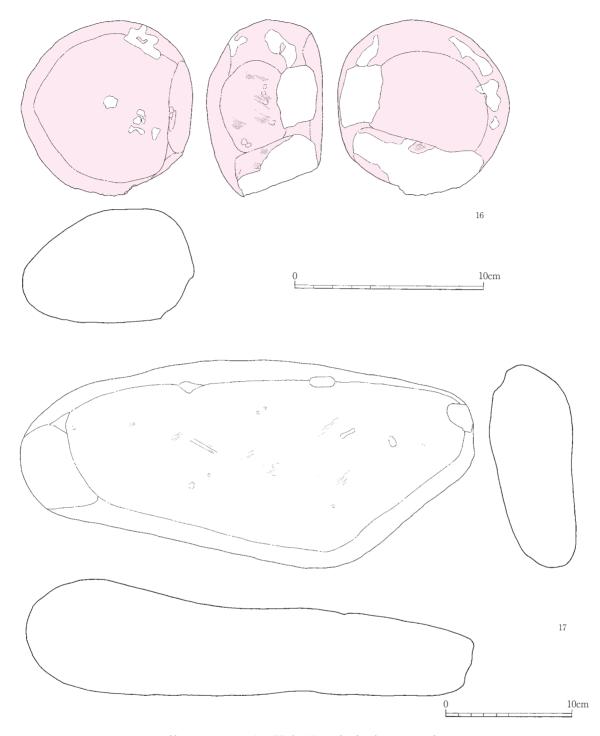
挿図	図番号	図版 番号	区	面	出土遺構 (報告番号)	出土遺構 (注記名)	器種	登録 番号	挿図	図番号	図版 番号	区	面	出土遺構 (報告番号)	出土遺構 (注記名)	器種	登録 番号
96	1	57	9		63号住居跡 覆土上層	65号住居跡 覆土上層	スクレイパー	66	97	12	57	9		67号住居跡	69号住居跡	スクレイパー	77
96	2	57	9		118号土坑	81号土坑	スクレイパー	67	97	13	57	9		84号住居跡 覆土下層	138号住居 跡覆土下層	石庖丁	78
96	3	57	9		119号土坑	83号土坑	スクレイパー	68	97	14	57	9		73号住居跡	78号住居跡	石庖丁	79
96	4	57	9		87号住居跡 覆土上層	142号住居 跡覆土上層	砥石	69	97	15	57	8		48号甕棺墓	26号甕棺墓	磨製石斧	80
96	5	57	9		125号土坑 覆土下層層	164号土坑 覆土下層	砥石	70	98	16	57	9		81号住居跡	86号住居跡	すり石	81
96	6	57	9		68号住居跡 南包含層	70号住居跡 南包含層	砥石	71	98	16	57	9		96号土坑	53号土坑	すり石	82
96	7	57	9		86号住居跡 P1	140号住居 跡P1	砥石	72	99	1	57	9		67号住居跡 覆土	69号住居跡 覆土	鉄鏃	83
96	8	57	9		67号住居跡 覆土	69号住居跡 覆土	砥石	73	99	2	57	9		79号住居跡 覆土下層	84号住居跡 覆土下層	鉄鎌	84
97	9	57	9		84号住居跡 覆土下層	138号住居 跡覆土下層	ガラス玉	74	99	3	57	9		87号住居跡 付近遺構面	142号住居跡 付近遺構面	鉄鎌	85
97	10	57	9		96号土坑	53号土坑	砥石	75	99	4	57	9		遺構面	遺構面	袋状鉄斧	86
97	11	57	9		96号土坑	53号土坑	砥石	76									

第6表 『藤の尾垣添遺跡Ⅲ』掲載石器・石製品、金属器一覧

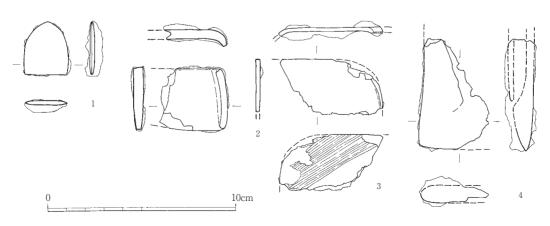


- 141 -





第 98 図 9 区石器実測図 (3) (1/2、1/3)



第99図 9区鉄器実測図 (1/2)

挿図番号	種類	区	出土地点(報告番号)	注記番号	長·径 (cm)	幅·径 (cm)	厚·高 (cm)	重量 (g)	残存率	材質	備考
第96図1	スクレイパー	9	63号住居跡覆土上層	65号住居跡覆土上層	(3.5)	(3.5)	1.25	(16.0)	破片	安山岩	
第96図2	スクレイパー	9	118号土坑	81号土坑	4.2	4.9	10.5	14.4	ほぽ完存	安山岩	
第96図3	スクレイパー	9	119号土坑	83号土坑	5.7	8.9	1.6	58.2	完存	安山岩	
第96図4	砥石	9	87号住居跡覆土上層	142号住居跡覆土上層	5	(4.9)	1.2	(42.3)	1/2	白色頁岩	仕上砥。持ち砥
第96図5	砥石	9	125号土坑覆土下層	164号土坑覆土下層	4.9	7.7	2.6	105.8	ほぽ完存	白色頁岩	仕上砥。持ち砥
第96図 6	砥石	9	68号住居跡南包含層	70号住居跡南包含層	(5.6)	(6.2)	1.7	(90.0)	破片	片岩	仕上砥。
第96図7	砥石	9	86号住居跡P1	140号住居跡P 1	(9.0)	4.0	1.55	94.8	2/3	頁岩	仕上砥。持ち砥
第96図8	砥石	9	67号住居跡覆土	69号住居跡覆土	(14.4)	7.5	5.1	362	9/10	白色頁岩	仕上砥。置き砥?
第97図 9	ガラス玉	9	84号住居跡覆土下層	138号住居跡覆土下層	0.5		0.25	0.09	完存		コバルトブルー。孔径0.15cm
第97図10	砥石	9	96号土坑	53号土坑	(5.8)	(3.6)	(3.9)	(69.3)	破片	細粒砂岩	
第97図11	砥石	9	96号土坑	53号土坑	(10.3)	(8.0)	(9.6)	(560)	破片	細粒砂岩	仕上砥。置き砥。
第97図12	スクレイパー	9	67号住居跡	69号住居跡	4.4	6.9	0.65	26.1	ほぽ完存	片岩	石庖丁の再利用。石庖丁の1/4
第97図13	石庖丁	9	84号住居跡覆土下層	138号住居跡覆土下層	5.4	(6.4)	0.7	(47.5)	3/7	片岩	横に抉り
第97図14	石庖丁	9	73号住居跡	78号住居跡	4.7	10.6	0.85	(45.9)	3/4	片岩	剥離。背孔1.7、1.3孔間1.7内 孔0.45~0.6外孔1.0~1.85cm
第97図15	磨製石斧	8	48号甕棺墓	26号甕棺墓	10.4	6.7	5.25	525	ほぽ完存	玄武岩	楔に再利用か。斧としては1 /3残存
第98図16	すり石	9	76号住居跡	81号住居跡	9.3	9.1	6.1	685	ほぽ完存	安山質凝灰岩	ベンガラ付着
第98図16	すり石	9	96号土坑	53号土坑	16.4	35.8	9.2	6250	ほぽ完存	安山質凝灰岩	
第99図1	鉄鏃	9	67号住居跡覆土	69号住居跡覆土	2.8	2.4	0.2	5.90	完形		小形、無茎式
第99図 2	鉄鎌	9	79号住居跡覆土下層	84号住居跡覆土下層	(3.5)	3.2	0.5	15.6	破片		直刃鎌
第99図3	鉄鎌	9	87号住居跡付近遺構面	142号住居跡付近遺構面	(5.4)	3	0.2	10.0	破片		直刃鎌か
第99図 4	袋状鉄斧	9	遺構面	第1遺構面	(5.9)	(3.7)	0.9	32.7	1/3		

第7表 9区出土石器・石製品、金属器一覧表

研磨痕が認められ、石斧として使用して折れた段階で再度加工を行い、楔などとして再利用しようとしたものと考えられる。裏の割れ面には再加工は見られず刃先も潰れていないことから、再利用途中の未製品であろう。玄武岩製である。 8 区 48 号甕棺墓棺外出土。

16・17 はすり石である。16 は上石で、17 は下石である。16 はほぼ完形で、右面および下面を使用している。剥落した部分以外ほぼ全面にベンガラが付着している。76 号住居跡出土。17 はほぼ完形で、表のみを磨りに使用している。表面は若干擦痕が見られるものの滑らかで、中央部が凹む。安山質凝灰岩製である。96 号土坑出土。(城門義廣)

#### 金属器 (第99図)

1は無茎式の小形鉄鏃で、関は直線となる。平面形は刃部側縁がしっかりした五角形を呈し、刃部断面は菱形に近い杏仁形である。錆がひどく、孔の有無は不明。長さ2.8 cm、幅2.4 cm、厚さ2.0 mを測り、67号住居跡覆土出土。2・3は鉄鎌。2は端部を折り曲げた直刃鎌で、残存部には刃はない。平面形は短冊型で、長さ3.5 cm以上、幅3.25 cm、厚さ5 mmを測る。79号住居跡覆土下層出土。3も直刃鎌になるか。端部にはわずかな折り返しがあるが、全体的に角度・幅ともに小さい。刃部は欠けるが、もう少しで刃部に至ると想定される。長さ5.4 cm以上、幅3.0 cm、厚さ2 mを測り、87号住居跡付近遺構面出土。4 は平面形が撥形の袋状鉄斧で、袋部断面は楕円形になる。錆が顕著なため、袋部内は破線で復元した。長さ5.9 cm以上、幅3.7 cm以上、厚さ0.9 cmを測り、9区遺構面出土。(大庭)

## 3 10区の検出遺構と遺物

## (1) 概要

10 区は9 区と県道を挟み、北側に位置する。調査面積は約300 ㎡である。調査区の標高は6.7m程である。土層は地表面から約80cmが新しい客土であった。調査時は梅雨前ではあったが大雨が降り、水没時にこの客土の土壁が大きく崩落し、調査に大きな支障をきたした。その客土を取り除くと淡青褐色砂質土を中心とする遺構面となる。近年盛んに行われていた土取りのためか、川の氾濫原であったためか、本来、上層にあったであろう粘質土層は失われている。検出遺構は土坑3基、柵列状遺構、その他のピットである。時期は近世を中心とするものであろう。出土遺物はパンケース1箱である。

### 調査日誌抄

平成 16 (2004) 年 5 月 17 日 (月) 現場開始。水汲み。遺構検出。5 月 18 日 (火) 遺構検出。5 月 19 日 (水) 遺構掘削。5 月 20 日 (木) 遺構掘削。平成 21 年 5 月 21 日 (金) 個別写真撮影。図面作成。5 月 25 日 (火) 空撮。レベル入れ。駄目押し。現場終了。

#### (2) 土坑

#### 131 号土坑 (図版 28、第 101 図)

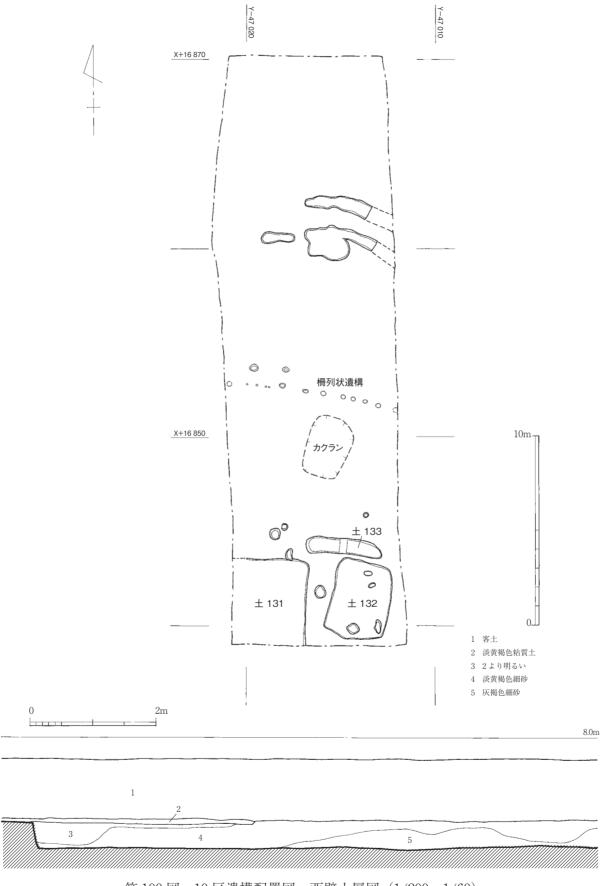
調査区の南西端部に位置する。土坑の規模は長軸 4.5m 以上、短軸 3.9m 以上で南側と東側は調査区外へ延びるが、平面プランは方形を呈するものと考えられる。平坦な床面で、ピット等の掘り込みはない。深さは約 0.1m である。壁の立ち上がりはやや急である。埋土は淡黄褐色粘質土である。出土遺物は、図化できなかったが、土師器片と近世以降と考えられる陶器片が出土している。遺構の時期は近世以降であると考えられる。

### 132号土坑 (図版 29、第 101 図)

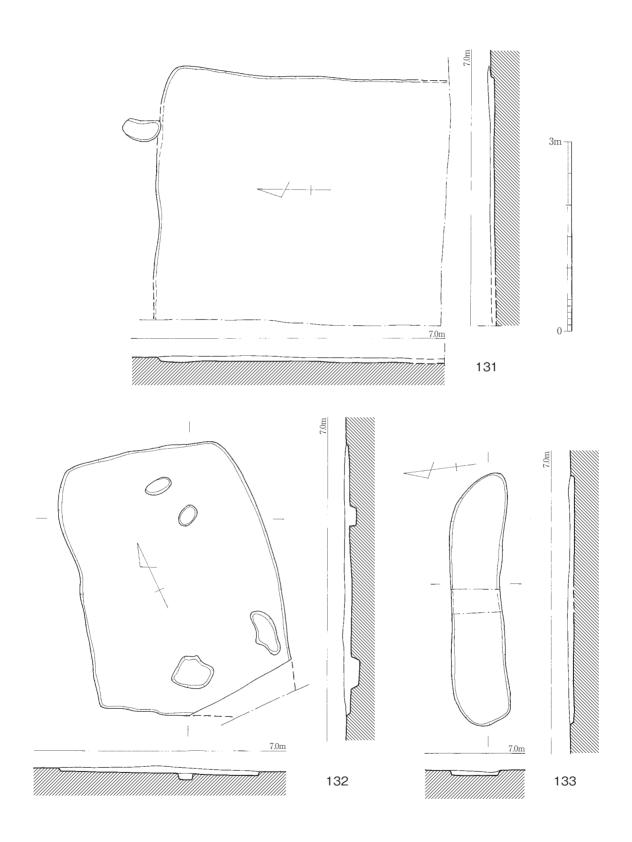
調査区の南東隅で検出した。土坑の規模は長軸 4.2m、短軸 3.2m で、平面プランは隅丸方形を呈する。深さは約 0.1m で、壁の立ち上がりはやや緩やかである。ほぼ平坦な床面で、4基の浅い掘り込みをもつ。埋土は淡黄褐色粘質土である。出土遺物は、図化できなかったが、土師器片が出土している。1号土坑と同様の埋土であることから、遺構の時期は近世以降であると考えられる。

#### 133 号土坑 (図版 29、第 102 図)

調査区の南側で検出した。土坑の規模は長軸 4.0m、短軸 0.8m で、平面プランは長楕円形を呈する。深さは約 0.1m で、壁の立ち上がりはやや急である。ほぼ平坦な床面で、ピット等の掘り込みはない。深さは約 0.1m である。埋土は淡黄褐色粘質土である。遺物は出土していない。1号土坑と同様の埋土であることから、遺構の時期は近世以降であると考えられる。



第 100 図 10 区遺構配置図·西壁土層図 (1/200、1/60)



第 101 図 10 区  $131 \sim 133$  号土坑実測図 (1/60)

### (3) 柵列状遺構

#### **柵列状遺構**(図版 29·30、第 100 図)

調査区の中央やや南寄りで検出した。東西に13基のピットが並ぶ。遺構の時期は不明であるが、新しいものである可能性が高い。

#### (4) 小結

本遺跡では、近世を中心とする土坑3基と柵列状遺構を検出した。ただし、調査範囲が極めて限定されており、遺物も少ないことから、遺跡の性格は、残念ながら不明である。(進村)

## 4 7・8区検出の甕棺墓と遺物

### (1) 概要

当遺跡 7 区中央~北、8 区中央~南にかけて総数 56 基の甕棺墓を検出した。その多くが上層遺構やその後の耕作などによって壊されており、完形で検出できたものは少ない。 3 遺構面の調査を行った 7 区は、11 基検出した第 1 面では弥生時代後期~古墳時代前期の竪穴住居跡の床面や壁から主に検出し、13 基検出した第 2 面では遺構面から、6 基検出した第 3 面は第 2 面で検出できなかった甕棺墓を調査したことになる。 8 区は 1 面の調査であったが、  $31 \sim 34$  号甕棺墓まで表土剥ぎ段階で検出したため、検出レベルが 20 cmほど高く、断面図では他の遺構と比べ浮いた図となった。また、  $7\cdot8$  区の大形棺の墓壙床面は青灰色粘土層まで大きく掘り込んでいるため、床面の把握が難しく、掘り過ぎたものもある。今回検出した甕棺墓の様相は、 1 次調査甕棺墓も含めて  $V-1\cdot2$  (p235  $\sim$ 242) で検討しているため、ここでは事実報告のみとする。

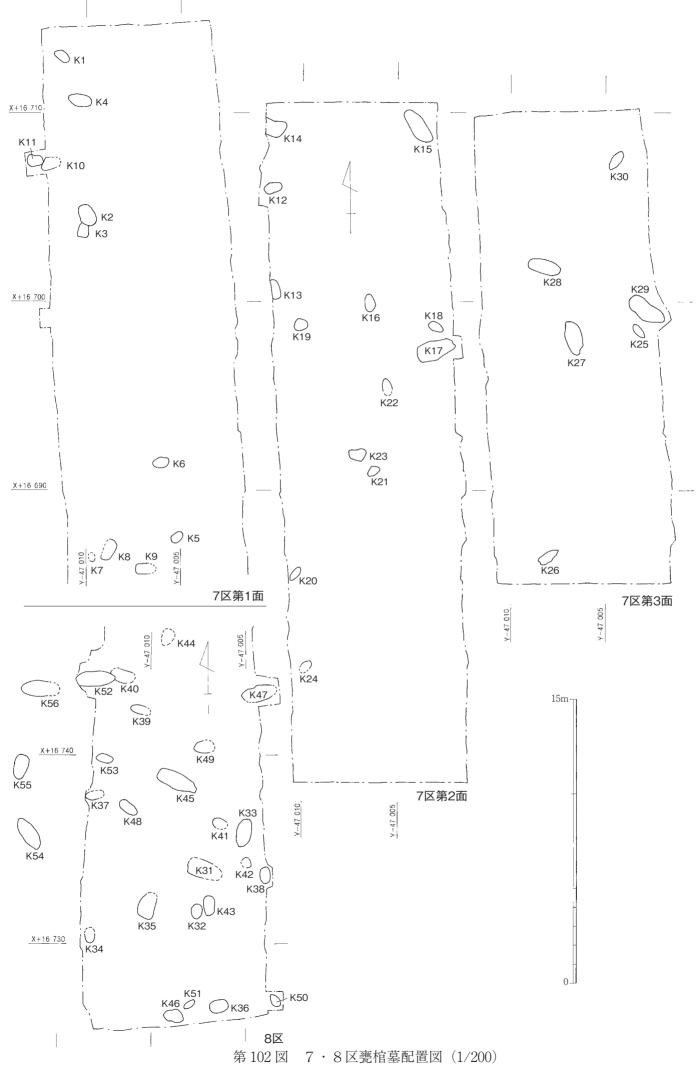
## (2) 7区第1面甕棺墓と遺物

#### 1号甕棺墓(図版31、第103図)

7区第1面の北西隅近くに位置し、上層の14号住居跡の床面精査時に検出した小形棺。14号住居跡P1により上甕の一部を壊され、かつ棺上半部は14号住居跡構築時に水平に壊されていた。墓壙の規模は長軸90cm×短軸52cmで、西側が窄まる墓壙形態と甕棺レベルから、西が下甕、東が上甕の合わせ口式の形態となる。甕棺の方位はN-58°-W、傾斜角は8°を測る。甕棺(図版58、第105図)下甕は胴部最大径が胴部上位になる張りの強い胴部を持ち、底部はやや上げ底である。やや内傾する三角口縁下にはナデ前に行った工具ナデの際の工具痕が認められる。粘土継ぎ目痕から3~4cmの粘土帯で成形していることが分かる。外面の調整は二次加熱により摩滅、内面底部付近は黒化し、かつ内面は全体的に剥離が顕著である。色は淡黄色。甕棺型式は南筑後KIb式。やや内傾する口縁部を持つ上甕は、下甕より張りが少ない胴部で、底部は欠損する。粘土継ぎ目痕から3cm前後の粘土帯で成形していることが分かる。外面は粗いハケを施し、三角口縁下は最後に布による横ナデを施す。内面には指おさえ痕が認められる。色は白灰黄色。甕棺型式は南筑後KIa式。

#### 2号甕棺墓(図版31、第103図)

7区第1面北中央の西寄りに位置し、3号甕棺墓を切る、中形甕を用いた小形棺。棺の大半



7 · 8 区甕棺墓配置図(1/200) - 149 -

はピットで壊されるが、墓壙及び切り込むピットの範囲から、単棺であった可能性が高い。墓壙の規模は現状で長軸 70cm 以上×短軸 43cm 以上を測り、甕棺の方位はN-11°-W、傾斜角は4°程度となる。甕棺時期は弥生中期前半(KI式)になる。

**甕棺**(図版 58、第 105 図) 甕胴部中位以上が欠損した 40%ほど残存する中形棺で、胴部下位 に三角突帯を巡らせる。底部はやや上げ底の厚底で、胴部外面には二次加熱・ススが、底部に は黒斑、内面はすべて黒化する。色は外が灰黄色、内が灰黒色。

#### 3号甕棺墓(図版31、第103図)

7区第1面北中央の西寄りに位置し、2号甕棺墓に切られる、中形甕を用いた単棺の小形棺。土圧により、棺上面が押しつぶされ、棺中央の開いた部分には上層のピットが切り込んでいた可能性がある。墓壙の規模は長軸82cm×短軸55cmの隅丸三角形の形状で、甕棺の方位はN-4°-E、傾斜角は9°を測る。

**甕棺**(図版 58、第 105 図) 60%ほど残存した大きく歪む中形甕で、外傾する三角口縁下には 低平な三角突帯を 1 条巡らし、その下には最後に横ハケを 1 周施す。胴部下半にもやや突出度 が強い三角突帯を巡らし、底部はやや上げ底の厚底である。底部のハケは最後に異なる原体を 用い行っており、外面には二次加熱痕とススが認められる。内面には丁寧なナデを施し、色は 外が黄橙褐色~橙褐色、内が灰褐色を呈する。甕棺型式は南筑後 K I a 式。

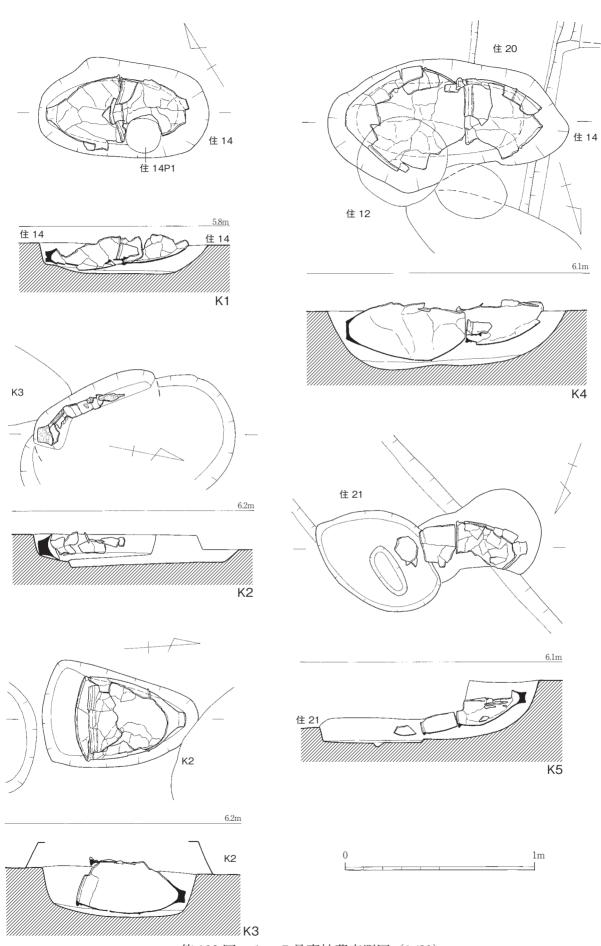
#### 4号甕棺墓(図版 32、第 103 図)

7区第1面北西に位置し、上層には12・14・20号住居跡があり、北側は上層のピットにより大きく壊され、かつ上層の住居構築時に甕棺墓上面を水平に壊されていた。墓壙の規模は長軸127cm×短軸70cmで、墓壙の形状と棺のレベルから、東が下甕、西が上甕で、上甕が下甕に被さる呑口式の中形棺である。甕棺の方位はN-14°-W、傾斜角は7°を測る。

**甕棺**(図版 58、第 105 図) 下甕はいわゆる丸味を帯びた系列に属するもので、三角口縁から 胴部最大径の位置に貼り付けた三角突帯まではヘラナデ、その三角突帯から底部近くまではハケの後は基本的に布等でナデ消し、底部付近は工具ナデ後ナデを施している。また口縁上端部までミガキを施す。外面には黒斑があり、胎土は精良で、色は灰黄褐色を呈する。甕棺型式は南筑後 K I a 式で、丸みを帯びた系列では最古段階のものとなる。上甕は、胴部が強い丸味を帯びた中形甕で、底部は欠損する。わずかに内傾する三角口縁下にはかなり低平な三角突帯を巡らし、胴部下半にも三角突帯を巡らす。胴部下半の調整は最初に細かな縦ハケを、その後に粗いハケ、最後に突帯下は横ハケを行い、三角突帯には横ハケの際の工具痕が認められる。胴部外面上位には 3 × 1.5 cm程度の黒斑が 2 ヶ所あり、焼成時の支えの痕跡である可能性がある。色は黄褐色。甕棺型式は南筑後 K I b 式。

### 5号甕棺墓(図版 32、第 103 図)

7区第1面中央のやや北寄りに位置し、上層の21号住居跡によりその大半を壊された小形 棺。墓壙西側は住居の外になるため、墓壙の深さは30cmほど残存するが、住居内の、特に下 甕は口縁部残存率が1/8程度とかなり壊されている。検出レベルが異なるため、墓壙は不整



第 103 図  $1 \sim 5$  号甕棺墓実測図 (1/20)

形となるが、墓壙の規模は現状で長軸 116cm × 短軸 52cm、棺のレベルから、東が上甕、西が下甕の、合わせ口の形態となる。なお、下甕部分の円形掘り方内の細長い落ち込みは掘り間違いである。甕棺の方位はN-69°-E、傾斜角は9°を測る。

**甕棺**(図版 58 第 105 図) 下甕は胴部が丸味を帯びた器形で、丸味を帯びた三角口縁下にはかなり低平な三角突帯を貼り付ける。胴部外面のハケはほとんど摩滅しており、色は淡灰黄色。甕棺型式は南筑後 K I a 式。上甕は、やや内傾する外端部にはナデ凹線が巡る三角口縁を持ち、器壁の厚めである。胴部中位には焼成後に外→内に打ち欠いた大きめの穿孔を持つ。厚い底部はやや上げ底で、口縁部と底部には黒斑がある。色は外が淡灰黄色、内は暗灰黄色を呈する。甕棺型式は南筑後 K I a 式。

### 6号甕棺墓(図版 32、第 104 図)

7区第1面中央の北寄りに位置し、上層には21号住居跡が存在する。当棺南の第2面21号 甕棺墓とは一部重複する可能性がある。21号住居跡構築の際に上面を水平に壊され、かつ北側の一部を21号住居跡P1に壊されている。墓壙の規模は長軸91cm×短軸60cm以上の卵形を呈し、鉢+甕という組み合わせと墓壙の形状から、西が下甕、東が上甕となる。また、下甕の胴部上半~口縁部は打ち欠き、図面では上甕を下甕に挿入した呑口式の形態となるが、棺自体の法量から、上棺が下棺内にずり落ちただけの可能性が高く、本来は合わせ口の形態となるか。甕棺の方位はN-80°-E、傾斜角ははぽ水平である。

**甕棺**(図版 58、第 106 図) 下甕は胴部上位を打ち欠いたもので、胴部中位には小振りな三角突帯を巡らす。卵形を呈する胴部は粘土継ぎ目痕から5~6 cm程度の粘土帯で成形したことが分かり、底部は平底。外面胴部上位は横ミガキ、胴部下位は短めの縦ミガキを施し、後に暗茶褐色の化粧土を外面全体に施す。外面には弱い二次加熱及びススが認められる。生地は外が灰橙褐色、内が灰色。甕棺型式は南筑後KIb式か。上甕は大形の鉢を用いたもので、下甕と同様に外面には暗茶褐色の化粧土を施す。やや内傾する三角口縁から少し離れた位置に小振りな三角突帯を巡らす。内外面はナデ調整で、内面の一部は黒化する。生地は灰黄色。甕棺型式は南筑後KIb式。

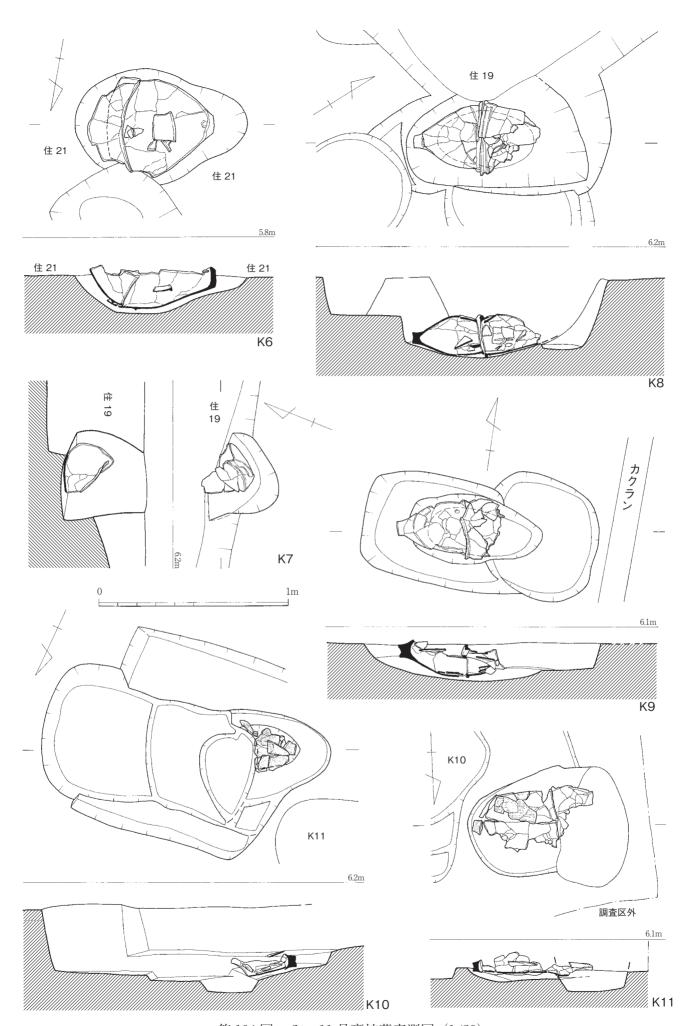
#### 7号甕棺墓(図版 33、第 104 図)

7区第1面中央の西寄りに位置し、南西には第2面20号甕棺墓が存在する。棺北側の半分以上を19号住居跡に壊され、棺として確認できたのは壺胴部1/2ほどで、それが上下棺ないしは単棺になるかどうかは不明である。墓壙の規模は現状で南北40cm以上×東西42cm以上の半円状を呈し、甕棺の方位はN-68°-E、傾斜角は18°程度か。

**甕棺**(図版 58、第 105 図) 須玖 II 式古段階の壺胴部を棺に用いたもので、40%ほど残存する。 口縁部は打ち欠いた可能性があり、底部は欠損する。胴部は「く」の字状に強く張り、胴部最 大径とその上位には工具による沈線を1条巡らす。外面は細かいハケのちヘラナデを施す。胎 土は精良で、色は外が灰茶褐色、内が黄茶色。

#### 8号甕棺墓(図版33、第104図)

7区第1面中央の西寄りに位置し、南東には第3面26号甕棺墓が存在する。西を19号住居



第 104 図  $6\sim11$  号甕棺墓実測図 (1/20)

跡、東・南を上層ピットにより壊される。19号住居跡構築時の土圧により上面が押しつぶされ、また上甕の胴部下半~底部にかけては検出できなかったため、東のピット掘削時に抜き取られたと考えられる。墓壙の規模は現状で長軸 126cm 以上×短軸 64cm 以上の、南側が窄まる卵形を呈し、墓壙の形状と甕棺のレベルから、北が上甕、南が下甕となる合わせ口式の小児棺である。また上甕内にはその割れ目を塞ぐかのように破片を入れていた。甕棺の方位はN-32°-E、傾斜角は4°である。

**甕棺**(図版 58、第 106 図) 下甕はやや歪みがあるほぼ完形のもので、やや丸味を帯びる砲弾形の胴部には粗いハケを施し、口縁下のみ最後に横ハケを施す。口縁上端部と底部には黒斑があり、色は白黄褐色を呈する。口径 28.7 cm、底径 6.3 cm、器高 34.8 cmを測る。甕棺型式は南筑後 K I b 式。上甕はかなり歪みがあり、上端部が窪む三角口縁は外傾する。三角口縁下にはかなり低平な三角突帯を巡らし、砲弾形の胴部は粗いハケを施す。口縁上端部には薄い黒斑あり。色は白黄褐色。甕棺型式は南筑後 K I b 式。

## 9号甕棺墓(図版 33、第 104 図)

7区第1面中央に位置し、当棺北東に位置する8号甕棺墓との間には、第3面26号甕棺墓が存在する。下甕の多くはピットにより壊され、棺上半分は土圧により押しつぶされている。墓壙の規模は現状で長軸94cm以上×短軸56cmの隅丸方形を呈し、甕棺のレベルと墓壙の形状から、東が下甕、西が上甕の、合わせ口式の小児棺になる。甕棺の方位はN-81°-E、傾斜角は5°である。

**甕棺**(図版 59、第 106 図) 下甕は胴部下半部が欠損し、胴部はやや丸味を帯びている。やや内傾する「コ」の字状を呈する口縁部は上面がわずかに窪み、その外面には黒斑がある。色は灰黄色。甕棺型式は南筑後 K I b 式。上甕はやや器壁の厚い、砲弾状の器形で、胴部外面のハケは一部ナデ消している。上面がわずかに窪む三角口縁下とやや上げ底の厚い底部付近には黒斑があり、色は灰黄色。甕棺型式は南筑後 K I a 式。

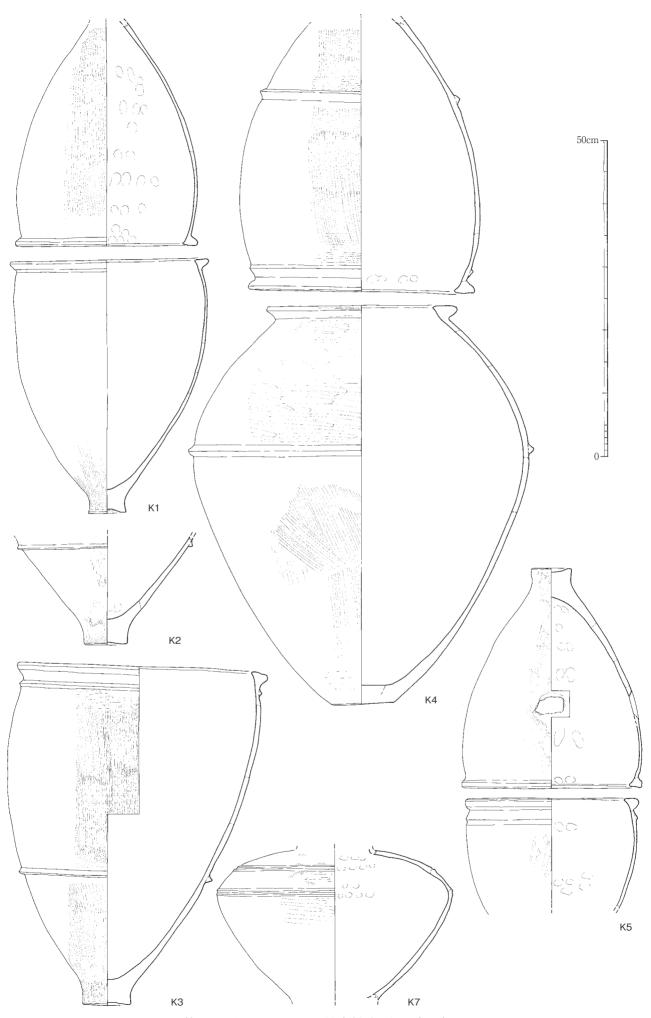
## 10 号甕棺墓(図版 34、第 104 図)

7区第1面北中央の西端に位置し、11号甕棺墓と接する。東側の大部分を上層ピットにより壊され、かつ土圧による押しつぶされ方が顕著。棺として確認できたのは、甕の胴部中位〜底部の1/2ほどであり、それが上下棺ないしは単棺になるかどうかは不明。墓壙の規模は現状で南北 52cm 以上×東西 52cm の、おそらく楕円形を呈する形状になる。甕棺の方位はN-65°-E、傾斜角はほぼ水平である。甕棺時期は弥生中期前半(南筑後KI式)である。

**甕棺**(図版 59、第 106 図) 胴部中位以上を欠損するもの。ハケは最初に粗めのハケを施し、後に底部付近のみ細かいハケを施す。底部はやや上げ底の厚いもの。外面には二次加熱痕、ススが認められる。色は淡橙褐色~淡黄褐色。

## 11 号甕棺墓 (図版 34、第 104 図)

7区第1面北中央に西端に位置し、10号甕棺墓と接する。西の上甕の多くは上層ピットに壊され、甕棺墓上面は土圧により押しつぶされている。墓壙の規模は現状で長軸70cm以上×



第 105 図  $1 \sim 5 \cdot 7$  号甕棺実測図 (1/6)

短軸 54cm の、おそらく楕円形を呈し、甕棺のレベルと合わせ口方法から、東が下甕、西が上甕となる、合わせ口式の小形棺である。甕棺の方位はN-87°-W、傾斜角はほぼ水平である。甕棺(図版 59、第 106 図)下甕の胴部外面は基本は縦ハケを施し、上位のみ横ハケを最後に施す。なお、三角口縁下には横ハケを施した際の工具の凹みが残る。底部はやや上げ底で、外面下位には二次加熱、ススがある。色は灰黄褐色。甕棺型式は南筑後KIa式。上甕は、胴部中位以下が欠損。外面は摩滅のため、調整が不明。色は灰橙褐色。甕棺型式は南筑後KIa式。なお、当棺内からは弥生時代後期終末~古墳時代前期前半に位置づけられる在地系壺の口頸部~胴部片が出土した。外面全体には化粧土を施し、内面は工具ナデのちナデで調整。外面には黒斑があり、胎土は非常に細粒が多く、生地は灰黄色。この土器は当棺を切る上層ピットの時期を示していると考えられる。

## (3) 7区第2面甕棺墓と遺物

### 12号甕棺墓(図版34、第107図)

7区第2面の北西端近くに位置し、北西で第1面10・11号甕棺墓を確認している。上甕上面の一部は土圧によりが押しつぶされているが、全体的に残りの良い甕棺墓である。墓壙の規模は長軸94cm×短軸59cmの長楕円形を呈し、甕棺のレベルから西が下甕、東が上甕の、合わせ口式の小形棺である。棺の方位はN-75°-E、傾斜角は27°を測る。

甕棺(図版 59、第 109 図) 上・下甕ともほぼ完形ながら、歪みが顕著なものである。下甕は 三角口縁と砲弾形の胴部、底部はやや上げ底の厚底。底部には黒斑あり、色は灰黄褐色。甕棺 型式は南筑後 K I a 式。特に歪みが顕著な上甕は、下甕よりやや丸味を帯びた砲弾形の胴部を 持ち、外面底部付近は最後に縦ハケを施す。内面口縁下では布痕と考えられる痕跡を確認した (図版 59)。外面底部には黒斑、内面下位は黒化し、色は灰黄褐色。甕棺型式は南筑後 K I a 式。

#### 13 号甕棺墓(図版 34、第 107 図)

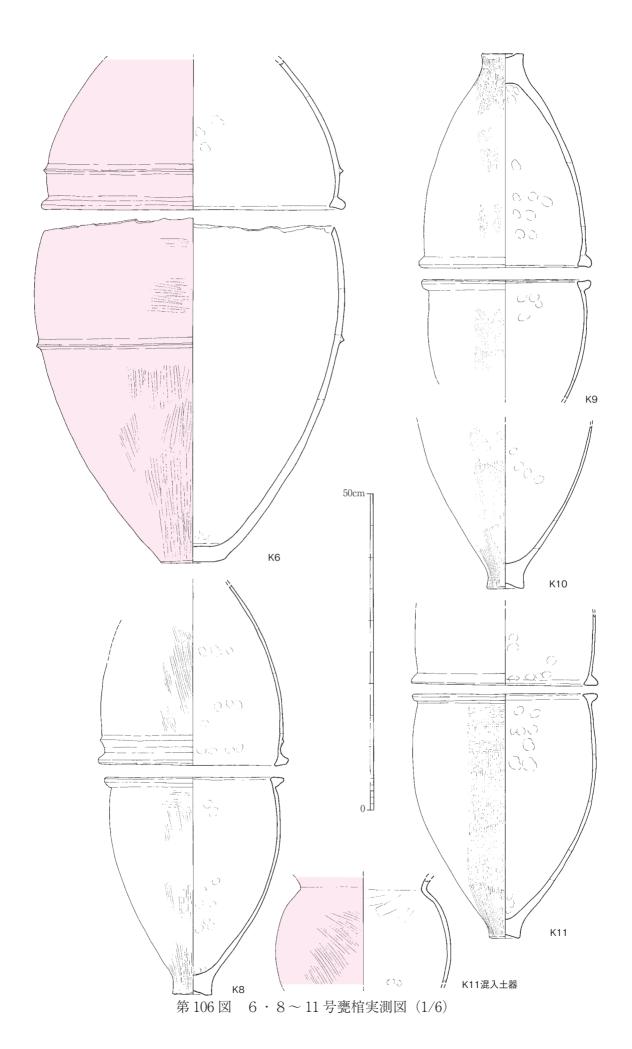
7区第2面北中央の西端の、25号土坑を切る、小形甕を用いた単棺の甕棺墓。土圧により、特に棺床面側が押しつぶされている。墓壙の規模は長軸102cm×短軸50cm以上の、おそらく長楕円形の形状となる。棺の方位はN-19°-W、傾斜角は15°を測る。

**甕棺**(図版 59、第 109 図) 三角口縁内端部が内に突出し、胴部は砲弾形、底部は少し上げ底の器形になる。外面底部付近は最後に粗いハケを施す。少し歪みはあるが、85%ほど残存し、復元法量は口径 30.2 cm、底径 5.5 cm、器高 40.5 cmを測る。外面下位には黒斑及び二次加熱が認められる。色は黄褐色を呈する。甕棺型式は南筑後 K I b 式。

#### 14 号甕棺墓 (図版 35、第 107 図)

7区第2面の北西端に位置する、中形甕を用いた単棺の甕棺墓で、北側をピットにより壊される。土圧により、棺上面が押しつぶされ、棺には細かい割れ・ヒビが認められる。墓壙の規模は長軸  $127cm \times 短軸 111cm$  以上の、棺の規模に対して大きな楕円形になる。棺の方位は N-88°- E、傾斜角は3°を測る。

甕棺(図版 59、第 109 図) 70%近く残存する中形甕棺で、三角口縁下と胴部下位には三角突



- 157 -

帯を巡らせる。胴部はやや丸味を帯びた砲弾形で、底部はやや上げ底である。外面は二次加熱が顕著で、薄いススも付着する。また胴部内面は黒化する。色は外が灰黄色、内が黒色を呈する。甕棺型式は南筑後KIb式。

#### 15 号甕棺墓 (図版 35、第 108 図)

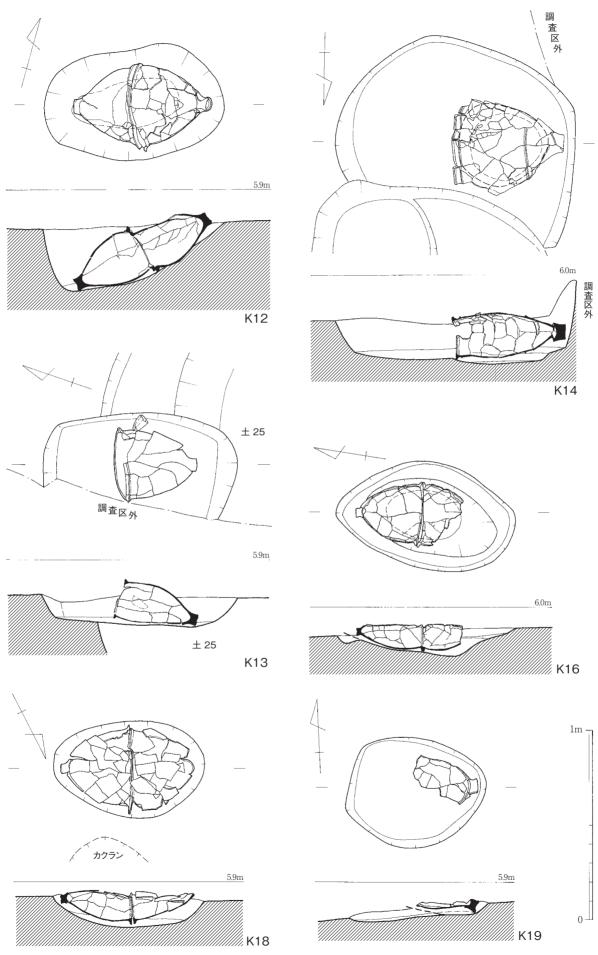
7区第2面の北東隅で検出した大形棺である。半分程度第1面15号住居跡と重複するため、特に下甕の上半分は土圧により押しつぶされ、かつ住居のベッド状遺構構築の際に抜き取られている。墓壙の規模は長軸202cm×短軸88cmの長楕円形を呈し、棺のレベルから、西が下甕、東が上甕の、合わせ口式の棺となる。なお、図化した墓壙下端は棺検出後に一段掘り下げた時のもので、本来の下端ではない。また当棺は青灰色粘質土層まで掘り抜いているため、床面が検出困難であり、調査では床面を掘り過ぎてしまい、やや棺が中に浮いた断面図となってしまった。なお、破線で囲んだ範囲で人の歯を確認した。棺の方位はN41°-W、傾斜角は7°を測る。甕棺(図版59、第109図)内・外とも突出が未発達な「T」字形の口縁部で、胴部上位がほば直立し、胴部中位にはかなり小振りな三角突帯を巡らせる。ほぼ完形ながら、かなり歪んでおり、器壁はやや厚めで、やや上げ底の底部は6cmと厚い。また粘土継ぎ目痕から、4cm前後の粘土帯で成形していることが分かる。胴部外面及び底部には黒斑があり、内面も半分程度黒化する。色は外が灰黄色~灰橙色、内が灰黄色を呈する。甕棺型式は南筑後KIc式。

やや歪みが認められるほぼ完形の上甕の口縁部は「コ」の字状口縁で、胴部中位には小振りな突帯を巡らせる。底部はやや上げ底で、厚みは5cmほどと下甕に比べ、やや薄い。粘土継ぎ目痕から5cm前後の粘土帯で成形しており、底部外面には工具痕が認められるため、外面全体はナデの前に工具ナデかハケを施した可能性がある。外面胴部上位及び底部には黒斑があり、色は灰橙褐色~灰黄褐色を呈する。甕棺型式は南筑後KIc式。

#### 16 号甕棺墓(図版 35、第 107 図)

7区第2面北中央に位置し、南では第3面27号甕棺墓を検出している。検出時には棺上半部は水平に壊されており、また下甕の胴部中位~底部は確認できなかったため、上層遺構により、抜き取られたと考えられる。このように、切り込む上層遺構の範囲を検出できなったため、特に南半分の墓壙の形状は自信がない。また墓壙上段部分は掘り過ぎたものである。墓壙規模は長軸70cm程度×短軸38cmの長楕円形を呈し、棺レベルと合わせ口方法から、南が下甕、北が上甕の、合わせ口式の小形棺となる。断面図で示した下甕部分の墓壙の落ち込みは、当初のものと考えられる。棺の方位はN-10°-W、傾斜角はほぼ水平である。

**甕棺**(図版 60、第 110 図) 下甕は胴部下位以下が欠損する。逆「L」字形の口縁部は強く内傾し、胴部は丸味を帯びている。口縁下のみ最後に細かいハケを施し、下位も最後に下→上にハケを施す。内面はナデによる凹凸が顕著である。色は茶褐色を呈する。甕棺型式は南筑後Ⅱ a 式。上甕は下甕と同じく、上面が窪む逆「L」字形の口縁部が強く内傾し、胴部は直立部をもたず、そのまま底部に向かって窄まる。底部は顕著な上げ底で、外面は二次加熱のため摩滅し、底部付近には黒斑がある。胎土には赤色粒を多く含み、色は橙褐色。甕棺型式は南筑後 K Ⅱ a 式。



第 107 図  $12 \sim 14 \cdot 16 \cdot 18 \cdot 19$  号甕棺墓実測図 (1/20)

## 17号甕棺墓(図版 36、第 108 図)

7区第2面北中央の南東端、27号土坑と接する大形棺である。北では18号甕棺墓及び第3面25・29号甕棺墓を検出している。棺の上半分は土圧によりが押しつぶされ、また墓壙東端はピットにより切られる。墓壙の規模は現状で長軸223cm程度×短軸103cmの長楕円形を呈し、墓壙形状及び甕棺のレベルから、東が下甕、西が上甕となる、合わせ口式の大形棺である。なお、甕棺上面破片は棺下面と接して出土したことから、棺内部が空洞だった時点で中に落ち込んだことが分かる。棺の方位はN-77°-E、傾斜角はほぼ水平である。

**甕棺**(図版 60、第 110 図) 下甕はやや内傾する逆「L」字形の口縁部を持ち、胴部上位は直立気味で、胴部中位には三角突帯を巡らす。外面は粗めの縦ハケを施し、その後一部斜めハケを行う。なお、口縁下及び突帯下のみ横ハケを施す。底部はほどんど欠損するが、やや丸底状の平底になる。外面胴部中位には黒斑、内面は黒化する。焼成時の温度が低いため焼成は悪く、色は外が灰橙褐色、内が灰褐色~暗茶褐色を呈する。甕棺型式は南筑後 K I c 式。上甕は胴部中位及び底部が欠損するもので、口縁部は上面が窪む逆「L」字形を呈する。胴部は底部に向かってかなり窄まり、胴部中位には突出の強い三角突帯を巡らす。胴部調整は外が縦ハケのち斜めハケを施し、内が工具ナデのちナデを施すため、一部工具ナデ痕がハケ状に残る。外面は黒斑が、内面は黒化する。色は外が茶褐色、内が黒色を呈する。甕棺型式は南筑後 K I c 式。

#### 18号甕棺墓(図版 36、第 107 図)

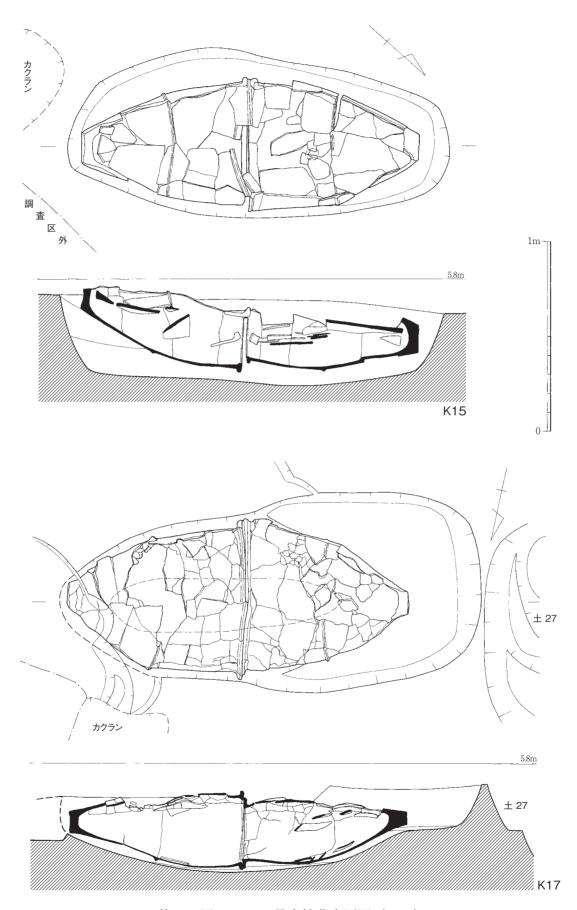
7区第2面北中央の南東端近くに位置し、南には17号甕棺墓があり、また下層第3面の25・29号甕棺墓のちょうど中間に位置する。土圧により、棺上半部は水平に押しつぶされ、かつ上甕底部付近は抜き取られていた。墓壙規模は長軸80cm×短軸52cmの楕円形を呈し、棺レベルから、西が下甕、東が下甕の、合わせ口式の小形棺となる。棺の方位はN-63°-W、傾斜角は3°を測る。

**甕棺**(図版 60、第 110 図) 下甕のやや内傾する口縁部は、口縁上面の窪みが顕著な逆「L」字形を呈し、胴部は砲弾形、底部はやや上げ底の厚底である。胴部は粗いハケを施し、下位のみ後に細かいハケを施す。外面底部には黒斑あり。色は灰黄色。甕棺型式は南筑後 I c 式。上甕は下甕と同じく、上面が窪む逆「L」字形の口縁部で、角度はほぼ水平である。底部は欠損するが、胴部は砲弾形で粗いハケを施し、下位のみ後に細かいハケを行う。胴部下位には黒斑あり、色は灰黄色。甕棺型式は南筑後 K I c 式。

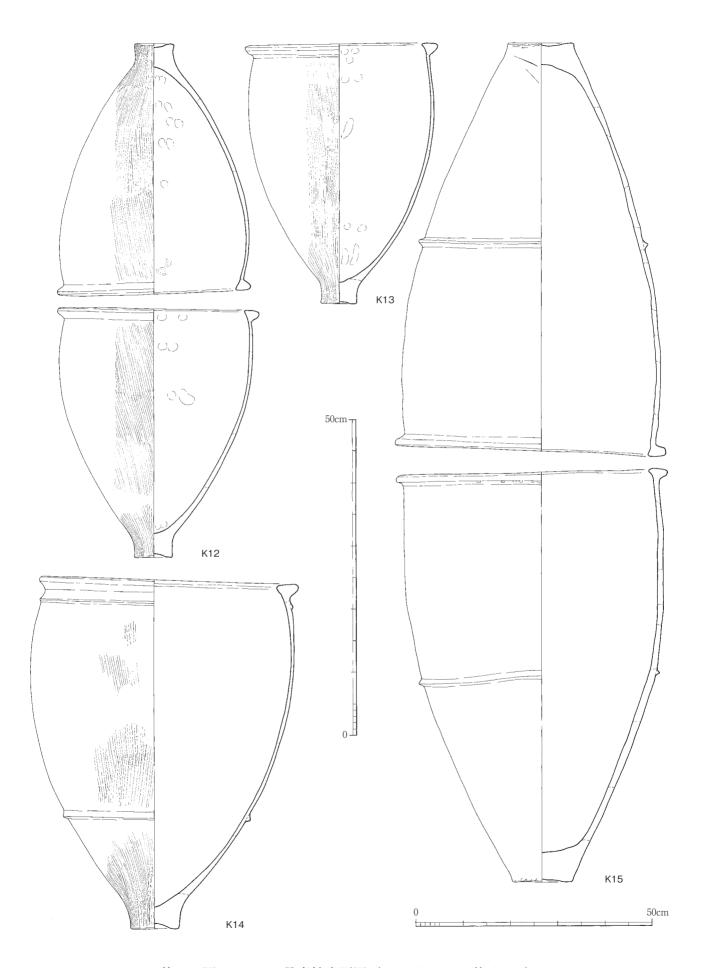
## 19号甕棺墓(図版 36、第 107 図)

7区第2面北中央の西寄りに位置する小形棺である。棺として確認できたのは、甕の胴部中位~底部の1/3ほどであり、それが上・下棺ないしは単棺になるかどうかは不明。また墓壙として検出した範囲も棺と床面の傾斜から判断すると掘り過ぎており、どのような墓壙形状となるかも不明。棺の方位はN-88°-Wを測る。甕棺型式は弥生中期前半である。

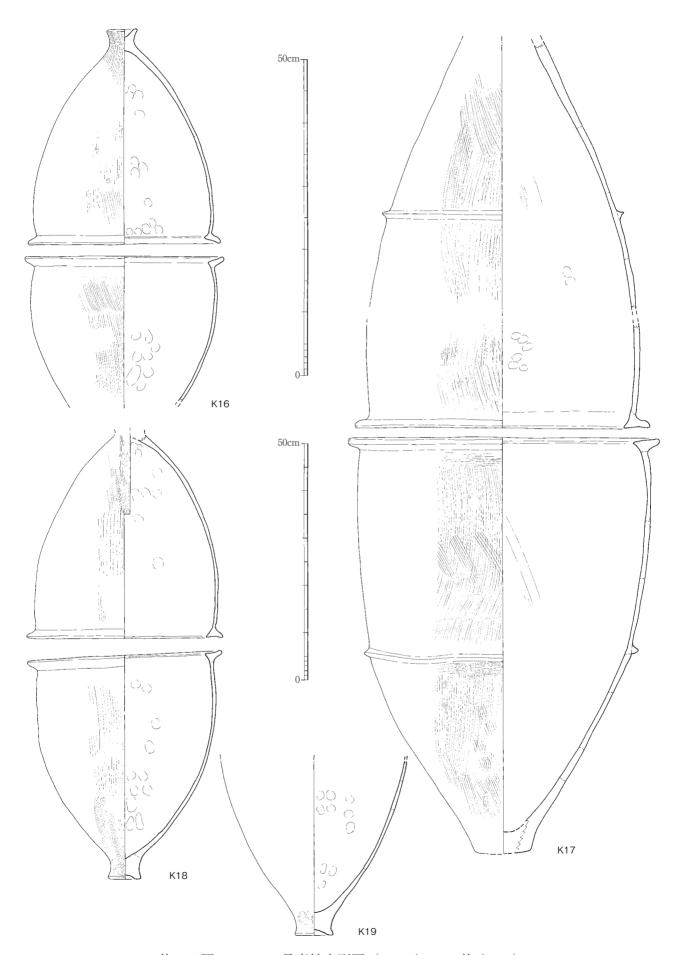
**甕棺**(図版 60、第 110 図) 口縁部~胴部上位が欠損し、底部はやや上げ底の厚底で、黒斑も認められる。外面の調整は摩滅しているものの、ハケのちナデを施したものか。色は外が白黄褐色、内が灰色を呈する。



第 108 図 15・17 号甕棺墓実測図 (1/20)



第 109 図  $12\sim15$  号甕棺実測図(K15 は 1/8、他は 1/6)



第 110 図  $16\sim19$  号甕棺実測図(K17 は 1/8、他は 1/6)

## 20 号甕棺墓 (図版 37、第 111 図)

7区第2面中央西端に位置し、当棺北東の第1面7・8号甕棺墓とは近い場所に存在する。 土圧により、棺上半部は押しつぶされ、またその部分は抜き取られていた。墓壙規模は長軸 83cm×短軸41cmの長楕円形を呈し、棺レベルから、東が下甕、西が下甕の、合わせ口式の 小形棺になる。棺の方位はN-39°-E、傾斜角は2°を測る。

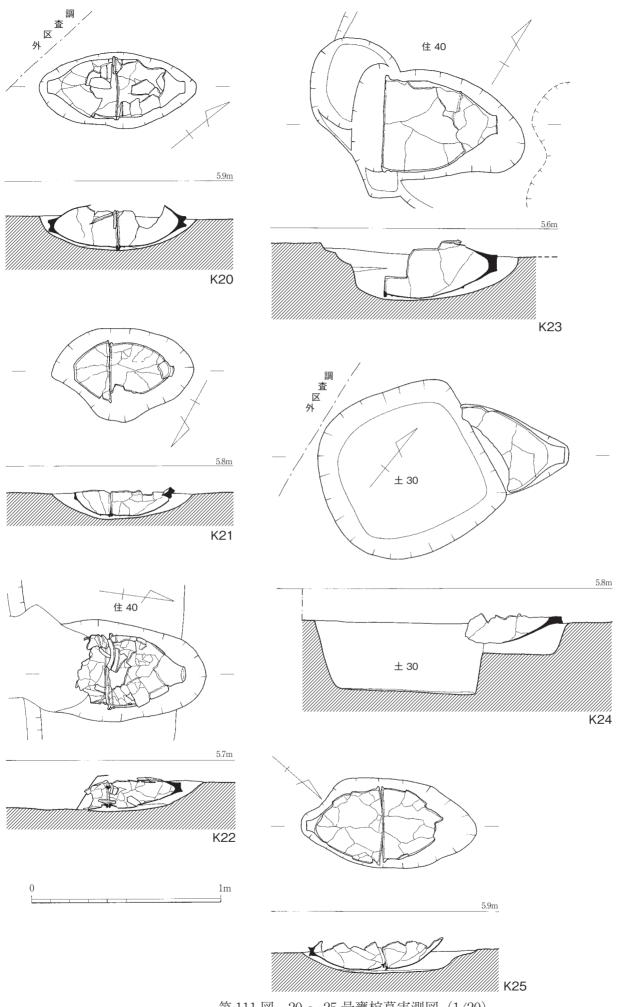
**甕棺**(図版 60、第 114 図) 下甕は三角口縁下 3 cmほどの位置に棒状工具による沈線を 1 条巡らす。胴部は砲弾形で、底部は厚底の上げ底である。口縁部~沈線間は最後に横ハケを施し、口縁下にはその際の工具痕が残る。外面には黒斑があり、二次加熱及びススも認められる。色は灰黄色。甕棺型式は南筑後 I b 式。上甕の口縁部は下甕より外端部が突出し、口縁下には沈線が巡る。底部は厚底かつ上げ底で、口縁~沈線間には横ハケを施すが、下甕と異なり一部縦ハケが切る。また底部付近のみ最後に縦ハケを行っている。外面には黒斑があり、二次加熱痕も認められる。色は灰黄色。甕棺型式は南筑後 K I b 式。

#### 21 号甕棺墓 (図版 37、第 111 図)

7区第2面中央に位置し、北西には23号甕棺墓があり、当棺北東の第1面6号甕棺墓とは一部重複する可能性がある。上層に21号住居跡が存在したため、棺上半分は水平に壊されていた。墓壙規模は長軸74cm×短軸50cmの長楕円形を呈し、鉢+甕という棺形態から、西が下甕、東が甕の合わせ口式の小形棺となる。棺の方位はN-62°-E、傾斜角はほぼ水平である。甕棺(図版60、第114図)下甕の胴部はやや丸味を帯びた砲弾形で、底部はやや上げ底の厚底である。三角口縁下には最後に横ハケを施し、外面には黒斑あり。なお、口縁上端部にある細幅の斜め黒斑(図版60)は、焼成時に藁などで口縁部を覆った痕跡と考えられる。色は外が灰橙色、内が灰橙色~灰褐色。甕棺型式は南筑後Ib式。上甕は鉢を用いており、口縁部は「コ」の字形で、口縁下にはかなり小振りな三角突帯を巡らす。突帯から底部にかけてはミガキを施し、内面は丁寧なナデを行う。色は外が灰茶褐色、内が灰黄色。甕棺型式は南筑後KIb式。

## 22 号甕棺墓(図版 37、第 111 図)

7区第2面中央のやや北寄りに位置し、棺がほぼ40号住居跡のベッド状遺構内に収まるもの。棺下甕の多くを40号住居跡も切るピットに壊され、棺上半分は40号住居跡ベッド状遺構構築時に水平に壊されていた。墓壙規模は長軸79cm以上×短軸54cmの長楕円形を呈し、棺レベルから、南が下甕、北が上甕の合わせ口式の小形棺になる。棺内では上甕内で人骨をわずかに検出したが、残りが悪く部位は確認できていない。棺の方位はN-7°-W、傾斜角は2°を測る。甕棺(図版60、第114図) 胴部中位以下が欠損した下甕は、三角口縁下にはかなり低平な三角突帯を巡らし、胴部は丸味を帯びる。内外面調整はナデで、外面は一部黒化する。胎土には細粒を非常に多く含み、色は灰白色。甕棺型式は南筑後KIa式。上甕は80%近く残存し、復元法量は口径30.5 cm、底径6.4 cm、器高39 cmを測る。やや内傾する三角口縁下にはかなり低平な三角突帯が巡る。胴部は丸味を帯びた砲弾形で、調整は二次加熱による摩滅のため、底部のハケ以外は不明瞭である。底部外面及び口縁部内面には黒斑あり、内面底部は黒化する。胎土には細粒を非常に多く含み、色は灰黄色。甕棺型式は南筑後KIa式。



第 111 図 20 ~ 25 号甕棺墓実測図 (1/20)

## 23 号甕棺墓 (図版 38、第 111 図)

7区第2面中央に位置する、中形甕を用いた単棺の甕棺墓である。棺の南東には21号甕棺墓、第1面6号甕棺墓が存在する。40号住居跡竪穴部南西隅に位置するため、40号住居跡構築時に棺上半分を大きく壊され、かつ抜き取られている。墓壙の規模は長軸113cm×短軸82cmの、北西部が突出する不整形な形状の墓壙である。棺の方位はN-59°-E、傾斜角はほぼ水平である。甕棺(図版61、第114図)「コ」の字形口縁の下と胴部下位には極めて低平な三角突帯を巡らせる。胴部はやや丸味を帯びた砲弾形で、底部はわずかに上げ底となる。外面には二次加熱痕及びススが認められ、色は灰黄色を呈する。甕棺型式は南筑後KIb式。

#### 24 号甕棺墓(図版 38、第 111 図)

7区第2面の南西端近く、本遺跡調査区内で検出した甕棺墓の中で最南端に位置する。上層には24号住居跡が存在するため、棺の上半部のほとんどを壊され、かつ30号土坑により甕胴部~口縁部の多くを壊されていた。墓壙の規模は長軸57cm以上×短軸47cm以上の、ほぼ棺形状と一致する形状の墓壙で、中形甕を用いた単棺となる可能性が高い。棺の方位はN-51°-E、傾斜角はほぼ水平になるか。甕棺時期は弥生中期前半になる。

**甕棺**(図版 61、第 114 図) 胴部上位が欠損した中形甕棺で、胴部下位には極めて小振りかつ 低平な三角突帯を巡らせる。底部は上げ底かつ厚底である。胴部外面のハケは突帯貼り付け後 に行う。また外面はスス状に黒化するが、焼成時の黒化である可能性がある。色は外が灰黄褐 色、内が灰色。

## (4) 7区第3面甕棺墓と遺物

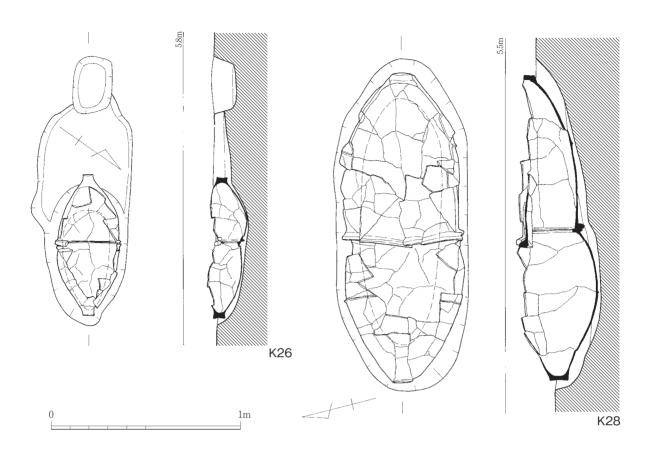
# 25 号甕棺墓 (図版 39、第 111 図)

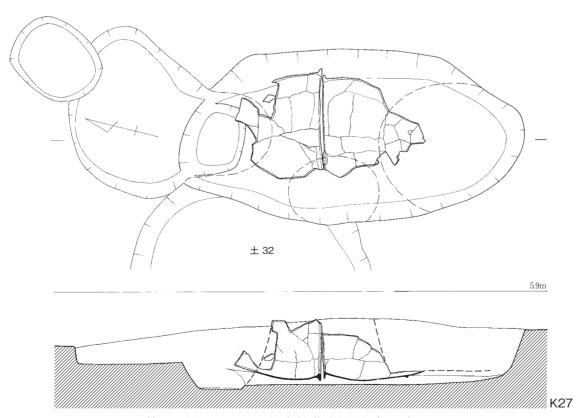
7区第3面中央の東端、29号甕棺墓の南に位置する。また第2面17・18号甕棺墓のちょうど間に位置する。検出時には棺上半分は壊されていた。墓壙規模は長軸92cm×短軸47cmの長楕円形を呈し、棺レベルから、北が上甕、南が下甕の合わせ口式の小形棺である。棺の方位はN-41°-W、傾斜角は9°を測る。

**甕棺**(図版 61、第 114 図) 下甕は、復元口径が 35.5 cmと幅広いもので、上面が窪む「T」字 形口縁部はやや内傾し、胴部の張りはほとんどなく、そのまま底部にかけて丸味を帯びつつ窄 まる器形となる。底部はかなりの上げ底で、やや厚底となる。器壁は薄く、口縁下は最後に工 具ナデのち横ナデで、口縁下にはその際の工具痕が残る。胴部上位には幅細い工具ナデ、胴部下位は原体が異なる細かいハケを最後に施している。色は灰黄褐色。甕棺型式は南筑後 K Ⅱ a 式。上甕は下甕と比べ、口縁部内傾度が強く、胴部上位には張りがあり、底部は平底になる。胴部上位には最後に横方向の工具ナデを施し、口縁下にはその際の工具痕が認められる。底部には上位とは原体が異なる細かいハケを施す。色は灰黄色。甕棺型式は南筑後 K Ⅱ a 式。

## 26 号甕棺墓 (図版 39、第 112 図)

7区第3面中央の南西隅に位置し、第1面8・9号甕棺墓に間を挟まれる。墓壙西端はピットで切られ、検出時には棺上半分は壊されていた。墓壙規模は長軸112cm以上×短軸44cm





第 112 図  $26 \sim 28$  号甕棺墓実測図 (1/20)

の東西に長い長楕円形を呈し、墓壙の形状から、東が下甕、西が上甕の合わせ口式の小形棺となる。棺の方位はN-55°-E、傾斜角はほぼ水平である。

甕棺(図版 61、第 114 図) 下甕はほぼ完形で、口径 35.5 cm、底径 5.2 cm、器高 36.9 cmを測る。 丸味を帯びた三角口縁下には極めて低平な三角突帯を張り付け、底部はやや上げ底かつやや厚底のものである。外面は二次加熱により器表は荒れる。外面には大きな黒斑があり、色は灰黄褐色。甕棺型式は南筑後 K I a 式。やや歪みがある上甕もほぼ完形で、口径 28.0 cm、底径 28.0 cm、器高 36.0 cmを測る。丸味を帯びた三角口縁下には非常に浅く全周しない可能性もある沈線を巡らし、器壁は厚めで、底部は上げ底となる。外面には黒斑がある。色は灰黄褐色。甕棺型式は南筑後 K I a 式。

## 27 号甕棺墓 (図版 39、第 112 図)

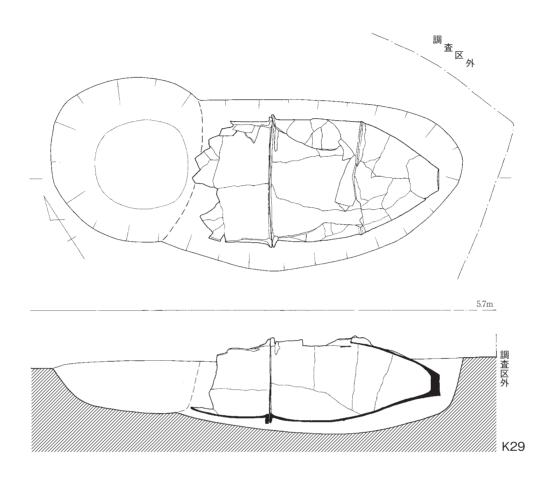
7区第3面中央に位置し、32号土坑を切る。墓壙北・南及び西側で一部を破線で示したピットで切られていた。また上下甕の胴部~底部にかけて抜き取られ、かつ棺上半分も検出時には壊されていた、残りの悪い甕棺墓である。墓壙規模は現状で長軸130cm以上×短軸92cm程度の、おそらく長楕円形を呈するもので、棺レベルと合わせ口方法から、南が下甕、北が上甕の合わせ口式の大形棺になる。棺の方位はN-14°-W、傾斜角は2°を測る。

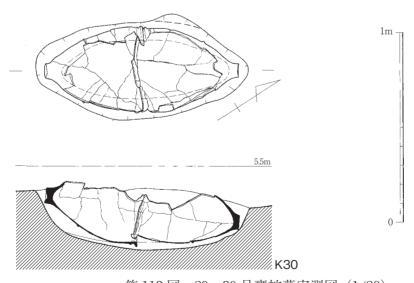
**甕棺**(図版 61、第 115 図) 下甕は胴部下半を欠損し、胴部上位には焼成後外→内の穿孔が認められる。「T」字形の口縁は内傾し、粘土継ぎ目痕から4~6 cm程度の粘土帯で成形したことが分かる。胴部外面はハケが残るが、基本的に最終的にはナデ消しを行う。内面はほとんど黒化し、色は外が灰橙褐色、内が灰黒色。甕棺型式は南筑後 K II a 式。上甕も胴部下半が欠損する。やや内傾する「T」字形口縁部を持ち、胴部外面は下甕と同じく、基本的に最終的にはナデ消しを行う。粘土継ぎ目痕から5 cm程度の粘土帯で成形したことが分かる。口縁上端部には黒斑あり。色は外が灰橙褐色、内が灰黄褐色。甕棺型式は南筑後 K II a 式。

#### 28 号甕棺墓 (図版 40、第 112 図)

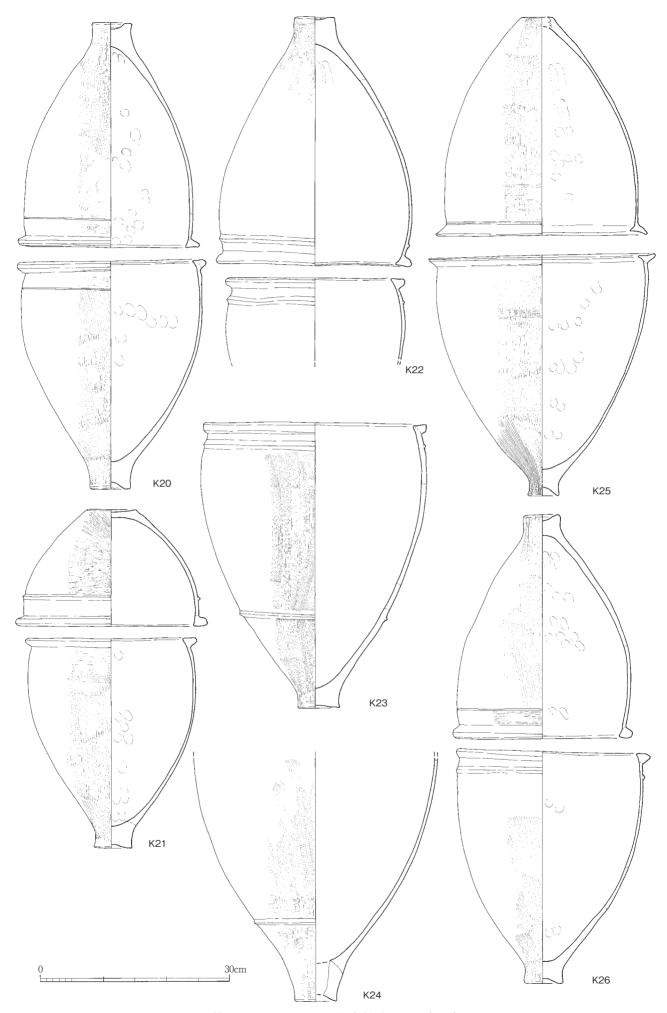
7区第3面北中央に位置する。棺上半分は土圧により押しつぶされ、かつ水平に壊されていた。墓壙の規模は長軸 175cm ×短軸 70cm の、東西に長い長楕円形を呈し、墓壙形状及び甕棺のレベルから西が下甕、東が上甕となる、合わせ口式の大形棺である。棺の方位はN-75°-W、傾斜角は7°を測る。

甕棺(図版 61、第 115 図) 下甕はほぼ完形で、口径 53.4 cm、底径 10.2 cm、器高 79.6 cmを測る。外傾する口縁部内端部は強く突出し、胴部は逆卵形を呈し、胴部中位にはきわめて低平な三角突帯を貼り付ける。粘土継ぎ目痕から 4~6 cmの粘土帯で成形し、外面に残る工具痕から工具ナデのちナデを施したことが分かる。また胴部外面はナデによる凹凸が顕著で、黒斑も認められ、最後に黒塗りを行っている。色は外は橙褐色、内が灰黄色。甕棺型式は南筑後 K I c式。上甕は内傾する「コ」の字形の口縁部、直立気味の胴部上位、また胴部中位には「コ」の字形の突帯という特徴を持つ。80%近く残存し、口径 56.0 cm、底径 12.0 cm、器高 83.0 cmを測る。胴部外面に存在する径 2 cm程度の円形の黒斑は、焼成の際の支持棒の痕跡と考えられる。また底部にも黒斑がある。外面調整は工具ナデのちナデ調整で、色は灰橙褐色~灰黒色。甕棺型式

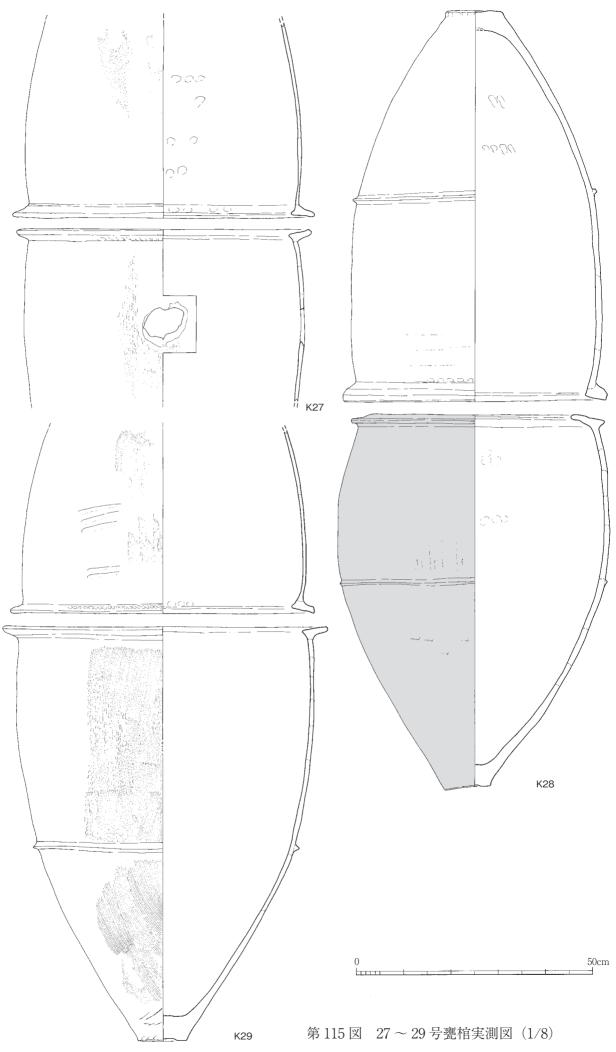




第 113 図 29・30 号甕棺墓実測図 (1/20)



第 114 図 20 ~ 26 号甕棺実測図 (1/6)



は南筑後КІс式。

## 29 号甕棺墓 (図版 40、第 113 図)

7区第3面中央東端に位置し、南には25号甕棺墓が存在する。また第2面18号甕棺墓と一部重複する可能性がある。棺西側の上甕の胴部中位~底部にかけてはピットにより壊され、また棺上半分は土圧により押しつぶされ、かつ水平に壊されていた。墓壙の規模は長軸157cm以上×短軸90cmの長楕円形を呈し、墓壙形状及び甕棺のレベルから東が下甕、西が上甕となる、合わせ口式の大形棺である。棺の方位はN-58°-W、傾斜角は3°を測る。

**甕棺**(図版 61、第 115 図) 下甕はほぼ完形で、口径 68.2 cm、底径 10.2 cm、器高 87.6 cmを測る。口縁部はやや内傾する逆「L」字形口縁部で、胴部中位よりやや下に小振りな三角突帯を巡らせる。粘土継ぎ目痕から 4 cm程度の粘土帯で成形したことが分かり、胴部外面にはハケも残るが、基本的にナデ消しを行っている。内面下位は縦ナデを行う。底部及び口縁部には黒斑があり、内面は黒化する。色は外が橙褐色、内が灰黒色。甕棺型式は南筑後 K II a 式。上甕は胴部下位を欠損し、内傾する逆「L」字形口縁部を持つ。外面調整はまずはタタキを行い、その後縦ハケ、最後にナデ消しを行っている。内面はほとんど黒化し、色は茶褐色を呈する。甕棺型式は南筑後 K II a 式。

## 30 号甕棺墓(図版 40、第 113 図)

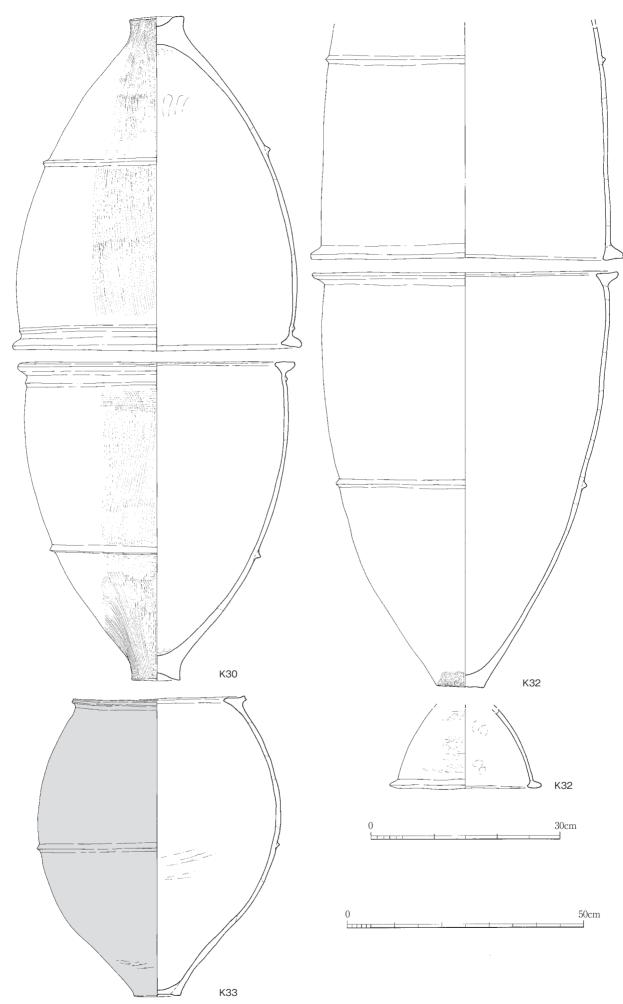
7区第3面の北東隅に位置する。第3面の表土剥ぎの際に棺上面を壊してしまったが、完形でも上層の第1面15号住居跡床面レベルより低いため、甕棺自体はほぼ残っていた可能性が高い。墓壙の規模は長軸112cm×短軸51cmの長楕円形を呈する。墓壙形状及び甕棺のレベルから北が下甕、南が上甕の、合わせ口式の中形棺である。なお、墓壙西側は一部掘り過ぎているため、破線で推定ラインを示した。棺の方位はN-33°-E、傾斜角は8°を測る。

甕棺(図版 62、第 116 図) 下甕はほぼ完形で、口径 43.4 cm、底径 7.5 cm、器高 50.1 cmを測る中形棺。「T」字形口縁直下と胴部下位には三角突帯を貼り付け、両三角突帯下には最後に横ハケを施すが、胴部下位突帯下は一部横ハケのち縦ハケを施している。内面の 1/3 ほど暗灰褐色の付着物があるが、甕棺の内容物が沈殿したものと考えられる。底部は上げ底である。底部と口縁上端部には黒斑があり、色は外が灰黄色、内が灰茶褐色。甕棺型式は南筑後 K I c 式。やや歪みがある上甕もほぼ完形で、口径 45.0 cm、底径 8.6 cm、器高 52.7 cmを測る。やや内傾する三角口縁で、口縁直下と胴部下位には三角突帯を巡らす。また胴部下位の三角突帯下は最後に横ハケを施す。上甕と同じく内面の 1/3 ほど暗灰褐色の付着物があるが、甕棺の内容物が沈殿したものと考えられる。底部は上げ底で、外面は顕著な二次加熱を受ける。底部外面には黒斑あり。色は灰黄褐色。甕棺型式は南筑後 K I c 式。

## (5) 8区甕棺墓と遺物

# 31 号甕棺墓 (図版 41、第 117 図)

8 区南中央のやや東寄りに位置する。上甕の大部分は86 号土坑に壊され、下甕北西側は67 号土坑に壊される。31 ~ 34 号甕棺墓は表土剥ぎ段階で確認したもので、他の甕棺墓より20 cmほ



第 116 図 30  $\sim$  33 号甕棺実測図(K30・32 は 1/6、1 他は 1/8)

ど検出面が高い。検出時には全体的に棺は土圧により押しつぶされていた。墓壙の規模は現状で長軸 158cm 以上×短軸 90cm 程度の隅丸方形状を呈し、墓壙形状及び甕棺のレベルから西が下甕、東が上甕となる、合わせ口式の大形棺である。棺の方位はN-80°-W、傾斜角は 14°を測る。甕棺(図版 62、第 116 図)下甕口縁部は上面がやや窪んた三角口縁で、長砲弾形の胴部中位には三角突帯を巡らす。顕著に残る粘土継ぎ目痕から4~6 cmほどの粘土帯で成形したことが分かる。底部外面にはハケが残るため、胴部外面全体にハケを施し、その後ナデ消していると考えられる。口縁上端部と胴部中位には黒斑があり、内面底部は黒化する。色は黄橙灰色。甕棺型式は南筑後KIc式。上甕は、やや外傾する上面が強く窪んだ三角口縁を持ち、胴部はほぼ直立し、胴部中位には小振りな三角突帯を巡らせる。粘土継ぎ目痕から4 cmほどの粘土帯で成形したことが分かり、内面は黒化する。色は外が灰黄色~茶褐色、内が灰黄色を呈する。甕

## 32 号甕棺墓 (図版 41、第 117 図)

棺型式は南筑後KIc式。

8 区南中央のやや南東寄りに位置する。31・33・34 号甕棺墓と同じく、表土剥ぎ段階で検出したため、周囲の遺構との切り合いは調査段階では確認できておらず、図上で合わせたものである。墓壙南西側の墓壙上端ラインは検出できなかったが、墓壙の規模は長軸86cm×短軸50cmの長楕円形を呈する。甕+鉢の組み合わせから、北甕が下甕、南が上甕の、合わせ口式の小形棺となる。棺の方位はN-18°-E、傾斜角はほぼ水平である。

**甕棺**(図版 62、第 116 図) 調査段階では下甕は存在していたが、その後整理段階で現在行方不明となってしまった。現在も探索中であり、発見後何らかの形で速やかに報告したい。上甕は鉢を用いたもので、下半部は欠損する。丸味を帯びた「T」字形の口縁部はやや外傾し、外面はミガキを施す。外面にはススが付着し、色は茶褐色を呈する。弥生時代中期前半に属する。

# 33 号甕棺墓(図版 41、第 117 図)

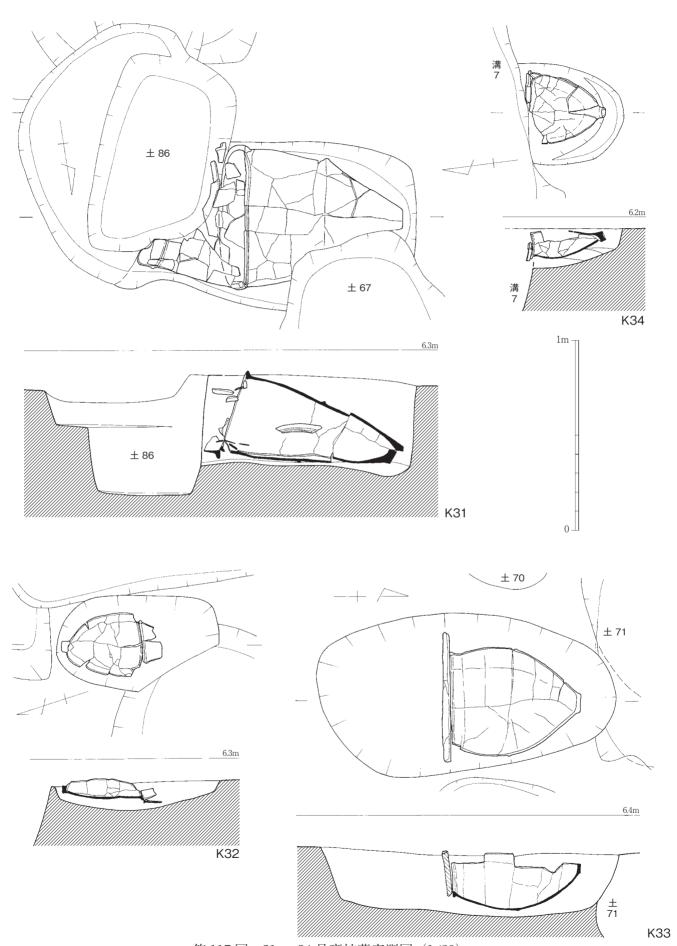
8区南中央の東端近くに位置し、71号土坑を切る。厚さ3cm前後の片岩系板石を大形甕の蓋とする石蓋甕棺墓で、本遺跡唯一の検出例である。棺上半部及び蓋石の一部は検出時には水平に壊されていた。墓壙の規模は現状で長軸155cm×短軸85cm、棺自体の法量に比べ、かなり大きな長楕円形の墓壙になる。棺の方位はほぼ座標北、傾斜角は3°を測る。

甕棺(図版62、第116図)80%近く残存する、いわゆる丸味を帯びた系列に属するもので、



31 号甕棺墓(東から)

復元法量は口径 39.6 cm、底径 10.0 cm、器高 63.2 cmを測る。口縁部はやや内傾する「T」字形で、胴部中位には小振りながら鋭い三角突帯を巡らす。外面には工具痕があるため、工具ナデのち丁寧なナデを施している。また外面全体にはその後黒塗りを施す。内面中位にはナデの稜が顕著に残る。口縁部外面及び胴部下位には黒斑があり、内面下位は黒化する。胎土は精良で、外は茶褐色、内が黄茶褐



第 117 図 31 ~ 34 号甕棺墓実測図 (1/20)

色を呈する。甕棺型式は南筑後KIc式。

## 34 号甕棺墓 (図版 42、第 117 図)

8区南の南西端近くに位置し、7号溝に上甕をほとんど壊される。先述したように、31~33号甕棺墓と同じく、表土剥ぎ段階で検出したため、甕棺調査時には7号溝が切るということに気づかず、後に図上で合成している。なお、下甕上半部は土圧により押しつぶされていた。墓壙の規模は長軸55cm以上×短軸53cmの楕円形を呈する。北棺の残りが悪いため、どちらが北・下甕となるかは自信がないが、合わせ口方法から、北棺を下甕として報告する。棺の方位はN-7°-E、傾斜角は3°を測る。

**甕棺**(図版 62、第 119 図) 下甕は、内への突出が強い口縁部のみ残存するもので、色は黄茶褐色。 上甕口縁部は三角口縁で、胴部は砲弾形、底部は上げ底となる。口縁下には長めの粗い縦ハケ のち横ハケを施す。内面のほとんどは黒化する。底部には黒斑あり。色は外が橙色、内が灰黄 色〜黒色を呈する。甕棺型式は南筑後 K I b 式。

#### 35 号甕棺墓 (図版 42、第 118 図)

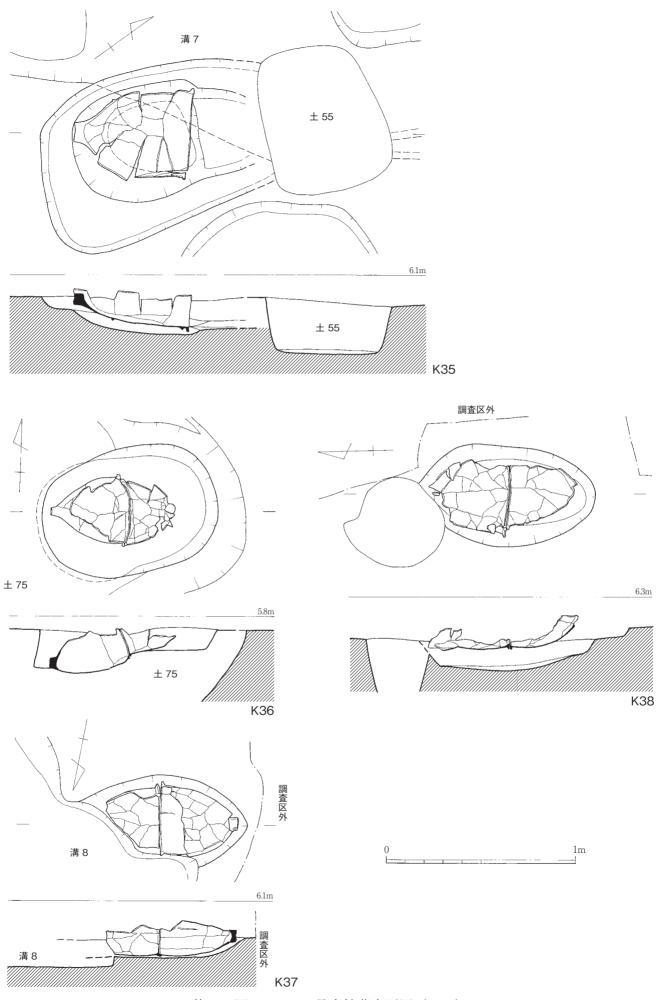
8区南中央のやや南寄りに位置し、55号土坑、7号溝に切られる、中形甕を用いた単棺である。棺上半分は7号溝により大きく壊され、土圧が強かったためか、棺東破片は床面にくい込んだ状態で出土している。墓壙の規模は長軸117cm以上×短軸90cmの長楕円形を呈する。棺の方位はN-36°-E、傾斜角は2°を測る。甕棺型式は弥生中期前半であるが、上下甕棺とも1号甕棺よりやや古い形態となる。

**甕棺**(図版 62、第 119 図) やや内傾気味の「コ」の字形の口縁部直下と胴部下位には三角突帯を巡らせ、底部は弱い上げ底となる。胴部は丸味を帯びた砲弾形で、顕著な二次加熱により、外面調整は摩滅している。外面にはススがあり、内面はほとんど黒化する。70%ほど残存し、復元法量は口径 41.5 cm、底径 8.3 cm、器高 56.1 cmを測る。色は外が黄橙色、内が灰褐色を呈する。甕棺型式は南筑後 K I b 式。

#### 36 号甕棺墓(図版 42、第 118 図)

8区南端の中央やや東寄りに位置し、当棺が切る75号土坑内にきれいに収まる、小形棺である。墓壙の規模は長軸95cm×短軸65cmの長楕円形を呈し、西壁はオーバーハングする。なお、下層に75号土坑が存在したため、棺床面は正確には検出できていない。検出時に棺上半部は、水平に壊されていた。墓壙形状及び甕棺のレベルから、西が下甕、東が上甕の、合わせ口式の形態となる。棺の方位はN-88°-E、傾斜角は20°を測る。

**甕棺**(図版 62、第 119 図) 下甕は歪みが顕著なもの。口縁部は三角口縁でやや内傾し、胴部は丸味を帯びた砲弾形、底部は上げ底となる。口縁直下は縦ハケのち横ハケを施し、底部付近のみ最後に下→上の縦ハケを施す。内面は指おさえ痕が顕著である。色は淡灰黄褐色。甕棺型式は南筑後 KIb式。上甕は胴部中位以下を欠損する。やや内傾する口縁部は三角口縁で、胴部はやや丸味を帯びる。色は灰黄褐色。外面には黒斑あり。甕棺型式は南筑後 KIb式。



第 118 図 35 ~ 38 号甕棺墓実測図 (1/20)

## 37 号甕棺墓 (図版 43、第 118 図)

8区南中央の西端に位置し、棺下甕のほとんどと棺上半分は8号溝により大きく壊されていた。墓壙の規模は長軸90cm以上×短軸45cm以上の長楕円形を呈し、甕棺のレベル及び合わせ口方法から、東が下甕、西が上甕の、合わせ口式の小形棺となる。棺の方位はN-79°-E、傾斜角はほぼ水平である。

**甕棺**(図版 62、第 119 図) 下甕は胴部下位を欠損する。口縁部は逆「L」字形で、ほぼ胴部に張りのない器形となる。口縁直下はナデ凹線があり、胎土は角閃石を多く含み、色は外が茶褐色、内が灰茶色~灰色を呈する。甕棺型式は南筑後 K I c 式。上甕は内傾する逆「L」字形口縁で、器壁は厚めである。胴部は砲弾形、底部は弱い上げ底で厚底。底部外面から胴部中位近くまで最後に縦ハケを施す。底部には黒斑があり、色は橙褐色。甕棺型式は南筑後 K I c 式。

#### 38 号甕棺墓 (図版 43、第 118 図)

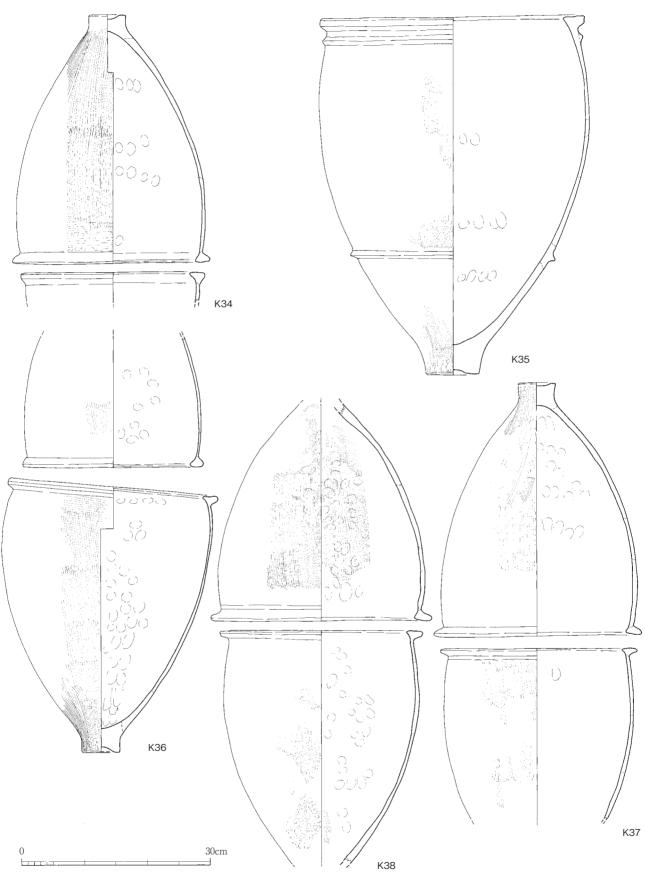
8区南中央の東壁際に位置し、下甕の底部付近をピットに壊され、検出段階で棺の上面 2/3程度は抜き取られていた。墓壙の規模は長軸 93cm 以上×短軸 53cm の長楕円形を呈し、甕棺のレベル及び合わせ口方法から、北が下甕、南が上甕の合わせ口式の小形棺となる。棺の方位は N-2°-E、傾斜角は 4°を測る。

**甕棺**(図版 63、第 119 図) 下甕は底部を欠損し、口縁部は逆「L」字形でやや外傾する。胴部は砲弾形で、胴部外面は基本的にはハケのちナデ消しを行う。内面には指おさえ痕が良く残り、色は淡灰褐色。甕棺型式は南筑後 K I c 式。上甕も下甕と同様、底部を欠損する。逆「L」字形の口縁部はやや内傾し、器壁は厚い。胴部外面はナデによる凹凸、内面も指押さえ痕が顕著で、その後ハケを施している。外面には薄い黒斑があり、内面は黒化する。色は淡灰黄色。甕棺型式は南筑後 K I c 式。

#### 39 号甕棺墓(図版 43、第 120 図)

8区中央の南に位置し、54号住居跡構築時に棺上半部の多くを壊され、また54号住居跡P5により下甕の下半部を抜き取られていた。墓壙の規模は長軸90cm以上×短軸47cmの長楕円形を呈し、北壁はオーバーハング気味に立ち上がる。墓壙形状及び甕棺のレベルから、東が下甕、西が上甕の合わせ口式の小形棺となる。なお、下甕の上面では灰茶褐色粘質土と白色粘土を混ぜた土を検出し(トーンで示す)、検出レベルと位置から棺の目張り粘土と考えられる。棺の方位はN-63°-W、傾斜角はほぼ水平である。

**甕棺**(図版 63、第 123 図) 下甕は底部を欠損した、口縁外端部が突出する三角口縁の甕である。 胴部はやや丸味を帯びた砲弾形を呈し、外面は二次加熱により器表が荒れ、内面は指押さえ痕が認められる。色は外が灰黄褐色、内が灰橙褐色。甕棺型式は南筑後 K I c 式。やや歪みのある上甕は 1/2 ほど残存するもので、やや内傾する三角口縁、上げ底かつ厚底の底部、やや丸味を帯びた砲弾形の胴部を持つ。 胴部上位と下位のハケ原体は異なり、ハケのちナデ消しを行うか。 粘土継ぎ目痕から 4 cmほどの粘土帯で成形したことが分かり、内面底部は黒化する。色は黄褐色を呈する。甕棺型式は南筑後 K II a 式。



第 119 図 34 ~ 38 号甕棺実測図 (1/6)

## 40 号甕棺墓 (図版 44、第 120 図)

8 区中央の西寄りに位置し、53 号住居跡、61・62 号土坑に切られる、大形丹塗磨研甕を用いた単棺である。棺南東部は62 号土坑に大きく壊され、土圧による歪みが断面図で確認できる。墓壙の規模は長軸122cm以上×短軸72cm以上の長楕円形を呈する。棺の方位はN-85°-W、傾斜角は3°を測る。

**甕棺**(図版 63、第 123 図) いわゆる丸味を帯びた系列に属するもの。口縁部はやや外に長く 突出かつ内傾する三角口縁で、胴部中位には突出度が強い三角突帯を貼り付け、底部は平底に なる。胴部外面にはミガキを施し、その後ベンガラと考えられる赤色顔料を塗布する。内面は 丁寧なナデ調整で、粘土継ぎ目痕から5・6 cmほどの粘土帯で成形したことが分かる。外面に は黒斑あり。胎土は精良で、生地は淡橙褐色。甕棺型式は南筑後KIc式。

#### 41 号甕棺墓 (図版 44、第 120 図)

8区南中央の北東寄りに位置し、70号土坑に南東部を大きく壊され、当棺が切る71号土坑とは調査時に切り合いの前後関係を誤り、墓壙北東部の一部を掘り失った。棺として確認できたのは甕下半部のみで、墓壙の規模から単棺の可能性が高く、甕上半分は70号土坑構築の際に抜き取られたと想定される。墓壙の規模は長軸74cm×短軸53cmの楕円形を呈し、棺の方位はN-82°-W、傾斜角は棺の残りが悪いため不明である。甕棺から時期は弥生中期前半になる。甕棺(図版63、第123図) 胴部中位以上が欠損するもので、底部はやや上げ底になる。外面は二次加熱により摩滅し、内面上位も赤変する。外面にはススが、内面にはコゲが付着する。色は灰黄色を呈する。

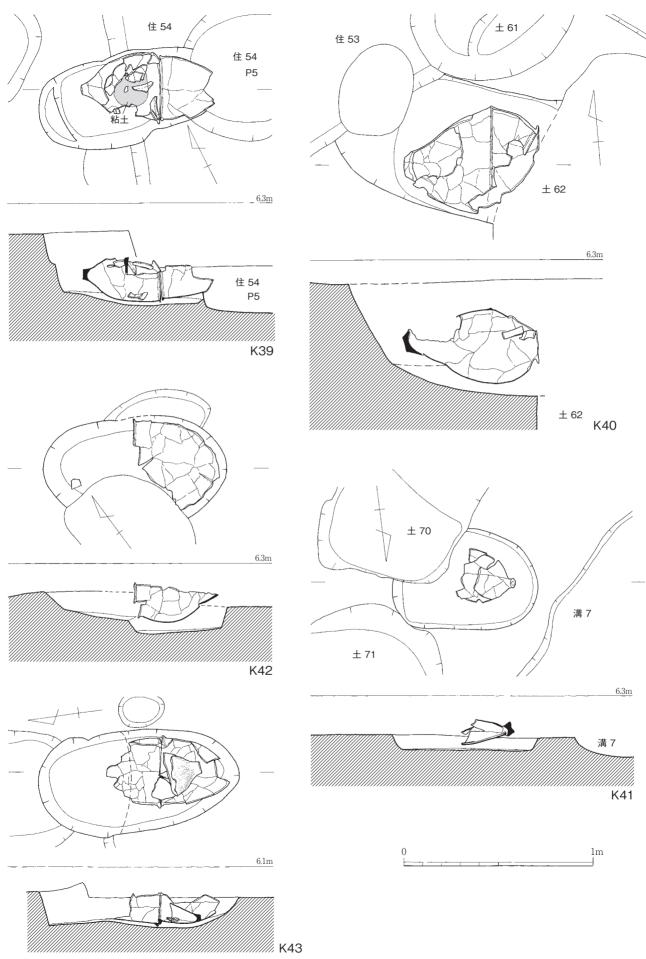
# 42 号甕棺墓 (図版 44、第 120 図)

8区南中央の東端近くに位置し、南側をピットにより大きく壊された、中形甕を用いた単棺である。検出時には棺上半部は壊されていた。墓壙の規模は長軸95cm×短軸52cm以上の長楕円形を呈し、棺の方位はN-54°-Wを測る。

**甕棺**(図版 63、第 123 図) 逆「L」字形の口縁部が強く内傾する口縁部で、丸味を帯びた胴部は強く張り、ボール状の器形となる。胴部最大径より下がった位置に極めて小振りかつ低平な三角突帯を貼り付けており、底部は平底で、外面は摩滅しているがミガキの後、黒塗りを行う。粘土継ぎ目痕から  $5\sim6$  cmほどの粘土帯で成形したことが分かる。口縁部上端部と底部には黒斑が、内面はすべて黒化する。焼成は焼成温度が低かったためか、やや不良で、色は灰黄色を呈する。甕棺型式は南筑後 K II a 式。

#### 43 号甕棺墓 (図版 45、第 120 図)

8区南中央のやや東寄りに位置する。検出時には棺上半部は水平に大きく壊され、下甕底部が下甕床面側と接することから、棺内がまだ空洞時に下甕底部を棺内に入れこみ、また上甕の胴部中位~底部にかけても確認できなかったことから、検出できなかったピットにより、下甕の下半部は抜き取られたと想定できる。墓壙の規模は長軸 63cm 以上×短軸 51cm の楕円形を



第 120 図 39 ~ 43 号甕棺墓実測図 (1/20)

呈し、墓壙形状及び甕棺のレベルから、南が下甕、北が上甕の、合わせ口式の小形棺となる。 棺の方位はN-8°-E、傾斜角はほぼ水平である。

**甕棺**(図版 63、第 123 図) 下甕は逆「L」字形の口縁部を持ち、胴部はやや丸味を帯びた砲 弾形を呈する。底部はやや上げ底で、底部外面付近には二次加熱痕・ススが認められる。粘土 継ぎ目痕から、3~5 cmほどの粘土帯で成形したことが分かる。色は黄褐色を呈する。甕棺型式は南筑後 K I b 式。上甕は底部を欠損するもので、上甕と同じくやや丸味を帯びた胴部を持つ。三角口縁の口縁部はほぼ水平である。外面には二次加熱痕が認められる。色は外が黄褐色、内が黄茶褐色~灰褐色を呈する。甕棺型式は南筑後 K I b 式。

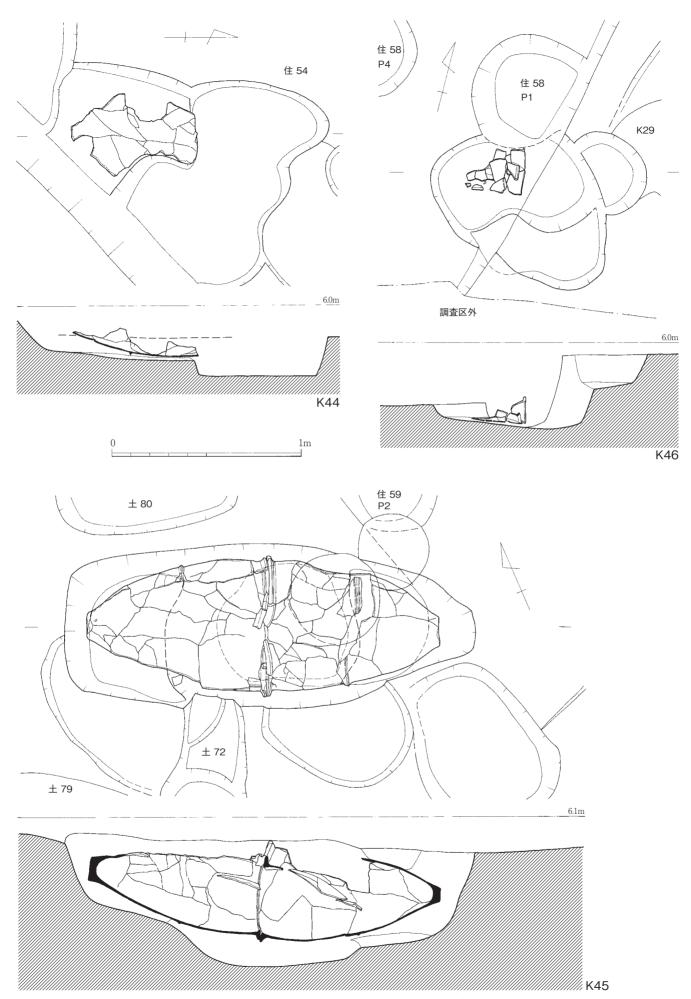
#### 44 号甕棺墓 (図版 45、第 121 図)

8区中央に位置し、調査区内で確認された甕棺墓で最北端のものである。棺として確認できたのは、大形甕1個体の胴部中位の1/8ほどで、ほとんどが52号住居跡構築時に壊されており、また確認した棺自体も、上・下棺になるのか単棺となるのかは判断できない。また墓壙も52号住居跡床下掘り込みとの区別が難しく、墓壙として確実なものは高さ8cmほどを測る西壁のみである。墓壙の規模は長軸80cm以上×短軸70cm以上、棺の方位はほぼ座標北で、傾斜角はほぼ水平である。

**甕棺**(第123図) 出土したのは胴部上位~下位片で残存率は1/8ほどの残りが悪いもの。 胴部中位から下がった位置に外に強くつまみ出した突帯を巡らせる。また突帯上下には焼成後 内→外の穿孔が認められるが、出土状況と穿孔方法から後の住居構築の際に付いた穿孔の可能 性がある。色は外が灰橙褐色、内が灰褐色を呈する。おそらく甕棺型式は南筑後KⅡa式。

## 45 号甕棺墓 (図版 45、第 121 図)

8区南中央に位置し、東側を59号住居跡、南側を72号土坑に切られ、また棺北東~南側に かけて、検出できただけでも5基のピットに壊されている。そのため棺は土圧により押しつぶ され、かつ棺上半部は水平に壊されていた。また棺内に落ち込んでいる破片も棺床ではなく、 棺の中位以上にあるため、水平に壊された時にはすでに棺内に土が流入していたと想定される。 墓壙の規模は長軸 216cm × 短軸 85cm の東西に長い長楕円形で、墓壙形状及び甕棺のレベルから、 東が下甕、西が上甕となる、合わせ口式の大形棺である。棺の方位はN-67°-W、傾斜角は4°。 甕棺(図版 63、第 124 図) 少し歪みのある下甕はほぼ張りのない長砲弾形の胴部と、三角口 縁及び平底の底部を持つ。胴部中位には三角突帯を巡らせ、胴部突帯下には1/8周程度、突 帯を貼り付ける際に付いたと考えられる工具ナデ痕が認められる。また底部外面や胴部下位に ハケが残ることから、胴部外面はハケのちナデを施していると考えられる。外面には薄い黒斑 があり、内面は1/2程度薄く黒化する。色は灰橙褐色を呈する。甕棺型式は南筑後КІЬ式。 少し歪みのある上甕は、やや内傾する三角口縁の外端部にナデ凹線が認められる。長砲弾形の 胴部中位には三角突帯を巡らす。粘土継ぎ目痕から4cm程度の粘土帯で成形したことが分かる。 平底の底部外面にはハケが残ることから、胴部外面はハケのちナデを行っている。また胴部外 面には斜め方向の幅5cm×長さ30cm程度の黒斑が2ヶ所確認でき、焼成時の甕棺の支え痕跡 の可能性がある。内面中位以下は布などによるナデを施している。内面の2/3は薄く黒化す



第 121 図 44 ~ 46 号甕棺墓実測図 (1/20)

る。色は外が灰橙褐色、内が灰褐色。甕棺型式は南筑後КІЬ式。

# 46 号甕棺墓(図版 46、第 121 図)

8 区南端中央に位置し、棺の大部分を 58 号住居跡の構築時に壊されていた、小形甕を用いた単棺である。58 号住居跡構築時にかなり押しつぶされ、棺床面部分しか当初の姿をとどめておらず、住居床面や住居内ピットにより水平に壊されていた。墓壙の規模は長軸 85cm ×短軸 54cm の楕円形で、南側の大きなテラス部分はその形態から当棺に伴う可能性は低い。棺の方位は N -75°-E、傾斜角はほぼ水平である。

**甕棺**(図版 64、第 123 図) 口縁内端部が内側に突出する三角口縁を持ち、胴部は砲弾形を呈する。底部はやや上げ底の厚底で、口縁下の一部には最後に横ハケを施す。外面には黒斑があり、色は黄褐色。甕棺型式は南筑後 K I b 式。

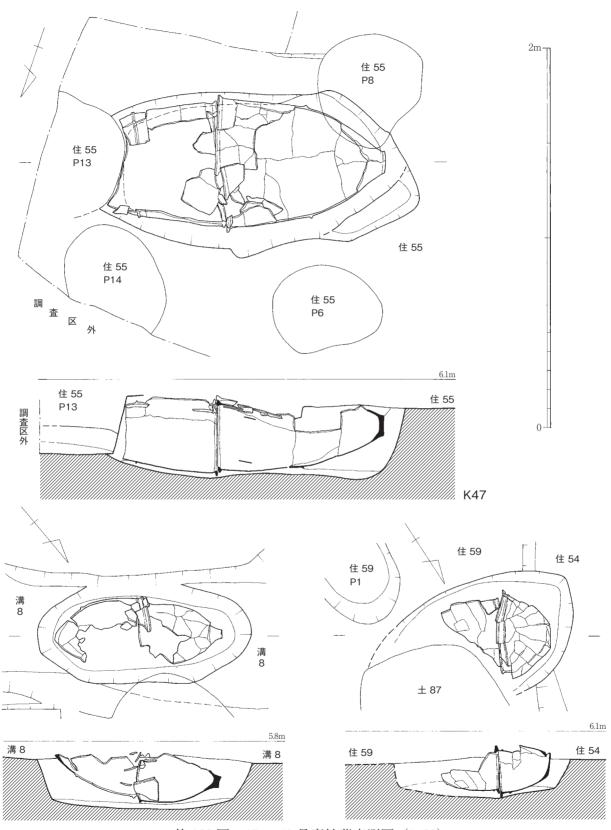
## 47 号甕棺墓 (図版 46、第 122 図)

8区中央の東端に位置し、55号住居跡の下層で検出した大形棺である。55号住居跡構築の際に、棺は土圧により押しつぶされ、かつ棺上半部は水平に壊されていた。また棺の南東及び東側は55号住居跡ピットにより壊されている。なお、墓壙北西部の段は掘り間違いである。墓壙の規模は長軸170cm以上×短軸83cmの長楕円形で、墓壙形状及び甕棺のレベルから、東が下甕、西が上甕となる、合わせ口式の形態になる。棺の方位はN-71°-E、傾斜角はほぼ水平である。甕棺(図版64、第124図)下甕は胴部下半が欠損し、やや外傾する「T」字形の口縁部上面は窪む。胴部上位はほぼ直立し、胴部中位にはやや台形状の三角突帯を貼り付ける。粘土継ぎ目痕から3~4cmの粘土帯により成形したことが分かり、胴部外面は工具ナデのち強いナデを施す。内面は一部黒化し、色は外が白灰黄色~淡橙褐色、内が淡灰褐色を呈する。甕棺型式は南筑後KIc式。「T」字形の上甕口縁部は水平で、上面は窪む。胴部上位はほぼ直立する砲弾形の器形で、胴部中位には突出度が強い三角突帯を貼り付けるが、突帯を貼り付けた後にハケを施している。粘土継ぎ目痕から4~6cmほどの粘土帯で成形したことが分かる。また底部外面には粘土絞り痕が顕著に残ることから、底部成形の際に何かの型に入れ、底部を成形した可能性がある。外面には黒斑があり、内面も多くが黒化する。色は外が灰黄色、内が灰黄色~灰黒色。甕棺型式は南筑後KIc式。

## 48 号甕棺墓 (図版 46、第 122 図)

8区南中央の南西寄り、ちょうど8号溝内に収まった位置にある。8号溝掘削の際に棺上半部は水平に大きく壊されるが、棺内への破片の落ち込み状況から溝に壊された段階では棺内は空洞であったと考えられる。墓壙の規模は長軸113cm×短軸50cmの長楕円形を呈し、墓壙形状及び甕棺のレベルから、西が下甕、東が上甕の、合わせ口式の小形棺となる。棺の方位はN-51°-W、傾斜角は8°を測る。棺内埋土からは磨製石斧(第97図15)が出土したが、出土状況から8号溝に壊された際に混入したものであろう。

**甕棺**(図版 64、第 125 図) 下甕は大きく歪むもので、三角口縁下には低平な三角口縁を巡ら す。胴部は砲弾形で、底部はやや上げ底になる。胴部外面は二次加熱により器表が荒れるもの



第 122 図  $47 \sim 49$  号甕棺墓実測図 (1/20)

の、調整は工具ナデのちナデを施したものか。外面にはススがあり、内面底部は一部黒化する。 色は黄褐色を呈する。甕棺型式は南筑後 K I a 式。下甕より大きな上甕は外傾する三角口縁下 に三角突帯を貼り付け、やや器壁の厚い胴部下位にも三角突帯を貼り付けている。底部は欠損 する。外面には黒斑があり、色は灰黄褐色。甕棺型式は南筑後 K I a 式。

#### 49 号甕棺墓 (図版 47、第 122 図)

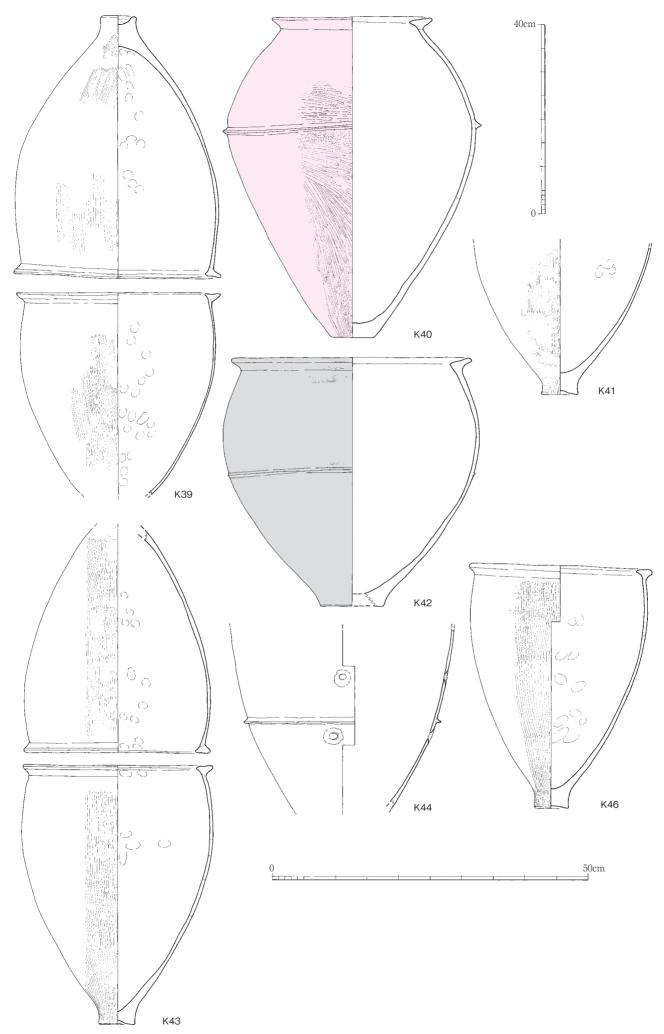
8区南中央の北東寄りに位置し、54・59 号住居跡、87 号土坑に切られる。特に87 号土坑には下甕のほとんどを壊され、棺上半部は54・59 号住居跡構築時に押しつぶされている。墓壙の規模は長軸92cm×短軸63cmの、長楕円形を呈し、鉢+甕という棺構成から、東が下甕、西が上甕の、合わせ口式の小形棺となる。棺の方位はN-57°-W、傾斜角はほぼ水平である。甕棺(図版64、第125 図)下甕は胴部下半を欠損し、胴部上位は歪みが顕著のため接合及び図上復元できなかった。上面がやや窪む「T」字形口縁下には極めて低平な突帯を貼り付け、胴部下位にも三角突帯を貼り付ける。内面は黒化し、色は外が灰黄褐色、内が灰黒色。甕棺型式は南筑後KIc式。上甕は鉢を用いており、上面がわずかに窪む「T」の字形口縁下には小振りな三角突帯を巡らす。底部は大きな平底で、胴部内外面はミガキを施し、底部内外面はナデ調整を行う。口縁部上端部と胴部には黒斑があり、胴部の黒斑は上が径1.5 cm、下が径3 cmの円形を呈し、焼成時の支え痕である可能性がある。色は外が淡灰黄色、内が灰黄褐色。甕棺型式は南筑後KIc式。

#### 50 号甕棺墓 (図版 47、第 126 図)

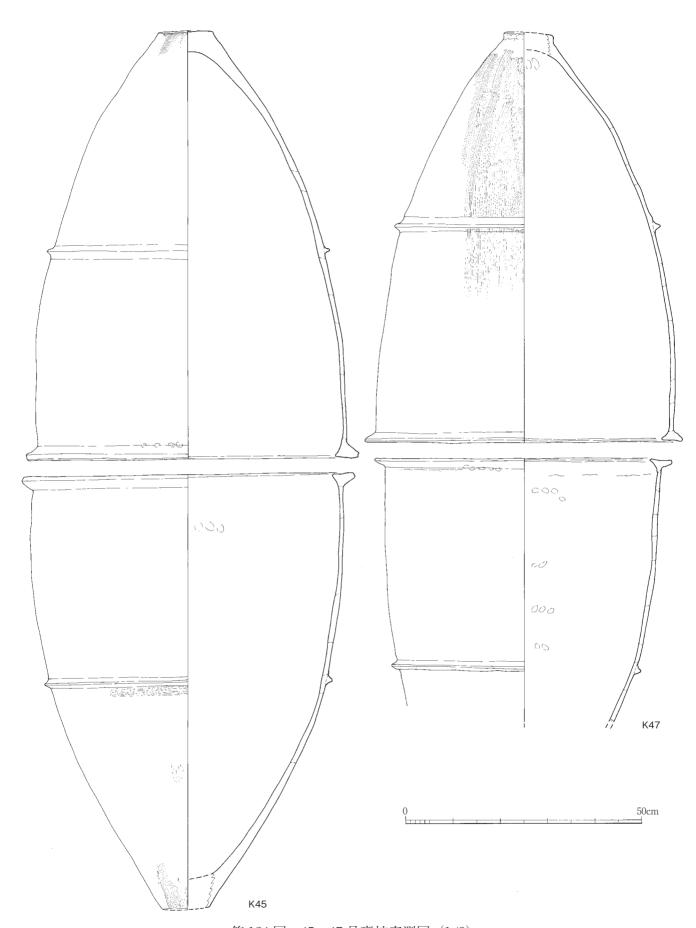
8区南東隅に位置する。壁際で当棺の一部を検出したことから、甕棺墓の検出範囲のみ拡張し調査したもので、下甕下半部は重機による表土剥ぎの際に壊してしまった。また検出面が6.2 m と高いレベルにあるため、田耕作などにより棺上半部は押しつぶされ、かつ壊されたと考えられる。墓壙の規模は長軸78cm以上×短軸45cmの長楕円形を呈し、墓壙形状及び甕棺のレベルから、西が下甕、東が上甕の、合わせ口式の小形棺となる。棺の方位はN 44°-W、傾斜角は5°。 **甕棺**(図版64、第125 図) 下甕は先述したように底部を欠損し、やや歪んでいる。口縁内端部がやや突出した、丸味を帯びた三角口縁はやや内傾し、胴部は張りのない砲弾形となる。色は灰茶色。甕棺型式は南筑後KIb式。上甕は顕著な歪みのため、口縁部と胴部片の復元径が大きく異なるため、別々に図化し掲載した。口縁部は三角口縁で、胴部は砲弾形、底部はやや上げ底になる。器壁は薄く、外面全体に二次加熱を受けているため、調整は不明。色は外が黄橙色~茶色、内が灰茶色。甕棺型式は南筑後KIa式。

#### 51 号甕棺墓 (図版 47、第 126 図)

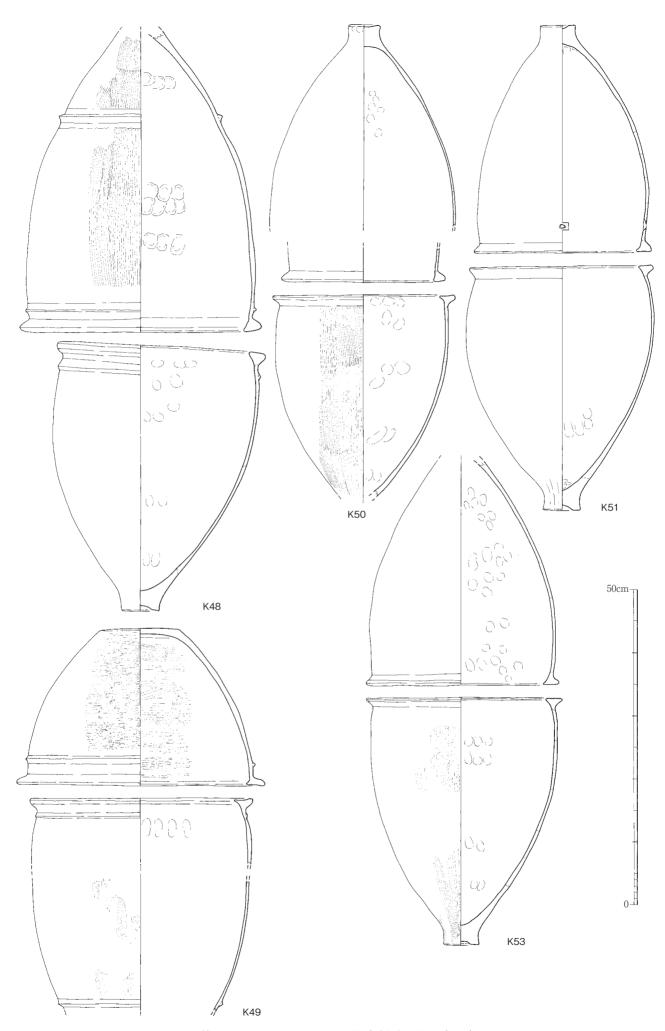
8区南端中央のやや東寄りに位置する。調査段階では75号土坑が当棺を切ると考えたが、出土遺物から当棺の方が新しく、誤って墓壙東側を掘り失った。墓壙南側のテラスは当棺に伴わない可能性が高い。棺は全体的に土圧で押しつぶされ、かつ上甕下半部はピットにより壊され、その際に破片を棺内に入れ込んだと想定される。墓壙の規模は長軸107cm以上×短軸74cm程度の楕円形を呈し、甕棺のレベル及び合わせ口形態から、東が下甕、西が上甕の、合



第 123 図 39  $\sim$  44 · 46 号甕棺実測図(K40 は 1/8、他は 1/6)



第 124 図 45·47 号甕棺実測図 (1/8)



第 125 図  $48 \sim 51 \cdot 53$  号甕棺実測図 (1/6)

わせ口式の小形棺となる。棺の方位はN-60°-E、傾斜角はほぼ水平である。

甕棺(図版 64、第 125 図) 下甕は、丸味を帯びた砲弾形の胴部、上げ底の底部及び三角口縁を持つ甕である。底部外面にはナデの稜が残り、外面全体は二次加熱のため器表が荒れ、調整は不明である。色は外が灰黄褐色、内が灰橙褐色を呈する。甕棺型式は南筑後 K I b 式。上甕は下甕より胴の張りが少ない以外はほぼ同様の器形となる。8割近く残存し、復元法量は口径28.4 cm、底径 5.6 cm、器高 36.8 cmを測る。口縁部下には径 6 mmほどの焼成後外→内の穿孔が 1 ヶ所施されている。粘土継ぎ目痕から 4~5 cmの粘土帯で成形したことが分かる。外面は全体的に二次加熱を受けているため、器表は摩滅し、調整は不明。内面はすべて黒化する。色は外が黄橙褐色、内が灰黒色を呈する。甕棺型式は南筑後 K I b 式。

## 52 号甕棺墓 (図版 48、第 126 図)

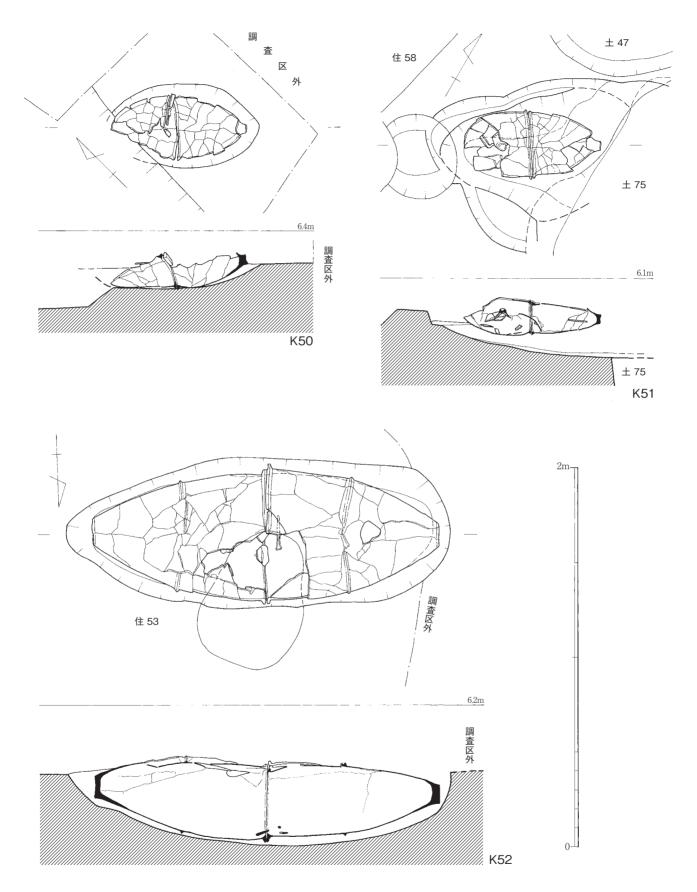
8区中央の西壁際に位置し、棺北東には40号甕棺墓が接する。棺北西部半分以上を53号住居跡に壊され、その際に棺は水平に押しつぶされている。また棺北中央はピットにより壊されている。墓壙の規模は長軸202cm×短軸80cmの東西に長い長楕円形で、甕棺のレベル及び合わせ口形態から、東が下甕、西が上甕となる、合わせ口式の大形棺である。棺の方位はN-88°-W、傾斜角は4°を測る。

甕棺(図版 65、第 129 図) 半分近く残存する下甕は、「T」字形口縁が内傾し、口縁外端部はナデ凹線が認められる。底部は欠損するが、穿孔を行っていた可能性もある。この地域特有の細長い砲弾形の胴部及び厚底のもので、胴部中央には三角突帯を 1 条巡らし、その下には焼成後外→内の穿孔を施している。内面には外面のハケとは原体が異なる工具による粗いハケが残り、その後ナデ消す。外面は黒斑、内面の中位以上は黒化する。色は外が橙褐色~暗茶褐色、内が灰黄茶褐色~黒色を呈する。甕棺型式は南筑後 K Ⅱ a 式。底部が欠損する上甕は、下甕と比べやや甕上部が開く以外はほぼ同様の器形となる。胴部外面には細かい縦ハケを施し、突帯下は最後に横ハケを施す。胴部上位の粘土継ぎ目痕から 8 cm程度の粘土帯で成形したことが分かる。内面上位は外面とは原体が異なる工具でハケを施し、その後口縁下のみ横ハケを 1 巡させ、最後はナデ消す。内面中位以下は残る工具痕から、工具ナデのちナデを施している。外面胴部上位には 2 × 3 cmほどの点状の黒斑があり、甕棺焼成時の支持棒の痕跡である可能性があり、その他にも外面底部や胴部では黒斑が認められる。内面は 2 / 3 ほど黒化する。色は外が黄橙色、内が茶褐色~黒褐色。甕棺型式は南筑後 K Ⅱ a 式。

## 53 号甕棺墓 (図版 48、第 127 図)

8区中央の南西隅に位置する。検出時に棺上半部は既に壊されており、また上甕の1/2以上抜き取られていた。墓壙の規模は長軸87cm×短軸46cmの長楕円形を呈し、墓壙形状及び甕棺のレベルから、西が下甕、東が上甕の、合わせ口式の小形棺となる。棺の方位はN-76°-W、傾斜角は12°を測る。

**甕棺**(図版 65、第 125 図) 下甕はほぼ完形で、口径 30.7 cm、底径 5.7 cm、器高 38.7 cmを測る。口縁部は口縁外端部が外側に突出する三角口縁で、胴部はやや丸味を帯びた砲弾形となり、底部はやや上げ底かつ厚底のもの。胴部外面は二次加熱のため器表は荒れて摩滅し、内面底部も



第 126 図  $50 \sim 52$  号甕棺墓実測図 (1/20)

二次加熱を受けている。口縁上端部と底部には黒斑があり、色は淡灰黄橙色。甕棺型式は南筑後KIb式。底部が欠損した上甕は、やや外傾する三角口縁を持ち、胴部はやや丸味を帯びた砲弾形の器形である。胴部外面は二次加熱のため器表は荒れて摩滅し、内面底部も二次加熱を受けている。色は黄橙色。甕棺型式は南筑後KIb式。

#### 54 号甕棺墓(図版 48、第 127 図)

8 区西側の水路下で検出した、大形甕を用いた単棺の甕棺墓。墓壙の規模は長軸 129cm × 短軸 75cm の楕円形で、棺の方位はN-32°-W、傾斜角は5°を測る。

**甕棺**(図版 65、第 130 図) いわゆる丸味を帯びた系列の甕棺で、「く」の字状口縁部の外端 部はナデにより窪む。胴部中位には小振りな三角突帯を巡らし、底部は平底となる。胴部外面 はミガキのち黒塗りを行い、胴部内面は丁寧なナデを施す。胴部外面には黒斑、胴部内面の一 部は黒化する。色は淡灰黄色。甕棺型式は南筑後 K I c 式。

#### 55 号甕棺墓(図版 49、第 127 図)

8区西側の水路下で検出したもので、棺上半部は水路建設時に壊されている。墓壙の規模は長軸 188cm×短軸 81cmの南北に長い長楕円形で、甕棺のレベル及び合わせ口形態から、北が下甕、南が上甕となる、合わせ口式の大形棺となる。棺の方位はN-23°-E、傾斜角はほぼ水平。甕棺(図版 65、第 129 図)下甕の口縁部は逆「L」字状で、口縁外端部はナデにより窪む。胴部は細長く、張りの少ない砲弾形、底部はやや上げ底となる器形である。胴部中位よりやや下がった位置にかなり小振りな三角突帯を貼り付け、胴部外面に残るわずかなハケ目から、ハケの後ナデ消していることが分かる。外面全体は最後に黒塗りを施す。外面には黒斑があり、内面底部付近は黒化する。色は茶褐色~灰黄褐色。甕棺型式は南筑後KIc式。やや内傾する上甕口縁部は三角口縁から逆「L」字状口縁へ変化する過渡期の口縁部形態で、胴部中位には三角突帯を巡らす。底部外面の器表はヒビ割れし、胴部外面も凹凸が顕著なことから、全体的に乾燥が充分でないまま成形したと判断される。粘土継ぎ目痕から7cmほどの粘土帯で成形している。外面には黒斑があり、色は外が黄褐色、内が茶褐色。甕棺型式は南筑後KIc式。

#### 56 号甕棺墓(図版 49、第 128 図)

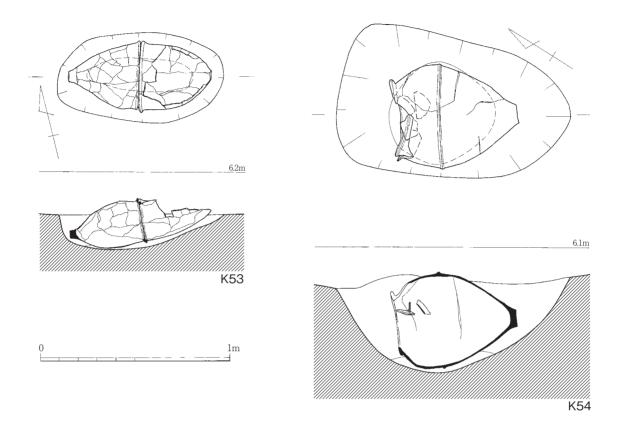
8区西側の水路下で検出したもので、棺上半部は水路建設時に壊されている。墓壙の規模は

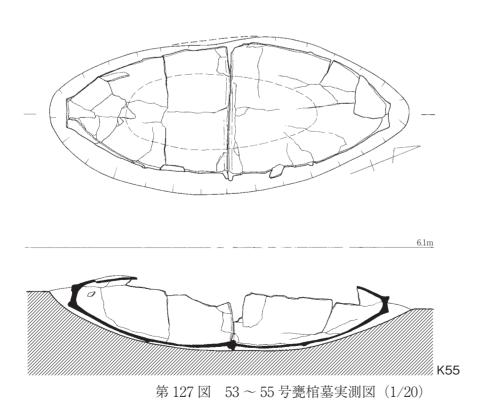


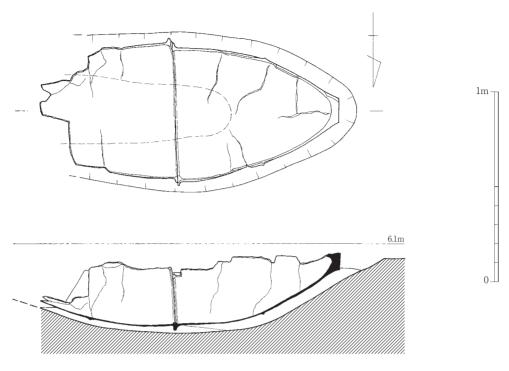
54~56号甕棺墓(空中写真、上が西)

長軸 182cm × 短軸 85cm の、おそらく東西 に長い長楕円形の墓壙になる。甕棺のレベル 及び合わせ口形態から、東が下甕、西が上甕 となる、合わせ口式の大形棺である。棺の方位は N -88° - W、傾斜角は 3° である。

甕棺(図版 65、第 130 図) 胴部下半部が欠損する下甕は、やや内傾する逆「L」字状口縁部、張りの少ない細長い砲弾形の器形となる。胴部中位よりやや下がった位置に三角突

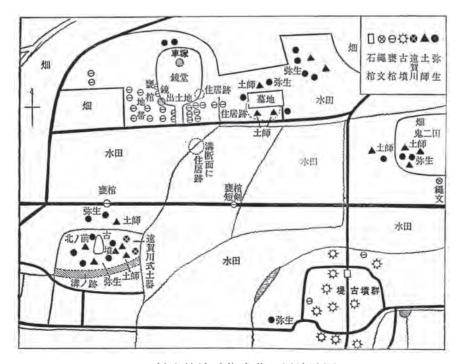




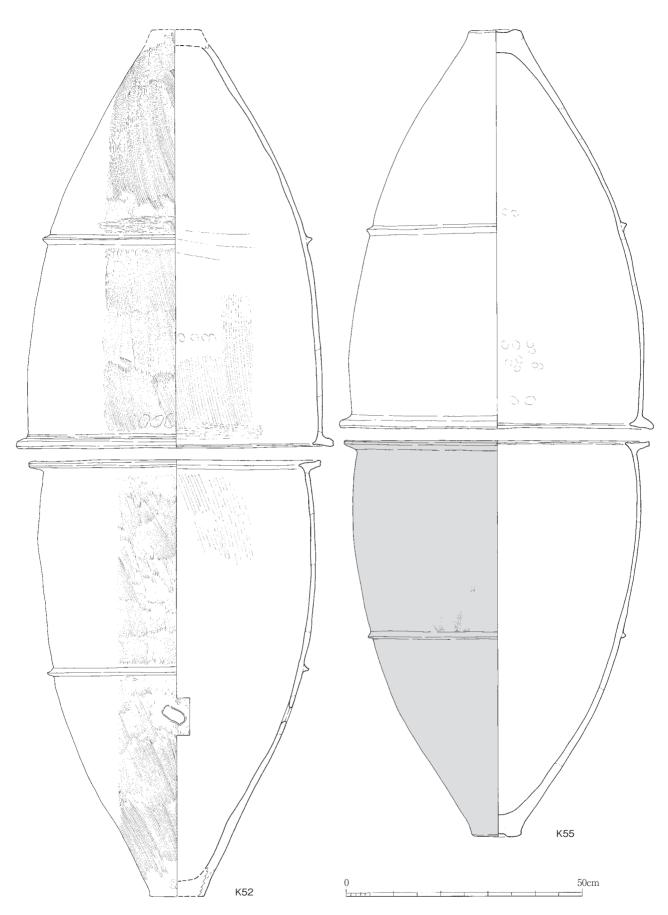


第 128 図 56 号甕棺墓実測図 (1/20)

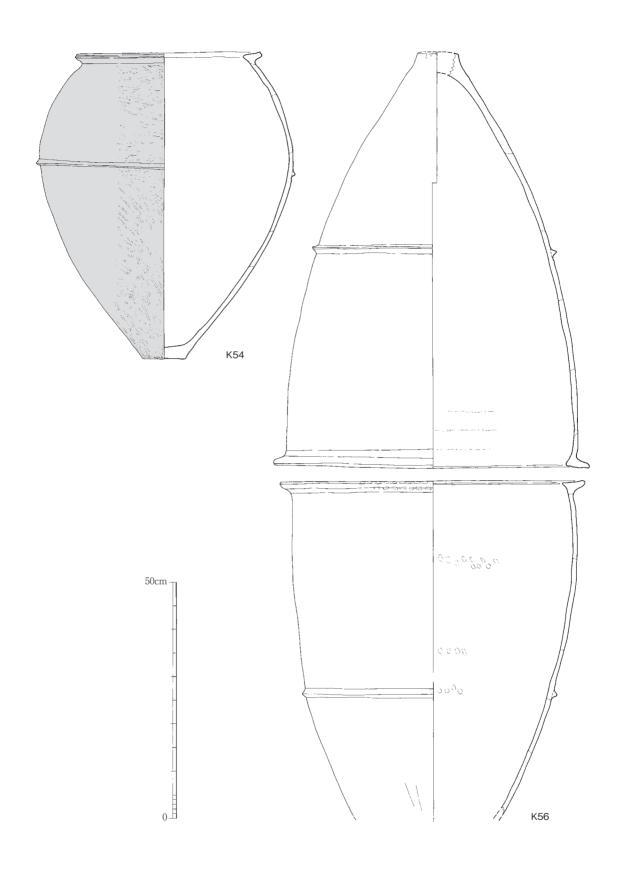
帯を貼り付け、外面の口縁下及び内面には布等を原体として用いた強いナデを施すが、外面に残る工具痕からその前に工具ナデを施していることが分かる。内面上位は黒化する。色は黄橙褐色~橙褐色を呈する。甕棺型式は南筑後KIc式。底部が欠損した上甕も、やや内傾する逆「L」字状口縁部、張りの少ない細長い砲弾形の器形となる。胴部中位に三角突帯を貼り付け、粘土継ぎ目痕から4cmほどの粘土帯で成形したことが分かる。底部には黒斑があり、色は橙褐色~灰黄色。甕棺型式は南筑後KIc式。



村山健治氏作成藤の尾遺跡図



第 129 図 52·55 号甕棺実測図 (1/8)



第 130 図 54 · 56 号甕棺実測図 (1/8)

##		図版	_	_	11. 1 \m 144	757	72.42	0072	24 A2 W FI	ir.		図版		_	(1) 1 30 144	V-27 A	12.9T	00 12	24 A2 W F
	図番号	番号	区	面	出土遺構	注記名	種類	器種	登録番号		図番号	番号		面	出土遺構	注記名	種類	器種	登録番号
21	1	65	7		35号土坑 住29P1	K61 住124P1	弥生土器 弥生土器	甕 脚付壺	261	38 39	20		9	$\vdash$	住72覆土 住72覆土上層	住77覆土 住77覆土上層	弥生土器 弥生土器	壺	98 98
22	2		7 8	1	第1面遺構面 住48覆土	第1遺構面 住92覆土	弥生·土師器 弥生·土師器	杓子形土器 高坏	94	39 39	22		9		住72覆土上層 住72覆土上層	住77覆土上層 住77覆土上層	弥生土器 弥生土器	壺壺	103 93
22	4		8		住48覆土	住92覆土	弥生土器	甕	74	39	24		9		住72覆土上層	住77覆土上層	弥生土器	壺	99
22	5 6		8		住50覆土 住50覆土下層	住95覆土 住95覆土下層	弥生土器 弥生土器	鉢 手捏ね土器	78 87	39 39	25 26		9		住72覆土上層 住72覆土上層	住77覆土上層 住77覆土上層	弥生土器 弥生土器	壺	100 90
22	7 8		8		住52覆土 住54覆土下層	住97覆土 住98覆土下層	弥生土器 弥生土器	器台	125 165	39 39	27 28		9		住72覆土上層 住72覆土上層	住77覆土上層 住77覆土上層	弥生土器 弥生土器	壺	106
22	9		8		住56覆土下層	住101覆土下層	土師器	壺	195	39	29		9		住72覆土下層	住77覆土下層	弥生土器	甕	120-1.3
22	10 11		8		住56覆土下層 住56覆土	住101覆土下層 住101覆土	土師器 土師器	<b>並</b>	196 194	39 39	30	50	9	$\vdash$	住72覆土上層 住72覆土上層	住77覆土上層 住77覆土上層	弥生土器 弥生土器	高坏	111.113 110
22	12 13		8		住56覆土 遺構面	住101覆土 第1遺構面	土師器 土製品	手捏ね土器 壁士	189	39 39	32		9		住72覆土上層 住72覆土下層	住77覆土上層 住77覆土下層	弥生土器 弥生土器	高坏	92 121
30	1		9		住61覆土	住63覆土	弥生・土師器	鉢	1	39	34	50	9		住72No.4 P4	住77No.4 P4	弥生土器	器台	115
30	3		9		住61覆土 住62覆土	住63覆土 住64覆土	弥生土器 弥生・土師器	<b>甕</b>	2 828	40	2		9	$\vdash$	住73覆土上層 住73覆土上層	住78覆土上層 住78覆土上層	弥生土器 弥生土器	壺	138 134
30	4 5		9		住62覆土 住63覆土上層	住64覆土 住65覆土上層	弥生土器 弥生・土師器	売	3 9	40 40	3 4	50	9		住73P1 住73覆土上層	住78P1 住78覆土上層	弥生土器 弥生土器	壺壺	129 141
30	6		9		住63覆土上層	住65覆土上層	弥生・土師器	壺	8	40	5	50	9		住73覆土下層	住78覆土下層	弥生土器	壺	140
30	7 8		9		住63覆土上層 住63覆土上層	住65覆土上層 住65覆土上層	弥生·土師器 弥生·土師器	壺	11 10	40	6 7		9		住73No.1 住73覆土	住78№1 住78覆土	弥生土器 弥生土器	蹇	123 131
30	9 10		9		住63覆土上層 住63覆土	住65覆土上層 住65覆土	弥生·土師器 弥生·土師器	壺	4 6	40	8		9		住73P1 住73覆土上層	住78P1 住78覆土上層	弥生土器 弥生土器	甕	127 135
30	11		9		住63覆土上層	住65覆土上層	弥生・土師器	魙	12	40	10		9		住73覆土上層	住78覆土上層	弥生土器	獲	133
30	12		9		住63覆土上層 住63覆土上層	住65覆土上層 住65覆土上層	弥生·土師器 弥生·土師器	甕	13 16	40	11 12		9		住73覆土 住73P1	住78覆土 住78P1	弥生土器 弥生土器	甕	132 130
30	14 15		9		住63覆土上層 住63覆土上層	住65覆土上層 住65覆土上層	弥生·土師器 弥生·土師器	<b>売</b>	15 14	40 40	13 14		9		住73覆土上層 住73No.2	住78覆土上層 住78No.2	弥生土器 弥生土器	甕	139 124
30	16		9		住63覆土上層	住65覆土上層	土師器	甕	17	40	15	50	9		住73No.3	住78No.3	弥生土器	鉢	125
30	17		9		住63覆土上層 住63覆土上層	住65覆土上層 住65覆土上層	弥生·土師器 弥生·土師器	高坏 鉢	18 7	40	16 17	50	9		住73No.1 住73No.4	住78No.1 住78No.4	弥生土器 弥生土器	鉢 器台	122 126
30	19	50	9		住63覆土上層	住65覆土上層	土師器	鉢	5-1.2	41	18 19		9		住73覆土上層	住78覆土上層	弥生土器	器台	137
32 32	2	50	9		住64覆土 住64覆土	住66覆土 住66覆土	弥生土器 弥生土器	壺	20 19	41	20		9		住73P1	住78覆土上層 住78P1	弥生土器 弥生土器	器台	136 128
32	3		9		住64覆土 住64覆土	住66覆土	弥生土器 弥生土器	郷	22 26	41	21		9	$\vdash$	住73覆土上層 住74覆土下層	住78覆土上層 住79覆土下層	弥生土器 弥生土器	壺	91 151
32	5		9		住64覆土	住66覆土	弥生土器	拠	24	41	23		9		住74覆土	住79覆土	弥生土器	甕	146
32	6 7		9		住64覆土 住64覆土	住66覆土	弥生土器 弥生土器	甕	23 27	41	24 25		9		住74覆土 住74土層ベルト内	住79覆土 住79土層ベルト内	弥生土器 弥生土器	甕	145 152
32	8 9		9		住64覆土 住64覆土	住66覆土 住66覆土	弥生土器 弥生土器	鉢	21 25	41	26 27		9		住74P1 住74覆土下層	住79P1 住79覆土下層	弥生土器 弥生土器	<b>売</b>	153 149
32	10		9		住64覆土	住66覆土	弥生土器	支脚	28	41	28		9		住74覆土下層	住79覆土下層	弥生土器	高坏	150
32	11		9		住66覆土 住67覆土	住66覆土	弥生土器 弥生・土師器	歪	29 35	41	29 30		9		住74覆土 住74覆土	住79覆土 住79覆土	弥生土器 弥生土器	高坏 甕	148 147
32 32	13 14	50	9		住67覆土 住67覆土	住69覆土 住69覆土	土師器 弥生・土師器	壺壺	32 34	41	31 32		9		住74屋内土坑 住74屋内土坑	住79屋内土坑 住79屋内土坑	弥生土器 弥生土器	差	646 647
32	15		9		住67覆土	住69覆土	土師器	壺	33	41	33		9		住74屋内土坑	住79屋内土坑	弥生土器	獲	645
32	16 17		9		住67覆土 住67覆土	住69覆土 住69覆土	弥生·土師器 弥生·土師器	甕	36 37	43	1 2		9		住75覆土下層 住75%9	住80覆土下層 住80%9	弥生土器 弥生土器	<b>並</b> 鉢	159-1 174
32	18		9		住67覆土上層	住69覆土上層	弥生・土師器	甕	42	43	3		9		住75屋内土坑	住80屋内土坑	弥生土器	壶蓋	162
32	19 20	50	9		住67覆土上層 住67No.1	住69覆土上層 住69No.1	弥生·土師器 土師器	<b>甕</b>	41 30	43	5	50	9	$\vdash$	住75屋内土坑 住75%2	住80屋内土坑 住80%2	弥生土器 弥生土器	蹇	161 154
33	21 22		9		住67覆土 住67No.2	住69覆土 住69No.2	土師器 弥生・土師器	高坏 鉢	39 31	43 43	6		9	$\vdash$	住75覆土下層 住75覆土上層	住80覆土下層 住80覆土上層	弥生土器 弥生土器	甕	160 158
33	23		9		住67覆土上層	住69覆土上層	弥生・土師器	鉢	40	43	8		9		住75P2	住80P2	弥生土器	魙	157
33	24 25	50	9		住67覆土	住69覆土 住69覆土	弥生·土師器 弥生·土師器	<b>甕</b> 土製品	38	43	9		9		住75No.3 住75屋内土坑No.3	住80№3 住80屋内土坑№3	弥生土器 弥生土器	甕	155 164
33	26 27		9		住67覆土上層 住67覆土上層	住69覆土上層 住69覆土上層	弥生土器 弥生土器	甕	43 44	43	11		9	_	住75屋内土坑No.5 住75屋内土坑	住80屋内土坑№5 住80屋内土坑	弥生土器 弥生土器	甕	165 166
33	28		9		住68床下掘り込み	住70床下掘り込み	弥生土器	ヹ	52	43	13		9		住75覆土	住80覆土	弥生土器	蓝	156-1
33	29 30		9		住68覆土下層 住68	住70覆土下層 住70	弥生土器 弥生土器	壺壺	51 47	43 45	14	51 51	9		住75屋内土坑№4 住76№38	住80屋内土坑№4 住81№38	弥生土器 土師器	甕 壺	163 198
33	31 32		9		住68覆土 住68	住70覆土 住70カマド	弥生土器 弥生土器	甕	49 53	45 45	2 3	51	9	H	住76No.11 住76No.48	住81No.11 住81No.48	土師器 土師器	壺	176 215
33	33		9		住68覆土下層	住70覆土下層	弥生土器	甕	50	45	4	51	9		住76No.12・14	住81No.12・14	土師器	菫	180
33	34 35	50	9		住68 住68	住70 住70カマド	弥生土器 弥生土器	鉢 注口	46	45 45	5 6	51	9		住76%.30 住76覆土下層	住81%,30 住81覆土下層	土師器	壺	197 822
33	36 37		9		住68 住69No.1	住70 住71No.1	弥生土器 弥生土器	甕	48 60	46 46	7 8	51 51	9		住76No.12 住76No.46	住81No.12 住81No.46	土師器	壺	183 211
33	38		9		住69No.1	住71No.1	弥生土器	甕	62	46	9	01	9		住76No.10	住81No.10	土師器	壺	175
33	39 40		9		住69P1 住69覆土上層	住71P1 住71覆土上層	弥生土器 弥生土器	高坏 鉢	61 63	46 46	10 11		9		住76覆土 住76覆土	住81覆土 住81覆土	弥生·土師器 弥生·土師器	壺	234 844
33 36	41	50	9		住69土81 住70覆土	住71土81 住75覆土	弥生土器 弥生土器	売 売	167 78	46 46	12	51	9	$\vdash$	住76下層 住76	住81下層 住81	弥生·土師器 土師器	壺	821 220
36	2		9		住70No.2	住75No.2	弥生土器	壺	69	46	14	01	9		住76下層	住81下層	土師器	壺	246
36 36	3 4		9		住70No.4 住70覆土上層	住75No.4 住75覆土上層	弥生土器 弥生土器	養	73 80	46 46	15 16		9		住76%.19 住76覆土下層	住81%.19 住81覆土下層	土師器	壺	189 247
36 36	5 6		9		住70覆土 住70覆土上層	住75覆土 住75覆土上層	弥生土器 弥生土器	鉢 器台	77 18	46 47	17 18	51	9		住76%19 住76覆土	住81%.19 住81覆土	土師器 土師器	壺甕	188 225
36	7	50	9		住70覆土	住75覆土	弥生土器	把手	_	47	19	51	9		住76No.54	住81No.54	土師器	連	222
36 36	8 9	50	9		住70No.11 住70No.4	住75No.11 住75No.4	弥生土器 弥生土器	歪 甕	83 71	47	20 21	51 51	9			住81No.12 住81No.8	土師器	甕	179 173
36 36	10 11	50	9		住70No.4 住70No.5・6・8	住75No.4 住75No.5・6・8	弥生土器 弥生土器	雅	72 75	47 47	22 23	51 51	9		住76No.28 住76No.40	住81No.28 住81No.40	土師器 土師器	甕	194 201
36	12	100	9		住70No.8	住75No.8	弥生土器	魙	76	48	24	51	9		住76No.13	住81No.13	土師器	獲	184
36	13 14	50	9		住70覆土上層 住70No.3	住75覆土上層 住75No.3	弥生土器 弥生土器	甕 高坏	79 120	48 48	25 26	51 51	9			住81No.1 住81No.12	土師器 土師器	甕	168 178
36 38	15 1	50	9		住71覆土下層 住72覆土上層	住76覆土下層 住77覆土上層	弥生土器 弥生土器	<b>売</b>	82 105	48 48	27 28	51 52	9		住76No.57 住76No.29	住81No.57 住81No.29	土師器 土師器	- 連	224 196
38	2		9		住72覆土	住77覆土	弥生土器	甕	85	48	29	52	9		住76No.58·61	住81No.58・61	土師器	甕	228
38	3 4		9		住72覆土 住72覆土	住77覆土 住77覆土	弥生土器 弥生土器	土師器 土師器	87 89	49 49	30	52	9		住76No.2 住76No.52	住81No.2 住81No.52	土師器	甕	169 217
38	5	En	9		住72覆土上層	住77覆土上層	弥生土器 弥生土器	鉢	109	49	32	52	9		住76No.60	住81No.60	土師器	差	229 204
38	6 7	50	9		住72覆土上層 住72覆土	住77覆土上層 住77覆土	弥生土器	器台	114 88	49	33		9		住76No.41 住76No.48	住81No.41 住81No.48	土師器 土師器	甕	212
38 38	8 9	$\vdash$	9		住72P4 No.4 住72P5	住77P4 No.4 住77P5	弥生土器 弥生土器	器台 器台	117 119	49 49	35 36	$\vdash$	9		住76覆土下層 住76No.41	住81覆土下層 住81№41	土師器	甕	245 202
38	10		9		住72覆土上層	住77覆土上層	弥生土器	壺	104	49	37		9		住76No.45	住81No.45	土師器	甕	208
38 38	11 12		9		住72覆土上層 住72覆土上層	住77覆土上層 住77覆土上層	弥生土器 弥生土器	売 <u>茶</u>	108 102	49 49	38 39	52	9		住76No.12	住81No.45 住81No.12	土師器 土師器	甕	207 181
38 38	13 14	50	9		住72覆土上層 住72No.1	住77覆土上層 住77No.1	弥生土器 弥生土器	壺壺	97 84	50 50	40 41	52	9		住76No.4 住76覆土	住81№4 住81覆土	土師器 土師器	甕	171 249
38	15		9		住72覆土上層	住77覆土上層	弥生土器	壺	95	50	42	52	9		住76No.12	住81No.12	土師器	甕	182
38	16 17		9		住72覆土上層 住72P4 No.2	住77覆土上層 住77P4 No.2	弥生土器 弥生土器	重	101 116	50 50	43		9		住76覆土 住76%19	住81覆土 住81№19	土師器 土師器	甕	232 191
38 38	18 19		9		住72覆土上層 住72覆土上層	住77覆土上層 住77覆土上層	弥生土器 弥生土器	壺壺	94 96	50 50	45 46	52 52	9		住76No.43	住81No.43 住81No.2・3	土師器 土師器	甕	206 170
30	13		J		14.144发上.上/图	[江112]	ZVIII. LAB	nit.	30	50	1 40	1 02	L J	_	TTTOWN - 9	PT-011007.9	Thirtip	JFG.	1 110

第8表 『藤の尾垣添遺跡Ⅲ』掲載土器類一覧 (1)

挿図	図番号	図版	区	面	出土遺構	注記名	種類	器種	登録番号	插図	図番号	図版	IZ	面	出土遺構	注記名	種類	器種	登録番号
		番号		Щ	住76覆土下層	住81覆土下層		the state of the s				番号	9	ш					
50 50	47 48		9		住76覆土	住81復工下層	土師器	差	230 233	59 59	40		9		住79覆土下層 住79覆土下層	住84覆土下層 住84覆土下層	土師器 弥生土器	高坏 高坏	536 535
51 51	49 50	52	9		住76No.28 住76No.41	住81No.28 住81No.41	土師器 弥生・土師器	撫	195 203	59 59	42	53	9	H	住79覆土上層 住79覆土下層	住84覆土上層 住84覆土下層	弥生·土師器 弥生·土師器	鉢鉢	299 308
51	51	52	9		住76No.5	住81No.5	土師器	高坏	172	59	44		9		住79	住84	上師器	鉢	289
51 51	52 53	52 52	9		住76No.58・61 住76No.54	住81No.58・61 住81No.54	土師器	高坏	226 219	59 59	45 46		9		住79覆土上層 住79覆土上層	住84覆土上層 住84覆土上層	弥生·土師器 弥生·土師器	鉢鉢	302 524
51 51	54 55	52	9		住76 住76覆土	住81 住81覆土	土師器	高坏	231 237	59 59	47		9		住79覆土下層 住79覆土下層	住84覆土下層 住84覆土下層	弥生·土師器 弥生·土師器	鉢鉢	309 310
51	56		9		住76No.39	住81No.39	土師器	高坏	200	59	49		9		住79覆土上層	住84覆土上層	弥生・土師器	鉢	523
51	57 58		9		住76%27 住76覆土下層	住81No.27 住81覆土下層	土師器	高坏 鉢	193 248	59 59	50 51		9	$\vdash$	住79 住79No.3 P1	住84 住84No.3 P1	弥生·土師器 弥生·土師器	鉢	288 513
51 51	59 60	52 52	9		住76No.55	住81No.55	土師器 土師器	鉢鉢	223 209	59	52 1		9		住79覆土下層 住80覆土上層	住84覆土下層 住85覆土上層	弥生·土師器 弥生土器	鉢壺	311
51	61	52	9		住76No.46 住76No.15	住81No.46 住81No.15	上師器	鉢	186	60 60	2		9		住80覆土下層	住85覆土下層	弥生土器	甕	320 323
51	62	52	9		住76覆土 住76№46	住81覆土 住81№46	土師器	鉢鉢	226 210	60 60	3 4	53	9	$\vdash$	住80%1付近 住80覆土上層	住85No.1付近 住85覆土上層	弥生土器 弥生土器	製	312 318
51	64	0.2	9		住76覆土	住81覆土	土師器	鉢	235	60	5		9		住80P4	住85P4	弥生土器	甕	330
51 51	65 66		9		住76覆土 住76№58・61	住81覆土 住81№58・61	土師器	鉢鉢	243 227	60 60	6 7		9	$\vdash$	住80覆土上層 住80覆土下層	住85覆土上層 住85覆土下層	弥生土器 弥生土器	甕	319 324
51 51	67 68		9		住76No.49 住76No.12	住81No.49 住81No.12	土師器	鉢鉢	213 177	60 60	8 9		9	$\vdash$	住80No.1付近 住80覆土	住85No.1付近 住85覆土	弥生土器 弥生土器	甕 高坏	313 317
51	69		9		住76No.14	住81No.14	土師器	鉢	185	60	10		9		住80覆土下層	住85覆土下層	弥生土器	高坏	326
51 52	70	52	9		住76No.53 住76No.16	住81No.53 住81No.16	土師器	鉢	218 187	60 60	11		9	$\vdash$	住80覆土下層 住80覆土下層	住85覆土下層 住85覆土下層	弥生土器 弥生土器	高坏	327 328
52	72	52 52	9		住76No.34	住81No.34	土師器	鉢鉢	199 216	60	13		9		住80覆土上層 住80No.1付近	住85覆土上層 住85No.1付近	弥生土器 弥生土器	高坏 高坏	322 314
52 52	73 74	53	9		住76No.50 住76No.48	住81No.50 住81No.48	土師器	鉢	216	60 60	14 15		9		住80%.117近 住80覆土下層	住85覆土下層	弥生土器	高坏	355
52 52	75 76		9		住76No.54 住76No.19	住81No.54 住81No.19	弥生·土師器 弥生·土師器	鉢	221 190	60 60	16 17		9		住80 住80覆土上層	住85覆土上層	弥生土器 弥生土器	鉢	333 321
52	77	53	9		住76No.26	住81No.26	土師器	器台	192	61	18	53	9		住80覆土No.2	住85覆土No.2	弥生土器	甕	315
52 52	78 79		9		住76覆土 住76覆土上層	住81覆土 住81覆土上層	土師器 弥生土器	器台	238 240	61 61	19	53	9		住81P4 住81覆土	住86P4 住86覆土	弥生土器 弥生土器	<b>並</b>	331 316
52	80	E9	9		住76覆土上層	住81覆土上層	弥生土器	甕	241	61	21		9		住81覆土下層	住86覆土下層	弥生土器	鉢	329
52 52	81 82	53	9		住76覆土上層 住76覆土上層	住81覆土上層 住81覆土上層	弥生土器 弥生土器	甕	244 239	61 61	22		9		住81覆土上層 住81覆土	住86覆土上層 住86覆土	弥生土器 弥生土器	壺	334 560
52 52	83 84		9		住76覆土上層 住77覆土下層	住81覆土上層 住82覆土下層	弥生土器 土師器	鹿	242 252	61 61	24 25	53	9	H	住81No.1 住81覆土	住86No.1 住86覆土	弥生土器 弥生土器	<b>売</b>	556 557
52	85		9		住77覆土下層	住82覆土下層	弥生・土師器	壺	253	61	26		9		住81覆土	住86覆土	弥生土器	独	558
52 52	86 87		9		住77覆土上層 住77覆土上層	住82覆土上層 住82覆土上層	弥生·土師器 弥生·土師器	<b>童</b>	251 250	61	27 28		9	$\vdash$	住81P3 住81覆土下層	住86P3 住86覆土下層	弥生土器 弥生土器	甕	564 335
52 54	88		9		住77覆土下層	住82覆土下層	弥生・土師器	器台	254	61 61	29 30		9		住81覆土	住86覆土	弥生土器	甕 高坏	559 336
54	2		9		住78覆土 住78覆土	住83覆土 住83覆土	弥生土器 弥生土器	重	261 274	61	31		9		住81覆土下層 住81覆土下層	住86覆土下層	弥生土器 弥生土器	高坏	336
54 54	3		9		住78覆土 住78覆土	住83覆土 住83覆土	弥生土器 弥生土器	壺	262 263	61 61	32		9	H	住81覆土 住81覆土	住86覆土	弥生土器 弥生土器	高坏 鉢	563 561
54	5		9		住78覆土	住83覆土	弥生土器	遊	260	61	34		9		住81覆土	住86覆土	弥生土器	鉢	562
54 54	6 7		9		住78覆土上層 住78覆土	住83覆土上層 住83覆土	弥生土器 弥生土器	甕	271 269	61	35		9		住81覆土下層 住81覆土上層	住86覆土下層 住86覆土上層	弥生土器 弥生土器	継	338 849
54	8		9		住78覆土上層	住83覆土上層 住83覆土上層	弥生土器	独	270	61	37		9		住81PI	住86P1	弥生土器 弥生土器	海 海	848
54 54	9 10		9		住78覆土上層 住78覆土上層	住83覆土上層	弥生土器 弥生土器	甕	272 273	64 64	2	53	9		住82No.1 住82覆土下層	住142No.1 住142覆土下層	弥生土器	進	341 340
54 54	11 12		9		住78覆土 住78覆土	住83覆土 住83覆土	弥生土器 弥生土器	甕 高坏	258 275	64 64	3 4		9	H	住82覆土上層 住82北覆土	住142覆土上層 住142北覆土	弥生土器 弥生土器	高坏 鉢	342 343
54	13		9		住78覆土	住83覆土	弥生土器	高坏	268	64	5		9		住82覆土下層	住142覆土下層	弥生土器	器台	339
54 54	14 15		9		住78覆土 住78覆土	住83覆土 住83覆土	弥生土器 弥生土器	鉢鉢	267 266	64 64	6		9	$\vdash$	住83 住84覆土上層	住137 住138覆土上層	弥生土器 弥生土器	壺	414 418
54 54	16 17	53	9		住78覆土 住78覆土	住83覆土 住83覆土	弥生土器 弥生土器	鉢	265 264	64 64	8		9		住84%2 住84覆土下層	住138%2 住138覆土下層	弥生土器 弥生土器	<b>連</b>	417 427
54	18		9		住78覆土上層	住83覆土上層	弥生土器	鉢	276	64	10		9		住84覆土下層	住138覆土下層	弥生土器	甕	426
54 54	19 20	53 53	9		住78№1 住78覆土	住83No.1 住83覆土	弥生土器 弥生土器	鉢	256 847	64 64	11		9	$\vdash$	住84覆土下層 住84覆土上層	住138覆土下層 住138覆土上層	弥生土器 弥生土器	糖	425 419
55	21		9		住78	住83	弥生土器	鉢	255	64	13		9		住84P4	住138P4	弥生土器	高坏	422
55 55	22		9		住78覆土下層 住78覆土下層	住83覆土下層 住83覆土下層	弥生土器 弥生土器	器台器台	278 277	64	14 15		9		住84No.1 住84P4	住138No.1 住138P4	弥生土器 弥生土器	鉢鉢	416 421
55 55	24 25		9		住78 住78覆土	住83 住83覆土	弥生土器 弥生土器	甕	257 259	64 65	16		9		住84覆土 住85覆土上層	住138覆土 住139覆土上層	弥生土器 弥生・土師器	器台壺	424 441
55	26		9		住78西攪乱	住83西攪乱	土師器	壺	287	65	2		9		住85覆土	住139覆土	弥生·土師器	壺	437
55 57	27	53	9		住78西攪乱 住79覆土上層	住83西攪乱 住84覆土上層	弥生·土師器 弥生·土師器	鉢 把手	286 303	65 65	3 4		9	$\vdash$	住85覆土上層 住85覆土上層	住139覆土上層 住139覆土上層	弥生土器 弥生・土師器	鈍	445 440
57 57	2		9		住79 住79No.3 P1	住84 住84No.3 P1	弥生·土師器 弥生·土師器	壺壺	290 514	65 65	5 6		9		住85覆土 住85覆土	住139覆土 住139覆土	弥生·土師器 弥生·土師器	甕	435 443
57	4		9		住79P4	住84P4	弥生・土師器	壺	537	65	7		9		住85覆土上層	住139覆土上層	弥生・土師器	売	442
57 57	5 6		9		住79覆土下層 住79覆土下層	住84覆土下層 住84覆土下層	弥生·土師器 弥生·土師器	壺壺	307 305	65 65	8 9	$\vdash$	9		住85覆土 住85覆土上層	住139覆土 住139覆土上層	弥生·土師器 弥生土器	甕	436 444
57	7		9		住79覆土上層	住84覆土上層	弥生・土師器	壺・甕	521	65	10		9		住85覆土上層	住139覆土上層	弥生土器	高坏	448
57 57	8 9		9		住79No.41 住79P5	住84No.41 住84P5	弥生·土師器 弥生·土師器	壺·甕 壺	205 538	65 65	11		9		住85覆土上層 住85覆土上層	住139覆土上層 住139覆土上層	弥生土器 土師器	高坏 高坏	450 447
57 57	10 11		9	F	住79覆土上層 住79No.1	住84覆土上層 住84No.1	弥生土器 土師器	壺壺	297 512	65 65	13 14	53	9	F	住85No.3 住85No.3	住139No.3 住139No.3	弥生土器 土師器	高坏 高坏	433 430
57	12	53	9		住79覆土上層	住84覆土上層	土師器	壺	301	65	15	00	9		住85P2	住139P2	弥生・土師器	高坏	431
57 57	13 14		9		住79覆土上層 住79覆土下層	住84覆土上層 住84覆土下層	弥生·土師器 弥生·土師器	甕	292 526	65 65	16 17	53	9		住85覆土上層 住85覆土下層	住139覆土上層 住139覆土下層	弥生·土師器 弥生·土師器	高坏 鉢	449 455
57	15		9		住79覆土下層	住84覆土下層	弥生・土師器	甕	529	65	18		9		住85覆土	住139覆土	弥生・土師器	鉢	438
57 57	16 17		9		住79覆土上層 住79覆土上層	住84覆土上層 住84覆土上層	弥生·土師器 弥生·土師器	甕	291 295	65 65	19 20		9		住85№1 住85覆土上層	住139No.1 住139覆土上層	弥生·土師器 弥生·土師器	鉢鉢	428 451
57 58	18 19		9	F	住79覆土上層 住79覆土上層	住84覆土上層 住84覆土上層	弥生·土師器 弥生·土師器	悪	518 516	65 65	21	$\vdash$	9		住85覆土上層 住85覆土上層	住139覆土上層 住139覆土上層	弥生·土師器 弥生·土師器	鉢鉢	446 452
58	20		9		住79覆土下層	住84覆土下層	弥生・土師器	甕	293	65	23		9		住85覆土下層	住139覆土下層	弥生・土師器	鉢	454
58 58	21 22		9		住79覆土下層 住79覆土下層	住84覆土下層 住84覆土下層	弥生·土師器 弥生·土師器	喪	527 528	65 65	24 25		9	Ħ	住85%3 住85覆土下層	住139%3 住139覆土下層	弥生·土師器 弥生·土師器	器台 支脚	429 456
58 58	23 24		9	F	住79P5 住79覆土下層	住84P5 住84覆土下層	弥生·土師器 弥生·土師器	拠	539 304	67 67	1 2	54	9	F	住86覆土 住86No.7	住140覆土 住140%.7	弥生·土師器 弥生·土師器	壺	476 466
58	25		9		住79覆土下層	住84覆土下層	弥生・土師器	甕	530	67	3	54	9		住86No.2	住140No.2	土師器	壺	461
58 58	26 27		9		住79覆土下層 住79覆土下層	住84覆土下層 住84覆土下層	弥生·土師器 弥生·土師器	甕	531 306	67 67	5	54	9		住86覆土下層 住86覆土上層	住140覆土下層 住140覆土上層	弥生·土師器 弥生·土師器	壺	503 483
58	28		9		住79覆土下層	住84覆土下層	弥生・土師器	甕	519	67	6		9		住86覆土上層	住140覆土上層	弥生・土師器	壺	484
58 58	29 30		9		住79覆土下層 住79覆土下層	住84覆土下層 住84覆土下層	弥生·土師器 弥生·土師器	悪	525 532	67 67	7 8		9		住86No.5 住86No.12	住140No.5 住140No.12	土師器 弥生土器	壺蓋	465 473
58 58	31 32		9	F	住79覆土上層 住79覆土上層	住84覆土上層 住84覆土上層	弥生·土師器 弥生·土師器	雑	517 520	67 68	9	54 54	9		住86No.12 住86No.1	住140No.12 住140No.1	弥生土器 弥生土器	<b>連</b>	474 458
58	33		9		住79覆土上層	住84覆土上層	弥生・土師器	甕	522	68	11	54	9		住86No.8	住140No.8	弥生土器	甕	467
58 59	34 35		9		住79%3 住79覆土上層	住84No.3 住84覆土上層	弥生土器 弥生・土師器	甕	515 294	68 68	12	$\vdash$	9	$\vdash$	住86覆土下層 住86No.1	住140覆土下層 住140No.1	弥生·土師器	甕	496 459
59 59	36 37		9		住79覆土上層 住79覆土下層	住84覆土上層 住84覆土下層	弥生土器 弥生・土師器	進進	298 533	68 68	14 15	П	9	П	住86覆土上層 住86覆土下層	住140覆土上層 住140覆土下層	弥生·土師器 弥生·土師器	甕	481 498
59	38		9		住79覆土上層	住84覆土上層	弥生土器	高坏	300	68	16		9		住86覆土	住140覆土	弥生・土師器	甕	475
59	39		9		住79覆土下層	住84覆土下層	弥生土器	高坏	534	68	17		9		住86No.4	住140No.4	弥生・土師器	甕	464

第8表 『藤の尾垣添遺跡Ⅲ』掲載土器類一覧(2)

挿図	図番号	図版番号	区面	出土遺構	注記名	種類	器種	登録番号	挿図	図番号	図版番号	区	面	出土遺構	注記名	種類	器種	登録番号
69	18	田万	9	住86覆土下層	住140覆土下層	弥生・土師器	甕	495	79	4	田万	9		土102	土59	弥生土器	甕	635
69 69	19 20		9	住86覆土下層 住86覆土	住140覆土下層 住140覆土	弥生·土師器 弥生·土師器	郷	497 478	79 79	5 6		9		±102 ±102	±59 ±59	弥生土器 弥生土器	甕	633 636
69	21		9	住86覆土下層	住140覆土下層	弥生・土師器	拠	493	79	7		9		士102	士:59	弥生土器	甕	632
69	22		9	住86No.12 住86覆土上層	住140No.12 住140覆土上層	弥生·土師器 弥生·土師器	悪響	472 482	79 79	8	55	9		±102 ±102	±59 ±59	弥生土器 弥生土器	甕 高坏	631
69	24		9	住86覆土 住86覆土下層	住140覆土	弥生・土師器	連	477	79	10	55	9		±102No.7	±59No.7	弥生土器	高坏	641
69 69	25 26		9	住86覆土下層	住140覆土下層 住140覆土下層	弥生土器 弥生土器	甕	502 499	79 79	11		9		±102 ±102	±59 ±59	弥生土器 弥生土器	<b>鉢</b>	637 634
69 69	27 28		9	住86覆土下層 住86覆土	住140覆土下層 住140覆土	土師器 弥生・土師器	郷	500 479	81 81	1 2	55 55	9		±107No.33 ±107No.36	±63No.33 ±63No.36	弥生土器 弥生土器	壺	661 666
69	29		9	住86覆土下層	住140覆土下層	弥生土器	高坏	508	81	3	55	9		±107No.42	±63No.42	弥生土器	壺	664
69 69	30		9	住86覆土上層 住86覆土上層	住140覆土上層 住140覆土上層	弥生土器 弥生土器	高坏	490 487	81 81	5	55 55	9		±107№6 ±107№29	±63No.6 ±63No.29	弥生土器 弥生土器	鉢 支脚	607
69 69	32		9	住86覆土下層 住86覆土下層	住140覆土下層 住140覆土下層	弥生土器 弥生·土師器	高坏 高坏	505 509	81 81	6	55 55	9		±107No.4 ±107No.11 • 13 • 24	±63No.4 ±63No.11 • 13 • 24	弥生土器 弥生土器	支脚 支脚	672 674
69	34		9	住86P1	住140P1	弥生·土師器	高坏	511	81	7 8	55	9		±107N <sub>0.5</sub>	±63No.5	弥生土器	支脚	673
69 69	35 36		9	住86覆土下層 住86覆土下層	住140覆土下層 住140覆土下層	弥生·土師器 弥生·土師器	高坏 鉢	510 507	81 81	9		9		±107No27 ±107	±63No.27 ±63	弥生土器 弥生土器	甕	649 • 654 648
69	37		9	住86No.10	住140No.10	弥生・土師器	鉢	470	81	11	55	9		±107No.6	±63No.6	弥生土器	甕	662
69 69	38 39	54	9	住86No.3 住86覆土下層	住140%3 住140覆土下層	弥生土器 弥生·土師器	鉢	462 506	81 81	12 13		9		±107No.17 ±107No.39	±63No.17 ±63No.39	弥生土器 弥生土器	<b>売</b>	650 659
69 69	40 41	54	9	住86覆土上層 住86No.9	住140覆土上層 住140%,9	弥生·土師器 土師器	鉢鉢	485 468	81 82	14 15		9		±107No.38 ±107No.21	±63No.38 ±63No.21	弥生土器 弥生土器	甕	658 652
69	42	54	9	住86覆土下層	住140覆土下層	弥生・土師器	鉢	504	82	16		9		±107No.6 • No.20	±63No.6 • No.20	弥生土器	甕	675-1.2
69 69	43		9	住86覆土上層 住86覆土上層	住140覆土上層 住140覆土上層	弥生·土師器 弥生·土師器	鉢	486 481	82 82	17 18	55 55	9		±107No.44 ±107No.15	±63No.44 ±63No.15	弥生土器 弥生土器	甕	668 676
69 69	45 46		9	住86覆土上層 住86覆土上層	住140覆土上層 住140覆土上層	土師器 弥生・土師器	鉢 手捏ね土器	488 492	82 82	19 20		9		±107No.8 • 28 ±107No.22	±63No.8 • 28 ±63No.22	弥生土器 弥生土器	甕	656 653
70	47		9	住86No.11	住140No.11	土師器	鉢	471	82	21	55	9		±107No.20	土63No.20	弥生土器	魙	665
70	48	54 54	9	住86No.10 住86No.4	住140No.10 住140No.4	上師器	鉢鉢	409 463	82 82	22		9		±107 ±107No.14	±63 ±63No.14	弥生土器 弥生土器	甕	651 660
70	50		9	住86覆土上層	住140覆土上層	弥生·土師器 弥生·土師器	器台	491	82 82	24	55	9		±107No.16 • 19	±63No.16 • 19	弥生土器 弥生土器	獲	669
70 70	51 52		9	住86覆土 住86№1	住140覆土 住140%.1	弥生・土師器	器台器台	480 460	82	25 26		9		±107No20・43 ±107No34	±63No.20・43 ±63No.34	弥生土器	甕	655 657
71	2	54	9	住87No.2 住87覆土上層	住142No.2 住142覆土上層	弥生土器 弥生土器	壺	541 546	83 83	1 2		9		±108 ±108	±64 ±64	土師器 弥生・土師器	壺 器台	816 677
71	3		9	住87覆土上層	住142覆土上層	弥生土器	甕	548	83	3		9		土112覆土	土67覆土	弥生・土師器	鉢	680
71	- 4 - 5	54	9	住87%.1 住87覆土下層	住142No.1 住142覆土下層	弥生土器 弥生土器	甕	540 552	83 83	5		9		土112覆土 土113	土67覆土 土68	弥生土器 弥生土器	<b>甕</b> 蓋	681 682
71	6 7		9	住87覆土下層 住87覆土下層	住142覆土下層 住142覆土下層	弥生土器 弥生土器	<b>売</b>	547 553	83 83	6 7		9		±113 ±113	±68 ±68	弥生土器 弥生土器	魏	683 684
71	8		9	住87No.4	住142No.4	弥生土器	甕	543	83	8		9		土114	土69	弥生・土師器	鉢	686
71	9		9	住87覆土上層 住87覆土	住142覆土上層 住142覆土	弥生土器 弥生土器	<b>売</b>	551 550	83 83	9		9		±116No.2 ±116No.2	土71No.2 土71No.2	弥生·土師器 弥生土器	鉢郷	691 692
71	11		9	住87No.3	住142No.3	弥生土器	鉢	542	83	11		9		土116	土71	弥生土器	姓	688
71	12 13		9	住87覆土上層 住87覆土上層	住142覆土上層 住142覆土上層	弥生土器 弥生土器	鉢鉢	545 544	83 83	12	56	9		土116 土116No.1	±71 ±71№.1	弥生土器 弥生土器	甕	687 695
71	14 15		9	住87覆土下層 住87覆土下層	住142下層 住142覆土下層	弥生土器 弥生土器	器台	554 555	83 83	14 15		9		±116No.1 ±116	±71%.1 ±71	弥生土器 弥生土器	甕	693 690
71	16		9	住87覆土上層	住142覆土上層	弥生土器	壺	549	83	16		9		土116	土71	弥生土器	甕	689
73	2		9	土88覆土 土89覆土	土43覆土 土44覆土	弥生·土師器 弥生·土師器	<b>郷</b>	565 569	83 83	17	56	9		±117 ±117	±80 ±80	弥生土器 弥生土器	壺蓋	715 704
73 73	3		9	土89覆土 土89覆土	土44覆土 土44覆土	土師器 弥生・土師器	鉢 脚部	568 566 • 567	83 83	19 20		9		土117 土117	±80 ±80	弥生土器 弥生土器	甕	708 706
73	5	54	9	±90No.8	±46No.8	弥生・土師器	脚付壺	579	83	21		9		土117	土80	弥生土器	魙	707
73 73	7		9	±90No.5 ±90No.7	±46No.5 ±46No.7	土師器 土師器	壺	584 575	83 83	22	56	9		±117 ±117	±80 ±80	弥生土器 弥生土器	<b>連</b>	716 711
73 73	8		9	±90%.10 ±90%.5 • 8	±46No.10 ±46No.5 • 8	弥生·土師器 弥生·土師器	壺壺	580 577	83 83	24 25		9		土117 土117	±80 ±80	弥生土器 弥生土器	速	717 710
73	10		9	±90No.4 • 7	±46No.4 • 7	上師器	ヹ	576	83	26		9		土117	土80	弥生土器	獲	709
73	11 12		9	土90No.8 土90No.8	±46No.8 ±46No.8	弥生·土師器 弥生·土師器	甕	596 595	83 83	27 28		9		±117 ±117	±80 ±80	弥生土器 弥生土器	甕	705 703
73 73	13 14		9	±90No.12 ±90No.12	±46No.12 ±46No.12	弥生·土師器 弥生·土師器	連	585 586	87 87	1 2	56	9		土118 土118覆土上層	土81 土81覆土上層	弥生土器 弥生土器	壺 甕蓋	723 734
74	15		9	±:90No.3	±46No.3	弥生・土師器	高坏	592	87	3	56	9		土118覆土上層	土81覆土上層	弥生土器	甕	815
74	16 17		9	±90No.11 ±90No.16	±46No.11 +:46No.16	弥生·土師器 弥生·土師器	高坏	581 593	87 87	4 5		9		±118 ±118	±81 ±81	弥生土器 弥生土器	郷	718 720
74 74	18 19	54	9	±90No.11	±46No.11 ±46No.13	土師器 土師器	鉢鉢	589 588	87	6	50	9		±118 ±118	±81 ±81	弥生土器 弥生土器	<b>速</b>	727 726
74	20	54	9	±90%.13 ±90%.13	±46No.13	弥生·土師器	鉢	587	87 87	8	56	9		土118覆土上層	土81覆土上層	弥生土器	甕	728
74	21		9	±90No.16 ±90No.9	±46No.16 +46No.9	弥生·土師器 弥生·土師器	鉢	597 578	87 87	9	56 56	9		±118 ±118	±81 ±81	弥生土器 弥生土器	<b>連</b>	730 736
74 74	23		9	±90No.15	±46No.15	土師器 土師器	鉢	590.594	87	11 12		9		土118	±81 ±81	弥生土器 弥生土器	甕	722
74	24 25	54	9	±90%15 ±90	±46No.15 ±46	弥生・土師器	鉢	591 601	87 87	13		9		±118 ±118	土81	弥生土器	甕	721 719
74	26 27		9	±90 ±90	±46 ±46	弥生·土師器 弥生·土師器	鉢	600 599	87 87	14 15	56	9		±118 ±118	±81 ±81	弥生土器 弥生土器	<b>選</b>	735 731
74	28 29		9	±90No.12	±46No.12	弥生・土師器	鉢鉢	582	87	16		9		土118覆土上層 土118	土81覆土上層	弥生土器	築鉢	725
74 74	30		9	±90%.12 ±90%.7	±46No.12 ±46No.7	土師器 弥生・土師器	鉢	583 598	87 87	17 18		9		土117・118	±81 ±80·81	弥生土器	魙	724 729-1•2
76 76	1 2		9	±93 ±93	±49 ±49	弥生土器 弥生土器	<b>売</b>	608 612	87 87	19 20		9		±121 ±121	±118 ±118	弥生土器 弥生土器	鉢鉢	740 738
76	3		9	土93	土49	弥生土器	甕	613	87	21		9		土121	土118	弥生土器	鉢	739
76 76	- 4 - 5		9	土93 土93	士49 士49	弥生土器 弥生土器	甕	611 610	87 87	22		9		±123 ±123	±121 ±121	弥生·土師器 弥生·土師器	甕 高坏	741 742
76 76	6 7		9	土93 土94覆土	土49 土51覆土	弥生土器 弥生·土師器	э 4	609 618	87 87	24 25		9		±123P4 ±123P4	±121P4 ±121P4	弥生·土師器 弥生·土師器	器台 高坏	422 421
76	8		9	土94覆土	土51覆土	弥生・土師器	鉢	616	87	26		9		±123P2	±121P2	弥生土器	甕	423
76 76	9	55	9	土94覆土 土94覆土	土51覆土 土51覆土	弥生·土師器 弥生·土師器	鉢 器台	617 619	90	2	$\vdash$	9		土124 土124	±163 ±163	弥生・土師器 土師器	鉢 甕	752 743
76 76	11		9	土95 土95	±52 ±52	弥生·土師器 土師器	壺	620 621	90	3 4		9		±124 ±124	±163 ±163	弥生土器 弥生土器	甕 高坏	749 745
76	13		9	土100	土57	弥生土器	甕	622	90	5		9		土:124	土163	弥生・土師器	鉢	750
76 76	14 15		9	±100 ±100	±57 ±57	弥生土器 弥生土器	甕	623 626	90	6 7	$\vdash$	9		±124 ±124	±163 ±163	弥生·土師器 弥生·土師器	鉢鉢	747 746
76	16		9	土100	土:57	弥生土器	鉢	624	90	8	56	9		士124	土163	土師器	鉢	667
76 76	17 18		9	±100 ±100	±57 ±57	弥生土器 弥生土器	甕 高坏	625 627	90 90	9	56	9		土124 土124	±163 ±163	弥生·土師器 弥生·土師器	鉢 器台	744 753
76 76	19 20		9	±101 ±101	±58 ±58	弥生·土師器 弥生·土師器	<b>薬</b>	629 628	90 90	11 12	H	9		土124 土125覆土下層	土163 土164覆土下層	弥生·土師器 弥生·土師器	器台	751 758
76	21		9	土103	土60	弥生・土師器	鉢	642	90	13		9		土125	土164	弥生・土師器	甕	762
76 76	22		9	±105 ±105	土61 土61	土師器 弥生・土師器	壅	644 643	90	14 15	$\vdash$	9		土125覆土下層 土125	土164覆土下層 土164	弥生·土師器 弥生·土師器	甕	766 755
76 79	24	55 55	9	±105 ±102	±61 ±59	弥生·土師器 弥生土器	甕	663 638	90	16 17		9		土125 土125覆土下層	土164 土164覆土下層	弥生・土師器	甕	756 767
79	2	- 55	9	±102No.1	±59No.1	弥生土器	壺	344	90	18		9		土125覆土下層	土164覆土下層	弥生・土師器	魙	765
79	3		9	±102No.2	±59No.2	弥生土器	甕	639	90	19		9		土125	土164	弥生・土師器	甕	757

第8表 『藤の尾垣添遺跡Ⅲ』掲載土器類一覧(3)

挿図	図番号	図版 番号	区面	出土遺構	注記名	種類	器種	登録番号	挿図	図番号	図版番号	区	面	出土遺構	注記名	種類	器種	登録番号
90	20		9	土125覆土上層	土164覆土上層	弥生·土師器	高坏	760		K18±		7		K18上	K53上	甕棺	小形棺	_
90	21 22		9	土125覆土下層	土164覆土下層	弥生・土師器	高坏	768 759	110	K187	60	7		K18下	K53下	甕棺 甕棺	小形棺	
90	22	56	9	土125覆土上層 土125No.1	土164覆土上層 土164No.1	弥生·土師器 土師器	鉢	759		K19 K20 L	60	7		K19 K20上	K54 K55東	<b>甕相</b>	小形棺 小形棺	+-
90	24	30	9	土125761	土164覆土下層	弥生・土師器	鉢	761		K20 T	60	7		K20 T	K55西	甕棺	小形棺	+
90	25		9	土125覆土下層	土164覆土下層	弥生・土師器	鉢	764	114		: 60	7		K21 ±	K56±	甕棺	小形棺	_
90	26		9	土125覆土下層	土164覆土下層	弥生·土師器	鉢	763	114		60	7		K21下	K56下	甕棺	小形棺	_
90	27		9	土125覆土下層	土164覆土下層	土師器	鉢	769	114	K22_b	: 60	7		K22上	K57上	甕棺	小形棺	_
92	1		9	土127	土166	弥生土器	高坏	771	114	K22 T	60	7		K22下	K57下	甕棺	小形棺	-
92	2		9	土127	土166	土師器	器台	770	114		61	7		K23	K58	甕棺	中形棺	
92	3	50	9	土127	±166	弥生・土師器	器台	773	114		61	7		K24	K60	甕棺	中形棺	+=
92	4 5	56	9	土128覆土 土128土1	土167覆土 土167土1	土師器 弥生土器	連	457 432	114 114		61	7		K25上 K25下	K62上 K62下	甕棺 甕棺	小形棺 小形棺	+
92	6	_	9	土128土1	土167土1	弥生土器	支脚	434		K26 L	: 61	7		K26 ±	K63 ±	甕棺	小形棺	_
92	7		9	土129	土168	弥生·土師器	壶	780		K26 T	61	7		K26下	K63下	甕棺	小形棺	- 1
92	8		9	土129	土168	弥生・土師器	鉢	778	115		61	7		K27上	K64上	甕棺	大形棺	_
92	9		9	土129	土168	弥生土器	甕	779	115		61	7		K27下	K64下	甕棺	大形棺	_
95	1		9	溝9	溝24	弥生•土師器	鉢	800	115		: 61	7		K28上	K65上	甕棺	大形棺	_
95	2		9	溝10	満25	須恵器	杯	798	115		61	7		K28下	K65下	甕棺	大形棺	
95	3		9	溝10	溝25	須恵器	杯	799	115		61	7		K29上	K66上	甕棺	大形棺	+-
95 95	- 4 - 5	_	9	P202 P304	P202 P304	土師器 弥生・土師器	遊	843 784	115	K29 F K30 F	61	7		K29下 K30上	K66下 K67上	甕棺 甕棺	大形棺 中形棺	+=
95	6		9	P422	P422	弥生・土師器	3E	792		K30 T		7		K30下	K65 F	甕棺	中形棺	+ = 1
95	7		9	P307	P307	弥生·土師器	差	785	116		62	8	1	K31上	K5上	甕棺	大形棺	_
95	8		9	P429	P429	弥生・土師器	挑	790	116		62	8	T	K31下	K5下	甕棺	大形棺	_
95	9		9	P304	P304	弥生•土師器	鉢	793	116	K32±	62	8		K32上	K6下	甕棺	小形棺	_
95	10	56	9	P269	P269	弥生•土師器	手捏ね土器	782	116		62	8		K33	K6	甕棺	大形棺	_
95	11		9	P303	P303	弥生土器	甕	787	119	K34	62	8		K34	K9上	甕棺	小形棺	
95	12		9	P303	P303	弥生土器	悪	795	119		65	8	-	K54	K44	甕棺	大形棺	+=
95 95	13 14		9	P259 P265	P259 P265	弥生土器 弥生土器	- 連	789 791	119 119		62	8	+	K35 K36 E	K10 K11 E	甕棺 甕棺	中形棺	+-
95	15	_	9	造構面	第1遺構面	弥生土器	遊	803	119		62	8		K36 F	K11F	<b>甕棺</b>	小形棺	+=
95	16		9	遺構面	第1遺構面	弥生土器	高坏	804	119		62	8		K37上	K12①	甕棺	小形棺	
95	17		9	遺構面	第1遺構面	土師器	壺	801	119		62	8		K37下	K122	甕棺	小形棺	
95	18		9	遺構面	第1遺構面	土師器	並	807	119	K38±	: 63	8		K38上	K13上	甕棺	小形棺	_
95	19		9	遺構面	第1遺構面	弥生土器	高坏	805	119		63	8		K38下	K13下	甕棺	小形棺	_
95	20		9	遺構面	北拡張区遺構面	土師器	鉢	808	123	K39±	: 63	8		K39上	K14上	甕棺	小形棺	
105	K-1上	58	7 1	K-1 上	K33上	甕棺	小形棺	_	123		63	8		K39下	K14下	甕棺	小形棺	_
105	K-1下	58		K-1 F	K33下	甕棺	小形棺		123		63	8		K40	K15	甕棺	大形棺	+=
105	K-2 K-3	58 58		K-2 K-3	K34 K35	甕棺 甕棺	小形棺 中形棺	-	123 123		63	8	-	K41 K42	K16 K17下	甕棺 甕棺	小形棺 中形棺	+=
105	K-4.L	58		K-4.E	K36上	源棺	中形棺	_	123		: 63	8	+	K43 ±	K19 L	甕棺	小形棺	+
105	K-4下	58	_	K-4 F	K36下	甕棺	中形棺	_	123		63	8		K43下	K19下	甕棺	小形棺	
105	K-5上	58		K-5上	K37上	甕棺	小形棺	-	123	K44	63	8		K44	K20	甕棺	大形棺	_
105	K-5下	58	7 1	K-5下	K37下	甕棺	小形棺	_	123	K46 T	64	8		K46下	K24	甕棺	小形棺	_
105	K-7	58		K-7	K39	甕棺	小形棺	_	124	K45上	: 63	8		K45上	K21上	甕棺	大形棺	_
106	K-6上			K-6上	K38上	甕棺	中形棺	_	124	K45 T	63	8		K45下	K21下	甕棺	大形棺	_
106	K-6下	58		K-6 F	K38下	甕棺	中形棺	_	124	K47 L	64	8		K47上	K25 E	甕棺	大形棺	+=
106 106	K-8上 K-8下	58 58		K-8上 K-8下	K40上 K40下	甕棺 甕棺	小形棺 小形棺	_	124 125			8		K47下 K48上	K25下 K26上	甕棺 甕棺	大形棺 小形棺	+ = -
106	K-9.L	59		K-9上	K41 上	甕棺	小形棺		125		64	8		K48 F	K26 F	甕棺	小形棺	
106	K-9下	59		K-9 F	K41下	甕棺	小形棺	_	125		64	8		K49 L	K27 ±	甕棺	小形棺	_
106	K-10	59		K-10	K42	甕棺	小形棺	-	125		64	8		K49下	K27下	甕棺	小形棺	
106	K-11上		7 1	K-11上	K43西	甕棺	小形棺	_	125		: 64	8		K50上	K28上	甕棺	小形棺	_
	K-11下			K-11下	K43東	甕棺	小形棺	_	125	K50 T	64	8		K50下	K28下	甕棺	小形棺	_
106			7 1	K11混入土器	K43東 混入土器	甕棺	小形棺		125		64	8		K51上	K24上	甕棺	小形棺	
109	K-12上		7 2	K-12 L	K47上	甕棺	小形棺	_	125		64	8		K51下	K24下	甕棺	小形棺	
109	K-12下			K-12 F K-13	K47 F	甕棺	小形棺	_	125		65	8	$\vdash$	K53 L	K31 E	甕棺 甕棺	小形棺	+
109	K-13 K-14	59 59		K-13 K-14	K48 K49	甕棺 甕棺	小形棺 中形棺	_	125 129			8	$\vdash$	K53下 K52上	K31下 K30上	<b>甕相</b>	小形棺 大形棺	+ = -
109	K-15上	59		K-15±	K50上	<b>甕棺</b>	大形棺	_	129		65	8	+	K52 F	K30 F	<b>甕棺</b>	大形棺	+
109	K-15上	59		K-15 F	K50下	甕棺	大形棺	-	129		: 65	8	$\vdash$	K55±	K45±	甕棺	大形棺	_
110	K16上	60		K16上	K51上	甕棺	小形棺	-	129			8		K55下	K45下	甕棺	大形棺	-
110	K16下	60		K16下	K51下	甕棺	小形棺	_	130		65	8		K54	K2	甕棺	大形棺	_
110	K17上	60		K17上	K52上	甕棺	大形棺		130	K56±	: 65	8		K56上	K46上	甕棺	大形棺	
110	K17下	60	7 2	K17下	K52下	甕棺	大形棺		130	K56下	65	8		K56下	K46下	甕棺	大形棺	_
					** 0 +	F-#- ~ 1	= 1-×	ᅄᄱ		n .t.=				1小云 百分	( 4 )			

第8表 『藤の尾垣添遺跡Ⅲ』掲載土器類一覧 (4)

# IV 自然科学分析

## 1 出土青銅鏡の分析

本遺跡6区1号溝(古墳時代前期前半と出土土器から想定)より出土した赤色顔料が付着した破鏡を、(財)元興寺文化財研究所に委託し分析を実施した。その報告は以下の通りである。(大庭)

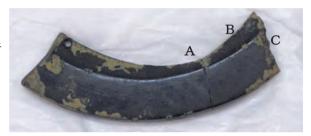
(財)元興寺文化財研究所

## (1) はじめに

九州新幹線建設に伴う福岡県みやま市瀬高町藤の尾垣添遺跡の発掘調査において、出土した青 銅鏡(弥生後期~古墳時代、破鏡、赤色顔料が付着)の分析について、以下の通り報告します。

## (2) 分析対象

福岡県みやま市瀬高町 藤の尾垣添遺跡出土青銅鏡1点(第131図)



#### (3)分析内容

青銅鏡の内側破断面 (第131図のA, B) に付着している赤色顔料の同定と、鉛同位体比の

第131図 福岡県みやま市瀬高町藤の尾垣添遺跡出土青銅鏡

測定に必要な鉛の有無の確認のため、蛍光 X 線分析装置による非破壊分析を行った。次いで、 青銅鏡の右側破断面(第131図のC)から鉛同位体比測定用試料を採取し鉛同位体比分析を 行った。なお、鉛同位体比分析は別府大学文学部平尾良光教授らによる。

#### (4) XRFによる分析

#### a. 使用機器及び測定条件

・エネルギー分散型蛍光X線分析装置(XRF) 【SIIナノテクノロジー SEA5230】

試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出することにより元素を同定する。

測定条件は、モリブデン管球使用、大気条件下、管電圧 $50 \mathrm{kV}$ (コリメータ $\phi 0.1 \mathrm{mm}$ )または、管電圧 $45 \mathrm{kV}$ (コリメータ $\phi 1.8 \mathrm{mm}$ )、測定時間300秒である。

ここではカリウム(K)よりも重い元素を検出することのできる条件に設定している。

- ・実体顕微鏡【ライカMZ】
- ・マイクロスコープ【キーエンスVHX-200】

#### b 分析結果

藤の尾垣添遺跡出土青銅鏡の分析箇所a~d、および、採取した鉛同位体比分析用試料から検出した元素とそのエネルギー強度を第9表に掲げた。

内側破断面地金部分(第133図 部分A分析箇所b)と、鏡背地金部分(第132図 分析箇所

d)をXRFで分析したところ、カルシウム(Ca)、鉄(Fe)、銅(Cu)、ヒ素(As)、銀 (Ag)、スズ(Sn)、アンチモン(Sb)、鉛(Pb)を検出した。このうち、カルシウムは周 辺環境に、鉄は周辺環境または後述の顔料(ベンガラ)に由来すると思われる。

### ·赤色顔料

内側破断面に付着している赤色部分(分析箇所 a )をXRFで分析したところ、近傍の地金部分(分析箇所b)や、鏡背の地金部分(第132図 分析箇所 d )で検出されたものと同じ元素が検出され、赤色顔料水銀朱の主成分である水銀は検出されなかった。赤色部分(分析箇所 a )は地金部分(分析箇所b、d)に比べて鉄を強く検出したことから、赤色顔料はベンガラ(酸化鉄、Fe2O3)の可能性がある。

また、報告書で穿孔の痕跡と記されている右側端部付近(第132図 部分B)を実体顕微鏡で観察すると第134図のような半円筒形様の部分があり、XRFで分析(分析箇所c)したところ、分析箇所aと同様に鉄を強く検出したのをはじめ、地金部分と同じ元素が検出された。

### d. 鉛同位体比分析に必要な鉛

鉛同位体比分析用として右側破断面から採取した試料(約5 mg)をXRFで分析したところ、鉛同位体比分析に必要十分な鉛を含んでいることがわかった。

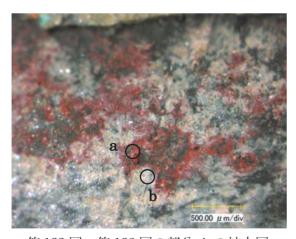
Z	元素	元素名	ライン	内側破断面 赤色部分 a(cps) [50kV・ φ 0.1mm]	内側破断面 地金部分 b(cps) [50kV・ φ0.1mm]	右側端部 赤色部分 c(cps) [50kV・ φ 0.1mm]	鏡背 地金部分 d(cps) [50kV・ φ 0.1mm]	鉛同位体比 分析用試料 (cps) [45kV・ φ1.8mm]	ROI(keV)
20	Ca	カルシウム	Ка	4.812	4.580	4.672	7.631	24.195	3.54 - 3.84
26	Fe	鉄	Ka	12.790	9.140	14.381	7.084	20.933	6.23 – 6.57
29	Cu	銅	Ка	15.340	18.407	14.936	22.643	1082.490	7.86 – 8.22
33	As	ヒ素	Кβ	0.862	1.006	1.164	1.134	20.047	11.52 – 11.93
47	Ag	銀	Ка	0.683	0.875	1.062	0.888	26.582	21.84 - 22.36
50	Sn	スズ	Ка	69.541	74.159	82.112	74.605	172.256	24.92 – 25.47
51	Sb	アンチモン	Ка	0.831	0.923	1.041	0.949	21.171	25.99 – 26.55
82	Pb	鉛	Lβ	11.225	11.227	13.417	11.701	67.218	12.42 - 12.84

第9表 藤の尾垣添遺跡出土青銅鏡の各部から検出した元素とそのエネルギー強度

# c. 分析データ [分析箇所]



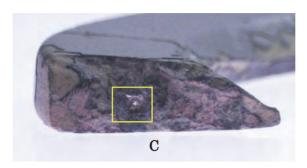
第132 図 藤の尾垣添遺跡出土青銅鏡 (上:鏡背、下:内側破断面)



第 133 図 第 132 図の部分 A の拡大図

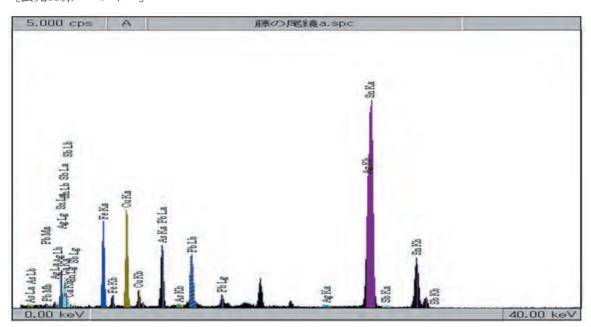


第134図 第132図の部分Bの拡大図

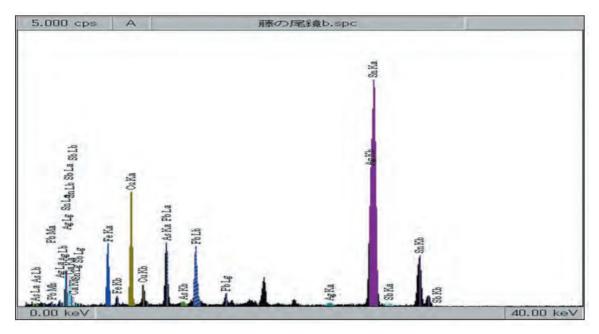


第135 図 鉛同位体比分析用試料の採取個所 C (右側破断面)

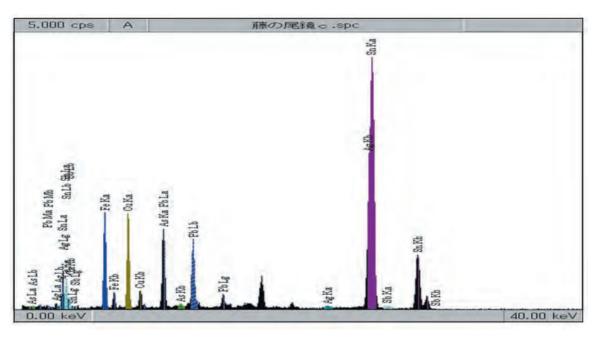
# [蛍光X線スペクトル]



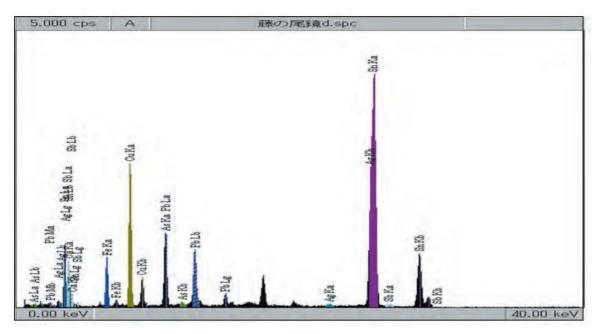
第 136 図 分析個所 a (内側破断面赤色部分)の蛍光 X 線スペクトル(50kV、 $\phi$  0.1mm)



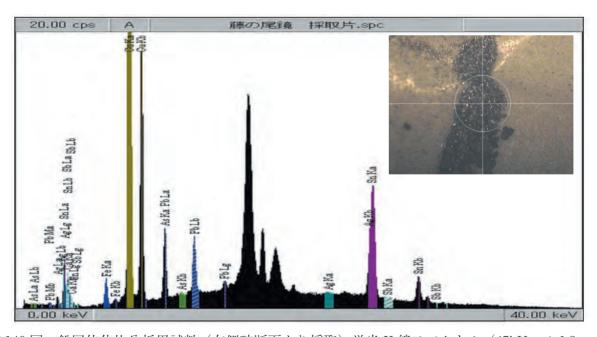
第 137 図 分析個所 b (内側破断面素地部分) の蛍光 X 線スペクトル (50kV、 $\phi$  0.1mm)



第 138 図 分析個所 C (内側破断面赤色部分) の蛍光 X 線スペクトル (50kV、 $\phi$  0.1mm)



第 139 図 分析個所 b (鏡背素地部分) の蛍光 X 線スペクトル (50kV、 φ 0.1mm)



第140図 鉛同位体比分析用試料(右側破断面より採取)蛍光 X 線スペクトル(45kV、φ 1.8mm)

(以上の分析および考察 (財)元興寺文化財研究所 川本耕三)

### (5) 鉛同位体比測定

青銅器片全量を鉛同位体比測定用試料とし、別府大学文学部平尾良光教授に調査を依頼した。以下にその報告を示す。

福岡県みやま市藤の尾垣添遺跡から出土した青銅鏡の鉛同位体比

別府大学大学院 文学研究科 西田 京平、山口 将史、平尾 良光

### a. はじめに

福岡県みやま市に所在する藤の尾垣添遺跡から出土した青銅鏡について、鉛同位体比を用いた材料産地の推定結果を報告する。

### b. 資料について

藤の尾垣添遺跡は、福岡県みやま市に所在する弥生~古墳時代の遺構を主とする遺跡である。資料が出土した調査区6区は弥生時代前期の遺物も出土しているが、遺構は弥生時代中期から古墳時代にかけての遺構が見られる(1)(2)。

蛍光 X 線測定の結果 ((4) -b、③分析データ参照) から、資料は銅・錫・鉛を主成分とした 典型的な漢式鏡であると推定される。

# c. 測定方法

青銅鏡の材料産地を推定するために、鉛同位体比法による産地推定を行った。鉛には204、206、207、208の質量を持つ4種類の安定同位体が存在している。そして、一般的に鉛の安定同位体の比は各地の鉱山ごとに異なることが知られている。つまり、材料産地の推定を行いたい文化財資料の鉛同位体比と、材料産地が明らかになっている資料や鉱山の鉱石の鉛同位体比とを値を比較することで、文化財資料の産地を推定することができる。詳しい原理については参考文献を参照されたい<sup>(3)</sup>。

鉛同位体比法による産地推定で使われる二種類の図を第141図(縦軸に208Pb/206Pbの比を、横軸に207Pb/206Pbの比をとった図・A式図)と第142図(縦軸に207Pb/204Pbの比と横軸に206Pb/204Pbの比をとった図・B式図)に示した。2つの図には、華北領域、華北領域内のa領域、華南領域、朝鮮半島領域、日本領域の各領域が示されている。華北領域は中国華北地域の鉱山と前漢鏡の鉛同位体比から推定され、日本の文化財資料では、弥生時代中期~後期の資料が主に分布する領域である。華北領域内のa領域は日本で出土する弥生時代後期~末期の資料が特に集中する領域である。華南領域は中国華南地域の鉱山と後漢鏡の鉛同位体比から推定され、日本の古墳時代以降の資料が主に分布する領域である。朝鮮半島領域は、多鈕細文鏡や弥生時代から古墳時代にかけて日本から出土した朝鮮半島と関係が深いとされる資料が分布する領域である。産地推定を行いたい資料の鉛同位体比を測定し、この図中に測定値をプロット

し、A式図とB式図にそれぞれの領域内やごく近くに分布した場合はそれぞれの産地の材料が利用されていると推定するのが、鉛同位体比法による産地推定の方法である。

今回の資料の鉛同位体比の測定には、別府大学に設置されているサーモフィッシャーサイエンティフィック社製の表面電離型質量分析計MAT-262を使用した。提供された分析用試料から鉛を分離し、測定の諸条件を整え、同一条件で測定したNBS-SRM-981で測定値を規格化した(4)。

### d. 測定結果・考察

青銅鏡の鉛同位体比測定結果を第10表に示した。鉛同位体比を値だけで理解するのは難しいため、第141図と第142図に測定結果をプロットした。青銅鏡の鉛同位体比は、第141図では華北領域内の左下、第142図では華北領域内の右上に位置した。これらのことから、青銅鏡の材料産地は中国華北であると推定される。

測定結果をより理解するために他の遺跡から出土した鏡と鉛同位体比の比較を行った。今回測定した藤の尾垣添遺跡から出土した青銅鏡は、弥生時代後期終末から古墳時代前期の遺構である1号溝から出土しているため、弥生時代の青銅鏡資料と古墳時代前半の青銅鏡資料と今回測定した青銅鏡の鉛同位体比を第143図と第144図で比較した(⑤)⑥(⑺)。第143図と第144図によると、弥生時代出土青銅鏡は主に華北領域に分布し、古墳時代出土青銅鏡は主に華南領域に分布している。しかし、弥生時代の青銅鏡でも華南領域に分布する資料や、古墳時代の青銅鏡でも華北領域に分布する資料もみられ、両方の時代の資料に華北・華南領域の間に分布している資料が見られる。弥生時代の主材料が華北、古墳時代の主材料が華南と考えるならば、弥生時代の鏡でありながら華南領域に分布した資料や、古墳時代の資料でありながら華北領域に分布するといった資料や、華北・華南領域の間に分布した資料については、単純に特殊例である可能性があるが、華北・華南の両方の材料を入手することのできたであろう弥生~古墳時代の過渡期の資料である可能性も示唆される。

今回測定した青銅鏡は鏡の破片であり、現在の考古学的な情報から鏡の種類などを参考にすることはできない。また、遺構の年代も弥生時代後期終末から古墳時代前半と鉛同位体比の値から見た金属材料の産地が変化する時期にも当たっているため、判断が難しい。しかし、A式図B式図共に弥生時代の青銅鏡が主に分布する華北領域に、今回測定した青銅鏡の鉛同位体比が分布したという事実から、藤の尾垣添遺跡から出土した青銅鏡片は中国華北領域の青銅材料を利用して、弥生時代後期終末に作られた資料である可能性が高いと推定される。

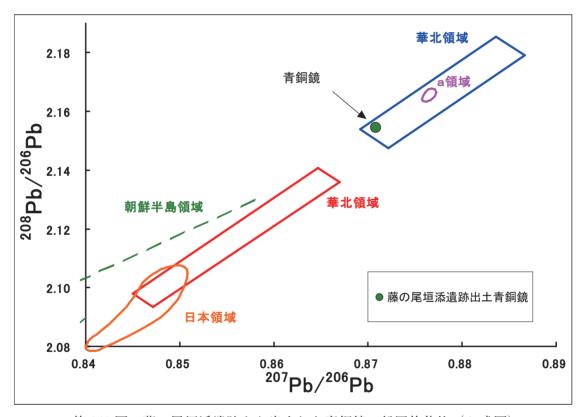
# <参考・引用文献>

- (1) 福岡県教育委員会編:『九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第9集 藤の尾垣添遺跡 1』,(2008)
- (2) 福岡県教育委員会編: 『九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第14集 藤の尾垣添遺跡 2』, (2009)
- (3) 平尾良光:「鉛同位体比を用いた産地推定」『考古学と自然科学 ④』 p314-349(1999)
- (4) 平尾良光、馬淵久夫: 「表面電離型固体質量分析計 V G Sector の規格化について」, 『保存科学』 28, p17 -24 (1989)
- (5) 平尾良光: 鉛同位体比の測定と分析, 「第6巻、弥生・古墳時代、青銅・ガラス製品」『考古資料大観』, 森田稔・井上洋一編, 小学館(東京), p345-368(2003)

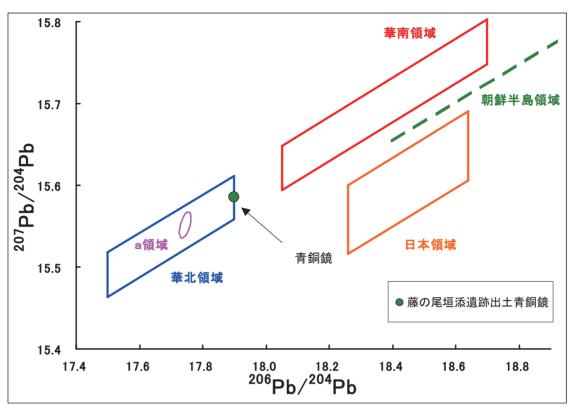
- (6) 山崎一雄、室住正世、馬淵久夫、平尾良光: 椿井大塚山古墳出土鏡の化学成分と鉛同位体比 (改訂), 『昭和28年椿井大塚山古墳発掘調査報告書』,京都府山城町教育委員会編、京都府山城町埋蔵文化財調査報告書 第20集、p79-92(1998)
- (7) Yoshimitsu Hirao, Yasuhiro Hayakawa and Junko Enomoto: Chemical Composition of Cultural Objects and their Technique 「Nondestructive Examination of Cultural Objects -Recent Advances in X-ray Analysis-」, 『The 28th International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property』, NRICP, Tokyo p37 44(2006)

資料名	<sup>206</sup> Pb/ <sup>204</sup> Pb	<sup>207</sup> Pb/ <sup>204</sup> Pb	<sup>208</sup> Pb/ <sup>204</sup> Pb	<sup>207</sup> Pb/ <sup>206</sup> Pb	<sup>208</sup> Pb/ <sup>206</sup> Pb	測定番号
青銅鏡	17.898	15.586	38.559	0.8708	2.1543	BP5385
誤差範囲(1 $\sigma$ )	± 0.010	± 0.010	± 0.030	± 0.0003	± 0.0006	

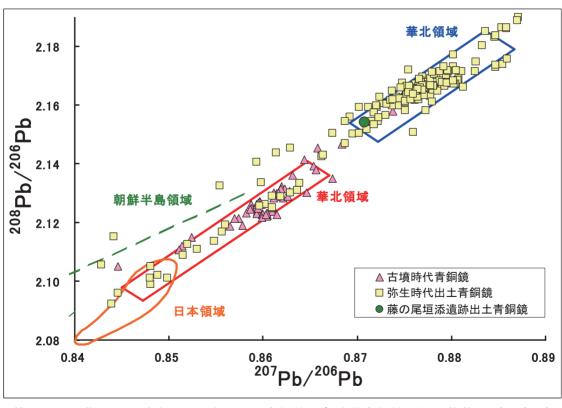
第10表 藤の尾垣添遺跡から出土した青銅鏡の鉛同位体比



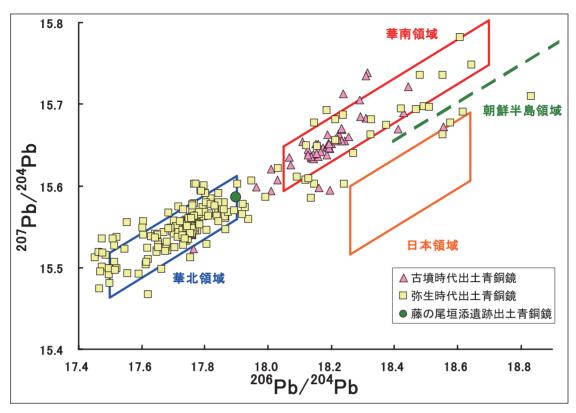
第141 図 藤の尾垣添遺跡から出土した青銅鏡の鉛同位体比(A式図)



第142図 藤の尾垣添遺跡から出土した青銅鏡の鉛同位体比 (B式図)



第143 図 藤の尾垣添遺跡から出土した青銅鏡と各時代青銅鏡の鉛同位体比(A式図)



第 144 図 藤の尾垣添遺跡から出土した青銅鏡と各時代青銅鏡の鉛同位体比(B 式図)

# 2 出土赤色顔料の蛍光X線分析

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

# (1) はじめに

福岡県みやま市に所在する藤の尾垣添遺跡より出土した土器および石器に付着する赤色顔料について蛍光X線分析を行い、組成を検討した。

### (2) 試料と方法

分析対象資料は、藤の尾垣添遺跡から出土した土器6点および石器1点に付着する赤色顔料で、時期は弥生時代後期後半~古墳時代前期である(第11表、第145図)。セロハンテープに資料の赤色部分を極少量採取して分析試料とした。

分析No.	種別	区	面	出土遺構	備考
1	土器	7	3	住41	I - 第75図10
2	土器	7	1	住23 覆土上層	I - 第46図11
3	土器	7	1	住24 覆土上層	I - 第47図7
4	土器	9		住81 P1	
5	土器	9		住81 覆土上層	
6	土器	7	2	住36 P6	I - 第64図4
7	石器	9		住76	磨石

第11表 分析対象資料

分析装置はエネルギー分散型蛍光X線分析装置である(株)堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000Type II を使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV·1mAのロジウムターゲット、X線ビーム径が $100\,\mu\,\mathrm{m}$ または $10\,\mu\,\mathrm{m}$ 、検出器は高純度Si検出器(Xerophy)で、試料室の大きさは  $350\times400\times40\mathrm{mm}$ である。検出可能元素はナトリウム~ウランであるが、ナトリウム、マグネ

シウムといった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上、検出感度が悪いため、試料中に少量含む程度ではピークを検出し難く、検出できてもその定量値はかなり誤差が大きい。

本分析での測定条件は、50kV、 $0.10\sim0.40mA$ (自動設定による)、ビーム径 $100~\mu$  m、測定時間500s、パルス処理時間P4(分解能を重視した設定)に設定した。定量分析は標準試料を用いないPP(ファンダメンタル・パラメータ)法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。そのため、定量値の誤差は大きい。

### (3) 結果

分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を第145図に示す。 分析No.1~No.6からは水銀(Hg)と硫黄(S)が検出された。他にアルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)などが検出された。分析No.7からは鉄(Fe)が多く検出された。他に、アルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、リン(P)、硫黄(S)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、ストロンチウム(Sr)が検出された。

### (4) 考察

この時期に使用されていた赤色顔料としては、朱(水銀朱)とベンガラが挙げられる。水銀朱は、硫化水銀(HgS)で鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄(Fe2O3、鉱物名は赤鉄鉱)を指すが、広義には鉄( $\square$ )の発色に伴う赤色顔料全般を指し(成瀬,2004)、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約1 $\mu$ mのパイプ状の粒子形状からなるものも多く報告されている。これは鉄バクテリアを起源とすることが判明しており(岡田,1997)、含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す(成瀬、1998)。

分析No.1~No.6からは水銀と硫黄が検出されたことから、これら土器には水銀朱が付着していたといえる。分析No.7については、ケイ素など土中成分に由来すると考えられる元素は検出されたものの、水銀は検出されなかった。鉄が多く検出されていることから、赤い発色は鉄によるものであると推定できる。すなわち、顔料としてはベンガラにあたる。また、分析No.7を光学顕微鏡下で観察したところ、パイプ状の粒子は観察されなかった。

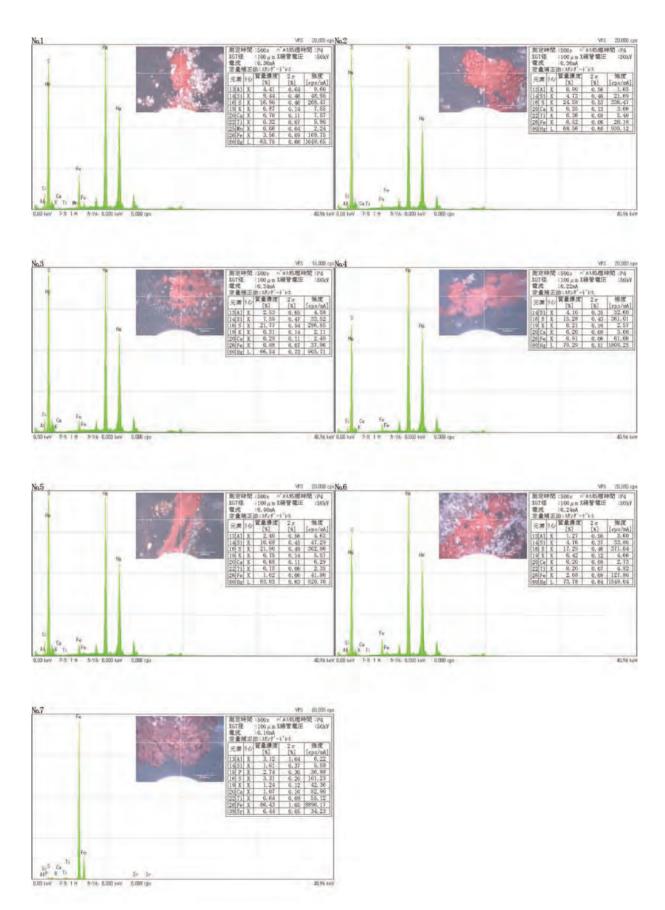
# (5) おわりに

藤の尾垣添遺跡より出土した土器及び石器に付着する赤色顔料について分析した結果、土器付着赤色顔料(分析№1~№6)からは水銀と硫黄が検出され、使用顔料は水銀朱であることが判明した。一方、石器付着赤色顔料(分析№7)からは鉄が多く検出され、鉄(Ⅲ)による発色と推定された。顔料としてはベンガラにあたる。

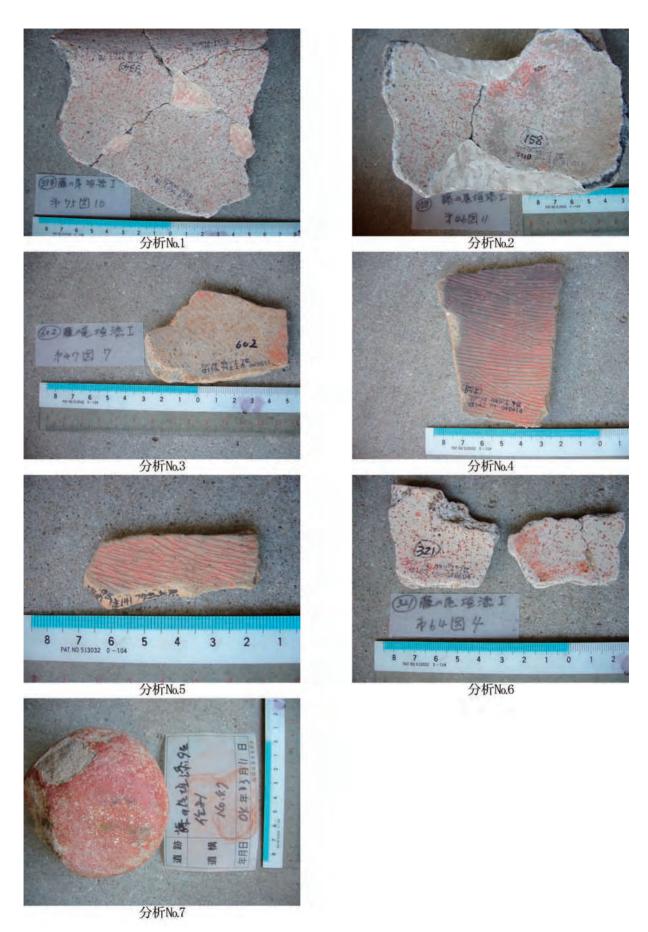
### 引用文献

成瀬正和(1998)縄文時代の赤色顔料 I ―赤彩土器―, 考古学ジャーナルNo438, 10-14, ニューサイエンス社. 成瀬正和(2004)正倉院宝物に用いられた無機顔料, 正倉院紀要, 13-61, 宮内庁正倉院事務所.

岡田文男(1997)パイプ状ベンガラ粒子の復元. 日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, 38-39.



第145図 赤色顔料の蛍光 X 線分析結果



第146 図 分析対象資料

# 3 土器付着物の材料分析

藤根 久・竹原弘展 (パレオ・ラボ)

# (1) はじめに

藤の尾垣添遺跡は、福岡県みやま市瀬高町山門字垣添・北ノ前・峯ノ元・北池に所在する。 今回の調査対象資料は弥生時代中期の甕棺および古墳時代前期前半の甕で、弥生時代中期の甕棺の外側表面には、黒斑とは別に黒色の薄い付着物が付着していた。また、古墳時代前期前半の甕の口縁部には赤色顔料と考えられる赤色物が付着していた。ここでは、これら付着物の材質について調べた。黒色付着物は赤外分光分析と蛍光 X 線分析、赤色付着物は蛍光 X 線分析を行った。なお、黒色付着物は藤根が担当し、赤色付着物は竹原が担当した。

# (2) 試料と方法

分析試料は、藤の尾垣添遺跡から出土した甕棺および甕の外面付着物 3 試料である(第147 図-1a·1b,2a·2b,第148図-1a·1b、第12表)。

試料No.	調査区	遺構	器種	時期	採取場所	付着物
1	7区	K 28	甕棺上甕	弥生時代中期前半	突带下部	黒色物(薄)
2	8区	K33	甕 棺	弥生時代中期前半	突带下部	黒色物(薄)
3	9区	住67覆土	甕	古墳時代前期前半	口縁部	赤色

第12表 土器外面黒色及び赤色付着物試料とその詳細

いずれも典型的な付着部分において、セロハンテープを用いて複数個所について採取した。 黒色付着物は、セロハンテープをエタノールで十分洗浄した後、黒色物を押しつぶして厚さ 1mm程度に裁断した臭化カリウム(KBr)結晶板に挟んで、油圧プレス器を用いて約7トンで 加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計(日本分光㈱製FT/IR-410、IRT-30-16)を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

黒色付着物および赤色付着物は、エネルギー分散型蛍光 X線分析装置(㈱堀場製作所製分析顕微鏡 X GT-5000Y Y Type Y を使用した。装置の仕様は、Y X線管が最大50Y Y Type Y を使用した。装置の仕様は、Y X線管が最大50Y Y Type Y である。測定条件は、Y Color Y Color Y Color Y である。測定条件は、Y Color Y Color

### (3) 結果および考察

以下に、黒色付着物と赤色付着物に分けて述べる。

#### [黒色付着物]

甕棺に付着する黒色付着物について赤外線分光分析を行った結果、吸収2800-2900 (cm-1) 付近の有機物に由来する吸収が見られた。試料№1は、その他吸収が見られるものの物質を同定できる吸収は見られなかった。なお、試料№2は、吸収1029 (cm-1) においてゴム質の吸収が見られたことから有機物の劣化に伴う吸収と考えられる(第147図-3)。なお、蛍光X

線分析を行った結果、試料No1では無機物として鉄(Fe2O3)が13.98~66.54%、カルシウム(CaO)が16.86~39.61%、ケイ素(SiO2)が2.81~10.54%などであった。また、試料No2では無機物として鉄(Fe2O3)が32.93~64.73%、カリウム(K2O)が13.89~34.32%、カルシウム(CaO)が3.03~11.39%、ケイ素(SiO2)が4.19~9.78%などであった(第13表)。これら元素のうちカリウムやカルシウムなどが比較的多く有機物由来の付着物(炭化物)であることを示す。ただし、有機物中の元素であることからX線強度が低く、鉄が相対的に多く検出されている。なお、いずれの試料も、イオウ(SO3)はセロハンテープに由来する元素である。

黒色物の材質については、炭素および窒素安定同位体比や炭素および窒素含有量を測定すると、植物由来か動物由来かなどについて検討出来るが、対象とした黒色物は薄くかつ量的にも少ないことか、困難であることが予想される。

試料No.	点No.	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	P2O5	SO3	K <sub>2</sub> O	Ca0	TiO <sub>2</sub>	MnO <sub>2</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CuO	ZnO	合計
	1	1.12	3.38	0.15	4.73	0.42	21.29	2.99	2.73	62.49	0.31	0.39	100.00
	2	1.66	6.26	0.21	9.18	1.46	29.02	4.65	0.14	46.24	0.76	0.42	100.00
1	3	0.91	2.81	0.03	4.32	1.16	16.86	4.49	2.46	66.54	0.06	0.36	100.00
	4	2.53	10.54	1.26	23.19	1.75	39.61	5.25	0.04	13.98	1.35	0.50	100.00
	5	3.04	7.42	1.29	22.76	1.48	31.07	4.81	0.62	25.76	0.87	0.87	99.99
最小	小値	0.91	2.81	0.03	4.32	0.42	16.86	2.99	0.04	13.98	0.06	0.36	
最为	大値	3.04	10.54	1.29	23.19	1.75	39.61	5.25	2.73	66.54	1.35	0.87	
平均	勻値	1.85	6.08	0.59	12.84	1.25	27.57	4.44	1.20	43.00	0.67	0.51	
	1	1.14	9.78	0.82	6.06	20.74	4.80	14.07	1.08	39.65	1.44	0.42	100.00
	2	0.79	4.25	0.39	4.28	16.32	3.03	4.14	1.06	64.73	0.88	0.13	100.00
2	3	1.22	5.20	0.10	6.17	26.52	11.39	4.52	2.34	41.99	0.39	0.16	100.00
	4	1.78	4.19	0.46	4.94	13.89	8.29	8.64	2.49	53.73	0.73	0.87	100.01
	5	3.13	7.98	0.36	7.10	34.32	3.66	8.47	1.58	32.93	0.38	0.10	100.01
最小	小値	0.79	4.19	0.10	4.28	13.89	3.03	4.14	1.06	32.93	0.38	0.10	
最为	大値	3.13	9.78	0.82	7.10	34.32	11.39	14.07	2.49	64.73	1.44	0.87	
平均	勻値	1.61	6.28	0.43	5.71	22.36	6.23	7.97	1.71	46.61	0.76	0.34	

第13表 黒色付着物の無機元素の分析結果(重量%)

# [赤色付着物]

蛍光X線分析を行った結果、主に水銀 (Hg) と硫黄 (S) が検出された。他にアルミニウム (Al)、ケイ素 (Si)、カルシウム (Ca)、鉄 (Fe) が検出された (第148図-2)。

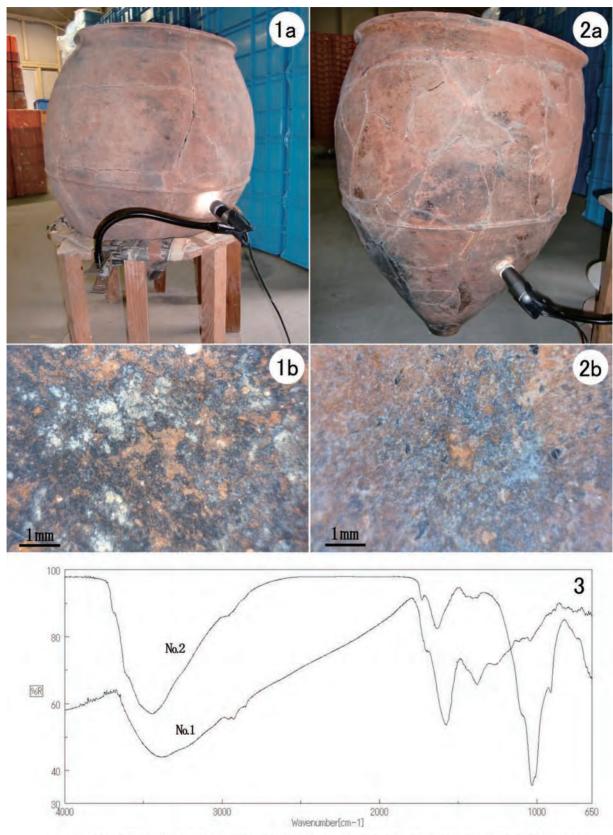
この時期に使用されていた赤色顔料としては、朱(水銀朱)とベンガラが挙げられる。水銀朱は、硫化水銀(HgS)で鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄(Fe2O3、鉱物名は赤鉄鉱)を指すが、広義には鉄(Ⅲ)の発色に伴う赤色顔料全般を指し(成瀬,2004)、広範な地域で採取可能である。

赤色付着物は、水銀と硫黄が高く検出されたことから赤色顔料としての水銀朱である。

### (4) おわりに

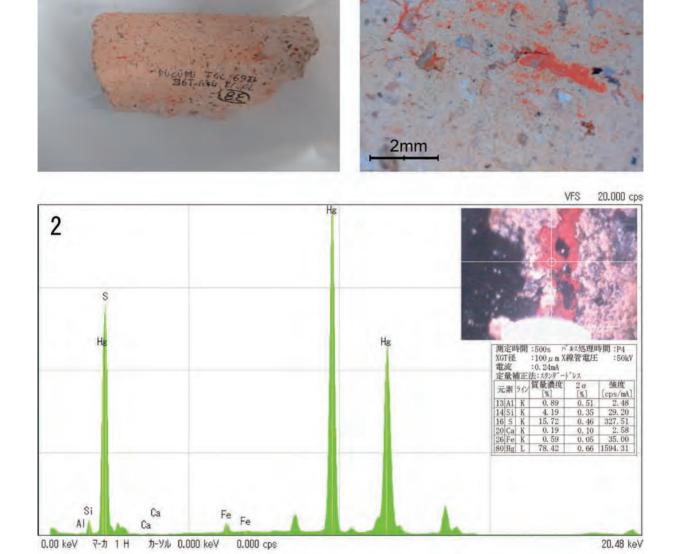
弥生時代中期の甕棺外面の黒色付着物は、劣化が著しく付着物を同定するには至らなかったが、有機物由来の炭化物と推定される。

一方、弥生時代後期の甕口縁部の赤色付着物は、赤色顔料としての水銀朱であった。



1a. 試料No.1 の甕と採取位置 1b. 試料No.1 の付着部分 2a. 試料No.2 の甕と採取位置 2b. 試料No.2 の付着部分 3. 赤外分光スペクトル図 (縦軸は透過率、横軸が波数を示す)

第147図 黒色付着土器と赤外分光スペクトル図



1a

1a. 試料 No.3 の甕の赤色付着物 1b. 試料 No.3 の甕の赤色付着物の拡大

2. 赤色物の蛍光 X 線スペクトル図

[元素記号] Al:アルミニウム. Si:ケイ素, Ca:カルシウム, Fe:鉄, Hg:水銀

第148図 土器付着赤色顔料の蛍光 X 線スペクトル図

# 引用・参考文献

成瀬正和(1998)縄文時代の赤色顔料 I 一赤彩土器一,考古学ジャーナルNo438,10-14,ニューサイエンス社.成瀬正和(2004)正倉院宝物に用いられた無機顔料,正倉院紀要,13-61,宮内庁正倉院事務所.

# 4 土師器および弥生土器の付着物の赤外分光分析

藤根 久 (パレオ・ラボ)

### (1) はじめに

みやま市藤の尾垣添遺跡は、矢部川が形成した低地に位置する。遺跡調査では、多数の住居跡や土坑が検出され、土師器や弥生土器が出土した。これらの土師器の中には、光沢のある黒色物が付着していたものや。また、弥生土器甕にも茶色付着物が観察された(第150図)。ここでは、これら付着物について赤外分光分析を行った。

# (2) 試料と方法

試料は、土師器に付着する黒色物 4 試料と弥生土器に付着する茶色物 1 試料である(第14 表、第150図)。

試料No.	遺構	遺物	報告No.	付着物の特徴	付着部位
1	山門北池遺跡 3 区16号住居跡	土師器坏身	山門北池-第18図9	光沢のある黒色物	内面、外面底部
2	山   1.4.他退跡 3 区10 写住店跡	土師器坏身	山門北池 - 第18図22	光沢のある黒色物	内面~外面口縁部
3	藤の尾垣添遺跡7区25号住居跡	土師器坏身	藤の尾 I - 第47図21	光沢のある黒色物	外面
4	藤の尾垣添遺跡7区26号住居跡カマド内	土師器坏身	藤の尾 I - 第50図2	黒茶色(厚み有)	内面
5	藤の尾垣添遺跡7区19号土坑覆土	弥生土器甕	藤の尾I-第78図14	茶色	内面口縁部

第14表 赤外分光分析を行った土師器および弥生土器の付着物の詳細

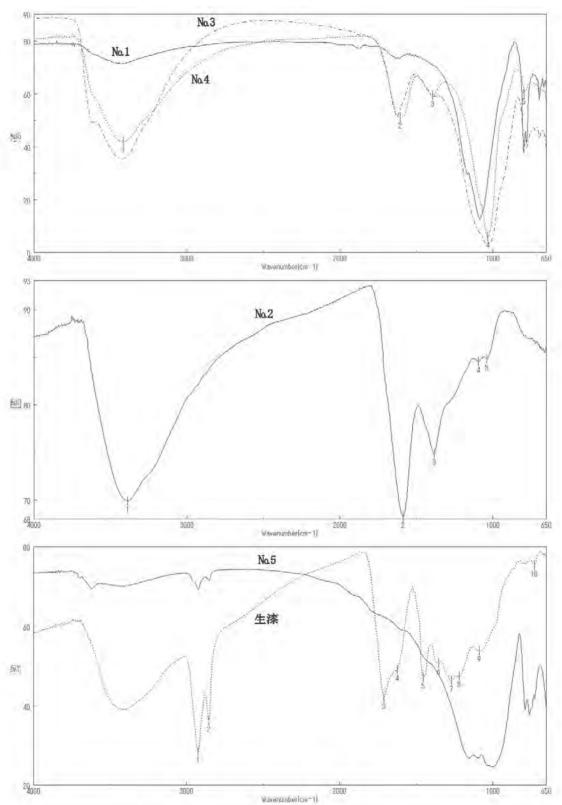
試料は、典型的な付着部分において手術用メスなどを用いて数角程度を薄く削り取った。試料は、押しつぶして厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム(KBr)結晶板に挟んで、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計(日本分光(株製FT/IR-410、IRT-30-16)を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

#### (3) 結果および考察

第149図に、付着物の赤外吸収スペクトル図を示す。図の縦軸が透過率(%R)、横軸が波数(Wavenumber (cm-l);カイザー)である。なお、スペクトルは、ノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は、付着物または生漆の赤外吸収位置を示す(第15表)。

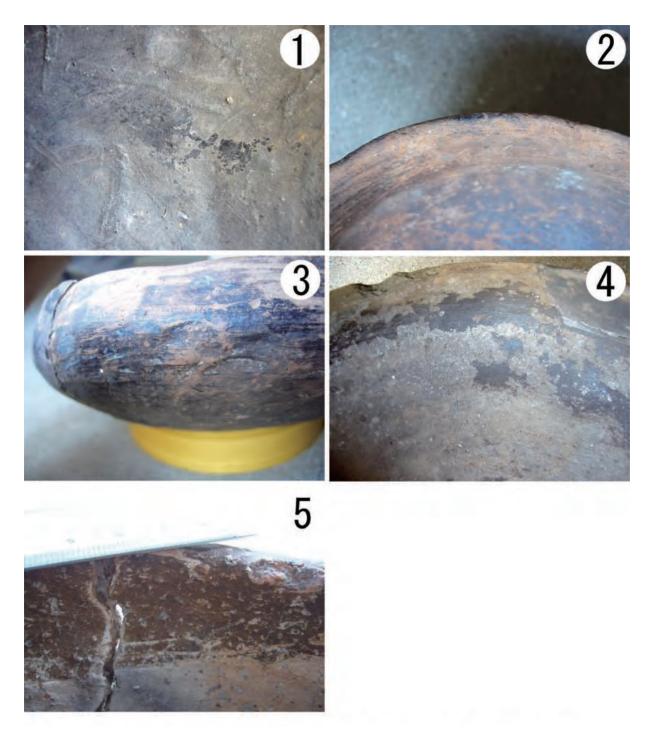
吸収No.	No	).2	No	.3	生	漆
PX4XINO.	位置	強度	位置	強度	位置	強度
1	3388.32	69.8843	3417.24	62.5623	2925.48	28.5337
2	1587.13	68.2867	1606.41	69.7547	2854.13	36.2174
3	1382.71	74.9123	1394.28	76.1913	1710.55	42.0346
4	1095.37	84.5516	1031.73	34.7914	1633.41	48.8327
5	1037.52	84.8127	796.46	76.8985	1454.06	47.1946
6	-	-	_	_	1351.86	50.8030
7	-	-	-	_	1270.86	46.3336
8	_	_	_	_	1218.79	47.5362
9	_	-	-	_	1087.66	53.8428
10	_	_	_	_	727.03	75.3890

第15表 付着物および生漆の赤外線吸収位置と強度



No.1. 土師器坏身内面 No.2. 土師器坏口縁部内面 No.3. 土師器坏外面 No.4. 土師器坏内面 No.5. 弥生土器鉢内面

第149回 付着物・生漆の赤外分光スペクトル図 (縦軸は透過率、横軸が波数を示す)



1. 土師器坏身内面(No.1) 2. 土師器坏身内面(No.2) 3. 土師器坏身外面(No.3) 4. 土師器坏身内面(No.4) 5. 弥生土器甕内面(No.5)

第150図 土師器および弥生土器付着物の拡大写真

測定した結果、No.1~No.4の土師器付着物においては有機物に見られる吸収(2920や2850付近)が見られなかった。このことから、これらの付着物は無機物と考えられる。

一方、No.5の弥生土器の褐色付着物は、有機物に見られる吸収(2920や2850付近)が確認されたことから、有機物と考えられる。ただし、特定される吸収が見られなかったことから、如何なる有機物であるかは同定できなかった。

# 5 出土壁材および土製支脚の材料分析

藤根 久・米田恭子 (パレオ・ラボ)

### (1) はじめに

藤の尾垣添遺跡は、福岡県みやま市瀬高町山門字垣添・北ノ前・峯ノ元・北池に所在する。 調査では、赤彩された壁材および土製支脚が出土した。ここでは、これらの材料について薄片 の偏光顕微鏡観察による特徴と蛍光X線分析による化学組成について調べた。

## (2) 試料と方法

試料は、藤の尾垣添遺跡から出土した壁材および土製支脚の各1試料である(第16表)。壁材および土製支脚は、薄片の偏光顕微鏡観察と蛍光X線による元素マッピング分析を行った。なお、試料No1の壁材表面の赤彩部の蛍光X線分析も行った。

試料No.	遺構	種類	時期	備考	その他
1	8区遺構面	壁材	弥生時代後期~古墳時代前期か	赤色塗彩	
2	7区27号竪穴住居跡	土製支脚	古墳時代後期	イネ籾痕多い	藤の尾I-第51図26

第16表 材料を検討した壁材および支脚とその詳細

### 「胎土薄片の顕微鏡観察】

壁材および土製支脚は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片を作製した。

- ①試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系 樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドグラスに接着し平面を作成した後、同様に してその平面の固化処理を行った。
- ②さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作製した後スライドグラスに接着した。
- ③その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm 前後の薄片を作製した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で研磨し、コーティング剤を 塗布した。

薄片(プレパラート)は、偏光顕微鏡を用いて薄片全面について微化石類(放散虫化石、珪藻化石、骨針化石)と大型粒子の特徴およびその他の混和物について観察と記載を行った。なお、ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。

# [珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは10~数百  $\mu$  m程度である。珪藻は海水域から 淡水域に広く分布する。小杉(1988)や安藤(1990)は、現生珪藻から環境指標種群を設定 し、具体的な環境復原を行っている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻 化石(海水種、淡水種)と分類した。

#### [骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状からなる。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。このことから、骨針化石は水成環境を指標する。

### [植物珪酸体化石]

主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、長径約 $10\sim50~\mu$  m前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在する。

### [胞子化石]

胞子粒子は、直径約 $10\sim30~\mu$  m程度の珪酸質の球状粒子である。胞子は、水成堆積中で多く見られるが土壌中にも含まれる。

#### 「石英・長石類〕

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く、一括して扱う。 「長石類」

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶(主として平行な縞)を示すものと累帯構造(同心円状の縞)を示すものに細分される(これらの縞は組成の違いを反映している)。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの(パーサイト構造)と格子状構造(微斜長石構造)を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶(微文象構造という)である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶(斑晶)に見られることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などのケイ酸分の多い深成岩などに産出する。

ミルメカイトあるいは文象岩は花崗岩などに産出する。

#### [雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開(規則正しい割れ目)にそって板状には剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などのケイ酸分の多い火成岩に普遍的に産し、変成岩類や堆積岩類にも産出する。

#### 「輝石類〕

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石(主に紫蘇輝石)は、肉眼的にビールびんのような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産する。単斜輝石(主に普通輝石)は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類やケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類中にも産出する。

# [角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のようなケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類あるいは火山岩類に産出する。

### 「ガラス質」

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄くて湾曲したガラス(バブル・ウォール型)や小さな泡をたくさんもつガラス(軽石型)などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物(テフラ)である。

## 「複合石英類〕

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質(マトリックス)の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01mm未満のものを微細、0.01~0.05mmのものを小型、0.05~0.1mmのものを中型、0.1mm以上のものを大型と分類した。

### [砂岩質·泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し基質部分をもつ。構成粒子の大きさが約0.06mm 以上のものを砂岩質、約0.06mm未満のものを泥岩質とした。

#### 「不明粒子]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるい は岩石片として同定不可能な粒子を不明粒子とした。

# [蛍光X線分析による元素マッピング分析]

試料は、薄片を作製した残り試料の切断面を用いて元素マッピング分析を行い、特徴的な組成部分について点分析を行った。

測定は、X線分析顕微鏡(㈱堀場製作所製XGT-5000Type II)を用いた。元素マッピングの 測定条件は、X線導管径 $100\,\mu$  m、電圧50KV、電流自動設定、測定時間10,000secである。点分 析の測定条件は、X線導管径 $100\,\mu$  m、電圧50KV、電流自動設定、測定時間500secである。定 量計算は、標準試料を用いないFP(ファンダメンタルパラメータ)法で半定量分析を行った。

なお、壁材の赤彩部については、典型的な赤色部分においてセロハンテープで採取し、短時間の元素マッピングを行った後、鉄の高輝度について複数個所において点分析を行った。

# (3) 結果

以下に、壁材および土製支脚の各薄片の顕微鏡観察結果と蛍光X線分析による化学組成について述べる。なお、ここでは、壁材および土製支脚を胎土と呼ぶ。

### [薄片の偏光顕微鏡観察]

胎土中の粒子組成は、微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度組成や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。なお、第18表中において、◎が非常に多い、○が多い、△が検出、空欄が未検出である。

No.1:平均粒径50~500  $\mu$  m(最大粒径1.0mm)。石英·長石類〉雲母類、斜方輝石》複合石英類、複合石英類(微細)、砂岩質、斜長石(双晶)、単斜輝石、角閃石類、ガラス質、凝灰岩質、珪藻化石(海水種Cocinodiscus属/Thalassiosira属、淡水種湖沼沼沢湿地指標種群Aulacosira distans、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、微粒炭片多量No.2:平均粒径50~150  $\mu$  m(最大粒径200  $\mu$  m)。石英·長石類〉雲母類、斜方輝石》複合石英類、複合石英類(微細)、砂岩質、斜長石(双晶)、単斜輝石、角閃石類、ガラス質、凝灰岩質、珪藻化石(外洋指標種群Thalassionema nitzschioides、海水種Cocinodiscus属/Thalassiosira属多産、Actinocyclus属、内湾指標種群Paralia sulcata,汽水種Achnanthes brevipes、汽水泥質干潟指標種群Pseudopodosira kosugii、淡水種Epithemia turgidula、Synedra ulna、Cymbella属、Cocconeis placentula、Pinnularia属、Caloneis silicula、Aulacosira属、不明種多産)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、微粒炭片多量

## [蛍光X線分析による元素マッピング分析]

壁材および土製支脚の切断面の元素マッピング分析では、いずれの試料においてもマンガン (Mn) と鉄 (Fe) において不均一な元素分布を示した。その他の元素では比較的均一な分布を示した(第151図)。各試料における点分析では、試料No.1 (壁材)では、ケイ素(SiO2)が43.67~55.27%、アルミニウム(Al2O3)が17.95~18.79%、鉄(Fe2O3)が19.71~27.28%、カリウム(K2O)が2.29~2.33%などであった。また、試料No.2 (土製支脚)では、ケイ素(SiO2)が39.56~93.23%、アルミニウム(Al2O3)が2.28~21.16%、鉄(Fe2O3)が3.00~15.09%、カリウム(K2O)が0.51~3.79%などであった(第16表)。

# [壁材の赤彩部の蛍光X線分析]

壁材の赤彩部の蛍光X線分析では、鉄の高輝度において測定した。その結果、鉄(Fe2O3)が72.12~88.51%であった(第17表)。

No.	点No.	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	SO <sub>3</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO <sub>2</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CuO	Rb <sub>2</sub> O	SrO	Y <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	ZrO <sub>2</sub>	合計
	1	17.95	44.26	1.17	3.56	2.29	1.61	1.34	0.43	27.04	0.05	0.06	0.10	0.03	0.11	100.00
1	2	18.79	43.67	1.10	3.21	2.33	1.55	1.28	0.44	27.28	0.06	0.06	0.09	0.04	0.12	100.02
	3	18.53	55.27	0.81	0.23	2.32	1.36	1.01	0.49	19.71	0.02	0.04	0.07	0.01	0.13	100.00
最小信	直	17.95	43.67	0.81	0.23	2.29	1.36	1.01	0.43	19.71	0.02	0.04	0.07	0.01	0.11	
最大信	直	18.79	55.27	1.17	3.56	2.33	1.61	1.34	0.49	27.28	0.06	0.06	0.10	0.04	0.13	
平均信	直	18.42	47.73	1.03	2.33	2.31	1.51	1.21	0.45	24.68	0.04	0.05	0.09	0.03	0.12	
	1	1.03	4.00	0.00	3.78	3.85	5.32	5.33	0.60	74.75	0.58	0.05	0.27	0.12	0.32	100.00
110	2	0.02	4.63	0.21	3.94	4.25	4.01	8.05	0.46	72.81	0.62	0.00	0.31	0.05	0.62	99.98
赤色	3	0.64	2.27	0.10	2.17	1.49	1.18	2.15	0.86	88.51	0.35	0.00	0.11	0.12	0.05	100.00
塗彩部	4	0.71	3.00	0.13	2.54	2.00	5.36	1.82	1.45	82.37	0.33	0.01	0.18	0.09	0.02	100.01
	5	0.92	5.64	0.21	3.65	4.52	4.24	6.76	0.42	72.12	0.82	0.00	0.28	0.24	0.18	100.00
最小信	直	0.02	2.27	0.00	2.17	1.49	1.18	1.82	0.42	72.12	0.33	0.00	0.11	0.05	0.02	
最大信	直	1.03	5.64	0.21	3.94	4.52	5.36	8.05	1.45	88.51	0.82	0.05	0.31	0.24	0.62	
平均信	直	0.66	3.91	0.13	3.22	3.22	4.02	4.82	0.76	78.11	0.54	0.01	0.23	0.12	0.24	
	1	2.28	93.23	0.00	0.37	0.51	0.21	0.27	0.03	3.00	0.01	0.02	0.03	0.00	0.03	99.99
	2	14.94	62.71	1.86	2.95	2.68	1.87	1.14	0.19	11.39	0.04	0.04	0.09	0.02	0.07	99.99
2	3	16.33	49.56	0.74	1.80	1.64	1.18	0.80	16.80	10.99	0.04	0.02	0.04	0.02	0.04	100.00
	4	16.07	58.97	1.04	5.77	2.18	2.99	0.94	0.10	11.74	0.04	0.04	0.06	0.01	0.08	100.03
	5	13.91	63.73	0.93	1.13	2.26	1.60	1.01	0.11	15.09	0.04	0.03	0.07	0.01	0.09	100.01
	6	21.16	59.68	1.86	0.50	3.79	1.38	1.40	0.15	9.89	0.03	0.03	0.06	0.02	0.07	100.02
最小信	直	2.28	49.56	0.00	0.37	0.51	0.21	0.27	0.03	3.00	0.01	0.02	0.03	0.00	0.03	
最大信	直	21.16	93.23	1.86	5.77	3.79	2.99	1.40	16.80	15.09	0.04	0.04	0.09	0.02	0.09	
平均信	直	14.12	64.65	1.07	2.09	2.18	1.54	0.93	2.90	10.35	0.03	0.03	0.06	0.01	0.06	

第17表 壁材とその赤彩部および土製支脚断面の半定量分析結果 (重量%)

# (4) 考察

### a. 微化石類による材料粘土の分類

壁材および土製支脚胎土中には、その薄片全面の観察から、珪藻化石などの微化石類が検出された。微化石類の大きさは、珪藻化石が $10\sim$ 数 $100~\mu$  m、骨針化石が $10\sim$ 100 $\mu$  m前後である(植物珪酸体化石が $10\sim$ 50 $\mu$  m前後)。一方、砕屑性堆積物の粒度は、粘土が約 $3.9~\mu$  m以下、シルトが約 $3.9\sim$ 62.5 $\mu$  m、砂が6 $2.5~\mu$  m~2mmである(地学団体研究会・地学事典編集委員会編、1981)。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は胎土の粘土材料中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。

なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれているものの、製作場では灰質が多く混入する 可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した試料胎土は、微化石類により、①淡水成粘土を用いた胎土に分類された。以下では、分類された粘土の特徴について述べる。

### ①淡水成粘土を用いた胎土

壁材および土製支脚胎土中には、海水種珪藻化石のほか、淡水種が含まれていた(第152 図)。特に、支脚中には、海水種珪藻化石や淡水種珪藻化石が多く、骨針化石や不明種珪藻化石も多く含まれていた(第152図-2c~2g)。

		粘土の特徴									砂粒0	D特徴					鉱物の	D特徴		植物	
試 料 No.	種類	放散虫化石	珪藻水 作 石	珪藻化石 石	珪藻化 石	骨針化石	胞子化石	分類	片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テラフ	ジルコン	角閃石類	輝石類	雲母類	7 珪酸体化石	備考
1	淡水成		$\triangle$	Δ	$\triangle$	0	$\triangle$	(Ec)			Δ		Δ		Δ		0	0	0	0	微粒炭多量
2	淡水成		0	0	0	0	0	(E)					$\triangle$		Δ		0	0	0	0	微粒炭多い

第18表 粘土塊中の粘土および砂粒組成の特徴

### b. 胎土中の砂粒組成による分類

ここで設定した岩石片は、構成する鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。このため、各胎土中の鉱物、岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。

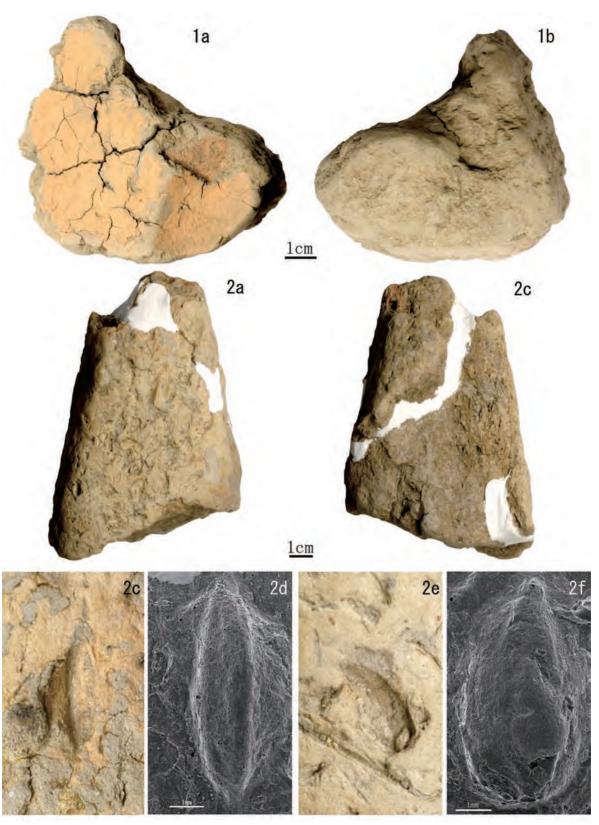
ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った(第18表)。岩石の推定は、 複合石英類(微細)や砂岩質が堆積岩類、ガラス質がテフラ(火山噴出物)、凝灰岩質が凝灰岩 類である。さらに、推定した起源岩石は、第19表の組み合わせに従って分類した。

全体的に大型の砂粒は少なく、堆積岩類やテフラあるいは凝灰岩類が少量含まれていた。この地域周辺には、低位段丘堆積物や中位段丘堆積物が隣接して分布することから(独立行政法

人産業技術総合研究所 地質調査総合センター,2004)、こうした段丘堆積物を採取利用したことが考えられる。

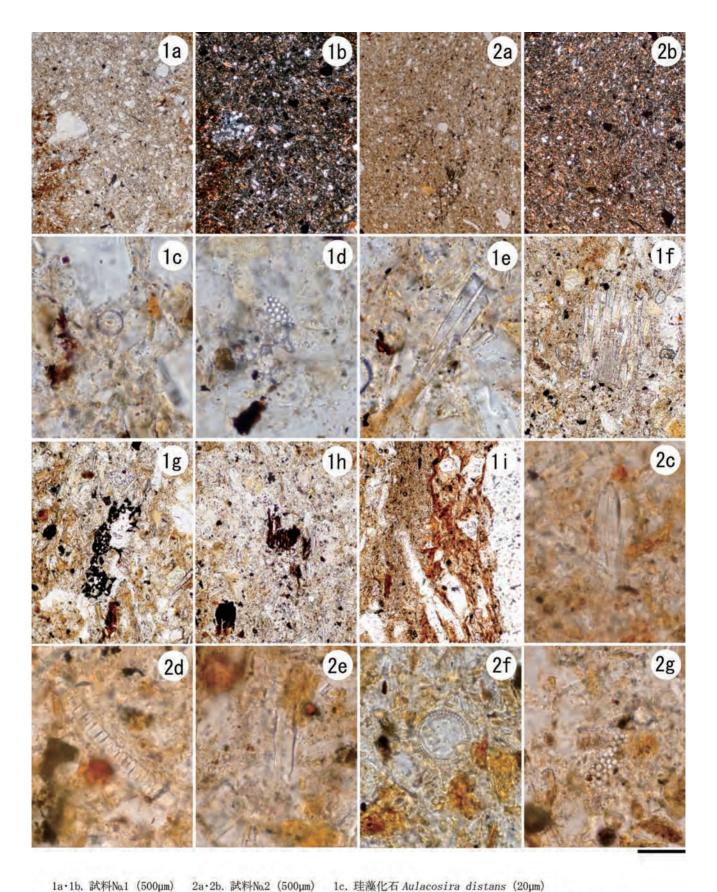
	_					第1出現群			
			A	В	С	D	E	F	G
			片岩類	堆積岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
	a	片岩類		Ва	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
***	b	深成岩類	Ab		Cb	Db	Eb	Fb	Gb
第2	С	堆積岩類	Ac	Вс		Dc	Ec	Fc	Gc
出	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd	Gd
出現群	е	凝灰岩類	Ae	Ве	Ce	De		Fe	Ge
柏干	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef		Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Ef	Fg	

第19表 岩石片の起源と組み合わせ

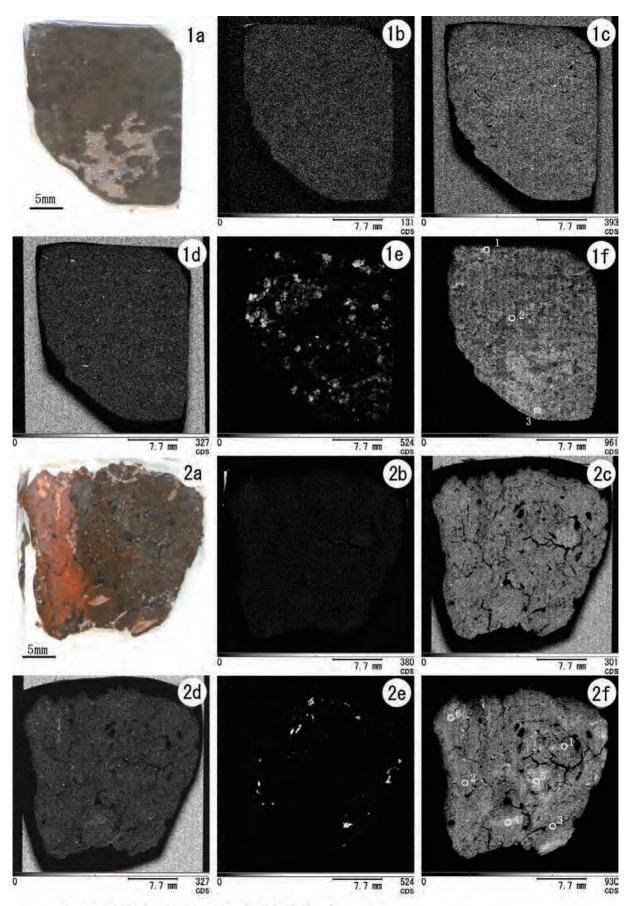


1a. 試料 No.1 の表面1b. 試料 No.1 の裏面2a. 試料 No.2 の表面2b. 試料 No.2 の裏面2c. 土製支脚表面の種子痕の実体顕微鏡写真2d.2c 種子痕レプリカの電子顕微鏡写真2e. 土製支脚表面の種子痕の実体顕微鏡写真2f.2e 種子痕レプリカの電子顕微鏡写真

第151図 壁材および土製支脚と種子痕の顕微鏡写真



1d. 珪藻化石 Coscinodiscus 属 / Thalassiosira 属 (20µm) 1e. 骨針化石 (100µm) 1f. 棒状珪酸体 (100µm) 1g. 炭化植物片 (100µm) 1h. 炭化植物片 (100µm) 1i. 赤色層 (100µm) 2c. 珪藻化石 Pinnularia 属 (20µm) 2d. 珪藻化石 Epithemia turgidula (20µm) 2e. 珪藻化石 Caloneis silicula (20µm) 2f. 珪藻化石 Palaria sulcata (20µm) 2g. 珪藻化石 Coscinodiscus 属 / Thalassiosira 属 (20µm) 第 152 図 壁材および土製支脚胎土の顕微鏡写真 (a:開放ニコル、b:直交ニコル)



la-lf. 壁材 (No.1)2a-2f. 土製支脚 (No.2)第 153 図 各試料の断面とその元素マッピング図「元素、b:Al,e:Si,d:Ca,e:Mn,f:Fe]

# c. 壁材および土製支脚の材料

いずれの試料も、海水種珪藻化石のほか淡水種珪藻化石や骨針化石が含まれていた。このことから、基盤として海成層が分布する地域において、淡水域で堆積した粘土層を利用したことが推定される。なお、大型の砂粒が少ないが、いずれも堆積岩類の砂粒物を含むことから類似した組成と推定される。元素マッピング分析では、マンガン(Mn)や鉄(Fe)において不均一であり、点分析において試料No2の土製支脚において鉄の含有量が高い傾向が見られた。なお、切断面において赤色層が観察されたが、鉄分が極端に高い値を示さないことから、受熱により赤化したものと推定される。

試料No.1の壁材の表面には、赤彩が施されていたが、鉄(Fe2O3)が72.12~88.51%と高い含有量を示し、鉄酸化物のベンガラが塗布されている。

試料No.2の土製支脚中にはイネ籾痕が多く見られたことから、籾がらが混和材として混ぜられたことが確認された。なお、いずれの試料も微粒炭片を多量に含んでいた(第152図  $-\lg \cdot lh$ )。

### (5) おわりに

壁材および土製支脚の薄片による顕微鏡観察では、いずれの試料も、海水種珪藻化石のほか 淡水種珪藻化石や骨針化石が含まれていた。このことから、基盤として海成層が分布する地域 において、淡水域で堆積した粘土層を利用したことが推定された。また、試料No.1の壁材の表 面において赤彩され、鉄酸化物のベンガラが塗布されている。また、試料No.2の土製支脚中に はイネ籾痕が多く見られ、籾がらが混和材として混ぜられたことが判明した。

# 引用文献

安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42,2,73-88. 地学団体研究会・地学事典編集委員会編 (1981) 『増補改訂 地学事典』, 平凡社, 1612p. 独立行政法人産業技術総合研究所 地質調査総合センター (2004) 20万分の1地質図幅「熊本」. 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27,1-20.

### 6 出土炭化材の樹種同定

小林克也 (パレオ・ラボ)

### (1) はじめに

藤の尾垣添遺跡から出土した炭化材について樹種同定を行った。藤の尾垣添遺跡は、矢部川によって形成された自然堤防上に立地する、弥生時代から古墳時代にかけての集落・墓地跡である。同定試料は、9区63号竪穴住居跡の覆土より出土した炭化材3点で、出土状況等より建築材と考えられる材である。ここでは、当時の建築材の用材利用について考える。

### (2) 試料と方法

試料は9区63号竪穴住居跡より出土した炭化材3点である。炭化材の同定方法は、炭化材の

横断面(木口)・接線断面(板目)・放射断面(柾目)を5mm角程度の大きさに整形したあと、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し試料を作製した。この後金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡で撮影を行った。なお、分析試料は福岡県教育委員会に保管されている。

### (3) 結果

同定の結果、いずれも常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属(以下アカガシ亜属)であった。 しかしNo.3の試料は、試料サイズが小さかったため、接線断面(板目)・放射断面(柾目)を 確認する事が出来ず、横断面(木口)で樹種を判断した。そのためコナラ属アカガシ亜属?と した。第20表に樹種同定結果の一覧を記す。

以下に同定された材の特徴を記載し、第154図に走査型電子顕微鏡写真を示す。

コナラ属アカガシ亜属 Quercus subgen. Cyclobalanopsis ブナ科 第154図 1a-1c(No.2)

やや大きい厚壁の道管が単独で放射方向に並ぶ放射孔材である。軸方向柔細胞は1~3列で、接線状に並ぶ。道管の穿孔は単穿孔を有する。放射組織は単列同性のものと集合放射組織がみられる。

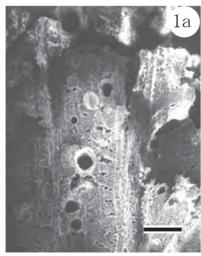
コナラ属アカガシ亜属には、 アカガシやツクバネガシなどが あり、暖帯に分布する常緑高木 の広葉樹である。材は重硬、強 靭で耐水性・耐朽性があるが、 切削加工は困難である。

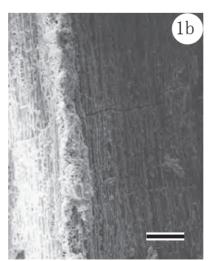
試料No.	出土遺構	出土層位	種類	樹種名
1	9 区住63	覆土上層	建築材?	コナラ属アカガシ亜属
2	9区住63	覆土上層	建築材?	コナラ属アカガシ亜属
3	9区住63	覆土上層	建築材?	コナラ属アカガシ亜?

第20表 藤の尾垣添遺跡出土炭化材の樹種同定結果一覧

# (4) 考察

同定の結果は、いずれもアカガシ亜属であった。アカガシ亜属は、加工は困難であるが非常に頑強で耐水性・耐朽性に優れた材である。当時の人々も、このようなアカガシ亜属の材の特性を理解して建築材として利用したことが考えられる。またアカガシ亜属は、常緑広葉樹林の主要構成樹木の一つでもある。当遺跡周辺には、アカガシ亜属含む常緑広葉樹林が広がっていた可能性が考えられる。







1a-1c. コナラ属アカガシ亜属 (No. 2)

a: 横断面 (スケール = 200  $\mu$  m) b: 放射断面 (スケール = 100  $\mu$  m) c: 接線断面 (スケール = 50  $\mu$  m)

第154図 藤の尾垣添遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

# 7 サヌカイトの産地推定

竹原弘展(パレオ・ラボ)

### (1) はじめに

福岡県みやま市に所在する藤の尾垣添遺跡より出土したサヌカイト資料について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

# (2) 試料と方法

分析対象資料は藤の尾垣添遺跡より出土したサヌカイト3点である(第21表)。試料は風化

層に覆われていたため、サンドブラストを用いて一部新鮮面を表出させ、測 定箇所とした。

分析装置は、(株)セイコーインスツルメンツ社製のエネルギー分散型蛍光 X線分析計SEA-2001Lを使用した。装

分析No.	区	面	出土遺構	種類	材質	備考
1	7	2	土25	スクレイパー	サヌカイト	I-第91図11
2	7	3	土33	スクレイパー	サヌカイト	I-第91図12
3	7	3	土33	スクレイパー	サヌカイト	I-第91図13

第21表 分析対象資料

置の仕様は、X線管はRhターゲット、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、測定時間300sec、照射径10mm、電流1~63 $\mu$ A(デッドタイムが20%未満になるよう設定)、電圧 50kV、試料室内雰囲気真空に設定した。

産地推定には、黒曜石産地推定法において用いられている蛍光X線分析によるX線強度を用いた判別図法(例えば望月2004)を、分析対象をサヌカイトに置き換えて適用した。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)とルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(Zr)の合計7元素のX線強度(Zr)の合計7元素のX線強度(Zr)の合計7元素のX線強度(Zr)の合計7元

- 1).Rb分率=Rb强度×100/(Rb强度+Sr强度+Y强度+Zr强度)
- 2)、Sr分率=Sr強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)
- 3).Mn強度×100/Fe強度
- 4).log(Fe強度/K強度)

そしてこれらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率 - 縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率 - 縦軸log(Fe強度/K強度)の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定するものである。原石試料も、採取原石を割って新鮮な面を表出させた上で産地推定対象試料と同様の条件で測定した。第22表に各原石採取地とそれぞれの試料点数を示す。

# (3) 分析結果

第155図および第156図に、サヌカイト原石の判別図と藤の尾垣添遺跡出土試料をプロットした図を示す。なお、両図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

判別図は、讃岐エリアの原石は雄山・城山以外は非常に近接しており重複部分も多く、明確

な区別は難しい。しかし、二上山エリアの原石と讃岐エリアの原石は明確にプロットされる位置が異なり、十分に区別可能である。

藤の尾垣添遺跡出土試料は、いずれも第156図では国分台1の範囲及びその周辺にプロットされたが、第155図では一致する判別群は無く、産地は不明であった。少なくとも比較対象原石として測定した二上山や讃岐地方各産地のサヌカイトとは異なるといえる。また、特に分析No.2とNo.3は非常に近い組成を示したため、同一産地である可能性も考えられる。

### (4)終わりに

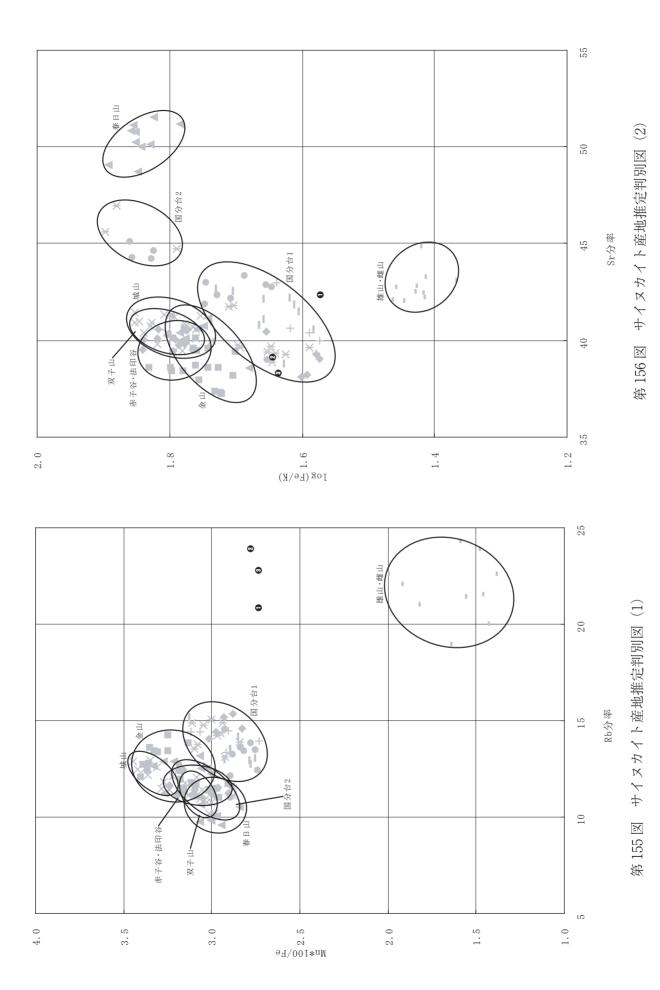
藤の尾垣添遺跡より出土したサヌカイトについて、蛍光X線分析を用いた判別図法による産 地推定を行った結果、3点の資料いずれも二上山、讃岐地方の各原石とは異なる組成を示し、 産地は不明であった。

## 引用文献

望月明彦(2004) 用田大河内遺跡出土黒曜石の産地推定. かながわ考古学財団調査報告167 用田大河内遺跡, 511-517, 財団法人 かながわ考古学財団.

エリア	判別群	原石採取地(試料点数)		
二上山	春日山	春日山みかん畑内(10)		
讃岐	国分台1	自衛隊演習場付近(5)、神谷神社前(13)、高産霊神社谷(12)、国分台下みかん畑(5)、蓮光寺(10		
	国分台2			
	赤子谷·法印谷	赤子谷第1地点(5)、赤子谷第2地点(5)、法印谷(10)		
	金山	北峰道路脇(10)、金山南麓(10)		
	城山	城山南側(5)、城山北側(5)		
	雄山・雌山	雄山(5)、雌山(5)		
	双子山	双子山南嶺(10)		

第22表 原石採取地と判別群名称



# V まとめ

# 1 藤の尾垣添遺跡の集落・墓地の変遷

これまで 2次にわたる発掘調査で、本遺跡の南北 1 ヶ所、東西 2 ヶ所に丁度トレンチを入れたような調査区となったため、各時期における本遺跡の様相がある程度明らかになった。これまで、 2次調査報告 I ・II のまとめでも 6 ~8 区集落の変遷について論じてきたが、最終冊にあたる本書では、 1 次調査も含むこれまでの調査成果から、本遺跡の集落及び墓地の変遷について、遺跡の立地状況も考慮した上で考察することとしたい。

なお、本書で用いた時期区分については、近年の著しい発掘調査の進展により、みやま市域 の弥生時代前期~古墳時代中期前半における土器編年がおおよそ可能な状況であることから、 本来なら土器編年を提示した上で考察すべきである。しかし、現在瀬高インター線建設による 山門牛島遺跡・山門ガラン遺跡・本吉遺跡・松延城跡、有明海沿岸道路建設による蒲船津江頭 遺跡など、当該期の遺跡調査報告が中途であることから、それらの報告後に本地域における土 器編年作業を行うべきであろう。そこで、本稿ではその代わりとして、弥生時代前期~古墳時 代中期前半各時期の指標となる標識土器出土遺構を第23表にまとめ、暫定案として提示した。

以下ではこの時期区分をもとに各時期順に集落の変遷を論じるが、墓地の変遷では橋口達也 氏の南筑後甕棺編年を用いて行うこととする。

#### 弥生時代前期

本遺跡の形成は前期後半の7区32号土坑を始まりとする。本遺跡南の山門前田遺跡1区6号 溝は前期前半の板付Ⅱa式併行期であることから、本遺跡周辺では少なくとも前期前半に、土 器様相から佐賀平野を介して弥生文化要素が伝播したと考えられる。なお、山ノ上遺跡では早

時代	時期		備考		
		藤の尾垣添遺跡	小川柳ノ内遺跡	周辺の遺跡	1
弥生時代	前期前半		5 区土44	山門前田1区溝6	
	前期後半	7 区土32	5 区土42		
	前期末	7 区土33(古相)、9 区土117 (新相)	5 区土 7·25、6 区土25、7 区土 5·20·28·68、8 区土 5		
	中期初頭	7 区土21、8 区土43、9 区土 118	5 区土45、6 区土26、6 区土 33(新)	上枇杷5号貯蔵穴(新相)、 上枇杷土器溜め(新相)	青銅器生産の開始?(上枇 杷遺跡)
	中期前半			上枇杷土7(古相)	
	中期後半		2区土3(新)、3区2号 祭祀土坑	上枇杷祭祀土坑、海津横馬 場住24	黒髪Ⅱ式と共伴
	後期初頭		2区土5、3区1号祭祀土 坑、3区土1·7	大江南竪穴遺構、三船山住 5・18、海津横馬場土13	黒髪Ⅱ式と共伴 (主体)
	後期前半		4区土4	三船山住9、藤ノ尾車塚住 11、海津横馬場住21	海津横馬場住21で凹線文甕出 土(吉備V様式前葉に類似)
	後期後半		6区土8、7区住17		
	後期終末	7区住13、8区住59	7区住1		
古墳時代	前期前半	8 区住46、9 区住86·土90	4区住6·12	藤ノ尾車塚住1・3、御仁田 住6	基本的に在地系土器が主 体、一部庄内・布留系の流入
	前期中葉	9 区住76	4区住9	藤ノ尾車塚住10、御仁田住4	
	前期後半	1次住4			
	中期前半	7区住29			

第23表 みやま市域における弥生時代~古墳時代中期前半の時期区分

期~前期前半の小児用甕棺墓群が認められ、この伝播が一段階遡る可能性がある。少し本筋からそれたが、本遺跡の前期後半は土坑1基のみであったが、前期末になると、9区中央~8区~7区北という遺跡中央部に土坑が点在する。集落本体は東の旧河川の存在から、西の現藤ノ尾集落内に存在した可能性が高い。このことは、小川柳ノ内遺跡7区2面では前期後半~末の土坑のみが集中する一方、同遺跡5・8区では前期末を中心とした松菊里型住居を含む円形住居群と土坑群が検出されており、本遺跡の土坑配置はどちらかというと後者の円形住居群に付属する土坑の配置状況に近いことも、西に集落本体が存在する可能性を示しているといえよう。弥生時代中期

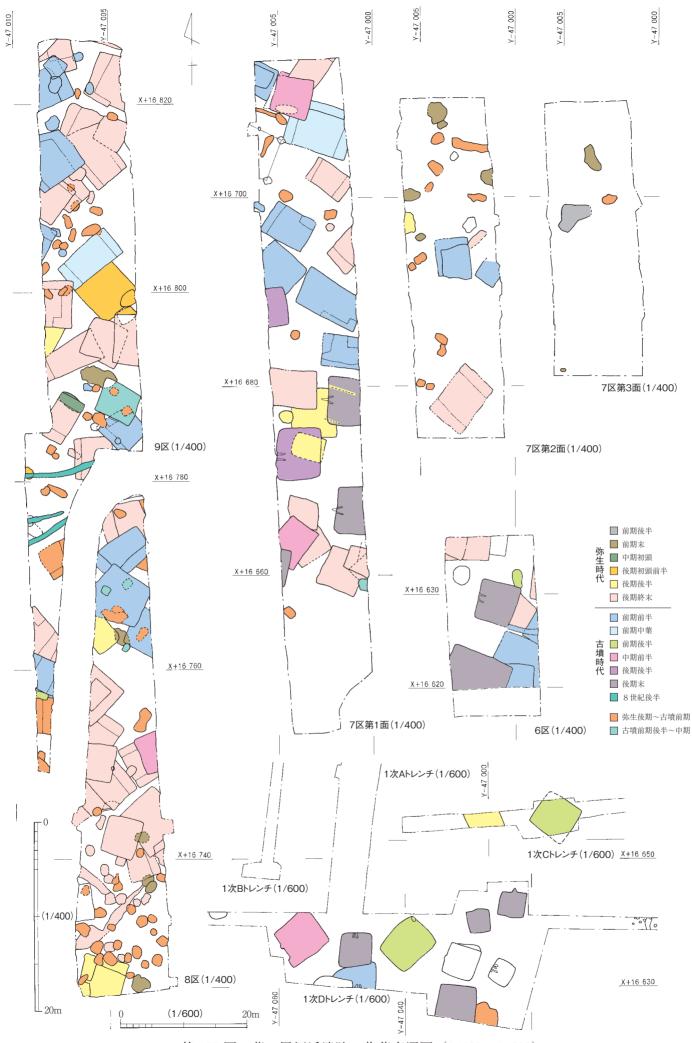
中期初頭の7区35号土坑と9区118号土坑を最後に、本調査区内は集落域から墓域に一旦変化する。第158図は甕棺墓の変遷を示したもので、↑は頭位の方向を表す。

まず、南筑後 K I a 式期に始まる本遺跡の墓地は、7~8 区の北西 - 南東方向と 1 次 A · B トレの北東 - 南西方向に列状に形成されるが、頭位・方位ともまとまりはない。続く、K I b 式期もこの列状構造が認められ、前段階に比べ甕棺墓も増加する。北西 - 南東方向の方位は東西、頭位は東が優先し、北東 - 南西方向は方位が北東 - 南西、頭位は北東が優先する。このような列状構造は、権現塚北遺跡や竹飯犬ノ馬場遺跡など、広く北部九州で認められるものである。この列状構造は K I c 期になると崩れ、8 区南、7 区北、1 次 A トレ内に集塊状にかたまり、頭位・方位の規則性もなくなる。 K II a 期は引き続き集塊状を呈し、甕棺墓も大きく減少する。なお、本遺跡の大形棺は K I a ~ K I b 式期には 1 次 A · B トレに集中し、 K I c ~ K I a 期には 7 区~8 区に集中する。 K I a ~ K I b 式期には 1 次 A · B トレに集中し、 K I c ~ K I a 期には 7 区~8 区に集中する。 K I a ~ K I b 式期の列状構造は、大形棺は 1 次 A · B トレに集中することから、墓地の形成当初は旧河川を意識し、地形を反映させた北東 - 南西方向の列がまず作られ、北西 - 南東方向の列は北東 - 南西方向をもとに 90 度直角にすることで形成されたと考えられる。 K II b 期以降甕棺墓は本遺跡での出土はなく、権現塚北遺跡や海津横馬場遺跡で K II b 式の大形棺が各 1 基確認されているものの、本地域では甕棺自体が急激に減少し、権現塚北遺跡 3 号土壙墓の蓋に転用された甕棺( K III a 式)を最後に本地域では甕棺葬が一旦途絶えるが、 K IV b 式以降に復活している。

# 弥生時代後期~古墳時代中期前半

中期後半古段階で墓地の形成が終了した後、後期前半に再び集落の形成が認められるが、後期前半の9区107号土坑から中期後半の土器が多く出土しており、9区東に中期後半の集落が存在する可能性が高く、集落自体は継続していると考えられる。後期前半になると、9区中央で75号住居跡と土坑が存在するのみであったが、後期後半になると9区中央、8区中央及び南、7区中央~南に竪穴住居跡と土坑が散在し、後期終末になると遺跡のほぼ全域に竪穴住居跡が作られている。後期終末の竪穴住居の方位は、大きくは地形に沿った北東-南西と東西方向の2者があり、切り合い関係から東西方向の竪穴住居跡が新しい傾向を示す。8区南には後期終末の地形に沿った7号溝とそれに直交する8号溝があり、それらより北は竪穴住居域、南は円形で貯蔵穴としての役割が想定される土坑群と、溝で集落内を区画している。

古墳時代前期前半~中葉には後期終末と比べ竪穴住居数は減少傾向にあり、その分布も全域から9区北~中央、9区南及び8区北、7区北、6区と竪穴住居がまとまり、その方位も地形に沿った北東-南西方向が主体に再度変化するが、北西-南東方向のものもあるなど規則性が



第 157 図 藤の尾垣添遺跡の集落変遷図 (1/400、1/600)

なくなる傾向にある。続く前期後半~中期前半は、竪穴住居形態が方形を基調とするように住居形態が大きく変化し、9区中央、8区中央、1次Cトレ、7区南、1次Dトレに竪穴住居跡が点在すると同時に、その数も大幅に減少する。この後、古墳時代後期後半まで集落が一旦断絶する。この要因としては、本遺跡北東に位置する全長55mの藤ノ尾車塚古墳の築造が大きく影響したことを指摘しておきたい。

### 古墳時代後期後半~奈良時代

古墳時代後期後半には7区中央~南にカマド付竪穴住居が形成され、後期末には7区中央~6区、1次Dトレという遺跡南側で集落が展開する。一方8・9区は安ノ内古墳の存在からおそらく横穴式石室を主体とする円墳が群をなしており、南の小規模な集落と北の墓域がセットとなる集落景観であったと想定される。本遺跡は7世紀前半の1次Dトレ6号住居跡を最後に集落の形成が終了し、8世紀後半の9区中央の複数の溝は規模と形態から田などの耕作に関連する溝と推測されることから、その後この地は田んぼを中心とする耕作地になったと考えられる。

# 2 藤の尾垣添遺跡及び周辺遺跡出土甕棺の地域性

#### a. はじめに

本遺跡では1で先述したように、橋口編年(橋口 1985)南筑後 K I a 式~ K II a 式の甕棺墓が1・2 次調査総計で87 基検出された。また、近年の九州新幹線建設等による発掘調査の進展により、みやま市域では K I ・ II 式を中心とする甕棺墓が多く発見されている。例えば、本遺跡とは返済川を挟んだ北側に位置する小川柳ノ内遺跡(進村 2007 など)では、南筑後 K I a ~ K II a 式、K IV式の甕棺墓 58 基、本遺跡から約 3.5 km南の竹飯犬ノ馬場遺跡(猿渡2007)では南筑後 K I b ~ K II c 式の甕棺墓 13 基、他では山門前田遺跡や山門北池遺跡、海津横馬場遺跡でも少数ながら確認されている。

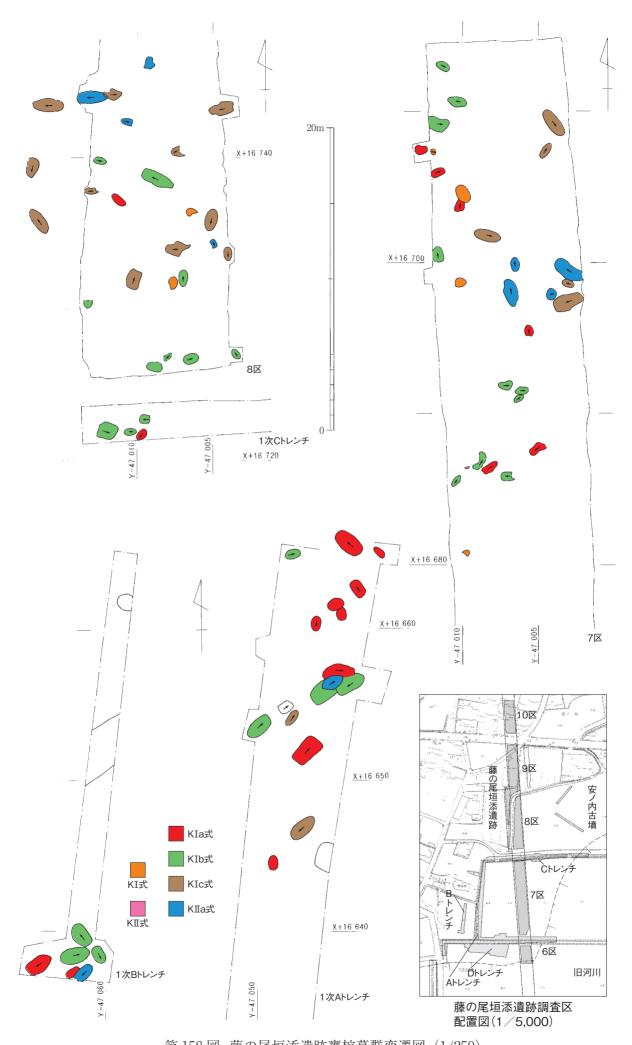
このように、橋口氏が編年を発表した当時と比べるとかなり資料の蓄積が進んでいるものの、 本地域の甕棺の編年については、橋口氏が整理した区分及び変遷案は現在でも問題がないが、 本地域の特徴的な甕棺については、資料の増加により若干検討できうる。

そこで、ここでは橋口氏が提示した甕棺の地域的特徴に付け加える形で、南筑後  $K I a \sim K II a$  本地域における甕棺の特徴について、簡単ながら検討することとしたい。

# b. 地域的特徴のある甕棺の検討

先述したように、本地域の甕棺の編年及び地域的特徴については、橋口達也氏による一連の論考(橋口 1979・橋口 1985・橋口 1993 など)によって詳しく論じられている。橋口氏が論じた南筑後 K I a ~ K II a 式期の甕棺の特徴を抜粋すると、①筑前・筑後・肥前の三国境付近で成立した三角口縁を呈する甕棺を源流として成立、②器壁が厚く、底部は5 cmほどと分厚い、③三沢周辺あるいは久留米付近から搬入されたと思われる甕棺の存在、④外面をミガキ風に仕上げる手法が残存するなどを特徴としてまとめている。現在でも橋口氏が提示したこれらの特徴は、本地域の甕棺の地域性を示す基本的なものである。

①については、本遺跡でも南筑後 K I a式のものが出土し (第159 図中の中)、その後口縁



第158図 藤の尾垣添遺跡甕棺墓群変遷図 (1/250)

部が内及び外に突出し、繊細となる流れで、三角口縁の系譜がKII a 式期まで認められる(第 159 図中の下)。また、肥後地域の黒髪式三・四式土器や本地域の小形棺に転用された日常土器の甕に認められる、蓋受け状に口縁部上面を窪ませ、口縁外端部をつまみ出すような形態の口縁部を持つ甕棺(第 159 図中の上)や黒髪II b 式の甕を上下棺とした竹飯犬ノ馬場遺跡 K 10(第 159 図右の中)は、地理的に隣接する本地域と肥後地域との関連や両者の時期的な併行関係を考える上で重要な資料となる。

#### 丸味を帯びた大形棺の系列

南筑後 K I b~ K II a式における丸味を帯びた中形棺の系列の存在は既に橋口氏により論じられているが(橋口 1985)、その系列とは異なる、大形棺で丸味を帯びた甕棺の系列が新たに確認できた(第 159 図左)。まずこの系列の初期段階のものである、小川柳ノ内遺跡 3 区 K22 下甕は内傾する口縁部は外側への突出が非常に弱く未発達なもので、胴部下位の三角口縁も低平なものである。 K 22 下甕よりは後出するが同じ南筑後 K I a式の範疇で捉えられる松延遺跡 K 3 北甕は、口縁部は K22 下甕と比べコの字状に外側に発達しているものの、より胴部は丸味を帯び、口縁部は著しく内傾する。加えて胴部突帯はなく、底部厚は 4.5 cmとこの地域・時期の甕棺にしては薄い。続く南筑後 K II b式の松延遺跡 K 3 南甕は胴部の丸味は少なくなり、口縁部は逆 L 字状に外側に発達し、内傾度も弱くなる。 K 3 北甕と同じく胴部突帯はなく、底径 9 cmと小さく、底部厚 4 cmと薄い。なお、本例は外面に横沈線・放射状の文様及び竪穴住居状の文様を施したものである。次の南筑後 K I c 式のものは確認されていないものの、この系列は中形棺となるが、 K II a 式の本遺跡 8 区 K42 に系譜が繋がると考えられる。

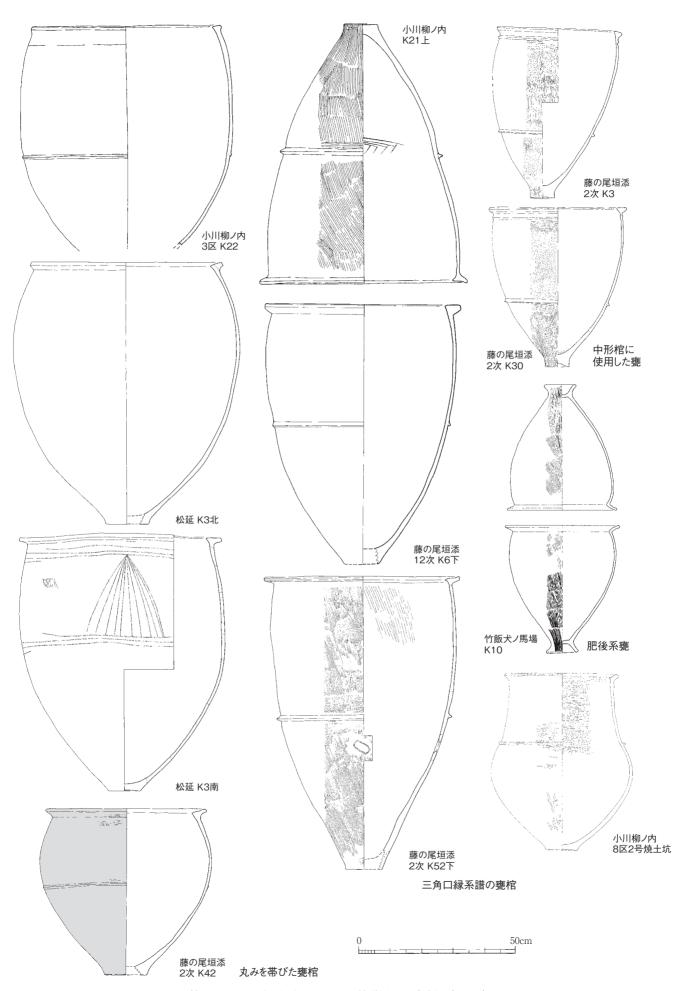
胴部突帯を持つ丸味を帯びた大形棺は、本遺跡 1 次 K 6 下甕 (第 159 図中の中)・ K 10 上下甕・ K 15 下甕・ K 18 上甕、今福貝塚出土甕棺上・下甕など、本地域の南筑後 K I a ~ K I b 式期の甕棺に散見される。この系譜はハサコ宮遺跡 K 8 上 (橋口 1978 より) などの存在から、三角口縁の甕棺とともに筑後地域から本地域にもたらされたものである可能性が高い。

### 中形棺専用として作られた特徴的な甕棺

本遺跡や小川柳ノ内遺跡、竹飯犬ノ馬場遺跡では、主に単棺で用いられた棺専用の中形甕が存在する (第 159 図右上)。この中形棺は口径が  $40 \sim 45 \, \mathrm{cm}$  前後、器高が  $50 \sim 55 \, \mathrm{cm}$  前後を測り、胴部は丸味を帯びた砲弾状で、底部は厚底・上げ底、外面のハケはそのままでナデ消しておらず、最大の特徴として胴部下位に三角突帯を巡らすことである。橋口氏は甕棺専用として作られたものは小形品であっても胴部突帯を付すとしており(橋口 1993)、この中形棺も棺専用として作られたと考えられる。この専用中形棺は南筑後 K I a 式には既に成立しており、本遺跡 K 14 下甕例のように南筑後 K II a 式まで認められる。

### 本地域における大形棺成立以前の墓制について(予察)

本地域における弥生時代前期の墓制は、山ノ上遺跡で早期~前期前半の壺+突帯文甕の甕棺墓が確認されている以外は不明である。しかし、本遺跡や山門前田遺跡、小川柳ノ内遺跡5区で弥生時代前期前半~末の遺構・遺物を発見していることから、本遺跡周辺でも将来的には弥生時代前期の墓地が発見される可能性が高い。本地域の弥生時代前期墓制を予察させるものとしては、小川柳ノ内遺跡8区2号焼土坑出土の大形壺(第159図右の下)がある。この壺は共伴土器から弥生時代中期初頭古段階で、容量的にも小児棺として用いられても問題がないもの



第 159 図 本地域における特徴的な甕棺 (1/12)

である。このことから、本地域の弥生時代前期の墓制は小児用は壺を用いたものであった可能性があり、成人用は土壙墓ないしは木棺墓であった可能性がある。今後の調査の進展に期待したい。

#### 参考・引用文献

橋口達也 1979 「甕棺の編年的研究」 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 XXXI 中巻 福岡県教育委員会橋口達也 1985 「V南筑後における甕棺の編年」 『権現塚北遺跡』 瀬高町文化財調査報告書第3集 瀬高町教育委員会田中康信編 1988 『藤の尾垣添遺跡』 瀬高町文化財調査報告書第4集 瀬高町教育委員会

橋口達也 1993 「甕棺-製作技術を中心としてみた諸問題-」 『考古学研究』 40 巻3号 考古学研究会中園聡 2004 『九州弥生文化の特質』 九州大学出版会

進村真之 2007 『小川柳ノ内遺跡 I 』 九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第7集 福岡県教育委員会 猿渡真弓 2007 『竹飯地区遺跡 竹飯堺遺跡 竹飯犬ノ馬場遺跡』 高田町文化財調査報告書第10 集 高田町教育委員会

# 3 藤の尾垣添遺跡周辺の竪穴住居の構造

- 弥生時代後期~古墳時代中期前半事例の検討-

#### a. はじめに

1の本遺跡集落の変遷で検討したように、本遺跡では弥生時代後期~古墳時代中期前半に属する竪穴住居跡が約90棟検出されている。本遺跡の発掘調査範囲は、1次調査は排水路部分、2次調査は新幹線路線という非常に狭長な調査区であったため、竪穴住居の全形を知りえたものは少ない。しかし、『藤の尾垣添遺跡Ⅰ・Ⅱ』の中で、本遺跡内において竪穴住居跡の平面形が長方形から方形に変化する過程を読み取れることを指摘した。そこで、ここでは本遺跡を含むみやま市内で検出された弥生時代後期~古墳時代中期前半の竪穴住居の変遷を検討してみたい。

### b. 竪穴住居の分析方法

本稿対象時期における北部九州の竪穴住居については、寺井誠氏による優れた先行研究があり(寺井 1995)、本稿でも他地域の事例と比較することで、本地域の位置づけを明らかにするために、寺井氏の分析手法に則って行うこととしたい。

寺井氏は分析対象とする竪穴住居の条件として、「全掘もしくはそれに準ずる程度に調査され、全貌を知ることができるもの」とするが、本稿では時期や主柱穴が明確でない竪穴住居跡も参考資料として第160図の一覧表に掲載した。この第160図では寺井氏による集成に倣い、平面形・主柱穴数・法量(長軸・短軸)・面積・長短比・ベッド状遺構型式の順に表を作成した。このうち、ベッド状遺構の型式については、第161図左下の寺井氏の分類によるが、図だけでは少し分かりにくいので簡単に説明すると、A類は壁隅、B類は短辺の1辺、C類は短辺の一辺と壁隅、D類は両短辺、E類は3方、F類は4方に付設するもので、N類はベッド状遺構のないものとしている。なお、本地域対象遺跡は沖積地や微高地上に立地することが多く、本遺跡でも竪穴住居跡下層に弥生時代中期の甕棺墓や弥生時代前期の土坑などがあることが多く、ベッド状遺構を誤って掘り失ったものもある。このような遺跡条件により、ベッド状遺構に気づかず、住居竪穴部だけを1棟の住居とした事例も存在する可能性が高く、本地域ではN類が

番号	遺跡名	住居番号	住居時期	平面	PL	長軸	短軸	面積	長短比	BN	備考	文献	
1		住1	後期初頭	方形	2	5.15	4.5	23.2	87%	N	黒髪式系台付甕あり		
2		住2	後期前半	方形	2	4.15	3.83	15.9	92%	N	張り出し部あり	1	
3		住3	後期前半	方形	2	4.95	3.9	19.3	79%	N	黒髪式系台付甕あり		
4		住5	後期初頭	方形	2	4	3.7	14.8	93%	N	主柱穴短軸上、黒髪式系台付甕あり		
5		住8 住9	古墳前期前半 後期終末	方形 方形	2	5.1 7.28	4.2 5.45	21.4 39.7	82% 75%	N E	4本柱の補助柱ありか	→ 川述ほか1985	
7	三船山遺跡	住10	1灰州 (木	方形		4.35	3.88	16.9	89%	N	4年住の補助性めりが	11137717711903	
8		住11	後期初頭	方形		4.6	4.4	20.2	96%	N	黒髪式系台付甕あり		
9		住12	後期終末	方形	2	5.6	4.9	27.4	88%	N			
10		住14		方形	2	5.05	3.7	18.7	73%	N			
11		住16 B-住3	後期初頭	方形 方形	2	6.8 5.05	5.88 3.85	40.0	86% 76%	B			
13		B-住16	後期後半	方形	2	3.03	3.26	13.0	82%	A		-	
14	大道端遺跡1次	B-住27	後期終末か	方形	2	4.3	3.4	14.6	79%	N		関編1977	
15		B-住30	古墳前期前半	方形	2	6.15	3.35	20.6	54%	N			
16		C-住1	古墳前期前半	方形	2	3.7	3.5	13.0	95%	A			
17		F-住7 F-住12	古墳前期前半 古墳前期前半	方形 方形	2	7.9 5.46	6 2.8	47.4 15.3	76% 51%	F	<u> </u>	-	
18	大道端遺跡2次	H-住3	古墳前期前半か	方形	2	6.04	4.04	24.4	67%	N N		田中1993	
20		H-住10	古墳前期	方形	2	3.4	2.6	8.8	76%	N		-	
21		住3	古墳前期前半	方形		5.1	5.1	26.0	100%	N			
22	北古賀遺跡	住11	古墳前期中葉	方形		3.6	3.5	12.6	97%	N		田中1993	
23		住24	古墳前期前半	方形	<u> </u>	5.04	3.82	19.3	76%	N	<del>                                     </del>		
24 25		住2	古墳前期中葉 後期終末	方形 方形	2	4.2 6.06	3.3 4.84	13.9	79% 80%	N N		$\dashv$	
26	No Section III to the sec-	住4	後期後半~終末	方形	2	5.4	4.04	24.3	83%	N	主柱穴短軸上	進村·宮地2005	
27	海津横馬場遺跡	住7	古墳前期中葉	方形		4.6	3.45	15.9	75%	N	man 1977 A A 197 Marine		
28		住35	古墳前期前半	方形	2か	5.2	4.9	25.5	94%	В		宮地2006	
29		住37	後期終末	方形	2	5.9	4.5	26.6	76%	N		E 362000	
30		4区住15 4区住17	古墳前期前半	方形 方形	2	6.1	4.4 3.95	26.8 15.8	72% 99%	D N		_	
32		4区住18	古墳前期中葉	方形		3.1	2.9	9.0	94%	N		進村2007	
33	小川柳ノ内遺跡	4区住19	古墳前期前半	方形		3.1	3	9.3	97%	N			
34		6区住3	古墳前期前半	方形		3.8	2.9	11.0	76%	N			
35		7区住1	後期後半	方形	<u> </u>	5	4.6	23.0	92%	N		進村2008	
36		7区住14	後期終末~古墳時代前期	方形	-	4.6	4.6	21.2	100%	N N	<u> </u>		
37 38		住4	古墳前期後半 古墳前期中葉	方形 方形		4.88	2.8	13.7	63%	N		-	
39	//- /	住6	古墳前期後半	方形		4.72	3.7	17.5	78%	N		H141005	
40	御仁田遺跡	住8	古墳前期後半	方形		6.1	5.2	31.7	85%	Е		田中1995	
41		住9	古墳前期後半	方形	<u> </u>	5.7	5.4	30.8	95%	N			
42		住10	古墳前期	方形	0	4.24	3.8	16.1	90%	N	<b>ナ</b> わら何動 L		
43	山門北池遺跡	3区住2 4区住41	古墳前期前半 後期終末か	方形 方形	2	5.1 4.4	3.7 4.1	18.9 18.0	73% 93%	D N	主柱穴短軸上	大庭編2007	
45	山門北池遺跡(松延遺跡)	住8	後期終末	方形	4	3.9	3.4	13.3	87%	N		田中編1998	
46	山門牛島遺跡	A区住3	後期終末か	方形		3.3	2.6	8.6	79%	N		田中1992	
47	I mart of what	住1	古墳前期中葉	方形	2	2.7	2.7	7.3	100%	N			
48	山門片垂遺跡	住2	古墳中期前半か 古墳前期中葉	方形 方形	_	2.6 3.15	2.4	6.2 9.0	92%	N B	出土土器図示なく、時期は記述による	田中1991	
50		住1	古墳前期前半	方形	$\vdash$	6.52	4.34	28.3	67%	D			
51		住4	古墳前期前半	方形	2	4.86	3.54	17.2	73%	N		HT-1-1-004	
52		住6	古墳前期前半	方形		3.8	3.1	11.8	82%	N		田中1994	
53		住10	古墳前期中葉	方形	<u> </u>	3.9	2.8	10.9	72%	N			
54 55	藤ノ尾車塚遺跡	住11	後期前半 古墳前期中葉	方形 方形	-	3.56 4.26	3.24 3.72	11.5 15.8	91% 87%	N F		_	
56		住15	後期終末	方形		3.92	3.12	12.2	80%	N		田中1996	
57		住16	後期後半	方形		3.36	2.92	9.8	87%	A		1	
58		住17	後期終末	方形	2	4.38	3.16	13.8	72%	N			
59	# * B	住2	古墳中期前半	方形	$\sqsubseteq$	6.58	6.34	41.7	96%	N	張り出し部あり	m.4.6F1000	
60	藤の尾垣添遺跡1次	住4 住12	古墳前期後半 古墳前期後半	方形 方形	4	7.6	6 5	45.6 30.0	79% 83%	N N		田中編1989	
62		住12	古墳中期前半か	方形	4	4.08	4	16.3	98%	N			
63		住15	古墳前期後半	方形	2	6.8	5.05	34.3	74%	E	3本柱の補助柱ありか	7	
64	64 65 66 67	住16	古墳前期前半	方形	2	4.4	2.7	11.9	61%	D			
65		住17	古墳前期前半	方形		4.9	3.65	17.9	74%	С	2-12-1-6-44   F-1-13-4-15-11-13-1-13-1-13-1-13-1-13-1-1	大庭編2008	
		住21	古墳前期前半 後期終末	方形 方形	2	6.95 4.37	3.8 4.35	26.4 19.0	55% 100%	C	主柱穴短軸上、5本柱の補助柱ありか		
68		住32	後期後半	方形		5.32	4.35	25.3	89%	N		-	
69		住37	後期後半	方形		3.33	2.55	8.5	77%	В		7	
70	藤の尾垣添遺跡2次	住38	後期終末	方形	2	4.94	4.23	20.9	86%	N			
71	#R・ノナビ>旦 (M. J型 町) ム (八	住40	古墳前期前半	方形		4.43	3.55	15.7	80%	Е		_	
72 73		住41	後期後半 後期終末	方形	2	6.1	4.35	26.5 16.5	71%	D B	<del> </del>		
73		住52 住54	皮期於木 古墳前期か	方形 方形	2	4.34	3.8	15.7	88% 88%	N		大庭編2009	
75		住67	古墳前期前半	方形	2	3.85	3.8	14.6	99%	D			
		住68	古墳中期か	方形	4	4.15	3.72	15.4	90%	N			
76			後期終末	方形		5	2.85	14.3	57%	D		本書	
77		住69			-		-						
77 78		住72	後期終末	方形	,	4.35	4.1	17.8	94%	N		-	
77					4 2		4.1 4.9 3.2	17.8 24.3 20.8	94% 99% 49%	N N D		_	

第160 図 分析対象竪穴住居跡一覧

全体でも75%と、寺井氏が分析した割合に比べ高い要因になっていると考えられる。

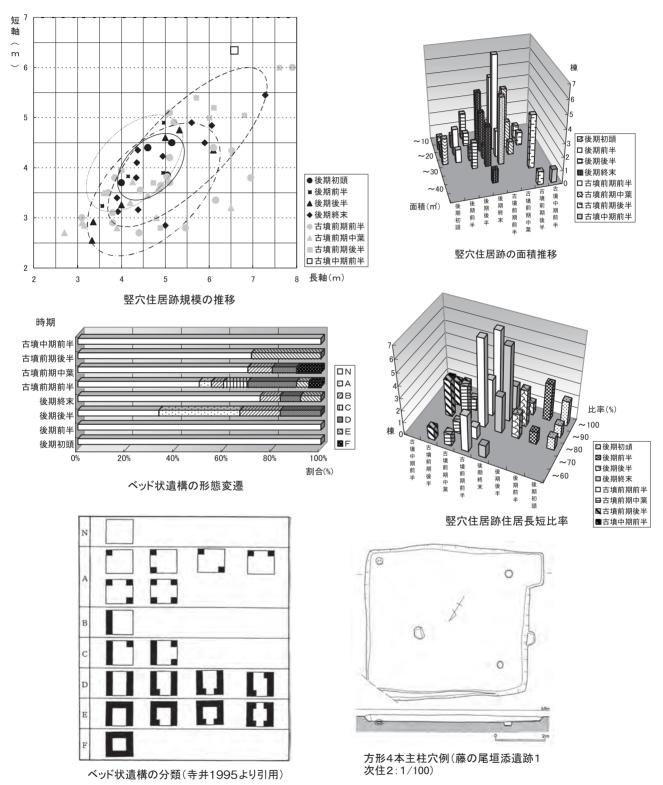
# c. 本地域における竪穴住居の分析

第160図の一覧表から、第161図にある竪穴住居跡規模の推移・面積推移・長短比、ベッド 状遺構の形態推移図を作成した。これらを基に本地域の竪穴住居の分析を行いたい。

まず、竪穴住居の平面形態と面積を見てみると、弥生時代後期初頭及び後期前半のものは規 模推移図、長短比、面積もほぼ一致し、平面形はやや長方形に近く、面積は11~24㎡程とや や小形である。後期後半になると、規模推移図の囲み線が下がり、面積も若干大きくかつ長短 比が低くなり、その後顕在化する偏長化傾向が現れ始める。後期終末になると、対象竪穴住居 数が急激に増加する。平面形では、本遺跡2次69号住居跡例が長短比57%と偏長化が進む竪 穴住居が存在する一方、長短比80%前後の長方形を呈するものが主体である。面積は増加傾向 にあり、三船山遺跡9号住居跡のような39.7㎡を測る大形住居も認められる。古墳時代前期前 半には最も多くの竪穴住居が属し、前期前半・中葉では一部の竪穴住居で偏長化が顕著となる。 面積では、47.4 mを測る大道端遺跡 F 区 7 号住居跡のような大形住居も認められるが、主体は 後期終末とほとんど同じ規模である。前期後半になると、平均面積が 29 ㎡と面積が急激に増加 し、長短比の平均も78%と徐々に方形化の傾向が伺える。古墳時代中期前半の事例は本遺跡1 次調査2号住居跡(第161図右下)のみであるが、長短比が96%とほぼ方形化を達成している。 次にベッド状遺構の型式変遷を見てみると (第161中左)、対象とした竪穴住居では弥生時 代後期初頭及び後期前半はベッド状遺構はないものの、三船山遺跡では後期前半の3号住居跡 がベッド状遺構を付設した19号住居跡(B類)を切ることから、後期前半にはベッド状遺構 は確実に存在している。後期後半はA類 33%、B・D類 16%、後期終末はB・D・E類が各8% と3方に付設するE類が寺井氏の指摘どおり本地域にも導入され、ベッド状遺構の住居内占有 率が低→高になる傾向も一致する。古墳時代前期前半は全型式が認められ、中でもD類が優位 となり、かつF類も存在する。前期中葉にはB·D·F類のみとA·C類がなくなり、前期後 半はE類のみとなる。寺井氏が西部地域では4本柱が普及する前段階にベッド状遺構が減少す ると指摘したように、本地域においても古墳時代前期中葉・後半にはベッド状遺構の割合が 25%と前段階に比べ減少し、中期前半はN類のみとなる。なお、4本柱が主柱穴の竪穴住居は、 対象とした遺構では弥生時代後期前半の本遺跡2次75号住居跡、後期終末の山門北池(松延) 遺跡8号住居跡、前期後半の本遺跡1次調査12号住居跡の3棟のみに認められる。

# d. 本地域の竪穴住居の位置づけ - 寺井氏の検討結果との比較から -

本地域では、弥生時代中期前半までは小川柳ノ内遺跡や海津横馬場遺跡で確認されたような 円形住居となるが、中期後半の竪穴住居跡は確認されておらず、平面形を含めた構造は不明で ある。弥生時代後期になると、後期初頭には平面は方形に変化しており、主柱穴も2本柱が基 調となる。本遺跡2次調査75号住居跡のような4本柱のものは、豊前・筑豊地域など東方から の影響を受け成立したものであるかは、同じく4本柱の後期終末の山門北池(松延)遺跡8号 住居跡例も含めて事例が少ないこともあり、注意を要する。なぜなら、肥前地域では庄内式並 行期には4本柱はないが、布留式古・中段階並行期には竪穴住居跡全体の6割強が4本柱とな



第161図 藤の尾垣添遺跡周辺における竪穴住居跡の変遷

るとした蒲原宏行氏の考察(蒲原 1994)や、寺井氏の検討でも4本柱が筑前・筑後地域に定着するのは布留式新段階であることがある。また寺井氏によると、布留式新段階以前の筑前・筑後地域では長短比が80%を上回ることはほとんどなく、ベッド状遺構は布留式新段階ではほぼN類が占めることから、豊前・筑豊地域の影響を受けた4本柱住居の本地域への導入は、古墳時代前期後半の本遺跡1次調査12号住居跡が初現期のものとなる可能性が高い。

本地域の竪穴住居の特徴としては、弥生時代後期終末~古墳時代前期後半の一部の竪穴住居では長短比が50%前後と極めて低いものが存在するとともに、古墳時代前期後半でも長短比の平均が79%と低いことがある。加えて、ベッド状遺構の付設割合は、弥生時代後期後半では7割、古墳時代前期前半では5割、前期中葉・後半では25%、中期前半は0%と、寺井氏の検討結果とは、本地域ではN類が多い影響はあるものの、おおよそ傾向は一致するが、古墳時代前期後半では北部九州全体ではベッド状遺構が1割以下しかないのに対し、本地域では25%と割合が高い。寺井氏は筑前・筑後地域の布留式新段階では、豊前・筑豊地域と同じく、大形住居が4本柱、小形住居が2本柱という住居構成に変化するとするが、本地域では主柱穴は確認できていないものが多いが、長短比からそのような構成区分になっていない可能性が高い。

#### e. おわりに

以上の比較検討結果から、本地域では古墳時代中期にならないと、寺井氏が指摘した方形4本主柱という新たな竪穴住居要素を本格的に受容しておらず、古墳時代前期でも大形住居 - 4本柱、小形住居 - 2本柱という構成区分を採用していない可能性が高い。このことは、本遺跡2次調査76号住居跡出土甕のような、外来系甕(主に庄内系甕)と在地系甕が折衷したものを作り出していることに象徴されるように、本地域の在来集団が布留系土器製作技術や他の外来系文化要素の受容に慎重であったことを示していると考えられる。

今回の検討結果はあくまでも現時点での評価である。瀬高インター建設に伴う山門牛島遺跡の調査では当該期の竪穴住居が多く発見されていることや今後の調査の進展などで、この評価が変わる可能性も大いにありうる。また今回は検討できなかったが、柳川市蒲船津江頭遺跡で確認された弥生時代後期~古墳時代前期の掘立柱建物群との比較なども、本地域の竪穴住居を分析する上では必要であろう。今後の調査・研究の進展に期待したい。

#### 引用文献

蒲原宏行 1994「古墳時代初頭前後の佐賀平野」『日本と世界の考古学-現代考古学の展開-』岩崎卓也先生退官記念論文集 雄山閣寺井誠 1995「古墳出現前後の竪穴住居の変遷過程-北部九州の事例を基に-」『古文化談叢』第34集 九州古文化研究会

# 4 藤の尾垣添遺跡出土赤色顔料関連資料について

#### a はじめに

本遺跡を最も特徴づける資料を出土資料の中から選ぶとすれば、私は迷わず、赤色顔料が付着した土器・石器の存在を第一に挙げたい。この赤色顔料が付着した本遺跡出土土器・石器の内容を見てみると、本田光子氏により内面朱付着土器と命名された(本田 1994)、土器の主に

内面に朱が付着したものが、1・2次調査で計18点出土している(第162図左下表)。加えて1次調査13号住居跡から朱精製用具である「L字状石杵」が1点(12)、2次調査9区76号住居跡から全面に厚くベンガラが付着した磨石1点(11)を赤色顔料関連資料として確認した(第162図)。特に内面朱付着土器18点は、福岡県内において破片点数では須玖永田遺跡(丸山・平田1987)、辻垣長通遺跡(柳田1994)に次ぐ量を誇る。さらに北部九州では3例目の出土となる、2次調査7区23号住居跡、8区56号土坑から出土した朱精製専用器(大久保1998)である甕を半裁し把手を付けた特殊な容器「把手付広片口皿(註1)」が2個体出土しており、本遺跡の地理的・歴史的な位置づけを考える上で重要な資料となる。

そこで、ここでは本遺跡における内面朱付着土器を主とした赤色顔料関連資料の様相を検討した上で、特に把手付広片口皿について、先行研究を踏まえつつ若干言及してみたい。

# b. 本遺跡における赤色顔料関連資料の様相

まず、検討を行うための基礎資料として、第162図左上には本遺跡における赤色顔料関連資料出土地点をドットで落とし、左下にはその出土一覧表、右には2次調査で出土した資料の実測図を掲載している。なお、現在1次調査出土資料は、本田氏作成の表(本田1994)とL字状石杵は同氏の実測図(本田1990)で知りえたのみで、諸事情により実見はできていない。そこで、12のL字状石杵は本田氏の文献から再トレースして使用した(註2)。なお、資料出土遺構の時期については、報告書に掲載された土器から私が判断した。

内面朱付着土器の特徴を整理した本田氏は、以下の8つの特徴を述べている(本田 1994)。 ①土器の主として内面に朱(硫化第2水銀)が残る。②小破片の場合は断面にも朱が付着する。 ③朱は粉状あるいは漆膜状に付着しているのではない。④朱は磨り込まれたように密着し、光 沢のあるものが多い。⑤朱が土器のヒビ等胎土深くに染み込み、外面まで染み出たものも多い。 ⑥土器の外面には著しく煤が付着するものが多い。⑦甕、鉢には片口の付くことが多い。⑧朱 専用の定型の石杵(L字状石杵、棒状石杵)と共伴することがある。本遺跡の内面付着土器を 見てみると、3点未分析のものはあるが、⑥を除き、ほぼその特徴を備えているといえよう。

また本遺跡における内面朱付着土器出土地点を見てみると、出土地点は散漫というべき状況であるが、9区北~中央、7区中央と遺跡南北軸で考えるとある程度の出土ブロックが認められるが、東西軸の状況は不明である。またその土器すべてが小片であることから、意図的に小片化され、その小片が何がしかの意味を持って、意図的に棄てられた状況が推測できよう。

次に本遺跡出土赤色顔料関連資料の出土時期を見ると、弥生時代後期後半~古墳時代前期中葉の遺構から出土しており、その主体は弥生時代後期後半~終末で、最も時期的に遅い資料は古墳時代前期中葉の76号住居跡出土ベンガラ付着磨石(11)である。内面朱付着土器の器種は、在地系の甕が14/18点、78%を占め圧倒的に多く、その他は在地系複合口縁壺と在地系直口鉢が各1点、朱精製専用器の把手付広片口皿が2点という構成になる。また弥生時代後期後半には、鉢・複合口縁壺・甕と器種が豊富であるが、弥生時代後期終末以降は在地系甕と把手付広片口皿に限定される。さらに、この把手付広片口皿も含めた本遺跡出土内面朱付着土器の胎土を観察すると、その全てが本遺跡周辺の土を使用しており、搬入品ではないと考えられる。

把手付広片口皿4個体と内面朱付着土器がまとまって出土した、行橋市辻垣長通遺跡では、

報告者は出土した内面朱付着土器は大溝の第3層に一括して流入、もしくは投入されたとしており、この第3層は弥生時代後期中葉の土器が主体であるとする(柳田1994)。この辻垣長通遺跡の内面朱付着土器は瀬戸内系の大形鉢が主体で、その他は瀬戸内系の壺などが認められるが確実な在地系の内面朱付着土器は甕のみと、本遺跡の様相とは大きく異なる。須玖永田遺跡では、一部掲載された内面朱付着土器の実測図を見ると、弥生時代後期中葉の在地系甕、在地系複合口縁壺片のみで構成されている。これらのことから推測すると、福岡県東部に位置する辻垣長通遺跡から西部地域へという内面朱付着土器の展開の状況が想定される。このことについては、dで少し検討してみたい。

### c. 矢部川流域における赤色顔料関連資料の様相

ごく最近、阿南亨氏が熊本県菊池川流域で確認されている赤色顔料関連資料を集成し、検討している(阿南 2009)。そこで、ここでは視点を矢部川流域まで広げ、検討してみたい。

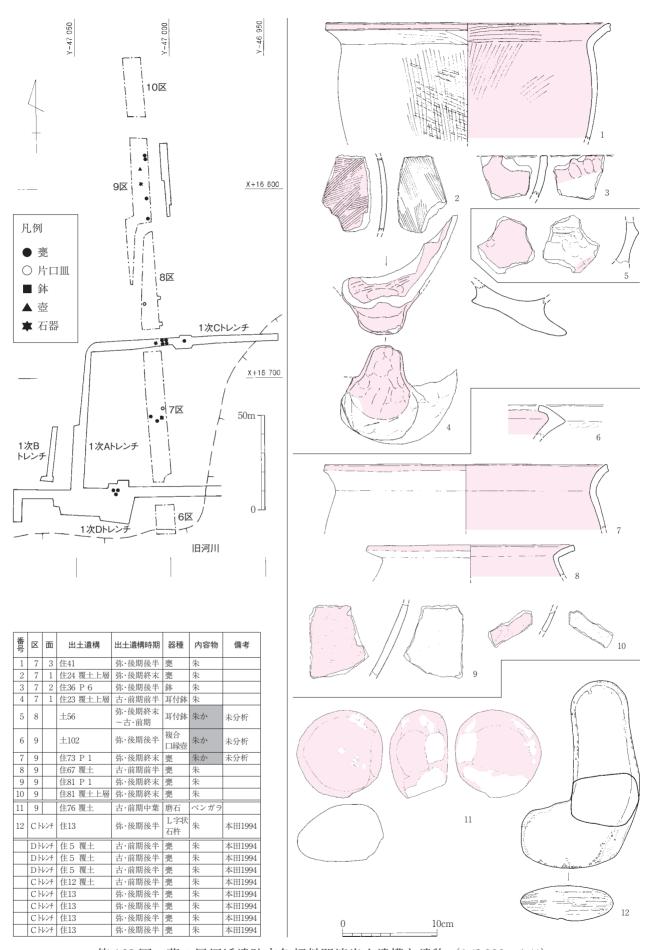
矢部川上流域の様相は不明であるが、中流域の八女市・筑後市においては、弥生時代後期~ 古墳時代前期の集落遺跡が多数確認されており、八女市深田遺跡で確認された突出部を持つ方 形居館など大規模な集落遺跡も発見されている。その中で、管見で知るうることができた赤色 顔料関連資料出土遺跡は、矢部川中流左岸の自然堤防上に築かれた拠点的な大規模集落である、 八女市(旧立花町)北山今小路遺跡のみである。

北山今小路遺跡では、I・II区合わせて弥生時代後期中葉~古墳時代初頭の200棟に近い数の竪穴住居跡が高い密度で検出されている(伊崎1993)(I区全体図については第163図左上に掲載)。概報の中で、「床面にベンガラが付着している例が多々あって、住居内においてベンガラを製造していたことを伺わせた。65号住居跡床面からは石杵とベンガラとが検出されている。」「石杵が2点出土したことも特記すべきであろう。住居跡等から検出された赤色顔料は、視覚的にはベンガラのみであって水銀朱は見られないようである。・・・」と記述されている。このことから、北山今小路遺跡では弥生時代後期~古墳時代初頭にかけて、ベンガラの精製作業を集落内の複数の竪穴住居で行っており、精製したベンガラを遺跡内に留まらず、他遺跡まで供給していた可能性も考えられる。菊池川流域では拠点集落や交通の要所にある遺跡で赤色顔料関連資料が出土することが明らかになっており(阿南2009)、矢部川流域においても、本遺跡や北山今小路遺跡のような拠点集落内で朱やベンガラの精製を行っていたことと状況が一致する。

この2事例から、少なくとも筑後・肥後地域では、比較的大きな河川単位に朱・ベンガラ精製に関わる遺跡が複数存在した可能性が高く、その時期は弥生時代後期後半~古墳時代前期前半にほぼ限定される。

### d. 把手付広片口皿について

先述したように、本遺跡では把手付広片口皿が2個体分出土している(第162図4・5)。 4は尾部把手片、5は尾部把手と体部との基部になる鰭状の突起部分である。内外面調整はいずれも普通のナデで、把手を主としてナデ痕も認められる。いずれも主に内面に朱が付着し、朱は胎土深くまで染み込み、外面にはススが顕著に付着する。出土遺構は弥生時代後期終末~古墳時代前期に属する。この本遺跡例を辻垣長通遺跡例(第163図中)と比べると、本遺跡例



第162図 藤の尾垣添遺跡赤色顔料関連出土遺構と遺物(1/2,000、1/4)

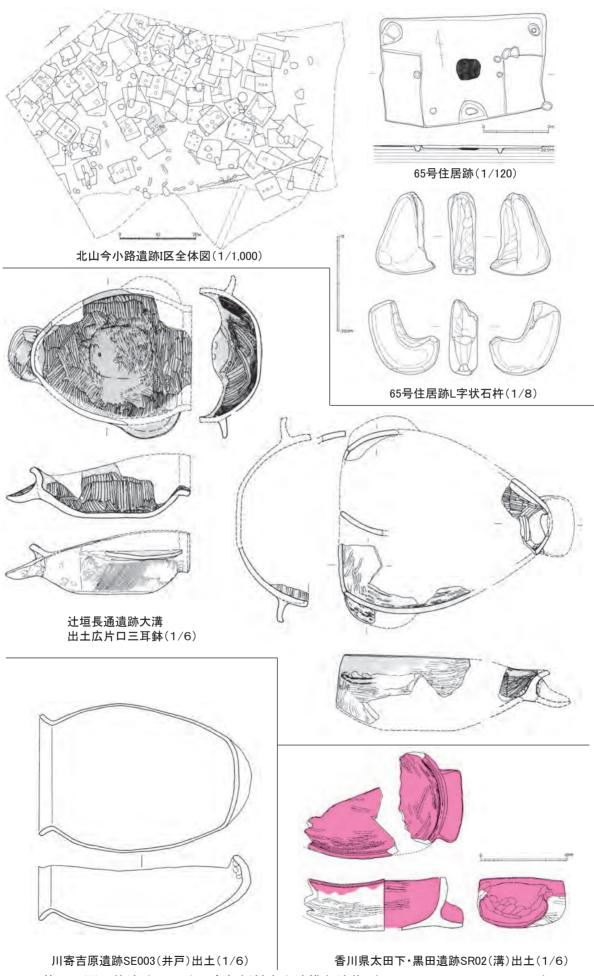
は一見して調整及び成形が雑であり、外面ハケ、内面ナデ、口縁部はナデという通常の甕に行う調整と同様の調整を施した川寄吉原遺跡例(第163図左下)と類似点が多い。

この把手付広片口皿は、既に岡山真知子氏が分類及び形態変遷案を発表している。岡山氏によると、川寄吉原遺跡例(第1段階)→辻垣長通遺跡例(第2段階)→香川県太田下・須川遺跡例(第3段階)(第163図右下)に変化するとされ(岡山2003)、本遺跡例は深い器形となることとやや粗雑化の方向性が伺えるため、岡山氏案の第3段階に属すると考えられる。

しかし、この岡山氏案は、共伴土器から川寄吉原遺跡例と辻垣長通遺跡例が弥生時代後期中葉、本遺跡例が古墳時代前期前半、一方瀬戸内~近畿地方の出土事例は弥生時代中期末~後期初頭に属するものがほとんどであるため、岡山氏案の川寄吉原遺跡例を祖形とする変遷は成り立つ可能性が低いと思われる。先述したように、辻垣長通遺跡では瀬戸内系大形鉢・壺の内面に朱が付着する一方、在地系土器にはごく少数しか朱付着例がない。よって、北部九州では把手付広片口皿は外来系要素の一つであるとした方が自然であり、この器を使用した朱精製技術も外来系の技術と想定される。このことは、市毛勲氏がこの器(市毛氏は「辰砂鍋」と呼ぶ)は阿波水銀鉱床群産の粗製辰砂(朱)を精製するために徳島平野弥生人の工夫により考え出されたものという指摘(市毛 1998)とも一致する。

弥生時代後期前半には、福岡平野の板付遺跡や那珂遺跡、豊前地域の安武・深田遺跡では瀬 戸内V様式前葉の土器が出土しており(西谷 2002)、特に板付遺跡F5d区SD31出土高坏と那 珂遺跡 20 次 SE03 下層出土長頸壺は讃岐産の可能性が指摘されている(平井 2002)。また本遺跡 南に位置する弥生時代後期前半の海津横馬場遺跡 21 号住居跡から吉備 V 様式前葉と考えられる 凹線文甕が出土している。これらのことから、弥生時代後期前半には北部九州の玄界灘沿岸地 域だけでなく、有明海沿岸地域の本地域と瀬戸内地域との交流が活発になったことは明らかで、 後期前葉の香川県上天神遺跡で認められる把手付広片口皿や大形鉢などの朱精製用具と朱精製 技術がセットになり、北部九州、当初は豊前地域に伝播し、展開していくと想定したい。この 理由の一つとしては、北部九州では弥生時代後期後半に細かい粒の揃った朱Ⅱの入手が途絶え、 次に入手し得たものは朱Ⅱに比べれば粒度の大きい朱Ⅲあるいは辰砂の原石であったために、粉 末の顔料とするためにL字状石杵が出現したという指摘(本田1990)から、この朱Ⅲは瀬戸内 東部地域から供給を受けていた可能性があり、朱精製技術・道具も一体となって瀬戸内地域から 伝播したと考えられるのではなかろうか。さらに踏み込むと、北部九州では弥生時代中期まで朱 (朱Ⅱ)は中国から輸入品であったが、弥生時代後期中葉までには何らかの要因で、中国産の朱 の供給が減少し、代替品として瀬戸内東部の徳島県若杉山遺跡に代表される水銀鉱山産の朱(朱 Ⅲ)が流通するようになった可能性もあることをこの要因の1つとして指摘しておきたい。

以上のことから、北部九州における把手付広片口皿は、弥生時代後期中葉の辻垣長通遺跡例 →同じく後期中葉の川寄吉原遺跡例→古墳時代前期前半の本遺跡例という、変遷過程が想定される。またこの土器の機能について、本田氏は意図的に朱に砒素を混ぜた「仙薬」調合用具の可能性を指摘しているが、大久保氏(大久保 1995)や市毛氏(市毛 1998)が想定する「朱精製最終調整用の専用具(市毛氏は浮遊選鉱法での粗製朱(辰砂)の精製を想定)」の方が、現状では説得力があろう。



第 163 図 他遺跡における赤色顔料出土遺構と遺物(1/1,000、1/120、1/8、1/4)

### e. おわりに

以上の本遺跡出土赤色顔料関連資料の検討結果から、本遺跡が矢部川流域における朱精製の拠点の一つであり、朱原料の入手などで広く交流している状況が確認できた。檀佳克氏は本遺跡を含む山門遺跡群は、有明海沿岸地域における海上交流の拠点的な集落の一つと指摘しているが(檀 2005)、ここでの検討結果からもこの状況を補強することができたと思われる。

赤色顔料関連資料については、岡山氏(岡山 2003)や阿南氏(阿南 2009)などが述べているように、未報告や存在に気づいていない例も少なくないと考えられる。比較的大きな河川流域には本遺跡のような朱精製拠点が存在する可能性が高く、今後の発掘調査のみならず、再整理などで赤色顔料関連資料の新たな発見がある可能性が高い。また阿南氏も指摘するように、同時に出土赤色顔料の顔料分析を進め、実体顕微鏡を用いた朱の粒子の形状の把握などで、付着した朱の産地の特定を行うことができるようになれば、飛躍的に研究が進化すると考えられる。今後の発掘調査や研究の進展に期待したい。

#### 註

註1:この土器について、柳田康雄氏は広片口三耳鉢(柳田 1994)、大久保徹也氏は把手付広片口皿(大久保 1995)という2つの名称が使用され、岡山真知子氏はこの2つの名を併用している(岡山 2003)。北部九州の弥生土器では皿という器種名は使用しないが、把手付広片口皿という名称の方が本遺跡例や川寄吉原遺跡例により合っていると考えたので、本稿では把手付広片口皿という名称を使用する。

註 2:本田 1990 によれば、このL字状石杵は、材質は火成岩? で、朱は磨面及び全面に付着し、法量は長さ 19.3 cm、幅 9.6 cm、重さ 1.400 g を測る。

# 引用・参考文献

丸山康晴·平田定幸 1987 『須玖永田遺跡』春日市文化財調査報告書第 18 集 春日市教育委員会

本田光子 1990「石杵考」『古代』第 90 号 早稲田大学考古学会

伊崎俊秋 1993 『北山今小路遺跡 I 』 立花町文化財調査報告書第6集 立花町教育委員会

柳田康雄編 1994 『辻垣畠田・長通遺跡』 椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第2集 福岡県教育委員会

本田光子 1994「内面朱付着土器」『庄内式土器研究』 庄内式土器研究会

大久保徹也・森格也 1995『上天神遺跡』 高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 香川県教育委員会 財団 法人香川県埋蔵文化財調査センター 建設省四国地方建設局

市毛勲 1998『新版 朱の考古学』考古学選書 雄山閣

大久保徹也 1998「弥生時代の内面朱付着土器」『考古学ジャーナル』 No. 438 ニューサイエンス社

天本洋一編 1981 『川寄吉原遺跡』 佐賀県文化財調査報告書第 61 集 佐賀県教育委員会

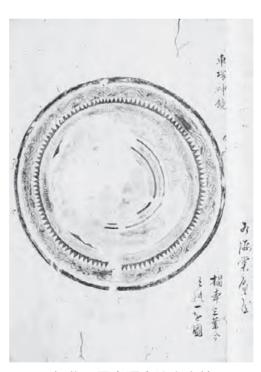
北山健一郎・森下友子 1995 『太田下・須川遺跡』 高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 香川県教育委員会 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 建設省四国地方建設局

西谷彰 2002「弥生時代後半期における土器編年の併行関係 - 西日本を中心に -」『古文化談叢』第48 集 九州古文化研究会 平井典子 2002「中・四国から見た併行関係と実年代資料」『日本考古学協会 2002 年度橿原大会研究発表資料集』日本考古学協会 2002 年度橿原大会実行委員会

岡山真知子 2003「水銀朱精製用具の検討 - 弥生時代中期末~後期初頭 -」『古代文化』55-6 (財) 古代学協会檀佳克 2005「九州出土の棒状浮文を有する土師器に関する一考察」『九州考古学』 第80号 九州考古学会

阿南亨 2009 「菊池川流域の赤色顔料関連資料について」 『九州考古学』 第84号 九州考古学会

# 図 版



伝藤ノ尾車塚古墳出土鏡

(原図は西原一甫著『珍奇漫録』に掲載、上記写真は『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告-XⅣ(大道端遺跡)』PL.6-(2)より複写・引用)



1 藤の尾垣添遺跡 8·9区全景 (上から、上が北)



藤の尾垣添遺跡全景 (北から)



2 藤の尾垣添遺跡9 区北(上から、上が北)



1 9区北全景 (南から)



2 9区中央東壁 土層(西から)



3 9区北端北壁 土層(南から)



1 9区61号竪穴住居跡、 88号土坑(西から)



2 9区62号竪穴住居跡、89号土坑(北西から)



3 9区63号竪穴住居跡 (南西から)



1 9区63号竪穴住居跡 炭化物塊(西から)



2 9区64号竪穴住居跡 (南から)



3 9区65号竪穴住居跡 (西から)

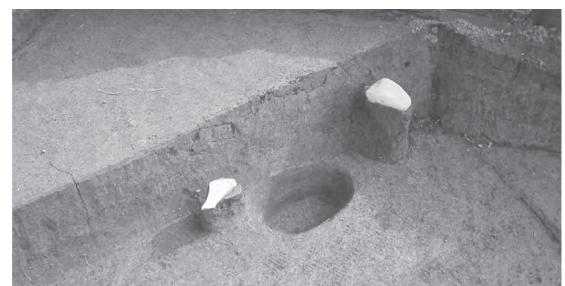




1 9区66号竪穴住居跡 (北西から)

2 9区67·68号竪穴 住居跡(南東から)

3 9区67号竪穴住居跡 炉周辺出土状況 (南から)



1 9区67号竪穴住居跡 砥石出土状況 (北から)



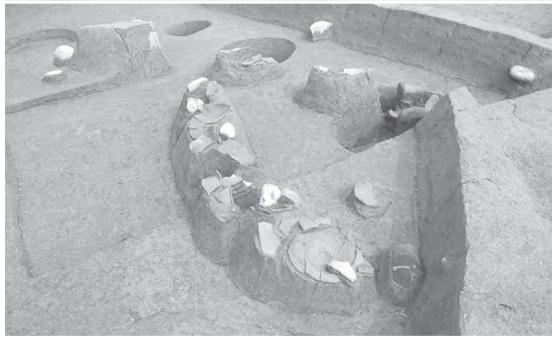
2 9区69号竪穴住居跡 (北西から)



3 9区70~74号竪穴住 居跡(東から)



1 9区70号~72号竪穴 住居跡(東から)



2 9区70号竪穴住居跡 出土状況(南から)



3 9区70号竪穴住居跡 P4(北北西から)



1 9区70·72号竪穴住 居跡出土状況 (東から)



2 9区72号竪穴住居跡 P4出土状況 (東から)



3 9区73号竪穴住居跡 (東から)



1 9区73号竪穴住居跡 出土状況 (東北東から)



2 9区73号竪穴住居跡 石包丁出土状況 (北から)



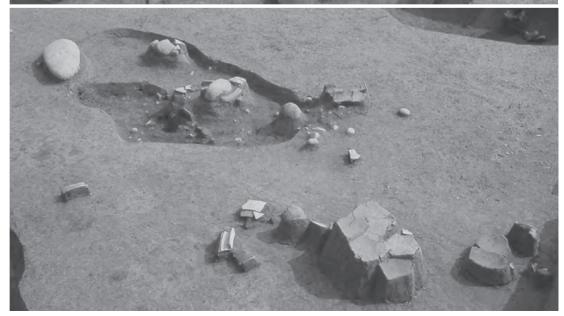
3 9区74号竪穴住居跡、 104·114号土坑 (西から)



1 9区75・76号竪穴住居跡(南東から)



2 9区75号竪穴住居跡 出土状況(1) (北西から)



3 9区75号竪穴住居跡 出土状況(2) (P1付近)(西から)



1 9区75号竪穴住居跡 出土状況(3) (北東から)



2 9区75号竪穴住居跡 屋内土坑、107号土坑 (西から)



3 9区76号竪穴住居跡 (北西から)



1 9区76号竪穴住居跡 出土状況(1) (南西から)



2 9区76号竪穴住居跡 出土状況(2) (西から)



3 9区76号竪穴住居跡 出土状況(3) (南から)



1 9区77号竪穴住居跡 94~98、105号土坑 (北西から)



2 9区78号竪穴住居跡 (北西から)



3 9区79号竪穴住居跡、 102号土坑(北西から)



1 9区79・87号竪穴 住居跡(南から)



2 9区80·81号竪穴 住居跡(北西から)



3 9区80·81号竪穴 住居跡出土状況 (南から)



9区84号竪穴住居跡、 163·168号土坑 (南東から)



2 9区85·86号竪穴 住居跡、128号土坑 (北西から)



3 9区86号竪穴住居跡 出土状況(西から)



1 9区90号土坑 (東から)

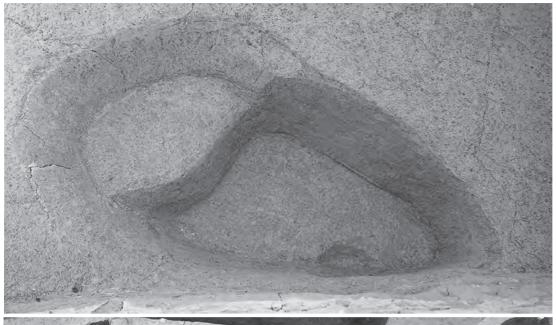


2 9区92号土坑 (西から)

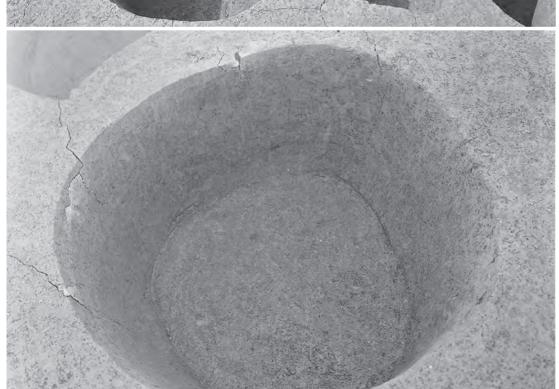


3 9区93号土坑 (南西から)

図版18







1 9区94号土坑 (西から)

2 9区95~97号土坑 (東から)

3 9区95号土坑 (南西から)



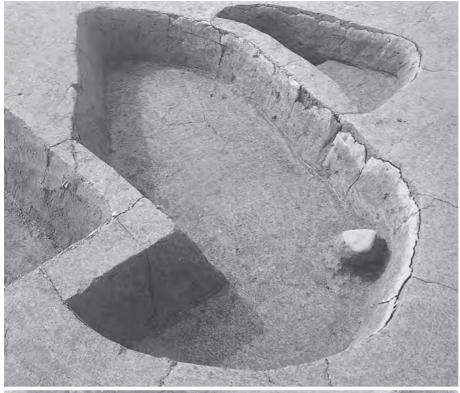
1 9区98号土坑 (北から)



2 9区101号土坑 (西から)



3 9区102号土坑 (南東から)



1 9区103号土坑 (東から)



2 9区104号土坑 (南東から)



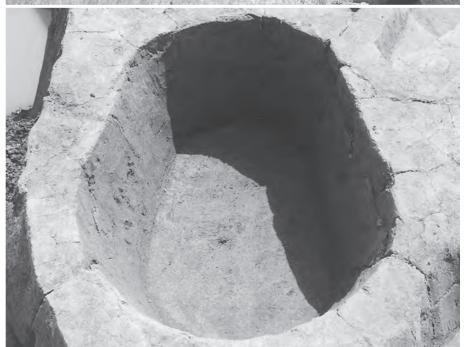
3 9区105号土坑 (東から)



1 9区107号土坑(1) (西から)

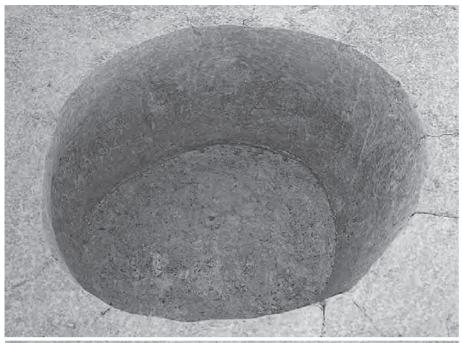


2 9区107号土坑(2) (東から)

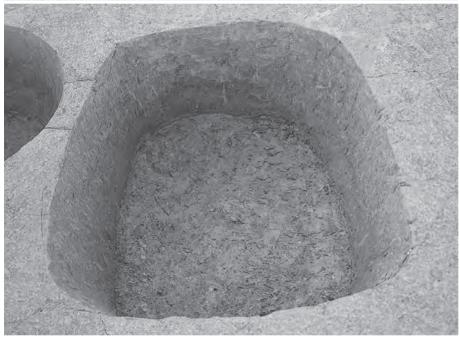


3 9区108号土坑 (西から)

## 図版22



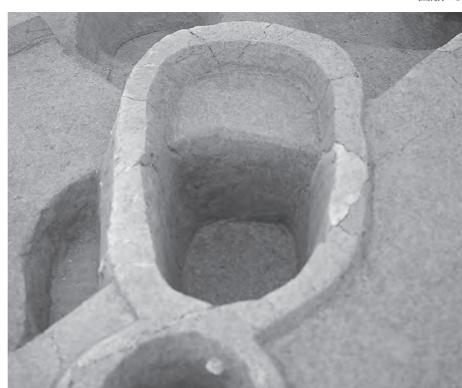
1 9区110号土坑 (北東から)



2 9区111号土坑 (北東から)



3 9区112号土坑 (南西から)



1 9区114号土坑 (北東から)



2 9区116号土坑 (東から)



3 9区117号土坑 (東から)



1 9区118号土坑 (北西から)



2 9区120号土坑 (南から)



3 9区122号土坑 (北北東から)



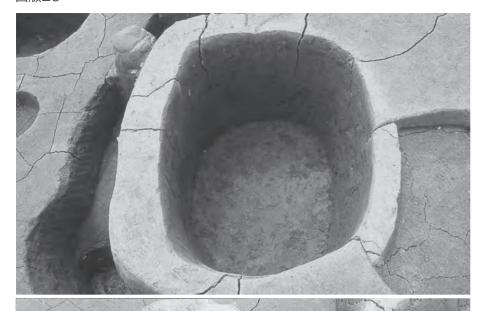
1 9区124号土坑 (南から)



2 9区126号土坑 (南西から)



3 9区127号土坑 (北から)





1 9区129号土坑 (東から)

2 9区130号土坑 (北から)

3 山門・藤ノ尾遺跡群 全景(南から)



1 10区全景 (空中写真)



2 10区全景 (空中写真、北から)



1 10区全景 (北から)



2 10区131~133土坑 (東から)



3 10区131号土坑 (北から)



1 10区132号土坑 (東から)



2 10区133号土坑 (北から)



3 10区柵列状遺構 (北から)



10区柵列状遺構 (西から)



2 10区トレンチ (北東から)



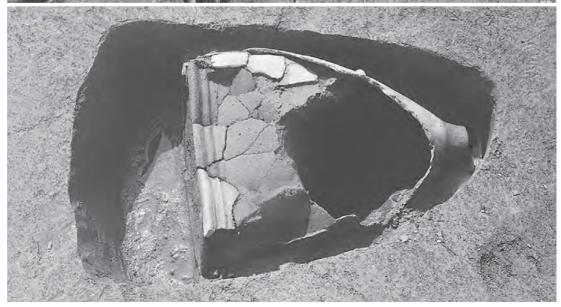
3 10区トレンチ (東から)



1 7区1号甕棺墓 (北西から)



2 7区2号甕棺墓 (南から)



3 7区3号甕棺墓 (東から)



1 7区4号甕棺墓 (北から)



2 7区5号甕棺墓 (北から)



3 7区6号甕棺墓 (北から)



1 7区7号甕棺墓 (北から)



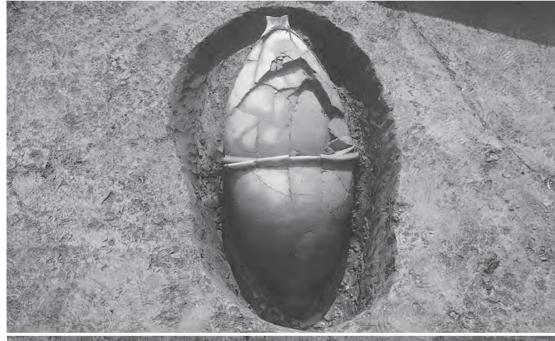
2 7区8号甕棺墓 (北西から)



3 7区9号甕棺墓 (北から)



1 7区10・11号甕棺墓 (南から)



2 7区12号甕棺墓 (西から)



3 7区13号甕棺墓 (東から)



1 7区14号甕棺墓(南から)



2 7区15号甕棺墓 (北東から)

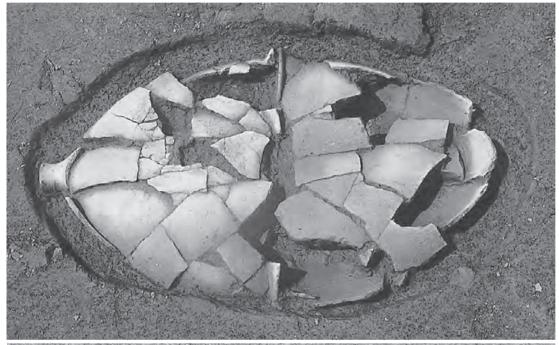


3 7区16号甕棺墓 (西から)

## 図版36



1 7区17号甕棺墓 (北から)



2 7区18号甕棺墓 (北西から)



3 7区19号甕棺墓 (南から)



1 7区20号甕棺墓 (北西から)



2 7区21号甕棺墓 (西北西から)



3 7区22号甕棺墓 (東から)



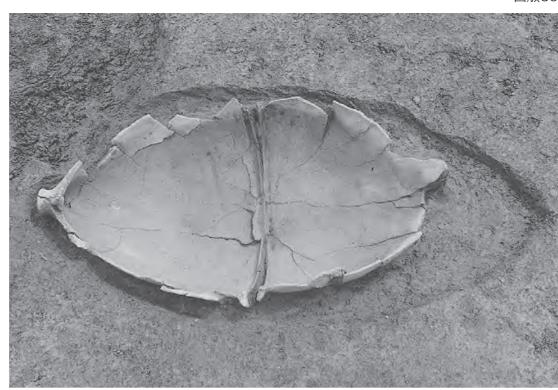
7区22号甕棺墓 人骨出土状況 (東から)



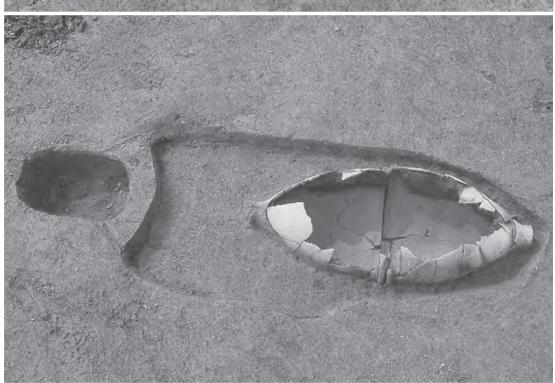
2 7区23号甕棺墓 (北北西から)



3 7区24号甕棺墓、 30号土坑 (南東から)



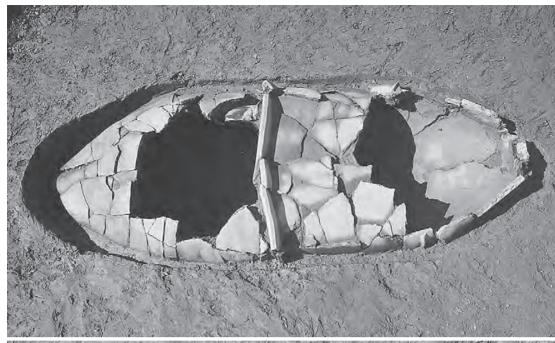
1 7区25号甕棺墓 (北東から)



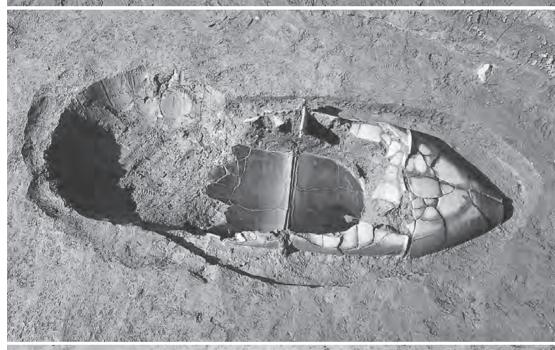
2 7区26号甕棺墓 (南東から)



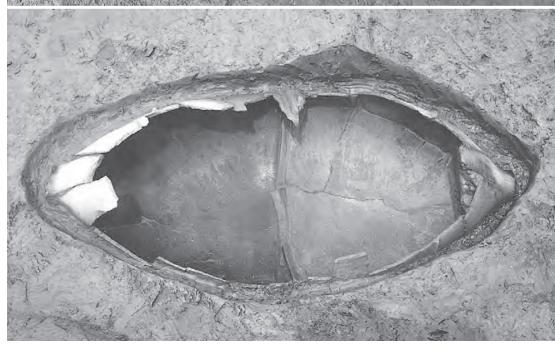
3 7区27号甕棺墓 (西から)



1 7区28号甕棺墓 (南から)



2 7区29号甕棺墓 (南西から)



3 7区30号甕棺墓 (南東から)



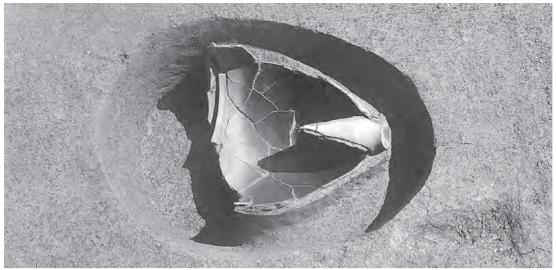
1 8区31号甕棺墓 (南から)



2 8区32号甕棺墓 (北から)



3 8区33号甕棺墓 (南から)



1 8区34号甕棺墓 (西から)



2 8区35号甕棺墓 (南西から)



3 8区36号甕棺墓 (西から)



1 8区37号甕棺墓 (北から)



2 8区38号甕棺墓 (東から)



3 8区39号甕棺墓 (南西から)

図版44



1 8区40号甕棺墓 (南から)



2 8区41号甕棺墓 (北から)



3 8区42号甕棺墓 (北東から)



1 8区43号甕棺墓 (東から)



2 8区44号甕棺墓 (西から)



3 8区45号甕棺墓 (北から)



1 8区46号甕棺墓 (西から)



2 8区47号甕棺墓 (北から)



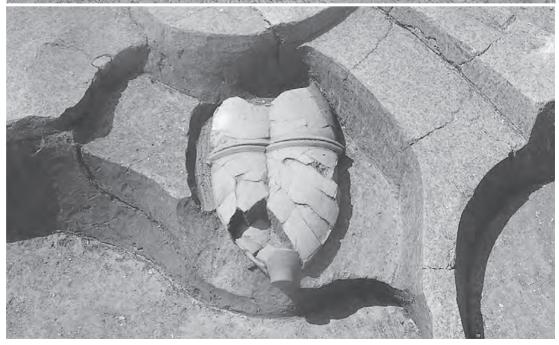
3 8区48号甕棺墓 (北東から)



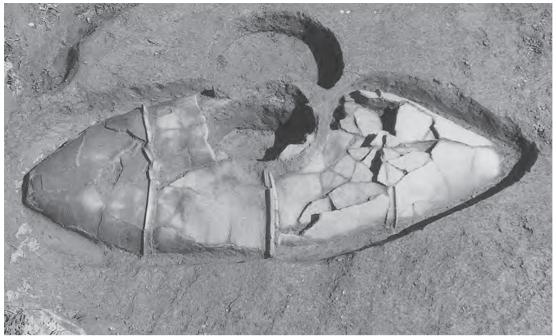
1 8区49号甕棺墓 (北から)



2 8区50号甕棺墓 (北東から)



3 8区51号甕棺墓 (北東から)



1 8区52号甕棺墓 (南から)



2 8区53号甕棺墓 (西から)



3 8区54号甕棺墓 (北東から)



1 8区55号甕棺墓 (東から)



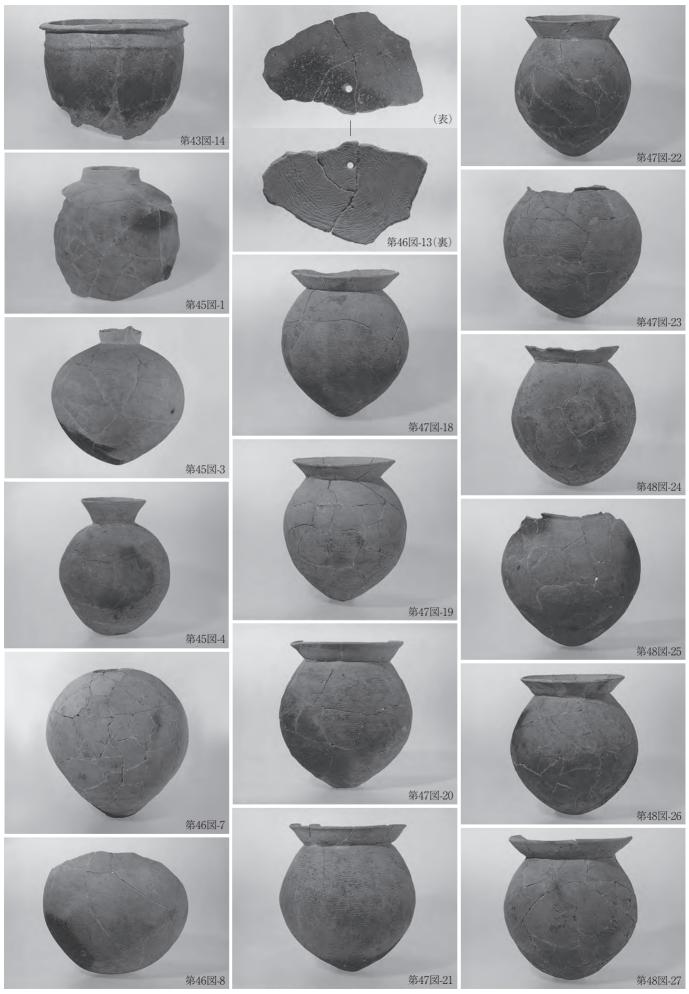
2 8区56号甕棺墓 (南から)



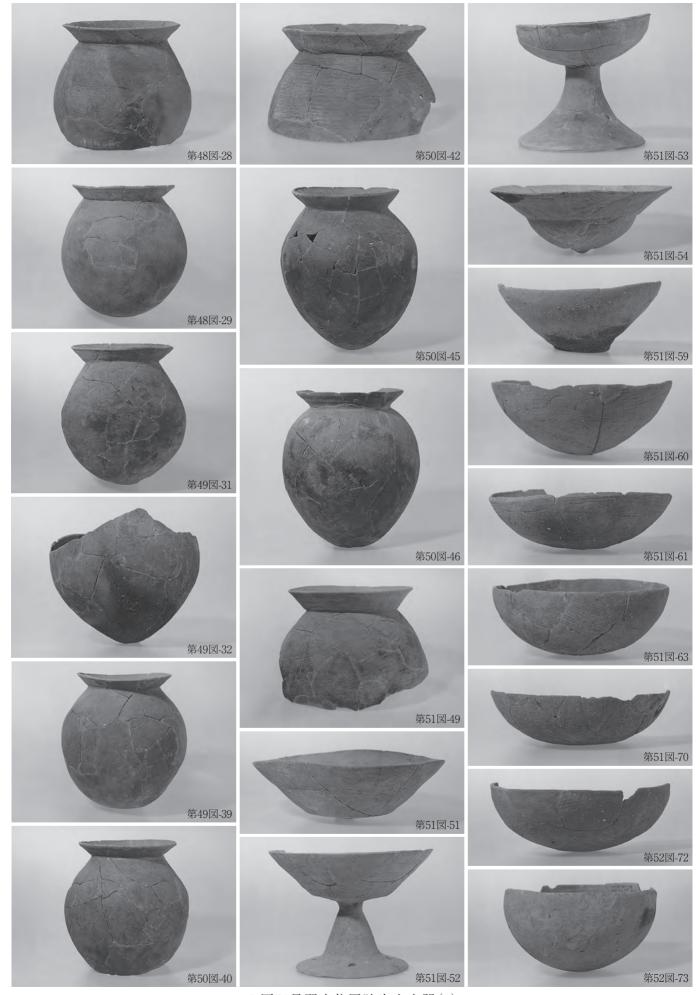
3 7区35号土坑 (北東から)



9区63·67·69~73·75(1)号竪穴住居跡出土土器



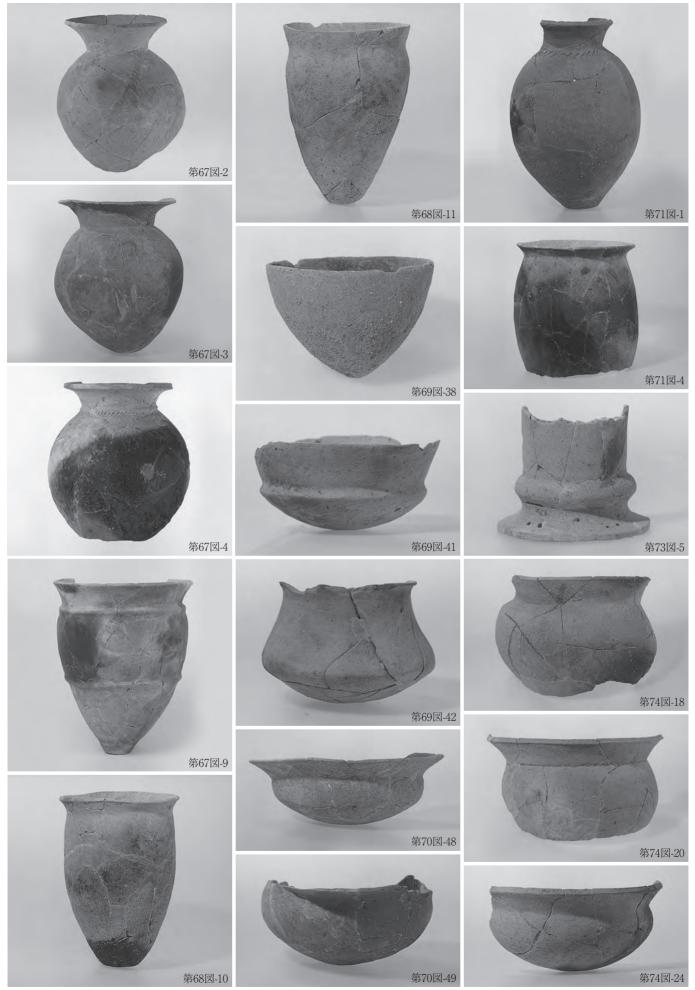
9区75(2)·76(1)号竪穴住居跡出土土器



9区76号竪穴住居跡出土土器(2)



9区76(3)·78~82·85号竪穴住居跡出土土器



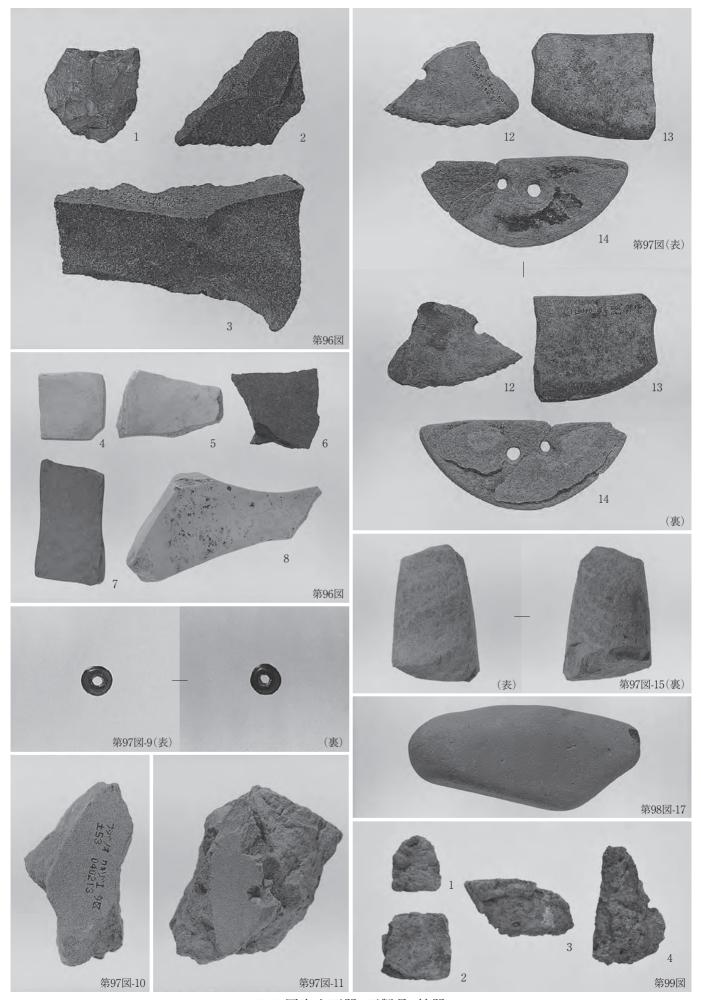
9区86·87号竪穴住居跡、90号土坑出土土器



9区95·102·105·107(1)号土坑出土土器



9 区107(2)・116~118・124・125・128号土坑、9 区ピット出土土器



7·9区出土石器·石製品、鉄器



7区1~8号甕棺



7区9~15号甕棺



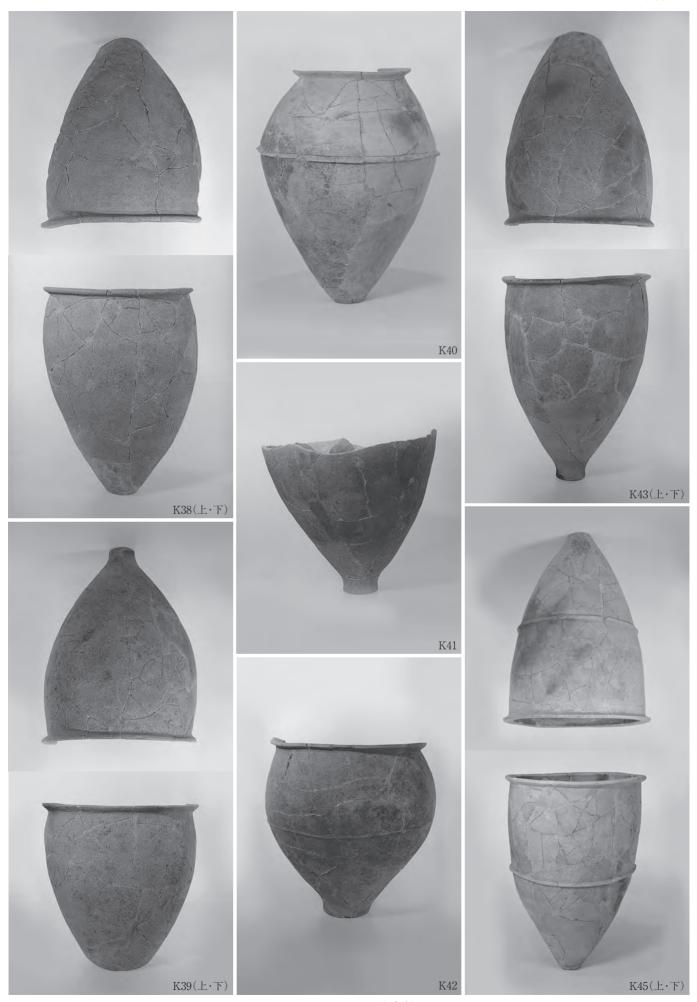
7区16~22号甕棺



7区23~29号甕棺



7 · 8 区30~37号甕棺



8区38~43·45号甕棺



8区46~51号甕棺



8区52~56号甕棺、7区35号土坑出土土器

区分	地点	遺跡名	所在地	対象面積 (mi)	調査面積 (㎡)	調査年度	報告年度	報告書番号
	1	観音山古墳群中原Ⅲ群	那珂川町大字松木	1,600	1,200	H17	H19	11集
	4	観音山古墳群平石Ⅲ群	那珂川町大字松木	3,900	2,700	H17·18	H21	15集
那	5	観音山古墳群平石IV群	那珂川町大字松木	5,600	300	H18·19	H20	12集
珂	6	観音山古墳群平石V群	那珂川町大字松木	2,800	600	H18	H20	12集
Ш	10	観音山古墳群瀬戸Ⅱ群	那珂川町大字下梶原	500	300	H18	H20	12集
	11-2	観音山古墳群瀬戸Ⅳ群	那珂川町大字下梶原	2,400	380	H16	H19	11集
	15	内河遺跡群	那珂川町大字上梶原	450	350	H15	H19	11集
	0 – A	上北島野町下遺跡	筑後市大字上北島	1,770	1,720	H19	H20	13集
筑	0-B	上北島川原田遺跡	筑後市大字上北島	1,000	300	H18	H20	13集
後	0 - C	常用前野遺跡	筑後市大字常用	820	265	H18	H20	13集
	0-E	津島餅町遺跡	筑後市大字津島	7,538	7,538	H19	H20	13集
	1	郡領ノー遺跡	みやま市瀬高町坂田	4,480	1,107	H16	H17	4 集
60	2	小川柳ノ内遺跡	みやま市瀬高町小川・下坂田	5,600	4,900	H16·17	H18·19	7.8集
船小	3	藤の尾垣添遺跡	みやま市瀬高町山門	3,360	5,500	H15·16	H19~21	9 · 14 · 16集
小屋	4 – A	山門北池遺跡	みやま市瀬高町山門		1,230	H15	H18	6集
大牟田田	4-B	山門前田遺跡	みやま市瀬高町山門・松田	6,340	1,175	H14·15	H17	3集
	4-C	松田掛畑遺跡	みやま市瀬高町松田		800	H17	H19	10集
#	5	海津横馬場遺跡	みやま市高田町海津	4,200	2,250	H13~15	H16·17	1.2集
	16	岩本下内遺跡	大牟田市大字岩本	1,300	770	H18	H19	10集

第24表 福岡県教育委員会が実施した九州新幹線関係埋蔵文化財調査地点一覧

## 福岡県教育委員会発行 九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告一覧

シリーズ名	書名
第1集	進村真之·宮地聡一郎2005『海津横馬場遺跡 I』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第1集 福岡県教育委員会
第2集	宮地聡一郎·(財)元興寺文化財研究所(川本耕三、別府大学文学部 平尾良光·原彰吾)2006『海津横馬場遺跡 II』九州新幹線 関係埋蔵文化財調査報告第 $2$ 集 福岡県教育委員会
第3集	大庭孝夫・坂元雄紀編、高田知恵・(㈱パレオ・ラボ(植田弥生・三村昌史・竹原弘展・黒澤一男)2006『山門前田遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第3集 福岡県教育委員会
第4集	今井涼子2006『郡領ノー遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第4集 福岡県教育委員会
第5集	秦憲二·今井涼子2006『西牟田大立遺跡 西牟田北原遺跡 西牟田平野遺跡(2次調査)』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第5集 福岡県教育委員会
第6集	大庭孝夫・一瀬智・㈱パレオ・ラボ(植田弥生・新山雅広・パレオ・ラボAMS年代測定グループ)2007『山門北池遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第6集 福岡県教育委員会
第7集	進村真之2007『小川柳ノ内遺跡 I』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第7集 福岡県教育委員会
第8集	進村真之·今井涼子2008『小川柳ノ内遺跡II』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第8集 福岡県教育委員会
第9集	大庭孝夫·宮地聡一郎2008『藤の尾垣添遺跡 I』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第9集 福岡県教育委員会
第10集	小川泰樹・一瀬智・㈱パレオ・ラボ(藤根久)2008『松田掛畑遺跡 岩本下内遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第10集 福岡県教育委員会
第11集	飛野博文編、大庭孝夫·秦憲二·林知恵2008『観音山古墳群瀬戸IV群 観音山古墳群中原 $III$ 群 内河遺跡第 1 次』九州新幹線 関係埋蔵文化財調査報告第11集 福岡県教育委員会
第12集	飛野博文編、小川泰樹·海出淳平2009『観音山古墳群平石Ⅳ·Ⅴ群 観音山古墳群瀬戸Ⅱ群』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第12集 福岡県教育委員会
第13集	一瀬智編、進村真之·大庭孝夫·秦憲二2009『上北島野町下遺跡 上北島川原田遺跡 常用前野遺跡 津島餅町遺跡 3 次調査』 九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第13集 福岡県教育委員会
第14集	大庭孝夫編、城門義廣・今井涼子2009『藤の尾垣添遺跡Ⅱ』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第14集 福岡県教育委員会
第15集	飛野博文編、荻幸一·海出淳平2010『観音山古墳群平石Ⅲ群 観音山古墳群瀬戸Ⅱ群』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第15集 福岡県教育委員会
第16集	大庭孝夫編、進村真之・杉原敏之・西堂将夫・城門義廣・(財)元興寺文化財研究所(川本耕三、別府大学大学院文学研究科平尾良光・西田京平・山口将史)・㈱パレオ・ラボ(竹原弘展・藤根久・米田恭子・小林克也)2010『藤の尾垣添遺跡Ⅲ』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第16集 福岡県教育委員会

## 報告書抄録

	Ι								
ふりがな	ふじのおかきそえいせき さん								
書名	藤の尾垣添遺跡Ⅲ								
副書名	福岡県みやま市	福岡県みやま市瀬高町山門所在遺跡の調査 -集落編3・墳墓編-							
巻次	Ш								
シリーズ名	九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告								
シリーズ番号	第 16 集								
編著者名	大庭孝夫(編集)・進村真之・城門義廣・杉原敏之・西堂将夫 (財)元興寺文化財研究所(川本耕三、別府大学大学院文学研究科 平尾良光・西田京平・山口将史) (株)パレオ・ラボ(竹原弘展・藤根久・米田恭子・小林克也)								
編集機関	福岡県教育委員会(教育庁総務部文化財保護課)								
所 在 地	〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園7-7 TEL 092-651-1111 FAX 092-643-3878 E-mail kbunkazai@pref.fukuoka.lg.jp								
発刊年月日	西暦 2010年	3月 31 日							
ふりがな	ふりがな	コー	ド	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	オレ が芋	<b>米性</b>	明 <u>日</u> 郑阳		明且尽囚	
が、おかきそえいせき藤の尾垣添遺跡	はいけれる 福世は一般をは一日、 はいりでは、 はいりでは、 はいりでは、 はいりでは、 はいりでは、 はいいでは、 はいでは、 とっと。 はいでは、 はいでは、 はいでは、 はいでは、 とっと。 は、 とっと。 とっと。 とっと。 とっと。 とっと。 と。 と。 と。 と。 と。 と。 と。 と。 と。 と。 と。 と。 と	40229		33°9′12″	130°29′39″	2003.12.3 ~2004.6.18	約5,500㎡	九州新幹線 鹿児島ルート 建設	
所収遺跡名	種別主な時代	主な遺	貴構	主な遺物		特記事項			
藤の尾垣添遺跡	弥生時代 集落 · 墓地 古墳時代	主玩45基、柵列状 遺構1基、溝4条、 甕棺墓56基。 2次調査計は、竪 穴住居跡87棟、掘 立柱建物跡1棟、		弥生土器 土師器 須恵器 甕棺	石器 石製品 鉄器 内面朱付 着土器	・9区76号住居跡出土土器は在地系・外来系土器要素が折衷した本地域の土器様式として重要。 ・弥生時代中期初頭~後半の甕棺は地域的特徴を良く示すものとして重要。 ・本遺跡から内面朱付着土器とL字状石杵、ベンガラ付着磨石が出土。特に出土した把手付片口皿は北部九州では3例目の出土であり、貴重。また、本遺跡は朱の保管・加工活動等を通じ、他地域との交流を担う拠点集落であったことが推測される。			
要約	本遺跡は標高6m前後の北東から南西方向に蛇行する旧河川が形成した自然堤防上に位置する。まず弥生時代前期後半~末に集落が形成され始めるが、中期になると集落が断絶し、中期初頭~後半にかけて総数200基を越える大規模な甕棺墓群が作られる。弥生時代中期後半、遅くとも弥生時代後期前半になると再び集落を形成し、古墳時代中期前半まで当地域の拠点的な大規模集落となるが、古墳時代中期後半以降は再び集落が断絶する。古墳時代後期後半~末に小規模な集落が形成されるが、集落断絶後の7世紀前半以降は耕地として利用され、現在に至る。								

福岡県行政資料				
分類番号	所属コード			
Ј Н	2 1 1 4 1 0 7			
登録年度	登録番号			
21	6			

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第16集

## 藤の尾垣添遺跡Ⅲ

平成22年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7-7

印刷 西日本印刷工業株式会社

福岡市博多区井相田3丁目2-1

TEL 092-581-5636